

# 筑前原田宿

歴史資料調査

筑紫野市文化財調査報告書 第44集

1994

筑紫野市教育委員会

# 筑前原田宿

歴史資料調査

筑紫野市文化財調査報告書 第44集

1994

筑紫野市教育委員会

## はじめに

筑紫野市教育委員会では、平成3～5年度にかけ原田宿歴史資料調査を実施いたしました。

かつて参勤交代の諸大名やオランダ使節、あるいは多くの旅人が往来した長崎街道は、時代の波とともに大きな変貌を遂げようとしています。現在、筑紫野市原田では旧宿場町を含む一帯に区画整理事業が進められていますが、原田宿歴史資料調査は、その過程で失われゆく歴史的遺産を将来に伝えるために行ったものであります。3ケ年にわたる調査の間、堀口歴史民俗資料館長の急逝という悲しい出来事もありましたが、関係諸氏のご尽力により多くの成果を上げることができました。なお、本調査は歴史資料を主とした調査でありましたが、一方では同域内において埋蔵文化財の発掘調査も行っており、総合的に原田宿の解明が進めば大きな喜びであります。

末尾ながら、この調査に多大のご理解とご協力を賜りました原田地区の皆様をはじめ、調査委員各位、並びに文化庁、福岡県教育庁、及び協力者各位に対しまして心から厚く御礼申し上げます。

平成6年3月31日

筑紫野市教育委員会

教育長 永 渕 正 敏



▲原田宿の景観

原田出身の学者山内陽亭が安政5年(1858)に書いた小説『田嶋外伝演千鳥』の挿し絵。絵は芳草園(清水)蝶堂が描いたもので、幕末の原田宿の町並みを含んだ一帯の景観がよく表されている。

筑紫野市立歴史民俗資料館保管

▶原田関番所の役人が着ていたと伝えられる羽織と袴 個人蔵



▲原田宿の名物であった「はらふと餅」を売る店。(『田嶋外伝演千鳥』より)

## 例 言

1. 本書は、国庫補助事業として平成3～5年度に実施した「原田宿関係歴史資料調査」の報告書である。
2. 資料の復刻にあたって、漢字は常用漢字を原則とし、旧字・異体字も使用した。
3. 本文中に句読点と並列点とを加えた。
4. 判読不能な文字は、□で示した。また、字数不明の箇所は [ ] で示した。
5. 抹消文字は左に//を付した。また、訂正されている場合は、その右に訂正された文字を（ ）で記した。
6. ふりがなは原文のままとした。
7. 執筆者は、それぞれ目次に記した。
8. 「鬼木文書」の目録は、福岡県文化会館編『福岡県古文書等緊急調査報告書（旧筑紫郡）』1982年に収められており、本書資料集の番号は、同報告書に準拠している。
9. 本書に収めた「筑紫神社文書」は、同社に伝わる縁起等5巻の全部である。なお、別に『福岡県古文書等緊急調査報告書（旧筑紫郡）』1982年にも同名の文書目録があるが、これは宮座（筑紫座）文書のうち明治期以前の文書目録である。
10. 紙幅の都合上、平成4年度・市歴史民俗資料館企画展「国境の宿場 —— 筑前原田宿」展の図録に収めた資料写真、及び目録は本書から省いた。

# 目 次

I. 調査の概要	(山村 淳彦)	1
II. 資料解説		
原田宿と鬼木家文書	(近藤 典二)	7
山内(花)家文書について	(鷺山 智英)	10
山崎(洋)家資料について	(山村 淳彦)	11
「御境石建覚書」について	( 〃 )	12
原田・筑紫の祭り行事	(佐々木哲哉)	13
筑前原田宿年表	(近藤 典二)	18
III. 資料目録		
山内(花)家文書目録	(鷺山 智英)	21
山崎(洋)家資料目録	(山村 淳彦)	37
宮座等関係資料目録	( 〃 )	56
IV. 資料集		
(1) 鬼木家文書		
諸通執行定 天地	(近藤 典二)	1
元治二年丑日記	( 〃 )	10
万延二年酉正月 公用日記	( 〃 )	28
安政六年未ヨリ当戌年迄御休泊御名元	( 〃 )	40
(2) 山内(花)家文書		
酒造滅石願	(鷺山 智英)	43
三国峠開鑿費之儀ニ付願口替願	( 〃 )	44
〔山神祭壇上飾式〕	( 〃 )	44
祭山川神祝文	( 〃 )	45
御神座記録	( 〃 )	46
郷社神宮郷社氏子 筑紫 原田 両村ニ対スル規約	( 〃 )	48
村会議員承諾書	( 〃 )	49
両村連合会日誌	( 〃 )	50
御笠郡原田村総計	( 〃 )	51
御笠郡筑紫村総計	( 〃 )	53
御笠郡原田村職分総計	( 〃 )	55
御笠郡筑紫村職分総計	( 〃 )	56
御笠郡原田村消防章程	( 〃 )	57
出火ニ付御届	( 〃 )	60
〔思水会会則〕	( 〃 )	62

(3) 山崎(洋)家資料		
御    触	..... (山村 淳彦)	63
(4) 佐賀県基山町 基山6区有文書		
御境石建覚書	..... (    "    )	65
(5) 筑紫神社文書		
鎮西筑前之州於大築紫府築紫宮を欲奉再興十方に請与力意趣	..... (近藤 典二)	91
筑紫神社縁起	..... (    "    )	92
御笠郡筑紫神社縁起	..... (    "    )	98
筑紫神社縁起後序	..... (    "    )	100
乍恐申上覚	..... (    "    )	101
(6) 宮座関係資料		
筑紫宮・本座	..... (田中 好美)	103
筑紫宮・筑紫座	..... (    "    )	106
若 宮 座	..... (山村 淳彦)	112
(7) その他の「座」関係資料		
恵比須座	..... (    "    )	121
金比羅座	..... (    "    )	122
弁財天座	..... (    "    )	124
祇 園 座	..... (    "    )	126

# I. 調査の概要

# 調査の概要

## 1. 調査の目的

筑紫野市大字原田は、かつて長崎街道「筑前六宿」のひとつとして栄えた宿場町である。筑後・肥前国にも接した国境の宿場であるが、この旧原田宿の町並みを含んだ地域に区画整理事業が実施され、民家の移転や建て替えなどに伴って歴史資料の散逸が懸念された。そこで、早急にこの地域の文化財の所在および現状を把握するため総括的な調査をおこない、目録等を作成して恒久的な保存を図ることを目的に実施した。

## 2. 調査組織

### ■調査委員

福岡地方史研究会会長	近藤 典二
田川市石炭資料館館長	佐々木哲哉
大野城市文化財保護審議会委員	田中 好美
大野城市立大野東中学校教諭	鷺山 智英

### ■事務局

#### 筑紫野市教育委員会

教育長	永淵 正敏
教育部長	岡部隆太郎（平成3年度）
同	永田 晋一（平成4～5年度）
社会教育課長	竹田 征治（平成3～4年度）
同	黒田 未宣（平成5年度）
文化財担当係長	山野 洋一
同 技師	森山 栄一
筑紫野市立歴史民俗資料館館長	村里 徳夫（平成3年度）
同	故堀口 幸雄（平成4～5年度）
同 主事	山村 淳彦

### ■資料整理

吉留 優子	鶴 浄美
朝長眞理子	中村 政之

## 3. 調査の年次計画

- 平成3年度………悉皆調査、資料分類
- 同4年度………資料研究、補足調査
- 同5年度………補足調査、研究、調査報告書の作成

## 4. 調査項目の設定

調査に先だって、あらかじめ次の項目を設定した。もとより、これらすべての資料にわたって存在の確証を得

た上でのことではなく、原田宿の姿を全体的に捉えられるような資料を網羅したいという希望からである。

#### I. 宿場以前

- ・中世原田氏関係資料
- ・宿場の設置に関する資料

#### II. 筑前原田宿

- ・長崎街道に関する資料
- ・原田宿代官関係資料  
小河内蔵允肖像掛幅、小河氏系図、代官屋敷関係資料など
- ・原田宿下代関係資料  
鬼木、松尾、高嶋文書など
- ・原田宿関番所関係資料  
古文書、関番の法被など
- ・文芸関係資料  
上原定賀、松尾伊陳、山内正興、山崎実秀らの書跡、和歌、絵馬、山内陽亭に関する資料など
- ・旅宿関係資料  
御茶屋（肥前屋）、町茶屋（藤屋、長崎屋）、旅籠（大黒屋、橋本屋、松尾屋など）に関する宿台帳、古記録、食器、寝具などの資料
- ・産業および交易に関する資料  
酒、醤油、菜種油、薬、蠟、紙などの製造販売に関する資料
- ・国境石関係資料  
梁井文書（佐賀県基山町）
- ・筑紫神社関係資料  
神官の系図、宮座帳、石塔、鳥居、絵馬、書跡、刀剣、粥卜関係資料など
- ・人口動態に関する資料  
伯東寺の墓籍帳、過去帳など

#### III. 原田の近代化

- ・宿場の生活誌
- ・宿場の廃止以降、明治～昭和初期にかけての記録、写真、生活用具などの民俗資料

### 5. 調査期間

平成3年6月14日～平成6年3月31日

### 6. 調査の経過とまとめ

現地での調査に入るにあたって、原田宿関係の資料は分散していることが予想され、総数も見当がつかない状況であったので、初年度は悉皆調査による資料の所在確認に重点を置いた。広報用のチラシを作成して地元の各戸に配布し、調査への協力を呼びかけた。また、平成4年には、市立歴史民俗資料館において「筑前原田宿」展を開催した。これは、前年度の調査成果を展示公開することによって市民の関心をたかめ、さらに資料の収集を進めようとする期待もあった。しかし、原田宿は度重なる被災によって近世以前の資料の大半は灰燼と化しており、展示会における一般の関心のたかさに呼応するような調査成果は上がらなかった。当初期待した宿場以前の

資料や宿場の設置に関する資料、旅宿関係資料は皆無に等しい状況であり、時代的には幕末～明治期の断片資料に集中した。このようななかで、明治以降の宿場の変化を窺うことができる山崎・山内家資料の発見があったのは大きな成果であった。

## 7. 調査協力者

本調査に関わり、下記の方々から貴重な資料のご提供やご指導、ご助言等をいただきました。深く感謝致しますとともに、ここにお名前を記させていただき、心からお礼申し上げます。

(五十音順、敬称略)

### ■資料提供ならびに協力者

浦山 栄太	大石 金丸	大久保利光	小河キミエ	鬼木 貞子
草場 啓一	権藤 貞子	佐藤 明善	高嶋 正武	高田 正男
飛松 広美	永田 正	長野 卓司	原 義則	松尾 昌英
三池 賢一	味酒 安英	梁井 忠	梁井 義信	山内 敬子
山内 花子	山崎 築士	山崎 永利	山崎 洋一	山田 正
吉原 勝				

### ■協力機関

九州大学  
太宰府市史編さん委員会  
筑紫野市史編さん委員会  
福岡県立図書館

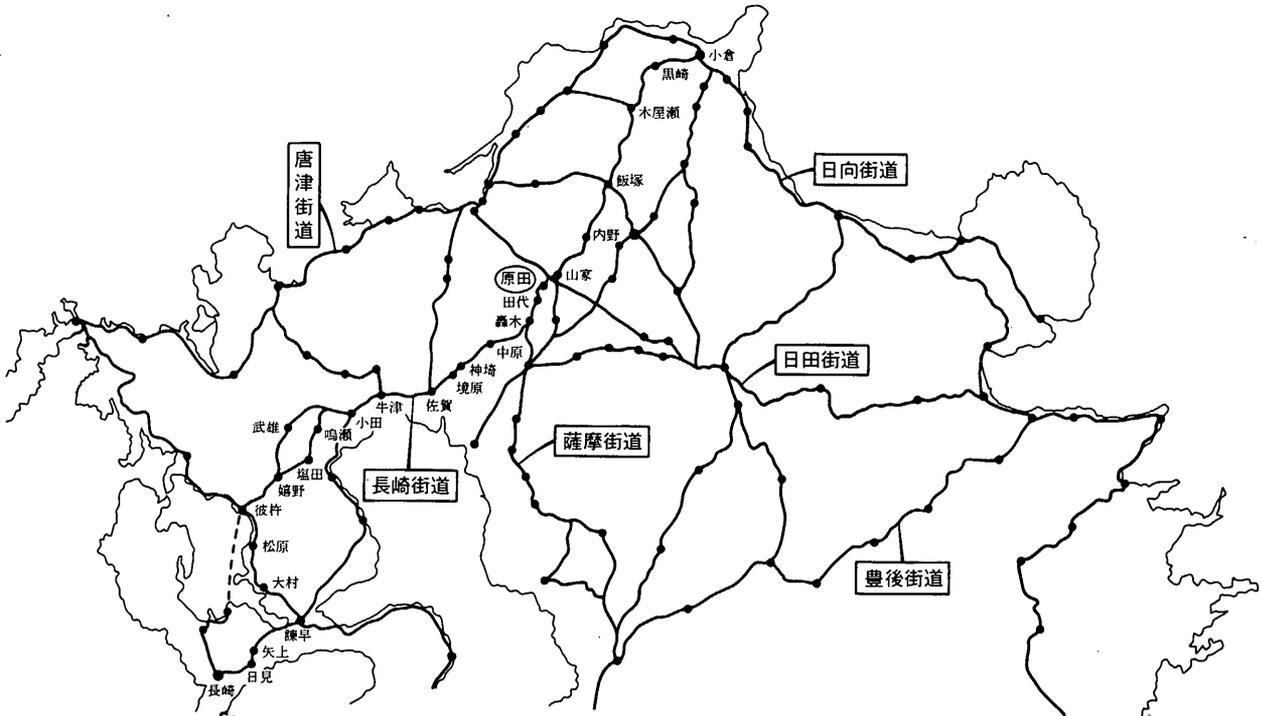
### ■文化庁文化財保護部美術工芸課

鈴木 規夫  
高橋 裕次

### ■福岡県教育庁指導第二部文化課

磯村 幸男 高橋 章  
大久保盛清 浜田 信也  
川述 昭人

## 北部九州の街道と宿場

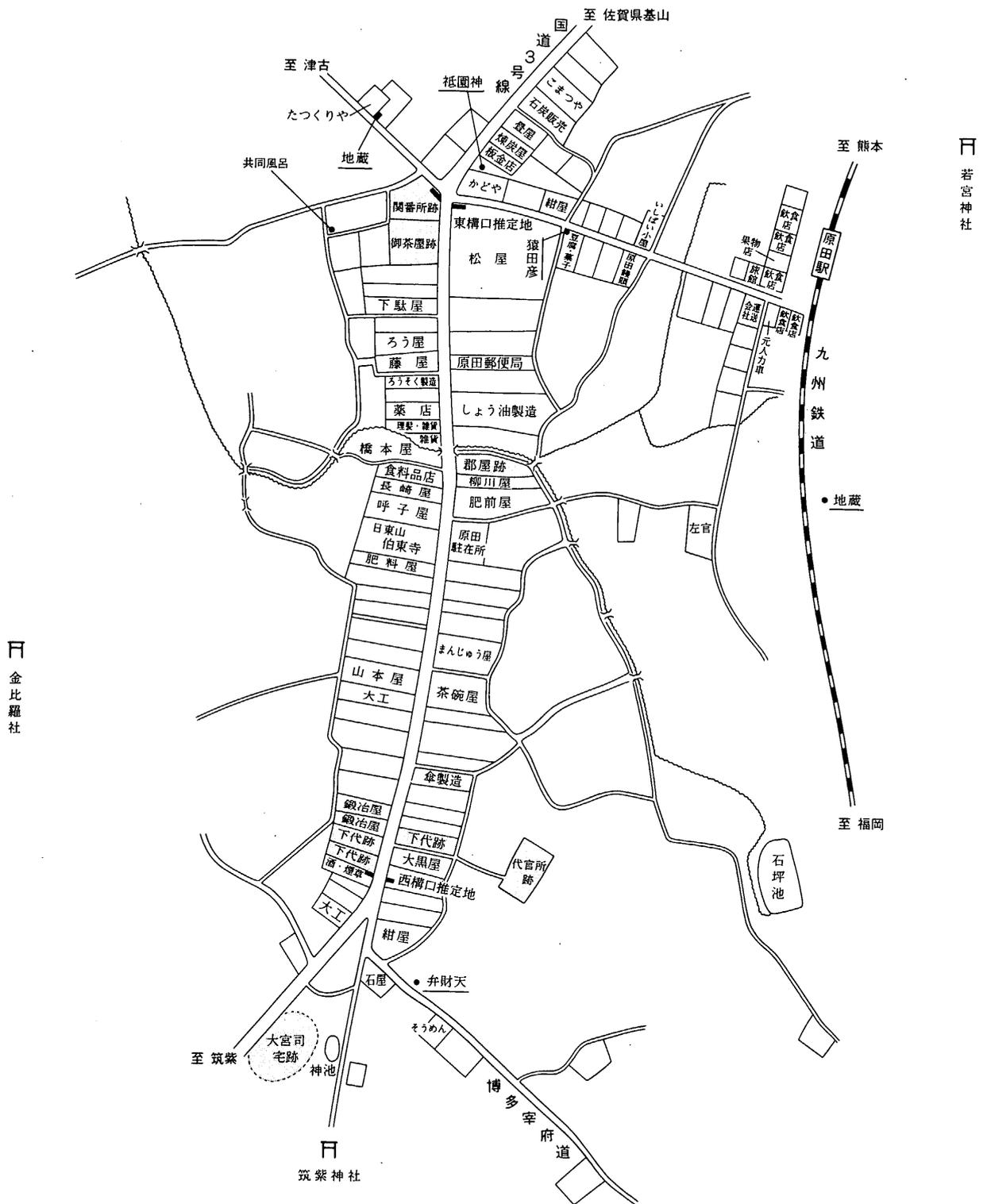


九州の街道で交通量が多かったのは、筑前を通る薩摩街道・長崎街道・日田街道である。  
長崎街道（筑前六宿街道）は、小倉と長崎を結ぶ長さ57里1町20間半（約228km）をいい、  
原田宿は筑前南端の国境に位置した。

筑前を通る街道と宿場は次のとおりである。

1. 長崎街道＝小倉より黒崎・木屋瀬・飯塚・内野・山家・原田（肥前田代へ）
2. 唐津街道＝小倉より若松・芦屋・赤間・畦町・青柳・箱崎・博多・福岡・姪浜・今宿・前原（中津領深江へ）
3. 秋月街道＝猪俣より大隈（千手・秋月・野町＝秋月領三宿を経て筑後松崎へ）
4. 日田街道＝福岡・博多より二日市・太宰府・甘木・志波・久喜宮（豊後日田へ）、小石原（豊後日田へ）
5. 篠栗街道＝福岡・博多より金出（飯塚へ）
6. 三瀬街道＝福岡より金武・飯場（肥前三瀬へ）
7. 薩摩街道＝長崎街道の山家宿から分かれて筑後松崎へ

# 昭和10~15年頃の原田宿



<注> (1) この図は、日東山伯東寺仏教社年会「昭和10~15年頃の原田居住者見取図」(昭和62年8月1日作成)、および吉原勝著『長崎街道物語』(出版年不詳)を参考に作成したものである。  
 (2) アミ部分は、江戸時代の主要な施設である。ただし、昭和10~15年時点ではすでに民家等として建て替えられており、現存していない。

## II. 資料解説

## 原田宿と鬼木家文書

原田宿は長崎街道の筑前6宿のうち南端の肥前国境に置かれた宿場である。原田宿の起源については、『二日市宿庄屋覚書』のなかに、次のような話が載っている。

「原田も古来よりの馬継宿ではないと私の親長左衛門が申していました。長左衛門が若い時、原田より馬継の御訴訟を御公儀様へ申し上げ、御評定場へ庄屋・頭百姓が出頭するよう仰せつけられ、早々まかり出ました処、右の件許可なされ、村中へ堅く申し渡せとの事で、御請け申し上げて帰ったのだそうです。今年正徳4年まで70年と少しばかりにもなりましょうか」

正徳4年(1714)から70年と少し前というから、寛永の終り頃のことになる。元禄時代の編纂だが『黒田家譜』には、寛永15年(1638)の元日に、島原の乱鎮圧のため西下中の老中松平伊豆守信綱の軍勢が原田に宿陣したことが見える。『二日市宿庄屋覚書』の話とも年代的に合うので、その頃出来た宿場だといえよう。

原田に宿陣した松平伊豆守の旅宿に、福岡藩の家老小河内蔵允が挨拶に出ている。この小河内蔵允は原田宿の初代代官と言われる。おそらく御笠郡内に知行地を持つ、同郡の蔵入地の代官だったであろう。小河内蔵允から竹森唱生まで22代の原田宿の歴代代官名を列挙した名簿がある。この最後の竹森唱生代官の名は、享和2年(1802)の『御笠郡明細記』の原田村の項に、次のように見える。

「竹森唱生殿御支配手附、御下代三人、御関番二人、郷足軽三人」

「御下代三人」の名前は出ていないが、おそらく松口七郎、古森治八、高嶋茂作の3人だったと思われる。下代は代官所に1人ずつ輪番で日直勤務していた。

原田宿下代の定員は、元文2年(1737)4月、4人に決まったが、寛延3年(1750)からは一名減員となった。享和2年から10年後の文化9年(1812)当時は、杉山平四郎代官のもとに、松口七郎と高嶋次七郎の2人がいて、あとの1名は当時欠員のままであった。この2人の下代の給与は、どちらも「二人扶持・五石」であった。文政8年(1825)、高嶋次七郎が病死した後を継いで、下代となった高嶋円助は、その年「御扶持方・米九俵二斗四升」と「御切米分・米十一俵八合」を受けている。この合計が「二人扶持・五石」の給与である。

この高嶋円助が、文政11年9月に原田宿代官所の記録を写したものが、鬼木家文書のなかにある。鬼木氏が原田宿下代となった年はわからないが、天保7年(1836)9月には、鬼木利七が原田宿下代をしている。鬼木利七は、その19年後の安政2年(1855)8月、眼を悪くして退職し、倅の鬼木左六が下代になっている。当時、鬼木利七は73歳だったから、30年前、高嶋円助が19歳で原田宿下代になったときには、すでに原田宿下代をしていたのではないかと思われる。左六は高嶋円助の実子で、鬼木利七の養子となった者である。鬼木左六は駅通制度が廃止される明治5年まで原田宿下代(当時は属吏と改称)をつとめている。

鬼木家文書のなかには、原田宿を知るうえで大変役に立つ史料がある。そのうちの四点を紹介しよう。

### ①『諸通執行定 天地』

これは大名送迎に関する代官の職務を定めた法規の写本の一つで、「嘉永五年三月中流写之」という奥書がある。筆写した人物の名はわからないが、嘉永5年(1852)は原田宿下代鬼木利七が70歳の時である。この鬼木本には、他の諸写本にはない秋月藩主の長崎往来(福岡藩主の代番)の際の取扱い11項目が見える。その第1項には福岡と秋月の藩境(夜須郡長者町)から原田宿を経て対州領田代境まで、原田宿郷足軽が先払い(先導役)をすることや、関番所のこと(第8・第11項)、町茶屋のこと(第6・第9項)などが見える。明らかにこの写本は原田宿代官所本を写したものとわかる。

## ②「安政六年未ヨリ当成年迄御休泊御名元」

これは原田宿町茶屋守孫四郎が文久2年10月に、山家宿代官所（代官森惣右衛門）あてに安政6年（1859）から文久2年（1862）まで4年間の休泊者名を届け出たものである。原田宿には「御茶屋」がなく「町茶屋」が1軒だけだったことは知られているが、その町茶屋守孫四郎に関する資料は極めて少ない。これはその1つである。またこの資料にはわずかに次の通行者14例が届けられているだけである。その理由が何なのか、またなぜ山家宿代官所に届け出たのか、等々不明な点が多い。またこのうちの5例に「宰府参詣の節、御供中望みにつき小漬飯（お茶漬ご飯）差し出す」とあるのが面白い。

- （安政6年）1. 御徒目付家来上下2人、2. 下向御目付上下26人  
（安政7年）3. 御徒目付家来上下4人、4. 下向御目付上下21人、  
5. 長崎奉行支配定役家族上下3人  
（文久元年）6. 下向御目付上下23人、7. 下向蕃書調所頭取支配上下2人、  
8. 蒸気船製作御用役々上下22人、9. 対州下向吟味役上下32人、  
10. 唐通事上下5人、11. 長崎奉行家族上下30人、  
12. 長崎船番筆頭手付上下5人、  
（文久2年）13. 松本良順様門人上下4人、14. 長崎奉行支配調役ら上下10人。

## ③「万延二年酉正月公用日記」

原田宿の上原団左衛門代官所に勤務していた下代高嶋文八の公用日記である。この公用日記を見ると長崎街道の筑前6宿が持つ連帯性というようなことを感ずる。この1例を示すと、平戸藩主からの拝領金配当の1件がある。

正月22日の条に、正月11日付の原田代官所が山家代官所に当てた文書が転記されている。この文章は、山家代官所は木屋瀬宿の町茶屋守甚三郎に、前年末参勤の平戸藩主からの拝領金配当の件について何度も問い合わせたが返事がないので、原田、山家、内野、飯塚4宿連帯で木屋瀬に抗議したい旨を正月8日原田宿代官所に申し入れたその返事である。原田宿代官所はこれは木屋瀬と原田の郷足軽との問題だとだけ答えているが、山家代官所は、16日内野代官森三右衛門役所に同意と「上筋」への伝達を依頼、17日内野代官所は飯塚代官尾崎与左衛門役所に「山家同意」の通達を送り、18日飯塚代官所は木屋瀬代官平賀伝左衛門役所に「当駅も内野同意」につき急速に解決されるよう申し入れている。19日木屋瀬代官所は町茶屋守石橋甚三郎に明日原田宿に行き下され金を受取って帰るよう申付けたこと、同人が帰宅次第直ちに各宿に相談することを飯塚代官所に返事し「下筋」への伝達を依頼している。正月22日の公用日記には「山近権平、木屋瀬甚三郎、平戸侯下され金の儀につき来る、卯七、三四郎申談、金子返す也」とある。山近権平は山家の下代である。甚三郎の書簡によると「平戸侯下され金」は一括して原田宿が受取り、これを木屋瀬宿の町茶屋守甚三郎が各宿に分配することになっていたようである。

また正月29日には、黒崎の下代久芳八郎が身退願を出したが「間近く賞誉」もあるという理由で差し止められたことを6宿の下代中に知らせ、11月11日には、同じく黒崎の下代勝野作平が村上大作と改名したことを6宿の下代中に知らせていることが見える。ともに順達されたもので、前者は2月8日に、後者は11月20日に原田に到着している。

## ④「元治二年丑日記」

維新前夜の元治2年（慶応元年）のこの日記には、例えば、

「正月三日、雨天、肥州木屋瀬宿陣の面々残らず引き払い相成り候事」

「二月二十三日、日和、宰府へ五京滞住に付、同所御造営奉行手付兩人にては不足に及び候に付、山家原田より下代一人宛助勤の儀、奉行衆より掛合来る」

などとあり、長州征討に出陣中の佐賀藩兵が引上げたこととか、五脚警備が宰府の下代2人だけでは手に負えない

ので原田と山家の加勢を求めてきたこととか、幕末の緊迫した空気が察せられる。また、前にも触れた秋月藩主の長崎往来のことも見える。

「四月二十四日甲斐守様明二十五日御越駕遊ばされ候に付、御往来とも原田御小休遊ばさる由、秋月御郡奉行衆より掛合いに相成り居り候処、御先触手元え承知致さず付、御休泊相分り申さず、其村へ御郡方出役に相なり居り候はば、此の趣引合わされ候上、右、申し越さるべく候。以上」

先触が来ないので、秋月藩領で街道筋の中牟田村庄屋に出した手紙の控えである。この心配も嘘のように、翌日の記事はいとも簡単である。

「同 二十五日、甲斐守様長崎御越駕済ませられ候」

そして帰路、町茶屋で小休止した秋月藩主の行列は無事原田宿を通り過ぎている。

「五月五日、甲斐守様御先触来る」

「同 七日、甲斐守様御帰座、五つ半頃、町茶屋にて御小休、無滞御通駕済み候事」



## 山崎(洋)家資料について

筑前原田宿は、筑後国と肥前国に接した長崎街道の宿場であり、同街道豊前国境の黒崎、唐津街道中津領境の前原とともに関番所が置かれていた。「口上覚」（鬼木文書26）には、9人の原田関番所役人の名が記されている。その中に山崎央（なかば）の名がみえる。本報告書に載せる山崎家資料の中心をなす人物である。央の在任期間は明かでないが、位牌から生まれは天保10年（1839）8月13日であることがわかるので、ほぼ原田宿最後の関番を勤めた人であったと思われる。家屋は明治16年（1883）9月29日の火災で焼失したので、現在に伝わる資料の大半は明治期以降のものである。しかしながら、同家資料からは明治維新を経て変貌していく宿場の一端が伺える。とりわけ、央という人物をとおして近代化していく原田の生活がみえてくる。山崎家資料の全部は目録に掲げたとおりであるが、以下、特徴的な資料について若干の解説をおこなう。

### ①「御触」（目録番号1／資料集参照）

本資料は、国境の宿場である前原・黒崎・原田代官所の任務を記したものである。本文中に勘左衛門（立花）の名がみえることから、文化年間頃のものであろうと思われる。内容は旅人と科人の往来について対処の仕方を定めたものであるが、「原田ノ黒崎・前原江すくに通リ申旅之女者代官ノ黒崎・前原代官江添手形遣シ可申外事」の定めがあることから、原田代官所本が筆写されたものと思われる。

### ②字図・野取簿等（目録番号3～68）

本資料は、明治9年3月から9月にかけての養父郡村田村・田中村・古賀村・轟木村（現佐賀県鳥栖市）・原古賀村（現中原町）の境界測量記録で、同地が三瀨県（4月18日、佐賀県の廃止に伴い全管轄地を合併）を経て長崎県第42大区へ編入（8月21日）される前後の資料である。養父郡は同16年5月9日、佐賀県の再置に伴い再び同県に編入された。これらの資料がなぜ山崎家に残されているのか明かではないが、時期的にみて山崎央が関与していたことが推察される。

### ③帳簿等（目録番号76～145）

一部欠落があるものの、明治6年（1873）～昭和16年までの家計簿類が揃っており、宿場が廃止された後の生活の推移を知る上で格好の資料である。

### ④恵比須座関係資料（目録番号146～172）

文政元年（1818）から昭和2年（1927）までの記録が含まれている。原田の恵比須座は、蠟燭屋・醤油屋・紺屋・元旅館等だけでもたれているが（昭和58年現在）、本来持ち送りであるはずの記録類が山崎家に留まっていたところを見ると、座および座員とも断続してきたことが考えられる。

### ⑤原田郵便局関係資料（目録番号195～212）

原田に郵便局が設置されたのは、明治5年（1872）1月である。山崎家は同16年に焼失した翌年、新築家屋の一角を郵便局に使用したと伝えられている。現原田郵便局の日誌には、同29年9月15日～41年6月9日にかけて央が局長を勤めていた記録が残されている。

## 「御境石建覚書」について

本書は、文化2～4年（1805～07）にかけておこなわれた筑前・筑後・肥前三国、ならびに筑前・肥前二国の国境石建立に関わる記録で、対州（対馬）領基肄郡城戸村庄屋の梁井徳介が、関係者へ宛てた手紙や口上手覚をもとに編集したものである。原本は佐賀県三養基郡基山町基山6区の区有文書として伝えられている。形態は書冊で、本文189ページ。保存状態は良好である。内容については翻刻を本報告書の資料集に収めたが、あらすじは次のようなものである。

文化2年（1805）2月19日、筑前・肥前の境を示す松が枯れたことをきっかけに、田代代官所の手代原永介より城戸村庄屋徳介へ国境確定のため筑前国原田村と交渉するよう達しがあった。2月21日、早速、徳介は原田村へ使者を遣わしたが、庄屋は福岡へ出張中であつた。3月2日には徳介父子が代官所へ呼ばれ、進捗状況について報告を求められた。そこで、徳介は、崩落しかけている三国割塚を先に再建した後、枯松跡の石建に移る段取りを提言した。3月5日には原田村へ、5月6日には筑後国三沢村へ提案がなされた。6月9日から三者協議が始まり、筑前から高野門七（山口村大庄屋）・山内奎七（原田村庄屋）・又助・武七（同村組頭）・藤本惣七（早良郡田嶋村庄屋＝御境目方）、肥前から青木與介（大庄屋）・梁井徳介（城戸村庄屋）・重右衛門・九郎右衛門（同村頭百姓）、筑後から花田卯八（三沢村庄屋）・十次郎・幸介が立ち会つた。筑後国の銘文のことで一時工事は難航したものの、三国境石は同年11月24日に完成した。

筑前・肥前二国境の協議は、文化4年1月13日から開始された。境界の新たな目印は、松を植え替えると田地に日陰が生じるという理由から石柱とすることに決定した。4月18日から石柱の製作にかかったが、4月29日に至り国境について双方の見解が異なっていることが明らかになった。筑前国原田村は元禄13年3月5日に取り交わした証文を根拠に、あくまでも枯松の場所が国境であると主張するのに対し、肥前国城戸村は、松は万治年中に植えたもので国境を示すわけではなく、永正年間から当地を相続している梁井家にも国境を定めた記録は無いと主張して譲らない。そこで、御境目方の藤本惣七は枯松を除去し、問題となる野地を測量した上で等分することを提案し双方妥結をみた。5月9～14日にかけて枯松の除去作業、翌15日に測量がおこなわれたが、またまた測量の方法で意見が対立したので、肥前国から姫方村庄屋定右衛門が参入して協議、5月18日に沓石の設置を終え証文を取り交わした。折柄の大洪水で作業は延期されたが、8月2日に石柱銘の彫刻が完成、同年8月17日に国境石の建立は完了した。

さて、結局、筑前・肥前の国境石は枯松の場所より3尺余り筑前寄りに建てられることになったわけである。100年ほど前に取り交わした証文を筑前側に提示されながらも、一旦は水掛論に持ち込み、あらためて野地を測量して等分にした徳介の交渉力には脱帽せざるを得ない。三国境石を建てたのち二国境石を建てる計画が、すでに1年半前に出されていることや、文化3年3月24日に城戸村役人たちが独自に測量した野地割図が残されていることなどから、交渉は肥前側の周到な準備の上に進められたことが窺える。憶測を交えると、一連の経過は、すべて徳介が描いたシナリオどおりではなかったかとさえ思えてくる。この一件の前年に、原田村庄屋に任せられたばかりの奎七は、おそらく対抗する術を持たなかつたのであろう。

なお、「御境石建覚書」とは別に、田代代官所の手代たちが一件に関わつた村役人たちの働きを上層部に報告するため作成したとみられる「三国御境割塚并筑前御境枯松跡石建方掛合略記」（筑紫野市立歴史民俗資料館編／『国境の宿場-筑前原田宿』／1992年所収）がある。

# 原田・筑紫の祭り行事

## ムラの神々と祭祀

**筑紫神社** 筑紫野市原田の筑紫神社は、『延喜式神名帳』所載の式内社である。その由来を語るものに『筑後国風土記』（『釈日本紀』所引）の「筑前国と筑後国の境に荒ぶる神がいて、往来のものの命を奪ったので筑紫君と肥君がこれを祀った」という説話がある。これまでこの説話をめぐって、その位置・司祭者などについてさまざまな論議がなされてきたが、いまだ定説となるべきものが得られていない。注目されるのは「国境の荒ぶる神を祀った」とあることで、この伝承をそのまま受け取って見ると、そこに浮かんでくるのは祟り神の性格を持った境界神である。主祭神に白日別神・五十猛命が当てられているが、いずれも後世の仮託で、もともとは他の式内社に見られるような祖霊的な地域守護神とは異なる、塞神的な性格の境界鎮護の神ではなかったかとも思われる。『三代実録』によれば神階は従四位上、延喜の制では名神大社に列せられ、中世には少弐氏亜流の筑紫氏が社司となり、多数の神職・社僧を擁して勢力を誇っていたことが窺われるが、筑紫氏の没落とともに衰微して近世に至っている。近世の信仰圏は原田村・筑紫村の二村。式内社という古い由緒を持ちながら、その信仰圏がこの両村に限られていたというのも、境界鎮護の神という祭神の性格からきたものではなかったろうか。ちなみに、『筑前国統風土記』（元禄十六年—1703）には「此社は原田村にあり。原田村の隣村に筑紫村あり。始は原田村も筑紫村の内也。後に別れて両村となる。」とあって、もとは筑紫村一村、近世初期に原田村が宿場町として機能するようになって別れたものと思われる。

明治四年（1871）の「筑紫神社祭神之次第 神社書上帳」によると、主祭神白日別神・五十猛命のほかに相殿神として坂上田村麿・玉依姫（宝満神）を祀り、氏子は原田村139軒、筑紫村69軒となっている。境内社は御祖神社（伊弉諾尊・少彦名命）・稻荷神社（倉稻魂命）。ほかに猿田彦大神と思兼神の石搭がある（『筑前町村書上帳』文政三年—1820）。

**村内の摂末社** 原田・筑紫両地区には筑紫神社のほかに、村内に散在する小祠がある。近世の地誌・神社書上等によって、若干の違いがあるが、享和二年（1802）の「明細記」（近藤家文書）に記された社種をあげると次のとおりである。

原田村……若宮神社（上原田） 弁才天社（森ノ本） 金毘羅社（□東天） 祇園社（町内） 蛭子社（町内） 天満宮（天神山） 田神（辻）

筑紫村……天神社（太郎丸） 天神社（木町） 天神社（松本）

このうち、原田村の若宮神社は筑紫神社の摂社で、境内に式内十九神の石体と山ノ神の祠がある。寛政十年（1798）の『筑前国統風土記附録』には筑紫村に「祇園社（タツガシラ）」の記載が見られるが、「明細記」にはこれが脱落している。また、『筑前町村書上帳』には若宮神社の境内社に葉山神社・大行事社があげられており、原田村にはあらたに宮地嶽神社が勧請されている。

**神社祭祀** 筑紫神社は、前述のように原田・筑紫両村共通の村氏神（近世の地誌類では産神）である。筑紫神社の祭祀は『統風土記附録』に「祭礼十一月初卯日 奉祀山内齋」とあり、「神社書上帳」では「祭日 二月初卯日 六月十九日 九月廿日 十一月卯日 仲卯日ヲ以テ大祭トス」となっているが、当然のことながら、この祭祀には原田・筑紫両村の氏子が関わってきた。二月初卯日の祭りには「粥占い」が継承されており、十一月卯日の大祭には「宮座」が営まれている。二月・十一月卯日の祭りは、農耕祭祀における“としごい”と“にいなめ”の対比を見せており、この時点で、すでに筑紫神社が地域農耕守護神の性格を帯びていたことを示している。六月十九日の祭

りは祇園信仰の影響による夏の災害防除を願っての夏祭り、九月廿日は“おくんち”と呼ばれているだけで氏子による祭祀は継承されていないが、近隣のムラでは旧暦九月に早稲の新穀を神前に供える“おくんちの宮座”が見られる。こうした年間諸祭のうち、十一月卯日の宮座がもっとも重視されていたことは、「仲卯日ヲ以テ大祭トス」という記載からも窺われる。この宮座は、村の成り立ちからみて、本来は一つのものではなかったかと思われるが、かなり早くから原田村・筑紫村がそれぞれ別個に営むようになっており、しかも原田村の場合には本座のほかに新座があって、筑紫村の筑紫座と合わせて三座が並立するという形をとっている。原田村で新座のできた時期は明らかでないが、その名の示すように、従来の本座に加わっていなかった階層によって新たに結成されたものと思われる。

この筑紫神社の宮座のほかに、上原田にある境外摂社の若宮神社にも、上原田の氏子だけによる若宮座と呼ぶ霜月祭の宮座が継承されており、これにもまた本座と新座とがある。

そのほか原田では村内に祀られている小祠に、それぞれ恵比寿座・弁財天座・金比羅座・祇園座と呼ぶ祭座が営まれてきた。

## 粥占神事

筑紫神社の二月卯日の祭りで現在伝承されているのが「粥占い」である。神事に用いられる銅鉢の銘に「奉寄進筑紫宮神粥鉢<sup>(マ)</sup> 文化二乙丑年十一月吉日 願主 原田村氏子中」とあって、初源はそれ以前に遡ることが知られる。オカユサマと呼ばれ、現在では二月十五日に粥納め（粥入れともいう）、三月十五日に粥試し（お粥出し）が行われ、粥の表面に生えたカビでその年の農作の吉凶を占うが、判定人には神職と原田・筑紫の氏子代表6人が当たっている。

概要は神社に保管されている次第書に記されているが、旧暦正月十五日、氏子が元旦に神社に上げた年玉（白米に昆布・するめを混ぜたもの）の米八合ほどで粥を炊いて銅鉢に盛り、その上に十一月卯日の宮座（原田の本座・筑紫座）で用いた柳箸を削って十文字に載せ、東西南北に仕切る。東が豊前、西が肥前、南が筑後、北が筑前で、それぞれに名札を立て、木箱に入れ封印をして神前に供えて置く。一ヶ月後の二月初卯日未明、神前から粥箱を下ろして開き、神職と氏子（もとは世襲制であったと思われる）でカビの生え具合を見て、それぞれの方角の農作を占う。判定の基準は次第書に記されている。判定の結果は参詣人に知らされ、終わったあとの粥は神池に投ぜられる。

## 宮 座

宮座は前述のように、筑紫神社の宮座が原田区の本座・新座と、筑紫区の筑紫座の三座、それに上原田若宮神社の若宮座に本座と新座とがある。呼称は“宮座”と“神座”の二通りがある。

**筑紫神社の本座・新座** 原田区の本座は十一月初卯日に宮座を継承していた模様であるが、文政三年（1820）の「筑紫宮御神座溜銭帳」によれば、宮座連中として27名が名を連ねている。宮座は中世以来の村落祭祀を引き継ぎ、ムラの主立ちと呼ばれる旧名主層や本家筋によって構成されていることが多いが、原田の場合ものちに新座が生じたということは、本座がそうした古くからの格式を持った家筋により、世襲性をもって営まれてきたことを示している。溜銭帳の記載から見て株座の形式をとり、宮座株を所有していたと思われるが、天保六年（1835）の時点で24名になっていたのが、同年さらに1名が退座、現在では座株を所有しているものが僅か5名になって、十一月二十日に形ばかりの座が継承されている。記録も数冊の溜銭帳以外には、明治五年（1872）十一月二日の日付で宮座の献備物を記した書付1通があるだけであるが、その末尾に、「従来は座元での直会・頭渡しの終わったあとで神社に参拝をしていたが、酒気を帯びての参拝は好ましくないので、神社で神主の祭典が執行されている間に参籠列座し、祭典後に直会式を行い、神主同道で座元に帰り、頭渡しをするように改める。」旨の記載がある。

新座のほうは慶応二年（1866）十一月廿日の日付を持つ「筑紫宮御神座帳」があって、座員15名の名が記されている。座法の記載はなく、明治十二年までの座の共有金の貸借が記されているが、それ以後昭和二十七年までの「溜金預人名帳」が保存されており、頼母子講的な要素も兼ねていたことが窺われる。ほかに宮座献立を記したもの3通（いずれも年代不詳）と、「宮座当渡式次第」とあるもの1通、明治九年から昭和十六年までの「神座入用諸品買入簿」（標題不統一）が残されているが、これらの記録の残り方から見て、新座ができたのは幕末期ではなかったかと思われる。座法を記した祭帳の上限は明治十五年旧十一月改の「産神新座帳」であるが、それによると宮座は旧十一月廿日。朔日から当人（座元）の家に注連を張って神迎えをし、本膳拵えで祭座を営み、終わって神社に座を移し、献饌・参拝のあと直会に移って最後に当渡しという順序であったことが窺われ、祭座・直会の献立、神饌の内容等が記されている。祭帳は昭和十八年から二十七年までを欠いているが、現在まで書き継がれており、その間の推移・変遷の跡を辿ることができる。明治三十三年のところには座株を「金五円で座中買上げ」の記載が見られ、宮座株の売買が行われていたことが窺われる。その後、座員の減少、期日の変更、神饌・献立の簡略化などがあって現在に至っている。現在の宮座は十一月下旬。座員は5名で、座元に集まって茶を一服したのち揃って神社に参拝、神事を終えて社務所で直会をするという程度のもになっている。

**筑紫座** 筑紫座は享保八年（1723）十一月十五日の「筑紫村御宮座帳」を上限とする祭帳があって、現在まで書き継がれている。最初の記載では座員31名、本座・助座と呼ぶ2人1組で座元を勤め、十一月卯日（初卯日と中卯日のどちらか）に宮座が営まれていた。座員31名は同村の氏子の半数に近く、多いときには40名になったこともあり、逆に天保十二年（1841）には20名に減少しているところを見ると、必ずしも家格にはこだわらず、純然たる株座の組織であったことが窺われる。座株は天保十年の「定」によると、「座付御田地買調仕組銭老人前正銭六拾文宛持寄当年々相極候事」とあり、この時点で宮田の出資金を当てることになったということになる。現在の座員は24名。定数が24名に固定したのは嘉永六年（1853）からで、座株が24株になったのを意味していよう。本座・助座は同じ組合せで、12年で一巡し、次の座元が回ってくると本座と助座が入れ替わる仕組みになっている。座員24名を干支に割り当てていたということになる。現在の宮座は月遅れの陽暦十二月初卯日。伝承の過程で多少の変動があるものの、比較的よく古格が保たれているので、現況をもとにこの地域の宮座の構造を見ることとしたい。

座元の注連卸しは従来の旧暦を踏襲して、旧十一月朔日。本座（その年の座元）の家に注連を張り、床の間に「筑紫大明神」の御神号を掛けて、神社から受けてきた御幣2本を立てる。昔は座元を引受けると畳換え、襖の張替え等をしていった。宮座の前日または前々日に、本座・助座の両人で座員宅に宮座の案内に回る。当日は御神号の前にオゴク2本（わら苞に熟飯を入れたもの）・懸鯛・酒一升・米一升・昆布・するめを供える。午前九時、座員が正装（昔は紋付・羽織・袴）で座元に集まり、会計報告のあった後、奈良漬けでお茶をいただき、床の間の供え物にオゴク1本を加え、うち揃って神社に参る。神社では献饌・祭典のあと当渡しが行われる。当年と翌年の本座・助座が向かい合って座につき、三ッ組の土器・昆布・するめ・オゴク1本を前にして盃をかわし、手締めをして当渡しを終わる。そのあと一同で御神酒とオゴクをいただいて一旦解散する。その日の午後、再び座元に参集して直会をする。献立は刺身・煮付け・吸物・茶碗蒸し等の八品、吸物には供え物の鯛を入れる。別にお平・熟し柿が必ず付く。直会が終わると当送りがあり、翌年の本座になったものが御幣とオゴクを持ち帰るのを座員一同で送り、本座宅で小宴を催して宮座の行事を終わる。

以上が現行宮座の大要であるが、神社に祀る神をムラ内に設けた神の宿に迎えて饗応したのち、神社に神送りをして、一同で神に捧げた供物をいただく相嘗めのあと、当渡し・直会・当送りと続く宮座の典型的な形がそこに見られる。ただし、現在ではムラ内に設けた宿（座元）における饗応が簡略化され、神饌も直会の献立も簡素化されているが、祭帳の記載を見ると、収穫祭の宮座にふさわしい内容であったことが窺われる。明和八年（1770）寅十一月十三日の「御宮座帳」によると、座元で用意すべきものに、大土器八枚、小土器三束、板折敷八枚、上筵壱枚

があり、神前の供え物は御饗（オゴク）が本社の筑紫大明神に三本、末社の太良丸天神・惣次良屋舗天神・木山天神・大日天神両社にそれぞれ一本、座前に二本を遣わすとあり、ほかに黒鳥八羽・青いて・ひらき豆・掛鯛三掛の記載が見られる。宮座の献立は明治二年（1869）からのものが保存されているが、同二十四年・三十六年、大正四年、昭和二年・十四年・十五年・二十四年・二十六年・二十八年・三十八年と改正があつて現在に至っている。ここでは明治二年・二十四年の「御神座献立帳」をもとに宮座の流れに従つた献立を抄記しておく。

筑紫神社御供物……御神酒一升 甘酒銚子一ツ 御供拾本 懸鯛三掛 柿拾五個 蜜柑拾五個 ねぎ壺把 大根拾本 鴨一羽 御饗米三升三合 塩壺升三合

座元御膳座り……御熨斗 お茶 香の物

本膳…飯 鱈（白髪大根・青み・切身） しんかん（はんぺん・卵厚焼・えび・香蕈・牛蒡・蓮根・山芋・氷菟蓴・焼ぶり・人参・干瓢・柳麩） 引物（いな味噌付焼） 汁（焼豆腐・花うけ・青み・葉付昆布） 小平（たくり・おろし生姜・うす葛）

冷酒 京焼引付け

筑紫宮宮座……三宝（土器盞） 嶋台（まきするめ・干とり昆布） 湯産（板付はんぺん・壺番肴） 吸物（鯛ひれ） 押え（小板付・蓮根・牛蒡・人参・氷菟蓴・焼豆腐・山芋） 鉢肴（ぬたあえ） だぶ（竹輪・蓮根・牛蒡・椎茸・根芹・うす葛） 鉢（たこの煮付） 長皿（ひたし・花かつを） 味噌吸物（もだま） 茶碗（かも・せん牛蒡・蓮根・椎茸・根芹） 鉢肴（かれい煮付） すみそ引皿（もだま・白髪大根・三嶋のり） 鍋料理（竹輪・蓮根・牛蒡・人参・春菊・焼豆腐・こんにゃく） 吸物（きすご） 糸目（生子ふくら入り・胡椒の粉）

当渡し……吸物（豆腐・打かき） 押へ見合 押へ（塩付大根・蜜柑）

**若宮座** 若宮神社は上原田にあつて、氏子は筑紫神社との二重氏子である。若宮神社にも本座と新座の二つの宮座があるが、構成員は筑紫神社の宮座と重複して、筑紫神社本座・新座の上原田の人びとが加わっていたと思われる。新座が生じた時期も筑紫神社の場合と同じ頃ではなかったろうか。現在では本座が六軒で十一月二十三日に、新座が九軒で十二月二十三日にそれぞれ宮座を営んでいるが、ここでは本座について概要を述べることにしたい（以下“若宮座”と呼ぶ）。

若宮座には寛文九年（1669）十一月十三日の「原田若宮大明神祭頭人次第註文」を上限とする祭帳が伝えられているが、頭人（宮座構成員）の人数は天明七年（1787）に一時24名（ほかに宮柱1名）になったことがあるが、ほぼ17,8名から14,5名で推移している。ここでも株座組織で、文久二年（1862）の条に「若宮御神座頭人相減候に付、当丑十一月五市座々仕組相立一巡左之通申極候事」とあつて、一応16株を定数としているが、その後、持ち主が欠けたときには「預け」としてそのままにしておいたり、新座からの加入を認めたり、明治二十年代には1株3円で売買も行われたりしている。祭帳に記載された神前献備の品々、宮座の献立等は筑紫神社宮座の場合と類似しているので、現行宮座の概要を記した上で、時代的変遷を見ることにしたい。

宮座当番を当元と呼んで輪番に勤めるが、前・当・後と3人が組になって、その年の当元の前後2人が加勢をする。当元はその年の神田（5反）の耕作をして収穫米で座を賄う。座の前日に門注連を張り、床の間に「若宮大明神」の御神号を掛け、その左に御幣を付けた櫛を立て、御神号の前には供物を供える。供物は藁苞に入れた御饗盛3膳、御神酒・米・塩・懸鯛・野菜・柿など、竹に付けた小さい御幣三本と、同じく御幣を付けた小さな弓2張を添える。御饗盛は神田で取れた新米を炊いて作る。午後一時ごろ、正装をした座員が当元宅に集まり、神職を中心にそれぞれが座に付いたところで、当元が取肴を盆にのせ、下座から挨拶をする。最初に御神酒が神職より右回りに一巡する。お酌人は当元の身内の未婚の女性が正装して勤める。御神酒が終わると会席前が出され、燗酒になり、給仕人がお酌をしまわす。会食のあと、最後にオユトウ（御供を炊いた釜に湯を入れて煮立てたもの）が出る。

これで当元での座が終わり、暫時休憩の後、お宮へと座を移す。

午後二時前に当元を出発するが、御饗盛の1膳は当元に残し、残りの神饌と御幣を持ち、行列を作ってお宮まで行く。お宮に着くとただちに献饌。神饌は御饗盛2膳（1膳は来年の当元分）、御神酒・饌米・塩・スルメ・昆布・柿（折敷一杯10個）・野菜（大根・人参・ネギ・茄子・白菜）・懸鯛に、榊に付けた御幣、竹串幣3本（神前・当元・当渡し用）を添える。祭典は修祓・開扉・祝詞奏上・玉串奉奠。祭典が終わると撤饌をして相嘗めに移る。取肴は小さく切ったスルメと昆布で、御神酒を土器でいただく。神前から下げた御饗盛をハッスン（柳の箸）で取り分けて座員に分配する。柿も全員に配ってそれぞれが持ち帰る。お宮での座が終わると、当元での直会の時間を打ち合わせ、一旦散会してそれぞれ自宅に戻る。

夕刻になると当元から子供が座員の案内に赴く。昔は七迎え半の案内であったという。直会も以前は決まった献立があり、料理人を雇うほど手のこんだものであったというが、現在では鍋料理に簡略化されている。座順は正面に神職が座り、その左手から年齢順に並び、末席に当元が位置する。最初に3ッ組の盃で御神酒が回り、終わって燗酒となり、鍋料理で会食をするが、日没後に当渡しが行われる。座の中央に今年の当元と翌年の当元が向い合せて座り、両者の間に御饗盛とハッスン、竹串幣1本、弓1張を載せた帳箱を置き、神職の指示に従って当渡しの盃が交わされるが、盃ごとの次第は持ち回りの書付に記されている。最初は当渡人→当受人→当渡人と盃が交わされて謡一番、次に当渡人→神職→当渡人→当受人と交わして謡二番、最後は押えとして当受人→座中巡盃→当受人→当渡し人と移って謡三番、盃が当受人に帰り、手締めをして当渡しを終わる。そのあとは無礼講の宴となり、宴が果てると座員一同で当送りをする。当受人は襟に竹串幣と弓を差し、御饗盛を持ち帰って神棚に供え、あとで家族のものがそれをいただく。送って来た座員を交えて小宴を持ち、宮座の儀式を終わる。極めて整然とした宮座儀礼の構造で、神饌と饗宴の献立、以前お宮で行っていた直会と当渡しを当元に帰って行うようになった点などに時代的推移が窺われるだけで、あとは古格が維持されているものと思われる。

## 小祠の祭座

ムラ内の小祠の祭座には、前述のように原田に恵比寿座・弁財天座・金比羅座・祇園座がある。それぞれの祠のある集落ごとの祭座で、積金や切り米をして座を営み、余剰金（米）を貸して利金を取るという頼母子講的な性格も兼ね備えていた。のちには単なる親睦会になったところもある。

**恵比寿座** 恵比寿神は宿場の守護神であるところから原田宿でもこれを祀り、商家の人々によって祭座が営まれている。文政元年（1818）からの「恵比寿座帳」が保存されており、旧十一月三日に白米1升・銭百五拾文を持ち寄って座を開いていたことが記されている。明治四年（1871）には頭人14名、当元を決めて、恵比寿社に参詣ののち当元宅で本膳拵えの直会があった。現在は十二月三日。

**弁財天座** 安政六年（1859）の「辨財天宮御神座連名并溜銭一順年々指引根帳」には御神座の始まりを「安政六年十月亥ノ日」と記し、座員11名、一人宛米3升4合持ち寄り、酒は3升を座員に割当てること定められている。当元は順番、座の献立は吸物・鮎汁・しひ飯・豆腐吸物程度の簡単なもので、頼母子講・親睦会的な要素のものであったが、平成元年で消滅を見ている。

**金比羅座** 明治四十三年（1910）の「金比羅宮御神座帳」では、十二月十日を定日とし、座員は9人、積金をして、当元を決め、吸物・ぬたえ・膾・お平程度の献立で祭座を営んでいた。現在は四月と十二月の十日に親睦会的な集まりとなっている。

**祇園座** 祇園社は現在筑紫神社の境内に祀られているので、もとの社地のあった地域の人々9人程度で、十一月十五日、輪番で簡単な祭座が営まれている。

## 筑前原田宿年表

- 1638 寛永15 1. 松平信綱、原田に宿陣、翌日島原へ向かう。小河内蔵允出る。(1)
- 1639 寛永16 4. 原田宿初代代官小河内蔵允、没。(1)
- 1665 寛文 5 原田代官高島角右衛門。(2)
- 1669 寛文 9 2. 筑紫宮再興の勸進趣意書できる。(3)
- 1681 延宝 9 6. 筑紫神社の縁起を京都の吉田靱負定俊が作る。(3)
- 1699 元禄12 11. 筑紫宮に石鳥居建つ。(4)
- 1700 元禄13 3. 筑前領・肥前田代領の国境絵図画できる。(5)
- 1708 宝永 5 5. 代官時枝長十郎。原田宿の駄賃稼ぎ人足、田代領赤坂の普請人足と喧嘩、庄屋平三郎・先庄屋休良、田代宿との交渉に当たる。(6)
- 1714 正徳 4 この年より70年ほど前に原田宿出来る。(7)
- 1715 正徳 5 5. 代官交替(時枝長十郎から川端市左衛門へ)。(8)  
原田在宅人馬奉行大野九郎左衛門。(9)
- 1719 享保 4 10. 代官川端市左衛門やめる。(9)
- 1720 享保 5 代官梶原作左衛門、筑紫神社縁起を著し寄進する。(3)
- 1723 享保 8 11. 「筑紫御宮座帳」第1冊はじまる。(3)
- 1743 寛保 3 6. 原田人馬奉行大野源蔵、飯塚代官に転勤。代官櫛橋久兵衛。(9)
- 1770 明和 7 11. 「筑紫村御宮座帳」第2冊はじまる。(3)
- 1774 安永 3 代官天野市左衛門。(4)
- 1778 安永 7 庄屋代助、久留米牢人坂井俊伯を手習師匠に雇い入れる。(6)
- 1781 天明 1 代官天野弥市兵衛。(6)
- 1784 天明 4 代官天野弥市兵衛。(6)
- 1786 天明 6 8. 坂井俊伯、往来手形不所持が発覚し追放される。庄屋・年寄・組頭中、科銀の罰を受ける。(6)
- 1787 天明 7 8. 原田宿関番所で抜荷米を差し押える。(6)
- 1794 寛政 6 9. 代官毛屋勘兵衛「町茶屋・関番所諸品」を請取る。(10)
- 1801 享和 1. 4. 代官薮兵蔵に長崎屋次助・大坂屋喜八、宿帳を差し出す。(11)
- 1802 享和 2 5. 吉田重房、糸荷屋善右衛門に泊まる。(21) この年代官竹森唱生、下代三人・関番二人・郷足軽三人。社人山内備後・山内縫殿。(12)
- 1804 文化 1 原田宿の浪花講定宿、山内孫四郎。(13)
- 1805 文化 2 6. 三国境割塚石の建設に庄屋山内奎七・組頭武七・又助立会う。(5)  
10. 大田南畝、長崎より帰任の途中、白頭寺(伯東寺)を訪ねる。(14)
- 1807 文化 4 4. 代官竹森唱生「町茶屋・関番所諸品請帳」を差し出す。(11)  
5. 「従是東筑前国・従是西肥前国対州領」の国境石建つ。(5)
- 1809 文化 6 4. 下代高嶋茂作、没。高嶋次七郎下代となる。(11)
- 1812 文化 9 9. 伊能忠敬、全国測量中、原田駅の客館預主山内孫四郎に泊まる。下役宿は長崎屋治助。代官杉山平四郎、年寄山内卯右衛門出る。坂部貞兵衛隊は町役人宇右衛門に小休、筑紫大明神当時神

主山内出羽。下代松口七郎・高嶋次七郎、関番六人・郷足輕三人。(15)(16)

- 1813 文化10 12. 天山烽火場見張り番人に鬼木利七・同正右衛門・同和作の三人、新規採用になる。各々二人扶持四石。(16)
- 1814 文化11 山内卯右衛門41歳、原田村庄屋になる。(11)
- 1818 文化 1 代官杉山平四郎「町茶屋・関番所御通方御用之諸品」を請取る。
- 1824 文政 7 12. 下代高嶋次七郎27歳、没。(11)
- 1825 文政 8 4. 代官杉山平四郎。高嶋円助下代(二人五石)となる。(11)
- 1828 文政11 9. 下代高嶋円助、原田代官所の記録を写す。(11)
- 1836 天保 7 9. 代官古藤五助。(11)
- 1839 天保10 9. 山内相模種興、「肥前国風土記」を写す。(17)
- 1844 弘化 1 8. 代官内海右兵衛。(11)
- 1846 弘化 3 6. 筑紫神社、藩より年々米十俵の寄付を受ける。(3)
- 1852 嘉永 5 3. 下代鬼木利七、原田代官所本「諸通執行之定」を写す。(10)  
8. 代官上原久五郎。(11)
- 1855 安政 2 8. 下代鬼木利七73歳退職、倅の郷足輕左六下代となる。(10)
- 1858 安政 5 4. 代官上原団左衛門。(10) 11. 山内陽亭「田嶋外伝濱千鳥」を著わす。この中に「原田駅家之真景」図あり。(17)
- 1861 文久 1 2. 山内良平、原田村庄屋になる。下代高嶋文八「公用日記」。(10)
- 1862 文久 2 7. 代官交替(上原団左衛門→浅香登)。(11) 閏8. 山内陽亭69歳「箱崎釜破古」を写す。(17)  
10. 町茶屋守孫四郎、休泊名元を報告。(10)
- 1864 元治 1 12. 代官交替(浅香登→田中宅之丞)。(11)
- 1865 慶応 1 4. 代官田中宅之丞退職。下代高嶋文八「元治二年丑日記」。(10)  
5. 古野忠右衛門、宰府御造宮奉行から原田代官に転勤。(10)  
山内陽亭石明72歳「筑前国統風土記拾遺」を写し終る。(18)
- 1867 慶応 3 12. 山内陽亭石磨74歳「妖魅考」を写す。(18)
- 1868 明治 1 6. 山内与次平が原田触口役に、原田村庄屋に山内篤次郎がなる。(11) 山内与次平役筆筭を誂える。(19)
- 1870 明治 3 2. 高嶋圓(文八改名)退職、与一郎下代相続。 3. 代官古野茂男(忠右衛門改名)に替わり飯塚代官内海貞、原田代官となる。(11)  
8. 高嶋与十郎、山家下代に転勤。(11) 9. 庄屋山内篤三郎。(11)  
12. 筑紫宮祠官、城山正興(旧姓山内)。(11)
- 1871 明治 4 4. 原田山家駅通取締役梅田茂苗。(11) 7. 山内平四郎、大庄屋となる。(11)  
9. 駅通添役・属吏の番宅を渡し切りにする。(11)
- 1872 明治 5 2. 第二十三区戸長山内平四郎。(11) 2. 高嶋与十郎、山家下代免職。(11)
- 1873 明治 6 4. 原田駅郵便取扱人山内伊七郎、同身元引請人山内利吉。(20)
- 1874 明治 7 12. 通運会社・原田駅継立所引受人、山内伊七郎。(20)

典拠文献(出典番号)：1 新訂黒田家譜 2 黒田三藩分限帳 3 筑紫神社文書 4 筑紫神社鳥居銘 5 梁井文書  
6 福岡藩御用帳 7 二日市宿庄屋覚書 8 長野日記 9 萬年代記帳 10 鬼木文書 11 高嶋文書  
12 御笠郡明細記 13 諸国定宿帳 14 小春紀行 15 測量日記 16 三奈木里田家文書

17吉原文書      18筑紫豊「青柳種信の研究」      19浦山文書      20福岡県史稿  
21吉田定房「筑紫紀行」

### III. 資料目録

# 山内(花)家文書目録

<資料内訳>

①証文関係	98点	④神社・宮座(本座)関係	24点	⑦その他	60点
②酒造関係	37点	⑤議会関係	25点		
③国道関係	8点	⑥行政関係	181点		
					総計/433点

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
----	-----	-----	-------	-----	-----

## ■ 証文関係

001	永代売渡申書物之事	安永5年11月29日	売主 甚之助	七五郎	切紙
002	質入田島之事	安永5年12月	借主 伝五郎 受人 伝之助	七五郎	継紙
003	[借用証文]	安永7年12月	債主 忠七 請人 又七・五次郎	七五郎	一紙
004	質物入置田地之事	天明1年12月21日	置主 幸助 証人 半三・太右衛門	七次	一紙
005	質入二付書物候事	天明1年12月21日	置主 幸助 証人 半三・太右衛門	七五郎	一紙
006	売渡申島事	天明3年12月	売主 源作 請人 作右衛門	七五郎	一紙
007	質物二入置田地之事	天明5年12月	借主 与右衛門 請人 十九郎	七五郎	一紙
008	売物之事	天明5年12月	喜三郎 請人 十九郎	七五郎	一紙
009	質入仕家屋敷之事	寛政1年12月	借主 孫作 受人 源之助	七五郎	継紙
010	借用仕錢覚	(寛政2カ)戌ノ正月14日	新町 孫作	七五郎	一紙
011	質入証文之事	寛政4年12月	証人 作右衛門 受人 五兵衛	七次	一紙
012	受取申錢之事	(寛政4カ)子ノ12月20日	借主 作右衛門 受人 五兵衛	七次	一紙
013	永代売渡シ申田地之事	寛政5年6月	売主 善三 受人 喜八・七次	七五郎	一紙
014	永代売渡申田地之事	寛政5年丑12月	売主 作右衛門・五兵衛 受人 五市	弥吉	一紙
015	永代売渡申田地之事	寛政6年11月	売主 与市 受人 五兵衛	七五郎	継紙
016	相渡置筑紫田之事	寛政6年11月	売主 与市 受人 五兵衛	七五郎	切紙
017	質入仕ル田地之事	寛政11年末12月29日	借主 伊三郎・長五郎	弥吉	一紙
018	質入仕ル田島之事	享和2年8月	借主 与市 受人 太助	弥吉	継紙
019	借用仕候銀之事	享和2年	おたけ	弥吉	一紙

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛	先	形 態
020	質入仕ル田畠之事写証文	享和3年1月	借主 与市 受人 太助・弥助・又八	弥吉		継紙
021	借用仕銀之事	享和3年12月	大黒屋与市	弥吉		一紙
022	銀合証文之事	享和3年12月	庄屋 奎七	弥吉		一紙
023	質入仕田地之事	享和3年12月	借主 又助 受人 与市	弥吉		継紙
024	質入申畠之事	文化1年4月25日	借主 又助・市五郎 受人 弥助・与市	弥吉		一紙
025	質入仕畠之事	文化1年子7月	質入主 伊三郎・長五郎	弥吉		一紙
026	質入仕田地之事	文化1年子7月	借主 伊三郎 受人 長五郎	弥吉		一紙
027	借用仕銭之事	文化1年12月	借主 太助 請人 弥助	弥吉		一紙
028	御家中え御貸渡銭御用達 仕候分式拾五ヶ年賦可相 渡根証文之事	文化4年9月	梶原市太郎 森惣右衛門 富藤 奎 青柳宇右衛門	御笠郡	原田村弥吉	継紙
029	借用仕ル金銀之事	文化4年12月13日	山水屋	弥吉		一紙
030	預申銀子之事	文化5年12月18日	松屋卯右衛門	弥吉		切紙
031	借用仕銭事	文化5年12月	借主 又助 受人 代助	弥吉		継紙
032	質入仕家屋敷之事	文化5年12月	借主 源太郎・源作 受人 源作	弥吉		継紙
033	一私家稻売渡ス証文之事	文化6年12月	和吉	弥吉		一紙
034	借用仕銭之事	文化9年7月29日	借主 又助 受人 吉蔵	弥吉		切紙
035	永代ニ売渡シ申稲作田地 之事	文化9年12月	借主 又助 受人 代助	鷹尾屋弥吉		一紙
036	質入仕畠ヶ之事	文化10年8月16日	借主 又助・市五郎	鷹尾屋弥吉		継紙
037	永代ニ売渡申家屋敷之事	文化11年1月	売主 松尾六右衛門 肥前屋伊平	弥吉		継紙
038	借用仕金子之事	文化11年3月	大黒屋代助	弥吉		切紙
039	永代ニ売渡申畠之事	文化11年5月	売主 松屋卯右衛門 請人 大黒屋代助	鷹尾屋弥吉		継紙
040	覚(田畠質入)	文化12年3月	大黒屋代助	弥吉		継紙
041	借用仕米之事	(文化12年カ)亥3月	大黒屋代助	弥吉		一紙
042	帰り扱之事	文化12年12月28日	鷹尾屋弥吉	大黒屋代助		継紙
043	[証文]	文化12年亥ノ12月28日	弥吉	佐助・良助		一紙
044	借用仕金銀之事	文化12年12月	大黒屋代助	弥吉		継紙
045	亥ノ冬御上納差支ニ付米 借用之事	文化13年3月	筑紫村庄屋 同組頭 忠市 同 庄七 頭百姓 七次 諸用聞 又助	弥吉		継紙
046	借用仕ル銭之事	文化13年子ノ12月	塔原村借主 左七・左八 受人 半次	原田村弥吉 七五郎・為寿		継紙

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
047	帰り扱	文政2年	(櫛橋)又之進内伊佐宇右衛門	原田弥吉	一紙
048	永代売渡申田地之事	文政2年12月	田地売主 武八 請人 卯右衛門・順平 左助	弥吉	一紙
049	証文添書之事	文政2年12月	売主 武八 請人 卯右衛門	弥吉	切紙
050	返扱之事	文政2年12月	買主 弥吉 請人 弥七	武八	切紙
051	永代売渡証文之事	文政9年2月	売主 徳助 受人 藤吉	久之助	一紙
052	永代売渡証文之事	天保2年4月	売主 代助 受人 弥七	弥吉	継紙
053	永代売渡証文之事	天保4年7月	塔原村 善左衛門 武蔵村庄屋 左蔵 同村組頭 権蔵	原田村七五郎	継紙
054	永代売渡証文之事	天保5年3月	山崎清兵衛	山内弥吉	一紙
055	永代売渡候家屋敷証文之事	天保5年6月	売主 源之助・嘉助 受人組頭 七五郎・半蔵	弥吉	一紙
056	永代売渡畠証文之事	天保6年12月	売主 幸右衛門後家 受人 勘口・喜太郎	弥吉	継紙
057	御上納差支ニ付永代売渡申畠証文之事	天保8年2月	売主 幸吉 受人組頭取 七右衛門 同 組頭 七五郎	勝平	継紙
058	売渡証文之事	天保10年亥12月	田地主 喜八 請人 和市・宗市	庄屋勝平	継紙
059	永代売渡証文之事	天保12年12月	売主 幸吉 受人 茂七・勘次	弥一郎	継紙
060	永代売渡証文之事	天保15年5月	売主 庄屋卯右衛門 請人 武八	弥一郎	継紙
061	永代売渡証文之事	天保15年5月			一紙
062	讓渡申事	弘化3年午8月	讓渡主 定平・請人 善助	弥一郎	継紙
063	家屋敷替規証文之事	弘化3年11月	茂市・茂吉 受人 兵七・善助・又五郎	弥一郎	継紙
064	永代売渡申家屋敷証文之事	嘉永3年12月	売主 左七・善次 受人 伊作・又五郎	弥一郎	継紙
065	依相談永代讓渡証文之事	嘉永4年12月	讓渡主 弥一郎 請人 定右衛門・松尾朔蔵	伊作	継紙
066	依相談讓渡申田地証文之事	嘉永4年亥12月	山崎卯七 請人 松尾朔蔵・定右衛門	弥一郎	継紙
067	[証文] (前欠)	文久1年12月	筑紫村組頭 和三郎 同村庄屋 兵吉	山内弥一郎	継紙
068	御上納差問ニ付永代売渡田地証文之事	慶応1年11月	田地主 平七 受人一族 茂一・利右衛門	山内弥一郎	継紙
069	御上納差問ニ付永代売渡申田地証文之事	慶応1年12月	売渡主 茂市・茂吉 受人一族 又四郎	山内弥一郎	継紙
070	帰扱之事	慶応1年丑12月	山内弥一郎	茂市・茂吉	一紙

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
071	御上納差支ニ付永代売渡 申田地証文之事	慶応2年11月	田地主 武四郎 一族惣代 又七・平七 受人 徳右衛門・利平	山内弥一郎	継紙
072	永代売渡申田地之事	慶応3年2月	借用主 弥平 請人 弥三郎・弥七・久七	本家弥一郎	継紙
073	御受取申書物之事	慶応3年卯12月	大工新作・請人平吉	山内篤三郎	一紙
074	銭預り	(江戸時代)巳7月10日	吉三郎	弥吉	切紙
075	[受取証文]	(江戸時代)寅12月28日	六右衛門	弥吉	切紙
076	預り	(江戸時代)正月18日	松屋卯右衛門	弥吉	切紙
077	当時預り	(江戸時代)巳1月18日	松屋卯右衛門	弥吉	切紙
078	為後年約定証文之事	明治1年12月	売主 又四郎 受人 久七	山内篤次郎	一紙
079	売渡申証文事	明治1年12月	借主 久七 受人 又四郎	山内篤次郎	継紙
080	御上納差支ニ付永代売渡 田地証文事	明治1年12月	田地主 五市 一族惣代 又作 受人 弥助	山内篤次郎	継紙
081	永代売渡申証文之事	明治1年12月	田地主 太助 一族惣代 田中伊助 同 太作 受人 山崎角一・半蔵	山内弥一郎 山内篤次郎	継紙
082	御上納差間ニ付田地売渡 添証文事	明治2年12月	田地主 五市 一族惣代 又作 受人 弥助・半蔵	山内萬代雄 山内篤三郎	継紙
083	年延御相続仕添証文事	明治3年12月	売主 茂市 受人 又四郎	山内弥一郎	一紙
084	御上納指支ニ付永代売渡 申田地証文事	明治5年2月	田地主 山内五市 一族惣代 山内又作 山内源三郎 受人 山内伊七郎 山崎卯平	山内萬代雄 山内篤三郎	継紙
085	借用仕上候証文之事	明治5年5月	借主 良七 受人 浦山孫九郎 世話人 山崎角一	山内萬代雄	一紙
086	預り申上候事	明治6年酉2月	原田村山内篤三郎	原様 請取頭様	一紙
087	耕地質入証書	明治9年1月15日	借主山崎角一・同 央	山内淑郎・山内伊七郎	書綴(野紙)
088	地所永代売渡証	明治9年以降	山内淑郎		書綴
089	売渡証	明治12年1月8日	山内平四郎	山内篤三郎	野紙
090	売渡証文之事	明治12年2月	売渡主 山内甚吉 同 山内七右衛門 証人 山崎良三郎	山内篤三郎	野紙
091	[土地売渡証文]	明治13年1月2日	山崎清蔵	山内淑郎	野紙
092	確証 [土地売買]	明治13年2月3日	永川新六 証人 永川又作	永川房吉	野紙
093	地所建家共永代売渡証	明治13年2月	売渡主 永川新六	永川房吉	書綴(野紙)
094	地所永代売渡証	明治14年1月15日	売渡主 柴田久吉 証人 山崎久四郎	原田村 山内篤三郎	書綴(野紙)

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
095	地所書入金借用証	明治14年1月29日	山崎甚六 証人 本多弥四郎	山崎利三郎	書綴
096	永代林売渡証	明治14年8月5日	柴田文平 証人 大石弥三郎	城山惣十	書綴(野紙)
097	永代林売渡証	明治14年8月	売渡人 柴田久吉	山崎甚六	書綴(野紙)
098	借用証	明治14年旧12月27日	山内平次郎	山内淑郎	野紙

## ■ 酒造関係

099	御構御用酒上納通帳	文久3年亥9月	原田宿 高雄屋篤次郎		長帳
100	酒造高調子ニ付大阪民部 省通商司・福岡藩庁より 御達写	明治3年5月			書冊
101	酒造石高書上帳	明治3年6月	筑州御笠郡原田村與次 平・稼人万代雄		書冊
102	記(御免許高書上)	明治5年12月	山内万代雄	御県庁御中	野紙
103	壬申酒醸造税上納申上候 事	癸酉1月7日(明治6)	山内万代雄	参事□谷庸 権参事 水野千波	一紙
104	記(生酒高)	明治6年4月13日	山内万代雄 副戸長 井手喜十郎		
105	明治6年醸造高報告	明治6年10月29日	原田村 山内篤三郎	福岡県令 立木兼善	一紙
106	御免許鑑札税金上納記	明治6年10月29日	山内篤三郎	福岡県令立木兼善	一紙
107	清酒醸造御免許鑑札願	明治6年10月29日	山内万代雄	福岡県令立木兼善	野紙
108-1	[免許税領収書]	明治6年11月7日	福岡県租税課	山内万代雄	切紙
108-2	[醸造税領収書]	明治6年12月	福岡県租税課	山内万代雄	切紙
108-3	[清酒造税領収書]	明治7年10月13日	福岡県租税課	山内万代雄	切紙
108-4	[清酒造税領収書]	明治7年10月15日	福岡県租税課	山内万代雄	切紙
108-5	[領収書]	明治8年11月4日	福岡県庁	山内篤三郎	切紙
108-6	[清酒醸造税半額分領収 書]	明治9年4月21日	福岡県令 渡辺清	山内篤三郎	切紙
108-7	[清酒税領収書]	明治9年9月21日	福岡県令 渡辺清	山内篤三郎	切紙
108-8	[清酒営業税領収書]	明治9年11月2日	福岡県令 渡辺清	山内篤三郎	切紙
108-9	[酒造営業税領収書]	明治11年10月9日	福岡県令 渡辺清	山内篤三郎	切紙
108-10	[酒小売税領収書]	明治11年12月9日	山内篤三郎	郡長 三木隆助	切紙
109	[免許鑑札願]	明治6年11月	山内万代雄		切紙
110	酒造減石願	明治7年4月5日	山内万代雄	福岡県令 立木兼善	書綴(野紙)
111	癸酉年醸造生酒書上	明治7年6月6日	山内万代雄		野紙
112	清酒造之儀ニ付請書	明治7年8月	山内万代雄	渡邊清	書綴(野紙)
113	乙亥醸造生酒書上	明治8年4月	山内万代雄	福岡県令 渡辺清	書綴(野紙)
114	醸造桶類書上	明治8年10月	山内万代雄	福岡県令 渡辺清	書綴(野紙)
115	明治十一年十月ヨリ酒造 ニ関スル布告纏	明治11年10月	山内篤三郎		書冊

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
116	清酒醸造高見込届	明治11年11月	山内篤三郎	郡長 三木隆助	野紙
117	清酒醸造臨時御検査願	明治12年2月17日	山内篤三郎	福岡県令 渡辺清	書綴(野紙)
118	清酒醸造高増石届	明治12年2月28日	山内篤三郎	福岡県令 渡辺清	野紙
119	醸造清酒惣石数検査願	明治12年4月12日	醸造稼人 山内篤三郎	福岡県令 渡辺清	書綴(野紙)
120	明治七八年度清酒高書上	明治12年5月25日	山内篤三郎	福岡県令 渡辺清	野紙
121	明治十二年十月ヨリ酒造ニ係ル諸願届控	明治12年10月	山内篤三郎		書冊(野紙)
122	[十二年度醸造惣石高届について]	明治13年3月21日	十等属 伊藤慶英	隈村 田中喜三郎 田中卯之吉 原田村 山内平四郎 山内篤三郎 永岡村 松尾休吾	書綴
123	□麴営業税則	明治13年9月27日	大政大臣 三条実美		綴(印刷)
124	酒造税則	明治13年9月27日	大政大臣 三条実美		綴(印刷)
125	酒造税則心得方	明治14年2月1日	福岡県令 渡辺清		綴(印刷)
126	桶類御検査願	明治15年3月	山内篤三郎	郡長 三木隆助	一紙

## ■ 国道関係

127	三国峠開鑿費之儀ニ付願 □替願	明治16年1月15日	御笠郡原田村外1ヶ村	郡長 小河久四郎 戸長 山内淑郎	書綴(野紙)
128	三国峠開鑿費出納簿	明治16年1月	山内淑郎		書冊(野紙)
129-1	三国道路開設ニ付諸入費 控帳	明治14年旧9月			長帳
129-2	踊入費一切仕約帳	明治16年旧8月25日	道路発起中		長帳
129-3	三国道路開鑿入費銘々所 替金指引帳	明治16年旧9月10日			長帳
129-4	三国道路開鑿ニ付費額仕 約帳	明治16年未9月			長帳
130	[三国新道開鑿費寄付51 円に対し木盃1個下賜]	明治17年1月12日	福岡県令岸良俊介代理 少書記官 萩原汎愛	山内淑郎	野紙
131	[三国新道開鑿費寄付100 円に対し木盃3ツ組下 賜]	明治17年1月12日	岡県令 岸良俊介代理 少書記官 萩原汎愛	山内淑郎	野紙

## ■ 神社・宮座(本座)関係

132	筑紫宮御神座溜銭帳	文政3歳□11月吉日			書冊
133	宮座附銭算用帳	文政12年己丑11月13日			長帳
134-1	祭山川神祝文	天保2年			切紙
134-2	山神祭壇上飾式	(天保2年カ)			一紙
135	御神座溜□勘定帳	天保12年丑11月17日改			書冊
136-1	神座余米	安政6年未11月			長帳

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
136-2	神座余米	万延1年申11月			長帳
136-3	[取立帳]	文久2年戌11月7日			長帳
137	筑紫宮御神座諸雜費入切控帳	慶応1年11月18日	頭元 山内弥右衛門代勤 山内弥一郎		長帳
138	御神座取立米	午11月8日			長帳
139	献備物	明治5年壬申11月2日	第23区郷社祠官城山正節	宮座連中	継紙
140	地券(字合原・耕地六畝歩)	明治10年8月10日	福岡県	宮田信次	一紙
141	地券(字合原・耕地六畝四歩)	明治10年8月10日	福岡県	宮田信次	一紙
142	郷社神官郷社氏子筑紫原田両村ニ対スル規約	明治14年1月	城山正節	戸長 山内淑郎・筑紫村々吏原田村々吏御中	書冊(野紙)
143-1	筑紫宮御神座溜金根帳	明治14年辛巳11月20日改			書冊
143-2	筑紫神社御神座溜金根帳	明治18年第3月			長帳
144	御神座記録	明治18年11月20日改	郷社筑紫神社祠官兼大講義 城山正節		書綴(野紙)
145-1	御神座諸入費計算目録	大正9年11月21日	頭元 山崎大助		長帳
145-2	御神座諸入費計算帳	大正10年11月20日	当元 山内三樹		長帳
145-3	御神座諸入費計算帳	大正11年11月20日	当元 横尾磯吉		長帳
145-4	御神座諸費計算書	大正12年11月20日	頭元 山内末次郎		長帳
145-5	御神座諸費計算書	大正13年11月	当元 山崎央		長帳
145-6	御神座諸費計算書綴	大正14年11月	当元 山崎末吉		長帳
146	御神座諸費計算書	大正15年11月20日	当元 山内万代雄		長帳

## ■ 議会関係

147	村会議員承諾書	明治12年4月			書冊(野紙)
148	会議録	明治12年			書冊(野紙)
149-1	村会日誌	明治14年8月			書冊(野紙)
149-2	連合会日誌	明治14年8月			書冊(野紙)
149-3	連合村会日誌	明治14年11月4日			書冊(野紙)
149-4	両村連合会日誌	明治14年11月			書冊(野紙)
149-5	筑原連合会日誌	明治15年1月			書冊(野紙)
150	御笠那珂席田郡各村臨時連合会日誌	明治14年11月24日			書綴(野紙)
151	御笠郡各村連合会決議録	明治15年8月30日			書綴(印刷)
152	十五年度三郡連合会・御笠郡会議日当渡方差引簿	明治16年1月27日			書冊
153	那珂御笠席田郡村組合規則認可伺	明治22年5月30日	那珂御笠席田三郡村組合会仮議長 萩尾四郎	那珂御笠席田郡郡長 郡 保宗	書綴(印刷)
154	三郡村組合会書類	明治25年	山内		書冊

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
155	明治26年度福岡県那珂御笠席田三郡町村組合会議事録	明治26年 4月22日			書冊(野紙)
156	[議案]	明治26年 9月22日	那珂御笠席田郡町村組合		書綴(野紙)
157	明治26年度那珂御笠席田郡町村組合議事録	明治26年11月17日			書冊(野紙)
158	明治二十六年度三郡村組合会書類綴	明治26年			書綴(印刷)
159	[那珂御笠席田郡町村組合議案書]	明治27年 1月23日	郡長 久野寂也		書冊(印刷)
160	明治27年度那珂御笠席田三郡組合会議事録	明治27年 6月29日			書冊(野紙)
161	[議案]	明治28年 1月28日	[那珂御笠席田全町村組合]		書綴(印刷)
162	明治28年度那珂御笠席田郡組合村会議事録	明治28年 6月25日	議事録審査委員議長指定 河辺精五郎・松尾太操		書冊(印刷)
163	那珂御笠席田郡組合町村費明治二十七年度歳入出総計決算	明治28年 6月25日			書綴(印刷)
164	[村会議員選挙投票証明書]	(明治)			一括(6枚)
165	三郡連合会議予算	(明治)			書綴(印刷)
166	[議案]	(明治)	戸長 山内淑郎		野紙
167	二十九ヶ村連合会日誌	(明治) 6月26日			書冊(野紙)

## ■ 行政関係

168	明治三年午十一月仕立西小田穂上りニ付講	明治 3年11月			折紙
169	(欠) 講帳	明治 3年午11月			書冊
170	触講十三ヶ村組	明治 5年壬申12月			長帳
171	奉願口上覚	(明治 5) 壬申 5月	御笠郡原田村卒矢田稔	御県庁御中	書綴(野紙)
172	触講帳入	明治 6年癸酉 1月改	第23区		包紙
173	[地券]	明治 6年 7月	福岡県令立木兼善	御笠郡筑紫村 山内弥八郎	一紙
174	[竹槍一揆についての達]	(明治 6年)		区戸長	野紙
175	[達]	(明治 7カ) 2月 9日	山内副戸長		一紙
176	[達書]	明治 7年 4月29日	第12大区出張所	各小区副戸長	書綴
177	証書之事(講脱会)	明治 7年戊 7月	北谷村伍長惣代 渡辺弥次郎・田村正市 同村保長 斉藤甚三郎	第12大区御出張所	野紙
178	証書[貢租余米]	明治 7年 9月	伊藤和三郎	新野保	継紙
179	小区費取換控	明治 8年 2月	3 小区		小横帳
180	合力橋架方御届	明治 8年10月12日	永岡村保長波多江五七郎・副戸長 山内篤三郎	福岡県令 渡辺清	書綴(野紙)

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
181	[領収書]	明治8年11月4日	福岡県庁	山内篤三郎	切紙
182	[任命書](十二小区副戸長)	明治8年11月5日	福岡県	山内淑郎	一紙
183	田畑収穫書上控	明治8年			書冊(野紙)
184	[任命書](二等副戸長)	明治9年2月2日	福岡県	山内淑郎	一紙
185	九年徴兵検丁検査附添留書	明治9年子3月	副戸長 山内篤三郎		書冊(野紙)
186	明治八年分副戸長月給請取	明治9年4月	副戸長 山内孫九郎	調所御中	書綴(野紙)
187	原田小学営繕並諸器機仕調費割帳	明治9年4月			書冊(野紙)
188	名寄帳仕調入費書帖	明治9年4月	4小区平等寺村		長帳
189	[民費の件]	(明治9)6月11日	2小区扱所	3小区御扱所	書綴
190	[区務改正ニ付職務差免候事]	明治9年12月7日	福岡県	二等副戸長 山内淑郎	一紙
191	第二期初納金未納直納簿	明治9年12月	第8大区3小区		書冊(野紙)
192	明治九年分地券税第二期納初納金上納記	明治9年12月	第8大区3小区副戸長 山内篤三郎	福岡県令 渡辺清	書綴(野紙)
193	初納金冊米指引簿	明治9年12月	3小区		書綴(野紙)
194	記[地券税上納]	明治9年12月	筑前国第8大区3小区原田村山内五市	為換方御中	一紙(野紙)
195	地券税・民費渡方聞通	明治10年第1月	山内淑郎		小横帳
196	[三小区扱所出仕申付候事]	明治10年2月	第8大区調所	2小区扱所 山内淑郎	一紙
197	二小区在職中會計仕払目録	明治10年3月	山内淑郎		書冊
198	明治九年分地券税皆済納上納証	(明治10年カ)4月30日	第8大区3小区副戸長代理 山内淑郎		書綴(野紙)
199	地所売買ニ付地券御書換願	明治10年5月30日	筑紫村売渡人 森内良作 原田村買受人 山内淑郎	福岡県令 渡辺清	書綴(野紙)
200	地所売買ニ付地券御書換願	明治10年5月	筑紫村売渡人 本多弥四郎	原田村 山内淑郎	書綴(野紙)
201	筑紫村負債口差違ニ而嘆願	明治10年5月	旧保長惣代 木村足彦	第8大区3小区正副戸長 米売主惣代 柴田久吉	書綴(野紙)御中
202	明治九年租金各村上納高並取立差引簿	明治10年6月	3小区扱所		書冊(野紙)
203	諸工商県税則	明治10年7月	3小区扱所		書冊(印刷)
204	地券	明治10年8月10日	福岡県		一紙(155枚)
205	諸渡金受取印取簿	明治10年8月	山内淑郎		書冊(野紙)
206	確然償口明細簿	明治10年丑9月2日			長帳
207	請書	明治10年10月8日	村中惣代安西宗吉ほか	保長岡部重吉	書綴
208	請書(保長八尋嘉三郎賃租諸費皆納不致につき調査の件)	明治10年10月9日			書綴(野紙)
209	[判決文]	明治10年12月17日	長崎裁判所福岡支庁	被告山内格一 山内勝平	書冊(野紙)

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
210	各学費賦課表	明治10年12月	3 小区扱所		書冊(野紙)
211	地券税込徴簿	明治10年	3 小区扱所		書冊(野紙)
212	教員月給渡方簿	明治11年 1 月	3 小区扱所		書冊(野紙)
213	巡回簿	明治11年 2 月	土木担当 木村足彦		小横帳
214	巡回簿	明治11年 2 月	土木担当 山崎央		小横帳
215	[辞令](三小区二級書役)	明治11年 3 月 1 日	第 8 大区調所	旧一級書役 山内淑郎	一紙
216	明治十一年三月分小区費 遺払明細帳	明治11年 3 月	3 小区		書綴(野紙)
217	記 [決算]	明治11年 5 月18日	2 小区戸長 末松勘次郎 3 小区副戸長 小松宥八	第 8 大区調所御中	書綴
218	巡回簿	明治11年 5 月	土木担当 酒井慎九郎		小横帳
219	受取証(徴兵検査旅費日 当分)	明治11年 7 月 6 日	第 8 大区 3 小区阿志岐村 森喜代吉父森源七		野紙
220	受取証(徴兵検査旅費日 当分)	明治11年 7 月 6 日	第 8 大区 3 小区阿志岐村 森喜代吉父森源七	3 小区戸長 新野保	野紙
221	無告之窮民上申	明治11年 7 月11日	3 小区山家村保長 満生武四郎	3 小区正副戸長御中	野紙
222	上申(当村砥綿弥作につ いて)	明治11年 7 月12日	3 小区山家村保長 山田甚三郎	戸長 新野保	野紙
223	上申(道徳ト申一組につ いて)	明治11年 7 月12日	3 小区山家村保長 山田甚三郎	戸長 新野保	野紙
224	大区夫使役人員平均台斗 表	明治11年 7 月ヨリ 12年 6 月迄			書綴(野紙)
225	[召集旅費等について]	(明治)11年 8 月10日	調所庶務科	3 小区正副戸長御中	野紙
226	[受取証]	明治11年 8 月27日	第 8 大区区長 石埜寛平	第 8 大区 3 小区 山内淑郎	切紙
227	明治十一年八月分月給受 取証	明治11年 8 月	高村穂積 外 2 名		野紙
228	御願上申	明治11年 9 月 4 日	天山村 井上芳七	3 小区戸長 新野保	書綴(野紙)
229	扱所奉工日数並金員借用 前指引帳	明治11年 9 月18日	原田村 山崎喜三	扱所御中	小横帳
230	[地方税について]	明治11年11月16日	御笠郡那珂郡席田郡 郡長 三木隆助	旧 3 小区戸長	書綴(野紙)
231	[郡区改正の際の民費金 出納の事]	明治11年11月16日	御笠郡那珂郡席田郡 郡長 三木隆助	旧 3 小区正副戸長	書綴(野紙)
232	明治十一年第十一月分月 給受取証	明治11年11月	針摺小学九等訓導補 大西脩己		野紙
233	扱所簿記文章器械引讓目 録	明治11年12月14日	旧戸長 新野保	戸長 高埜貫兵衛ほか	書冊(野紙)
234	触講米取立並村々引付帳	明治11年寅旧12月15日			長帳
235	[売薬税納入]	明治11年12月16日	郡役所	3 小区役所御中	野紙
236	[二日市校諸費及教員給 料明細帳]	明治11年	旧 2 小区扱所	旧 3 小区扱所御中	書綴(野紙)
237	民費収徴簿	明治11年	第 3 小区		書冊(野紙)
238	三小区出納惣計算書類	明治11年	山内		書綴(野紙)

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
239	土木及新築費地租掛	明治11年			切紙
240	御笠郡原田村消防章程	(明治11年カ)			書綴(野紙)
241	勤怠表	明治11年	戸長 新野保		書冊
242	[取立書上]	明治12年1月7日			長帳
243	筑紫村民費其他収徴簿	明治12年1月	原田村筑紫村村役場		書冊
244	原田村村費小目録帳	明治12年1月			長帳
245	諸品代当分繰替渡方控	明治12年2月	山内淑郎		書冊(野紙)
246	御笠郡原田村筑紫村職分 総計	明治12年2月	御笠郡原田村筑紫村 村長 山内淑郎		書綴(野紙)
247	組長日当並出夫控	明治12年卯2月改			小横帳
248	[学校費寄付礼状]	明治12年5月1日	福岡県	原田村平民 山内淑郎	一紙
249	受取証	明治12年5月26日	土木担当 酒井慎九郎	岡田村組長 平城六三郎	切紙
250	徭役人名総計	(明治)12年5月	戸長 高野貫兵衛		野紙
251	仮受取	(明治12カ)6月8日	土木担当 酒井慎九郎	岡田村組長 平城六三郎	切紙
252	十二年春溜池並水路等夫 金便記	明治12年6月	木村足彦	委員戸長 山内淑郎	書綴
253	地租金高	明治12年7月1日	在村戸長 岡部円造ほか		書綴
254	診断書(副島勇助)	(明治)12年第7月6日	医師 山崎養敬	御笠郡夜須郡席田郡御役所	野紙
255	巡回簿	明治12年	土木担当 酒井慎九郎		小横帳
256	巡回簿	明治12年	土木担当 山崎央		小横帳
257	明治十二年一月ヨリ十二 月マデ予算民費収徴簿	明治12年	原田村		書冊
258	明治十二年地稅徴収簿	明治12年	原田村筑紫村村役場		書冊(野紙)
259	土木費賦課帳簿類入	明治12年			包紙
260	明治十二年度前半期協議 費地価割	明治12年			書綴(野紙)
261	旧触講並西小田講取立帳	明治13年1月17日			長帳
262	御笠郡原田村筑紫村総計	明治13年1月30日	戸長 山内淑郎		書綴(野紙)
263	[慰勞金下賜候事]	明治13年2月16日	福岡県	原田村外1村戸長 山内淑郎	一紙
264	旧触講並西小田講取当米 配附帳	明治13年2月17日			長帳
265	埋葬証・医証綴	明治13年			書冊(野紙)
266	十三年度地方稅協議費徴 収日計簿	明治13年	原田村外1ヶ村村役場		書冊(野紙)
267	諸受取証張上簿	明治13年			書冊(野紙)
268	協議費賦課表	明治13年	原田村筑紫村役場		書冊
269	十三年度地租増減差引帖	明治13年			書冊(野紙)
270	未納帳	明治14年2月1日	原田村筑紫村役場		書冊(野紙)
271	[辞令](除服出務申付候 事)	明治14年2月2日	御笠郡那珂席田郡郡役所	原田村外1ヶ村戸長 山内淑郎	野紙

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
272	[書状] (第一土木連合会 開会について)	(明治)14年5月31日	山家村戸長 満生武四郎	戸長 山内淑郎・同岡部円 造ほか3名	書綴(野紙)
273-1	光雲神社維持金寄附名簿	明治14年8月3日	光雲神社事務所	原田	綴
273-2	光雲神社維持金寄附名簿 第三十五号	明治14年8月3日	光雲神社事務所	筑紫	綴
273-3	[光雲神社寄附金依頼]	明治14年8月22日	郡役所庶務科	戸長 山内淑郎	切紙(印刷)
274	明治十四年学事口達類編	明治14年10月4日	福岡県令 渡辺国武		書冊(印刷)
275	諸受取張上簿	明治14年10月			書冊
276	農具料御給与願	明治14年11月22日	御笠郡原田 山内弥吉 隣保証人 城山正節ほか	福岡県令 渡辺国武	書綴(野紙)
277-1	木屋掛料御給与願	明治14年11月22日	御笠郡原田村 山内弥八 隣保証人 中島嘉平ほか	福岡県令 渡辺国武	書綴(野紙)
277-2	木屋掛料御給与願	明治14年11月23日	御笠郡原田村 山内弥吉 隣保証人 城山正節ほか	福岡県令 渡辺国武	書綴(野紙)
278	徴収金支払簿	明治14年11月			書冊(野紙)
279	公金徴収日計簿(第一号)	明治14年11月			書冊(野紙)
280	明治十四年度後半期営業 税	明治14年			書冊(野紙)
281	十四年度地租金増減差引 帳雑種税徴収簿	明治14年			書冊(野紙)
282	明治十四年戸籍異動	明治14年	戸長役場		書冊(野紙)
283	御笠郡那珂席田郡職員表	(明治)15年2月			一紙
284	第一土木連合村ノ内人夫 役未済之儀ニ付上申	明治15年3月	元御笠郡第一連合 土工方 木村足彦 御笠郡西小田村外 16ヶ村戸長惣代 山内淑郎	郡長 小河久四郎	書綴(野紙)
285	[種痘接種者]	(明治)15年4月	川波春郷・村山順亮	山崎養敬	書綴
286	[戸籍異動証]	明治15年5月15日	夜須郡上高場村外 2ヶ村戸長 上埜善次郎	御笠郡筑紫村戸長 山内淑四郎	書綴(野紙)
287	[受領証]	明治15年8月9日	御笠郡那珂席田郡各村 連合会 委員戸長 末松勘次郎ほか14名	戸長山内淑郎	一紙(印刷)
288	[月給受取証]	明治15年8月27日	大村貞平(教員)		書綴(野紙)
289	[免許書写](外科医術開 業)	明治15年8月31日	内務卿 山田顕義	石川県士族 児玉伝男	一紙
290	離別願	明治15年9月25日	御笠郡原田邨居住 願人藤野と免	御笠郡那珂席田郡郡長 小河久四郎	野紙 書綴(野紙)
291	旧中学思川分校書籍器械 受渡目録	明治15年9月28日	御笠郡那珂席田郡郡書記 平野五郎次 御笠郡原田村外1ヶ村 戸長 山内淑郎		書綴(野紙)
292	御検査願	明治15年9月28日	御笠郡原田村 山内弥作	御笠郡那珂席田郡 郡長 小河久四郎	書綴(野紙)
293	改宗届	明治15年10月	原田村石井伊三郎	戸長 山内淑郎	野紙
294	[書籍貸与]	明治15年11月11日	那珂席田郡公用事務所 委員 末松勘次郎	御笠郡委員戸長 山内淑郎	野紙

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
295	歎願書	明治15年11月	後備予備軍総代 白石伊之助・前田信吉	御笠郡戸長御中	書綴(野紙)
296	諸税金収納日誌	明治15年	原田村外1ヶ村村役場		書冊(野紙)
297	[地租税ほか領収証]	明治15・16年	戸長役場		一括(34枚)
298	寄留届纏	明治16年4月17日	戸長 山内淑郎		書冊(野紙)
299	御笠那珂席田郡職員表	明治16年5月改			一紙(印刷)
300	十六年度第五番学区学費 予算決議録	明治16年7月17日	第5番学区連合会 議長岡部重吉	戸長 山内淑郎 木村足彦	書綴(野紙)
301	公用金徴収日計簿	明治16年7月	原田村外1ヶ村村役場		書冊(野紙)
302	明治十六年地租上納通	明治16年7月	戸長役場	久光丈七	切紙(印刷)
303	出火二付御届	明治16年9月29日	御笠郡原田村外1ヶ村 戸長 山内淑郎	福岡警察署二日市分署御中	書綴(野紙)
304	衛生会会員当選状	明治16年11月20日	御笠那珂席田郡 郡長 権藤貫一	山内淑郎	一紙
305	[村費出納帳]	[明治16年カ]			書綴(野紙)
306	変換地一筆限帳	明治16年	御笠郡筑紫村 新野保	福岡県令 岸良俊介	書綴
307	明治16年分村費取替之覚	明治16年			長帳
308	[支払之部]	明治16年			書綴
309	分家願	明治17年1月6日	御笠郡原田村2122番地 居住士族矢田稔・矢田諫	御笠那珂席田郡郡長 権藤貫一	書綴(野紙)
310	戸籍異動人別届綴	明治17年1月ヨリ至12月	戸長役場		包紙
311	退隠家督届	明治17年2月10日	御笠郡原田村2091番地 永川弥吉	戸長 山内淑郎	野紙
312	分家願	明治17年5月	御笠郡原田村2128番地 平民山崎安太郎	御笠那珂席田郡郡長 権藤貫一	書綴(野紙)
313	他県行届	明治17年6月24日	筑紫村454番地居住平民 山内弥栄	戸長 山内淑郎	野紙
314	寄留御届(山内藤三郎)	明治17年6月	御笠郡原田村2088番地 山内壮三	原田村外1ヶ村戸長 山内淑郎	野紙
315	[辞令](学務委員)	明治17年7月5日	福岡県	山内淑郎	一紙
316	[辞令](学務委員)	明治17年8月15日	福岡県	山内淑郎	一紙
317	[当選状](教育会会員)	明治17年9月22日	御笠那珂席田郡 郡長 権藤貫一	山内淑郎	一紙
318	諸願伺指令綴	明治17年	原田村外1ヶ村村役場		書冊(野紙)
319	[戸数人口統計]	明治17年			書綴
320	明治十七年送籍之部	明治17年			書冊(野紙)
321	[申付書]	明治18年4月7日	御笠那珂席田郡役所	萩原村外五村戸長 山内淑郎	野紙
322	[礼状](学校建築費寄付)	明治18年11月13日	福岡県令岸良俊介	原田村平民 山内淑郎	野紙
323	明治十八年生糸高取調	明治19年3月12日	御笠那珂席田郡郡役所		書綴(印刷)
324	[任命書](5ヶ村戸長)	明治19年12月10日		萩原村外5ヶ村戸長 山内淑郎	一紙
325	授業料領収簿	明治20年1月以降	御笠郡二日市尋常校		書冊

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
326	[辞令] (准判任官七等)	明治20年9月16日		二日市村外4村戸長 山内淑郎	一紙
327	[辞令] (依願免本官)	明治20年11月15日	福岡県	二日市村外4村戸長 山内淑郎	一紙
328	委任状	明治26年9月28日	筑前筑紫村 山内口三郎		切紙
329	[申達書] (郡廃置法発布)	明治29年4月6日	村長 谷甚兵衛	議員 山内篤三郎	切紙
330	[書状] (送別会の儀)	明治29年4月13日	筑紫村役場	山内篤三郎	野紙
331	[出勤表]	明治29年			書綴
332-1	第十二大区三小区御笠郡 原田村脱籍之事 (山崎久 吉)	(明治) 6月5日			野紙
332-2	第十二大区三小区御笠郡 原田村脱籍之事 (山崎久 吉)	(明治) 6月5日			野紙
332-3	第十二大区三小区御笠郡 原田村脱籍之事 (山崎久 吉)	(明治) 6月10日			野紙
333	[種痘願用紙]	(明治)			一括(19枚)
334	各小区改正区書	(明治)			書冊(印刷)
335	収徴金支払簿	(明治)			
336	[書状]	(明治)	城山正節	学務委員山崎央 戸長兼学務委員 山内淑郎	継紙
337-1	[人力賃金]	(明治) 9月15日	三小区御笠郡下見村扱所		切紙
337-2	送り証	(明治) 9月15日	三小区御笠郡下見村扱所		野紙
338	謹奉賀天長節	(明治) 11月3日	戸長 山内淑郎		折紙
339	[書状] (月給支給催促)	(明治) 2月22日	近藤利久	山内戸長閣下	野紙
340	地租改正ニ関スル書類綴		第8大区3小区		書冊(野紙)
341	原田村々費取替帳	旧5月26日			長帳
342	諸雜形綴		山内淑郎		書冊(野紙)

## ■ そ の 他

343	田島御物成覚	寛政6年11月改メ			切紙
344	白土御通	天保3年辰3月吉日	博多大浜白土屋三右衛門	原田駅高尾屋弥吉	小横帳(表紙のみ)
345	田島買入根帳	天保8年酉2月	山内勝平源武秀		書冊
346	原田村御年貢米大豆諸上 納銭通帳	天保14年卯秋ヨリ (慶応3年マデ)	庄屋清三郎	弥一郎	長帳
347	原田筑紫名寄帳	天保15年辰5月改	山内弥一郎抱分		書冊
348	永備金奥メ金子改目録帳	弘化5年1月			長帳
349	筑紫村御年貢米大豆諸上 納銭通帳	安政2年卯年ヨリ	庄屋弥平	弥一郎	長帳

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
350	御笠郡隈村名寄帳人別奥 ノ書	安政4年6月			長帳
351-1	差紙為替下米請取通	安政4年巳9月	山内弥一郎	庄屋山内卯右衛門	長帳
351-2	御差紙下米請取通	安政6年10月16日ヨリ	山内弥一郎	山内卯右衛門	長帳
351-3	御差紙下米請取通帳	万延1年10月	山内弥一郎	山内卯右衛門	長帳
351-4	御差紙下米受取通	文久1年9月	山内弥一郎	庄屋 与次平	長帳
351-5	差紙為替下米請取間通	文久2年戌9月	高尾屋篤次郎	庄屋 与次平	長帳
351-6	指紙為替下米請取通	亥10月	篤次郎	庄屋 与次平	長帳
351-7	差紙為替下米間通帳	子10月	高尾屋篤次郎	庄屋 与次平	長帳
351-8	御差紙下米請取間通	慶応1年丑9月	高尾屋篤次郎	原田村庄屋 与次郎	長帳
351-9	御差紙下米請取間通	慶応2年寅9月	高尾屋篤次郎	庄屋山内 与次平	長帳
352	原田村御年貢通	安政5年午年ヨリ	弥右衛門跡		長帳
353	御笠郡隈村庄屋山内弥一 郎乍恐御願申上口上之覚	安政6年11月	隈村庄屋 山内弥一郎	夜須御笠御郡代御役所	継紙
354	弥右衛門跡成行之節雜費 帳	安政7年3月21日			長帳
355	仕法立積書	文久2年壬戌閏8月改			書冊
356	御面返上雜費入用錢借入 根帳	慶応2年寅9月			長帳
357	触仕組講帳	慶応3年卯11月			書冊
358	御受取申書物之事	慶応3年卯12月	大工新作・請人平吉	山内篤三郎	一紙
360	覚〔宿助出方〕	(江戸時代)			長帳
361	耕地小作口書之事	明治11年6月	小作主 本多弥四郎	山内淑郎	書綴(野紙)
362	小学校用諸品御通	明治12年	原田さかきや店		小横帳
363	帝国勅奏官員表	明治13年5月	細流舎印刷		一紙
364	〔思水会会則〕	明治13年12月	思水会		継紙
365	天拝山天満神社神殿改造 之記	明治14年3月	天拝山天満神社改造発起 有志者御笠郡幸府村 城原安成ほか13名		書冊(野紙)
366	太宰府神社心池水路疎募 帖	明治14年8月	太宰府成言会		書冊(印刷)
367	繰替帳	明治14年11月22日	筑后国御井郡東久留米村 今津繁吉		小横帳
368	袖中雑誌	明治17年	山内		小横帳
369	略本曆綴	明治18年			刊本
370	諸職人下人下女勤怠表	明治19年	山内淑郎		書冊
371	福岡日々新聞代価月々指 引	明治25年1月	原田新聞配達書		書冊(野紙)
372	計算書並ニ一月ヨリ五月 迄計算				
373	福岡日々新聞代指引帳	従明治26年9月	井尻分		書冊(野紙)
374	福岡日々新聞代指引帳	明治26年9月	二日市駅		書冊(野紙)

番号	名 称	時 代	作 者 名	宛 先	形 態
375	福岡日々新聞代指引帳	従明治26年9月			書冊(野紙)
376	履歴書	明治26年11月	御笠郡筑紫村大字原田 山内篤三郎		書綴(野紙)
377	福岡日々新聞代並配達料 徴収簿	明治27年1月			書冊(野紙)
378	福岡日々新聞購読者人名 簿	明治27年1月	原田駅取次所		書冊(野紙)
379	福岡日々新聞購読者人名 簿	明治28年1月	原田駅取次所		書冊
380	[書状](金銭借用)	明治29年5月10日	桑野弘人	山崎伊七郎・山内篤三郎	野紙
381	第十一期営業報告書	明治39年6月30日	株式会社筑紫銀行		書冊(印刷)
382	[筑紫銀行決算報告]	明治39年12月31日	株式会社筑紫銀行		書冊(印刷)
383	村設置共同稚蚕飼育日誌	明治40年	山内ナミ		書冊
384	[出銭記録]	(明治)			横長帳
385	[諸費取立記]	(明治)			書冊(野紙)
386	[弊帛二振製調]	(明治)10月10日	桑野弘人	金刀比羅神座御中	野紙
387	原田甘木間鉄道馬車布設 予算書				書綴(印刷)
388-1	[太宰府神社御神幸費に ついて]				野紙
388-2	[金銭書上]				野紙
389	大福帳	大正4年9月			小横帳
390	大福万覚帳	大正9年以降	山内資雄		長帳
391	[筑紫小学校成績原簿]	(大正カ)			一括(14枚)
392	第4学年読方教授案	(大正カ)	授業者山内		一紙(印刷)
393	[書状]	3月5日	るい	原田御母さま	切紙
394	[村中籠入費]	8月15日			長帳

# 山崎(洋)家資料目録

## <資料内訳>

①原田代官所関係 …… 2件 2点	⑦書籍・印刷物 …… 183件 211点	⑬戦争関係 …… 18件 29点
②土地関係 …… 73件 98点	⑧書画 …… 22件 22点	⑭辞令・表彰状等 …… 6件 6点
③帳簿関係 …… 70件 70点	⑨手紙 …… 147件 147点	⑮衣類 …… 25件 25点
④信仰関係 …… 49件 54点	⑩写真・絵ハガキ …… 89件 845点	⑯食具類 …… 35件 72点
⑤原田郵便局 …… 18件 18点	⑪学校関係 …… 4件 7点	⑰その他生活用具 …… 25件 81点
⑥その他原田関係資料 …… 7件 7点	⑫鉄道・交通関係 …… 11件 11点	

総計/784件 1,705点

(寸法単位/cm)

番号	整理番号	名 称	員数	製作者等	時 代	品質形状	備 考
----	------	-----	----	------	-----	------	-----

## ■ 原田代官所関係

1	83-9	御触	1	伊丹九郎右衛門ほか →樋口長五郎	寅 8 月	墨書/書冊	
2	83-1	制札等控	1		江戸時代	墨書/書冊	

## ■ 土地関係

3	83-5	原田村現反別野取書替 并掉合根元入	1				図4枚入り
4	83-5	各種現反別野取簿	一袋	原田村	明治8年4月		
5	83-5	宅地求積簿書			明治8年4月		
6	83-5	現反別野取帳			明治9年5月21日		村田村
7	83-6	各種小以反別書抜簿	一包	江島村総代	明治9年9月	墨書/書冊	江嶋村村田村分
8	83-6	各種小以書抜並総計簿			明治9年10月	墨書/書冊	江嶋村村田村分
9	83-6	境界変更図カ				墨書/一紙	下書き
10	83-6	官山草生地道川溝水溜寄帳	1		明治9年8月	墨書/書冊	
11	83-6	現反別取調金取帳	1			墨書/書冊	字朝日山
12	83-6	反別総計簿	1		明治9年	墨書/書冊	佐賀県第三大区
13	83-6	手紙(熊本騒動之儀ハ…)	1	高島円→山崎央	明治9年9月12日		
14	83-6	照会(春普請ヶ所…)	1	平嶋惣五郎→山崎央	4月14日	墨書/野紙	
15	7	御笠郡原田村字図	1				
16	17	字図	1				
17	83-5	字図	1				原田村字赤田
18	8	御笠郡原田村総丈量野取図帳	26			墨書/書冊	箱入
19	83-6	各種分界野取簿	1	正静社	明治9年5月29日	墨書/書冊	養父郡村田村
20	83-6	各種分界真形野取簿	1	正静社	明治9年5月30日	墨書/書冊	養父郡村田村
21	83-6	各種分界真形野取簿	1	正静社	明治9年5月30日		養父郡村田村
22	83-6	各種分界野取簿	1		明治9年6月1日		養父郡村田村
23	83-3	境界測量野取簿	1		明治9年6月1日		養父郡村田村
24	83-6	各種分界測量真形野取簿	1	正静社	明治9年6月9日	墨書/書冊	養父郡村田村
25	83-6	境界測量真形野取簿	1	正静社	明治9年6月10日		養父郡村田村
26	83-6	境界秣場測量簿	1		明治9年6月15日	墨書/書冊	養父郡村田村

番号	整理番号	名 称	員数	製作者等	時 代	品質形状	備 考
27	83-6	受山分界取簿	1	正静社	明治9年6月19日	墨書／書冊	養父郡新田村
28	83-3	土着林山并受地山分界真形簿	1		明治9年7月13日		養父郡村田村
29	83-6	境界測量真形野取簿	1		明治9年7月13日	墨書／書冊	養父郡村田村
30	83-6	山受人別分界野取簿	1		明治9年7月	墨書／書冊	養父郡新田村
31	83-6	境界測量野取帳	1		9月	墨書／書冊	養父郡村田村
32	83-6	各種分界真形野取簿	1	正静社	明治9年	墨書／書冊	養父郡村田村
33	83-6	測量真形野取簿	1		明治9年5月29日		村田村
34	83-6	測量真形野取簿	1		明治9年5月30日		村田村
35	83-6	真形野取簿	1		明治9年6月2日		村田村
36	83-6	各種分界真形野取簿	1	正静社	明治9年6月8日		村田村
37	83-6	朝日山受地分界野取簿	1		明治9年7月18日		村田村
38	83-6	各種分界野取簿	1		明治9年6月4日		田中本村村田村
39	83-6	各種分界野取簿	1		明治9年6月5日		田中本村村田村
40	83-6	真形野取簿	1		明治9年5月31日		村田村分
41	83-5	各種測量真形野取簿	1		明治9年4月14日		原古賀村
42	83-5	各種分界野取簿	1	正静社	明治9年4月17日		原古賀村
43	83-5	各種測量野取簿	1		明治9年4月18日		原古賀村
44	83-5	境界測量真形野取簿	1		明治9年4月19日		原古賀村
45	83-5	真形野取簿	1		明治9年4月20日		原古賀村
46	83-5	各種分界野取簿	1	正静社	4月22日		原古賀村
47	83-5	各種分界野取簿	1	正静社	4月24日		原古賀村
48	83-5	秣場分界野取帳	1		明治9年5月20日		原古賀村
49	83-6	境界測量野取簿	1		明治9年5月19日	墨書／書冊	養父郡轟木村
50	83-6	秣場分界野取簿	1		明治9年5月21日	墨書／書冊	養父郡轟木村
51	83-6	測量分界真形野取簿	1	正静社	明治9年4月11日	墨書／書冊	養父郡轟村
52	83-5	各種真形野取簿	1		明治9年3月24日		轟木村
53	83-6	各種分界野簿	1	正静社	3月29日	墨書／書冊	轟木村
54	83-6	現反別取調野簿	1			墨書／書冊	轟木村
55	83-6	各種分界野取簿	1	正静社	4月	墨書／綴	養父郡原古賀村
56	83-6	測量野取簿	1		明治9年5月31日		田中
57	83-6	現反野取簿	1	□正舎	明治9年4月27日	墨書／書冊	
58	83-5	各種分界野取簿	1		明治9年5月24日		
59	83-6	境界真形野取簿	1	山崎	明治9年6月3日		
60	83-6	山林田畑分界野取簿	1	正静社	明治9年6月15日		
61	83-3	山林原野分界野取簿	1	正静社	明治9年6月16日		
62	83-5	各種真形野取	1	正静社	明治9年4月		
63	83-3	土地惣丈量願	1	平野五郎次→県知事	明治19年12月	墨書／綴	
64	18-1	野取帳	1				
65	18-2	野取帳	1				
66	83-3	各種野取簿	1	公直社	3月20日		
67	83-3	各種真形野取簿	1	公直社	3月21日		
68	83-3	分界野取真形	1	正静社	4月12日		
69	83-6	溝堀替儀付願	1	山内淑郎 →小河久四郎	明治15年3月19日	墨書／一紙	
70	83-1	有租地免租地成一筆限帳	1	三宅徳平	明治21年9月	墨書／書冊	
71	83-4	山林開墾願	1	山崎央→福岡県知事	明治35年6月28日	墨書／綴	
72	83-3	地券受下ヶ未済之地所取調帳	1	三小区針摺村	明治時代	墨書／綴	

番号	整理番号	名 称	員数	製 作者 等	時 代	品質形状	備 考
73	83-4	国道敷地買収ニ対スル関係地 主側所縁事項綴	1		昭和6年11月15日		第1回集会
74	83-4	第2国道土地買収費明細書	1		昭和6年ごろ		
75	83-9	第二次農地改革関係法律	1	農政懇話会	昭和21年11月25日		

## ■ 帳 簿 等

76	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治6年1月	墨書/長帳	
77	83-10	年中日誌簿	1	山崎氏	明治7年1月	墨書/長帳	
78	83-10	年中日誌簿	1	山崎氏	明治10年1月	墨書/長帳	
79	83-10	年中日誌簿	1	山崎氏	明治12年1月	墨書/長帳	
80	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治13年1月	墨書/長帳	
81	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治14年1月	墨書/長帳	
82	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治15年1月	墨書/長帳	
83	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治16年1月	墨書/長帳	
84	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治17年	墨書/長帳	
85	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治18年1月	墨書/長帳	
86	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治19年1月	墨書/長帳	
87	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治20年1月	墨書/長帳	
88	83-2	年中日勘簿	1	山崎氏	明治21年1月	墨書/長帳	
89	83-2	年中日勘簿	1	山崎氏	明治23年1月	墨書/長帳	
90	83-2	年中日勘簿	1	山崎氏	明治24年1月	墨書/長帳	
91	83-2	年中日勘簿	1	山崎氏	明治25年1月	墨書/長帳	
92	83-2	年中日勘簿	1	山崎氏	明治26年1月	墨書/長帳	
93	83-2	年中日勘簿	1	山崎氏	明治27年1月	墨書/長帳	
94	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治29年1月	墨書/長帳	
95	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治30年1月	墨書/長帳	
96	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治31年1月	墨書/長帳	
97	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治32年1月	墨書/長帳	
98	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治33年1月	墨書/長帳	
99	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治34年1月	墨書/長帳	
100	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治35年1月	墨書/長帳	
101	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治36年1月	墨書/長帳	
102	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治37年1月	墨書/長帳	
103	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治39年	墨書/長帳	
104	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治40年1月	墨書/長帳	
105	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治42年1月	墨書/長帳	
106	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治43年1月	墨書/長帳	
107	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治44年1月	墨書/長帳	
108	83-10	年中日勘簿	1	山崎氏	明治45年1月	墨書/長帳	
109	83-10	職人下人下女指引帳	1	山崎氏	明治21年1月	墨書/長帳	
110	83-10	職人下人下女指引帳	1	山崎氏	明治22年1月	墨書/長帳	
111	83-10	職人下人下女指引帳	1	山崎氏	明治23年1月	墨書/長帳	
112	83-10	職人下人下女指引帳	1	山崎氏	明治24年1月	墨書/長帳	
113	83-10	職人下人下女指引帳	1	山崎氏	明治25年1月	墨書/長帳	
114	83-10	職人下人下女指引帳	1	山崎氏	明治26年1月	墨書/長帳	
115	83-10	職人下人下女指引帳	1	山崎氏	明治27年1月	墨書/長帳	

番号	整理番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品 質 形 状	備 考
116	83-10	職人下人下女指引帳	1	山崎氏	明治29年1月	墨書／長帳	
117	83-10	職人下人下女指引帳	1	山崎氏	明治31年1月	墨書／長帳	
118	83-10	職人下人下女指引帳	1	山崎氏	明治32年1月	墨書／長帳	
119	83-10	職人下人下女指引帳	1	山崎氏	明治35年1月	墨書／長帳	
120	83-6	米間通	1		明治15年12月	墨書／綴	
121	83-6	田畑下作帳	1	山崎	明治9年正月	墨書／長帳	
122	83-6	田畑下作帳	1	山崎央	明治18年1月	墨書／長帳	
123	83-6	明治15年午年山崎央ヨリ 山内孫九郎方へ入レ米	1		明治15年	墨書／長帳	
124	83-10	年中日誌	1	山崎氏	明治11年1月	墨書／長帳	
125	83-9	染代取立帳	1		明治20年7月		
126	83-9	米受取間通	1	山崎央→手柴巳之吉	明治20年11月		
127	83-5	大福萬買入控帳	1	山崎氏	明治21年1月		
128	83-10	田畑下作帳	1	山崎氏	明治21年11月		
129	83-9	卯冬取立帳	1	山崎直記	明治24年12月		
130	83-9	卯旧七月取立帳	1	山崎直記	明治24年		
131	83-10	年中日記覚書	1	山崎氏	明治34年1月		
132	83-10	田畑下作帳	1	山崎氏	明治37年冬		
133	83-2	顕碑諸入費帳	1		明治39年3月20日		
134	83-10	諸税金納付控簿	1	山崎氏	明治40年1月		
135	83-2	□ノ木入場計算記	1		明治43年5月		
136	83-3	年中諸勘定帳	1	山崎氏	明治41年1月		
137	83-5	大福萬日記帳	1	山崎氏	大正2年		
138	83-10	年中総勘定帳	1	山崎氏	大正3年1月		
139	83-10	大福日勘帳	1	山崎直記	大正7年		
140	83-10	金錢出納帳	1	山崎直記	大正10年1月		
141	83-9	家計日記簿	1	山崎	昭和12年度		
142	83-9	家計日記簿	1	山崎	昭和13年度		
143	83-9	家計日記簿	1	山崎	昭和14年度		
144	83-9	家計日記簿	1	山崎	昭和15年度		
145	83-9	家計日記簿	1	山崎	昭和16年度		

## ■ 信仰関係

146	26	恵比須座帳	1		文政元年11月	墨書／書冊	
147	26	蛭子宮御神座定格	1	頭人中	明治4年11月3日	墨書／書冊	
148	26	恵比須講連名帳	1		明治7年12月3日	墨書／書冊	
149	26	恵比須宮御神座記録	1		明治16年11月3日	墨書／書冊	
150	26	恵比須社献立	1		明治34年11月	墨書／書冊	
151	26	恵比須座雜費控帳	1	頭元山内弥吉	明治34年11月	墨書／長帳	
152	26	蛭子座諸費控簿	1	頭元山内富三郎	明治35年11月	墨書／長帳	
153	26	恵比須座諸費控帳	1	頭元山崎七三郎	明治36年11月	墨書／長帳	
154	26	恵比須神社御神座 諸入費仕約帳	1	頭元山崎央	明治37年	墨書／長帳	
155	26	恵比須神社 御神座諸入費控帳	1	頭元多田倉次	明治38年11月3日	墨書／長帳	

番号	整理番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品 質 形 状	備 考
156	26	恵比須神社御神座 諸費仕訳帳	1	頭元浦山栄次	明治39年12月18日	墨書／長帳	
157	26	恵比須神社諸入費控帳	1	頭元多田太八郎	明治41年11月3日	墨書／長帳	
158	26	恵比須神社御座入費帳	1	頭元山内篤三郎	明治42年	墨書／長帳	
159	26	恵比須神社御座入費帳	1	頭元山内伊七郎	明治43年12月3日	墨書／長帳	
160	26	恵比須神社御座入費帳	1	頭元山内種木	明治44年12月3日	墨書／長帳	
161	26	恵比須神社御座費用控	1	頭元山崎美	大正1年12月3日	墨書／長帳	
162	26	恵比須神社御座費用控	1	頭元山内幾次郎	大正2年12月3日	墨書／長帳	
163	26	恵比須神社御座入費帳	1	頭元安垣好雄	大正3年12月3日	墨書／長帳	
164	26	恵比須宮御座入費帳	1	頭元多田太四郎	大正5年12月	墨書／長帳	
165	26	御神座宝物控帳	1	頭元山崎駒男	大正7年12月3日	墨書／長帳	
166	26	恵比須御神座諸費控	1	頭元多田太八郎	大正8年12月3日	墨書／長帳	
167	26	恵比須御神座諸費控	1	頭元山内種木	大正11年12月3日	墨書／長帳	
168	26	恵比須座諸費控	1	頭元山崎美	大正12年12月3日	墨書／綴	
169	26	恵比須御神座諸費控	1	座元山内幾次郎	大正13年12月3日	墨書／長帳	
170	26	恵比須神社御座用目録綴	1	頭元山崎直記	大正15年12月	墨書／長帳	
171	26	恵比須御神座費	1	頭元多田太四郎	昭和2年11月3日	墨書／長帳	
172	26	献立	2		明治～大正時代	墨書／一紙	
173	83-2	講加入連名帳	1	世話方	明治27年11月	墨書／長帳	
174	83-2	十一当座取立	1		明治31年3月	墨書／長綴	
175	83-2	取立	1		明治31年6月16日	墨書／長綴	
176	83-2	第拾三回座取立	1		明治31年10月20日	墨書／長綴	
177	83-2	弍番座取立帳	1		明治33年2月		
178	83-2	弍拾五番座取立	1		明治36年3月	墨書／長綴	
179	83-2	取立	1		明治37年6月16日	墨書／長綴	
180	83-2	取立	1		明治37年10月16日	墨書／長綴	
181	83-2	取立	1		明治38年3月16日	墨書／長綴	
182	27	若宮神社御座献立	4				
183	29	筑紫祠神門額本書	1	花山院内大臣定誠公	江戸時代	墨書／一紙	
184	83-1	保存金及御忌仕約帳	1	西方寺	明治42年3月26日	墨書／長帳	
185	83-1	天山西方寺古本尊由来	1			墨書／書冊	
186	24	鱧ひれ	2				魔よけ
187	11	如意輪観音	1				
188	12	鉄仏	1				
189	21	木魚	1				
190	49	家相図	1	緒方益哉	明治25年8月		
191	49	家相図	1	小川峯三郎	明治時代		
192	49	家相図	1	小川峯三郎	大正15年10月9日		
193	49	地割判断図	1		明治25年8月		
194	49	吉凶方位図	1	緒方益哉			

## ■ 原田郵便局

195	83-9	事務連絡	1	雑餉隈局→原田局長	明治25年9月27日		
196	83-2	郵便事業用器具器械出納原簿	1	原田郵便局	明治25年10月17日		
197	83-6	事務連絡	1	二日市局→原田局長	明治27年1月14日		
198	83-10	事務連絡	1	二日市局→原田局長	明治35年1月18日		

番号	整理番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品 質 形 状	備 考
199	83-10	事務連絡	1	二日市局→原田局長	明治35年7月27日		
200	83-6	事務連絡	1	二日市局→原田局長	明治36年12月28日		
201	83-5	切手類収入印紙買受精算帳	1	原田局	明治37年1月		
202	83-9	事務連絡	1	岩戸局長→原田局長	明治38年4月12日		
203	83-9	事務連絡	1	二日市局→原田局長	明治38年4月13日		
204	83-9	事務連絡	1	太宰府局→原田局長	明治38年4月13日		
205	83-9	事務連絡	1	岩戸局長→山崎局長	明治38年4月14日		
206	83-9	事務連絡	1	山家局→原田局	明治38年5月16日		
207	83-9	事務連絡	1	太宰府局→原田局長	明治38年7月9日		
208	83-9	事務連絡	1	是野口長→山崎央	明治38年11月13日		
209	83-9	郵便電信用達商会定価表(8号)	1	郵便電信用達商会			
210	83-9	郵便電信用達商会定価表(9号)	1	郵便電信用達商会	明治38年9月		
211	83-9	郵便局用冬被服並ニ諸品定価表	1	鈴木利三郎	明治38年		
212	83-4	借用申込書	1	原田郵便局長 →熊本通信局	昭和7年8月2日		局舎新築ニ付

## ■ その他の原田関係

213	83-6	御笠郡原田村組頭文吉組合中 文乍恐御願申上ル口上之覚	1	組頭文吉 →民事方御役所	明治3年12月	墨書/書冊	
214	83-3	御笠郡村名附	1	古森□□		墨書/書冊	
215	83-6	女工場資本金見積帳	1	原田村有志中	明治12年8月	墨書/書冊	
216	83-3	埋葬認可証届控	1	山崎央 →二日市警察署	明治22年		
217	83-2	還曆賀選集	1	山崎時居	明治23年11月20日		
218	83-2	山崎時居頌徳碑賀歌集	1	佐々木信平ほか	明治30年12月	墨書/書冊	欠ページあり
219	83-4	株式会社筑紫銀行定款	1	設立发起人	明治44年5月	墨書/綴	
220	83-6	口演	1	梅や山内	8月8日	墨書/一紙	

## ■ 書籍・印刷物

221	83-3	庭訓往来	1		寛文元年6月	木版/書冊	
222	83-1	孟子 卷之十一	1		寛文10年	木版/書冊	
223	83-3	□□登山□	1	水田甚左衛門	元禄4年正月	墨書/書冊	
224	83-6	女大学	1		享保14年	木版/書冊	
225	83-1	永々曆	1		延享年間	木版/書冊	
226	83-3	万葉集 一之卷	1		安永8年11月5日	墨書/書冊	
227	83-1	詩語碎金	1	植村藤右衛門ほか	寛政4年9月	木版/書冊	
228	83-3	万葉集 卷第二	1	梶田真麻呂	文化15年3月20日	墨書/書冊	
229	83-3	[和歌手引き書]	1		文政9年春	木版/書冊	
230	83-3	大学章句序	1		天保14年	木版/書冊	
231	83-3	大学章句	1		江戸時代	木版/書冊	
232	83-3	大学章句新疏 卷下	1		江戸時代	木版/書冊	
233	83-1	中庸章句序	1		江戸時代	木版/書冊	
234	83-3	農家諺種	1		嘉永2年8月	墨書/書冊	古森三助写
235	83-2	黒田家家臣伝	1		嘉永3年1月	墨書/書冊	岡部勝平写
236	83-6	新文章	1		嘉永3年2月	墨書/書冊	古森三助

番号	整理番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品質形状	備 考
237	83-3	今川	1		嘉永5年3月	墨書／書冊	
238	83-3	月見往来	1		嘉永6年	墨書／書冊	古森三四郎写
239	83-3	類題真璞集 下	1		安政2年5月	木版／書冊	
240	83-3	書状手習鑑	1		万延元年8月	墨書／書冊	
241	83-3	石山軍鑑後編第一	1			墨書／書冊	古森写
242	83-3	石山軍鑑後編第六	1			墨書／書冊	
243	83-3	石山軍鑑後編第八	1			墨書／書冊	
244	83-3	石山軍鑑後編第九	1			墨書／書冊	
245	83-3	石山軍鑑後編第十	2			墨書／書冊	
246	83-3	石山軍鑑後編第十二	1			墨書／書冊	
247	83-3	石山軍鑑後編第十三	1			墨書／書冊	
248	83-3	石山軍鑑後編第十四	1			墨書／書冊	
249	83-3	石山軍鑑後編第十六	1			墨書／書冊	
250	83-3	石山軍鑑後編第十七	1			墨書／書冊	
251	83-3	石山軍鑑後編第十九	1			墨書／書冊	
252	83-3	石山軍鑑後編第二十	1			墨書／書冊	
253	83-3	石山軍鑑後編第二十二	2		文久2年春	墨書／書冊	
254	83-3	石山軍鑑後編第二十三	1		文久2年春	墨書／書冊	
255	83-3	石山軍鑑後編第二十五	1		文久2年春	墨書／書冊	
256	83-1	作蹟集	1	山崎保治	文久4年	墨書／書冊	
257	83-1	庭訓往来抄地	1		元治2年4月	墨書／書冊	山崎慈八郎写
258	83-3	六十四番舞詰	1	山崎保治	慶応3年夏	墨書／書冊	
259	83-1	絵本ふちはかま上之巻	1	□山撰、柳川重山画	江戸時代	木版／書冊	
260	83-1	千字文	1		江戸時代	墨書／書冊	山崎慈八郎写
261	83-3	庭訓往来	1		江戸時代	木版／書冊	
262	83-1	庭訓往来(上)	1		江戸時代	木版／書冊	古森三四郎写
263	83-3	孟子集註 卷之序説～一	1		江戸時代	木版／書冊	
264	83-3	孟子集註 卷之二	1		江戸時代	木版／書冊	
265	83-3	孟子集註 卷之三	1		江戸時代	木版／書冊	
266	83-3	論語 卷之六～十	5		江戸時代	木版／書冊	
267	83-3	論語	1		江戸時代	木版／書冊	
268	83-3	類題真璞集中	1		江戸時代	木版／書冊	
269	83-1	万葉集	1		江戸時代	墨書／書冊	写本
270	83-1	[伊勢物語]	1		江戸時代	木版／書冊	
271	83-3	和歌麗乃塵 卷之下	1		江戸時代カ	木版／書冊	
272	83-1	古今和歌集(上)	1		江戸時代カ	木版／書冊	
273	83-1	[和歌集]	1		江戸時代カ	墨書／書冊	
274	83-6	皇朝略史(三之上)	1	笠間益三	江戸時代カ	墨書／書冊	
275	83-3	女消息往来	1		明治17年		山崎まき写
276	83-6	修身小学(巻十)	1	吉田利行	明治18年8月		
277	83-3	尋常小学習字本	1	村田浩蔵	明治20年9月		
278	83-3	初学文章軌範	1	三島毅	明治20年11月8日		
279	83-3	初学文章軌範	1	三島毅	明治20年11月8日		
280	83-6	初学文章軌範 三	1	三島毅	明治20年11月8日		
281	83-1	督促状見本	1	渡辺一翁	明治20年11月		
282	83-1	高等小学習字帳	1	博多鉄耕堂	明治21年6月23日		
283	83-1	高等小学習字帖	1	宮本茂任	明治21年9月3日		
284	83-3	標注漢文教科書 卷之三	1	深井鑑一郎	明治25年11月30日		

番号	整理番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品質形状	備 考
285	83-3	標注漢文教科書 卷之二	1	深井鑑一郎	明治26年9月15日		
286	83-3	小学講義 全	1	近藤延之助	明治26年10月11日		
287	83-3	土佐日記	1	星野忠直	明治27年5月16日		
288	83-6	三国交戦画報	1	林斧介	明治27年9月3日		ブランクセット版
289	83-3	扶桑雑誌第13号	1	中村水城	明治27年7月5日		
290	83-3	扶桑雑誌第16号	1	中村水城	明治27年10月11日		
291	83-3	扶桑雑誌第19号	1	中村水城	明治28年2月10日		
292	83-3	扶桑雑誌第27号	1	佐々木信平	明治28年12月5日		
293	83-3	扶桑雑誌第31号	1	佐々木信平	明治29年4月5日		
294	83-3	扶桑雑誌第32号	1	佐々木信平	明治29年5月7日		
295	83-3	扶桑雑誌第36号	1	佐々木信平	明治29年8月6日		
296	83-3	扶桑雑誌第43号	1	佐々木信平	明治30年4月2日		
297	83-3	扶桑雑誌第44号	1	佐々木信平	明治30年5月6日		
298	83-3	扶桑雑誌第52号	2	佐々木信平	明治31年1月6日		
299	83-3	扶桑雑誌第56号	1	佐々木信平	明治31年5月5日		
300	83-3	扶桑雑誌第57号	1	佐々木信平	明治31年6月5日		
301	83-3	扶桑雑誌第58号	1	佐々木信平	明治31年7月10日		
302	83-3	扶桑雑誌第59号	3	佐々木信平	明治31年8月7日		
303	83-3	扶桑雑誌第62号	1	佐々木信平	明治31年11月7日		
304	83-3	扶桑雑誌第65号	1	佐々木信平	明治32年2月5日		
305	83-3	扶桑雑誌第67号	1	佐々木信平	明治32年4月4日		
306	83-3	扶桑雑誌第69号	1	佐々木信平	明治32年6月4日		
307	83-3	扶桑雑誌第70号	1	佐々木信平	明治32年7月5日		
308	83-3	扶桑雑誌第71号	1	佐々木信平	明治32年8月6日		
309	83-3	扶桑雑誌第72号	1	佐々木信平	明治32年9月3日		
310	83-3	扶桑雑誌第73号	2	佐々木信平	明治32年10月3日		
311	83-3	扶桑雑誌第78号	1	佐々木信平	明治33年3月7日		
312	83-3	扶桑雑誌第79号	1	佐々木信平	明治33年4月5日		
313	83-3	扶桑雑誌第80号	1	佐々木信平	明治33年5月13日		
314	83-3	扶桑雑誌第81号	1	佐々木信平	明治33年6月3日		
315	83-3	扶桑雑誌第82号	1	佐々木信平	明治33年7月3日		
316	83-3	扶桑雑誌第83号	1	佐々木信平	明治33年8月4日		
317	83-3	扶桑雑誌第84号	1	佐々木信平	明治33年9月3日		
318	83-3	扶桑雑誌第85号	1	佐々木信平	明治33年10月7日		
319	83-3	扶桑雑誌第86号	1	佐々木信平	明治33年11月5日		
320	83-3	扶桑雑誌第87号	1	佐々木信平	明治33年12月5日		
321	83-3	扶桑雑誌第89号	1	佐々木信平	明治34年2月5日		
322	83-3	扶桑雑誌第90号	1	佐々木信平	明治34年2月5日		
323	83-3	扶桑雑誌第91号	1	佐々木信平	明治34年3月6日		
324	83-3	扶桑雑誌兼題出詠391首ノ内 選択	1	佐々木信平	明治34年4月5日		
325	83-1	扶桑雑誌	1	佐々木信平	明治31年9月6日		
326	83-1	扶桑雑誌	1	佐々木信平	明治34年1月10日		
327	83-1	扶桑雑誌	1	佐々木信年	明治31年8月7日		
328	77	和洋裁縫大全 一	1	小出新次郎	明治40年1月25日		和服之巻
329	77	和洋裁縫大全 二	1	小出新次郎	明治40年1月25日		和服之巻
330	77	和洋裁縫大全 三	1	小出新次郎	明治40年1月25日		和服之巻
331	77	和洋裁縫大全 四	1	小出新次郎	明治40年2月28日		和服之巻

番号	整理番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品質形状	備 考
332	77	和洋裁縫大全 五	1	小出新次郎	明治40年 3月30日		和服之巻
333	77	和洋裁縫大全 六	1	小出新次郎	明治40年 2月28日		和服之巻
334	77	和洋裁縫大全 六之下	1	小出新次郎	明治40年 5月13日		和服之巻
335	77	和洋裁縫大全 七之上	1	小出新次郎	明治40年 3月30日		和服之巻
336	77	和洋裁縫大全 七之下	1	小出新次郎	明治40年 6月10日		和服之巻
337	77	和洋裁縫大全 八之上	1	小出新次郎	明治40年 8月10日		女子袴之巻
338	77	和洋裁縫大全 八之下	1	小出新次郎	明治41年 2月 5日		男袴之巻
339	77	和洋裁縫大全 九	1	小出新次郎	明治41年 2月 5日		和装端物之巻
340	77	和洋裁縫大全 十	1	小出新次郎	明治40年 2月28日		結之巻
341	77	和洋裁縫大全 十之下	1	小出新次郎	明治40年 5月13日		袋物之巻
342	77	和洋裁縫大全 十一之上	1	小出新次郎	明治40年10月25日		はぎ物之巻
343	77	和洋裁縫大全 十一之下	1	小出新次郎	明治41年 7月 6日		はぎ物之巻
344	77	和洋裁縫大全 十二	1	小出新次郎	明治40年 7月23日		夜具雑具之巻
345	77	和洋裁縫大全 十三	1	小出新次郎	明治40年 7月23日		洋服端物之巻
346	77	和洋裁縫大全 十四之上	1	小出新次郎	明治40年12月30日		洋服之巻
347	77	和洋裁縫大全 十四之中	1	小出新次郎	明治40年12月30日		洋服之部
348	77	和洋裁縫大全 十四之下	1	小出新次郎	明治40年12月30日		洋装端物之巻
349	77	和洋裁縫大全 十五之上	1	小出新次郎	明治40年10月25日		法衣之巻
350	77	和洋裁縫大全 十五之下	1	小出新次郎	明治41年 2月 5日		法衣之巻
351	77	和洋裁縫大全 十六之上	1	小出新次郎	明治40年 7月23日		女房装束之巻
352	77	和洋裁縫大全 十六之中	1	小出新次郎	明治40年 8月10日		装束之巻
353	77	和洋裁縫大全 十六之下	1	小出新次郎	明治41年 7月 6日		装束之巻
354	77	和洋裁縫大全 十七之上	1	小出新次郎	明治40年10月25日		続編
355	77	和洋裁縫大全 十七之下	1	小出新次郎	明治40年12月30日		教授法之巻
356	77	和洋裁縫大全 洋服之巻 下	1	小出新次郎	明治41年 7月 6日		洋服之巻
357	77	和洋裁縫大全 続々編	1	小出新次郎			絵画之巻
358	83-6	中学漢文読本 (巻之八)	1	秋山四郎	明治29年 7月 8日		
359	77	日本諸礼式完	1	小松信香	明治34年 2月 1日		
360	77	一葉全集 第二版	1	樋口一葉	明治35年 8月 8日		
361	83-3	商船学校案内	1	商船学校	明治36年 6月10日		
362	83-3	北海道植民図解	1	北海道庁植民部	明治36年 6月20日		
363	83-5	戦争終局予言	1	榎本松之助	明治37年 7月13日		
364	83-1	金玉集	1	古賀克己	明治38年 2月11日		
365	77	裁縫秘術総要	1	小出新次郎	明治39年 8月20日		
366	83-10	流行色甲斐絹値段表	1	丸五商店	明治39年11月15日		
367	83-10	誓文晴御案内	1	笠野屋	明治39年11月20日		
368	83-3	尋常小学書き方手本	1	香川能蔵	明治43年 2月25日		
369	83-1	かな帖	1	坂正臣	明治44年 7月10日		
370	83-1	廻章	1	山内伊七郎・山崎央	2月 8日		
371	83-1	しおり	18				
372	83-2	雪中鶯	1				
373	6	増補和歌題林抄 (下之一)	1				
374	83-1	歌集	1				
375	3	龜頭校正東京玉編大全(上下)	2				
376	83-3	平治物語 巻第三目録	1				
377	83-3	自遣往来	1	中村長兵衛			
378	83-6	手本重宝記凡令	1				
379	83-1	わか竹	1	井原豊作	大正 2年 2月10日		大日本歌道奨励

番号	整理番号	名 称	員数	製作者等	時 代	品質形状	備 考
380	83-1	かなの手ふり	1	多田令子	大正2年8月1日		
381	83-3	金光教一斑	1	長谷川雄次郎	大正2年10月2日		
382	83-1	大祓講話	1	山下石太郎	大正2年10月3日		
383	83-3	三越呉服店御案内	1	三越呉服店	大正3年頃		一部カラー印刷
384	83-1	軍備及財政	1	梅田又次郎	大正4年2月18日		
385	83-1	封祈禱修行	1	武蔵寺	大正4年7月21日		
386	83-3	仏国軍従軍中ノ所感空中偵察ニ関する研究	1	石井良二郎	大正6年2月5日		
387	83-1	有職月報	1	三上源治	大正6年4月30日		
388	83-1	家庭霊薬案内	1	朝鮮製薬合資会社	大正9年2月1日		
389	83-5	大正11年略本暦	1	神宮神部署	大正10年		
390	83-1	人参の名薬	1	朝鮮製薬合資会社	大正14年5月5日		
391	77	昭和女子修身訓 卷一	1	小西重直	昭和6年3月16日		
392	77	女子新国語読本 卷二	1	澤瀉久孝・木枝増一	昭和7年11月23日		
393	77	女子新国語読本 卷三	1	澤瀉久孝・木枝増一	昭和7年11月23日		
394	77	女子新国語読本 卷四	1	澤瀉久孝・木枝増一	昭和7年11月23日		
395	77	女子新国語読本 卷五	1	澤瀉久孝・木枝増一	昭和7年11月23日		
396	77	女子新国語読本 卷六	1	澤瀉久孝・木枝増一	昭和7年11月23日		
397	77	女子新国語読本 卷七	1	澤瀉久孝・木枝増一	昭和7年11月23日		
398	77	女子新国語読本 卷八	1	澤瀉久孝・木枝増一	昭和7年11月23日		
399	77	女子新国語読本 卷九	1	澤瀉久孝・木枝増一	昭和7年11月23日		
400	77	女子新国語読本 卷十	1	澤瀉久孝・木枝増一	昭和7年11月23日		
401	77	夏の衛生と家庭看護	1	中山龍次 (NHK)	昭和10年6月1日		ラジオテキスト
402	83-1	図書目録	1	山崎央カ		墨書/折紙	

## ■ 書 画

403	83-8	書 (無事茶煙外)	1	岫雲			
404	83-8	書 (去国三年)	1	雪口			
405	83-8	書 (鷄林八達)	1	清江外史			
406	83-8	書 (口是宝)	1	桂樵			
407	83-8	書 (小憩及口好)	1	桂樵			
408	83-8	書 (登多所及)	1	桂樵			
409	83-8	書 (長風波浪)	1	岫雲			
410	83-8	歌 (仲冬十一月、原古処)	1	江藤謙具			
411	83-8	俳句	1	飛木居士			
412	83-8	浮世絵 (美人画)	1	国芳、広重		木版	
413	83-8	浮世絵 (日本橋)	1	広重		木版	
414	83-8	画 (えびす大黒)	1				
415	83-8	画 (梅鶯図)	1	洞成平			
416	83-8	画 (瓢図)	1	岫雲		紙本墨画	
417	83-8	画 (馬図)	1	岫雲		紙本墨画	
418	83-8	画 (牛ひき図)	1			紙本着色	
419	83-8	画 (服福寿老)	1			紙本着色	
420	83-8	画 (山水)	1			紙本墨画	
421	83-8	画 (カラス)	1			紙本墨画	
422	83-8	画 (いかだ)	1			紙本淡彩	

番号	整理番号	名 称	員数	製作者等	時 代	品質形状	備 考
423	83-8	画 (虎図)	1			紙本墨画	
424	83-1	近江八景	1	村井巖	壬辰 8 月	紙本印刷	

## ■ 手 紙

425	83-10	手紙	1	青木常英→山崎央	明治32年 2 月 3 日		
426	83-10	手紙	1	平嶋幸市→山崎央	明治33年 8 月 4 日		
427	83-10	手紙	1	手柴巳之吉→央母	明治33年 6 月 2 日		
428	83-10	手紙	1	桑野弘人→山崎央	明治33年 6 月 9 日		
429	83-10	手紙	1	手柴久米二→山崎央	明治33年 7 月 1 日		
430	83-10	手紙	1	中西茂→山崎央	明治33年 8 月 2 日		
431	83-10	手紙	1	山内重太郎→山崎央	明治33年12月18日		
432	83-10	手紙	1	桑野弘人→山崎央	明治34年 1 月 3 日		
433	83-10	手紙	1	手柴久米二→山崎央	明治34年 4 月12日		
434	83-10	手紙	1	手柴巳之吉→山崎央	明治34年 5 月 9 日		
435	83-10	手紙	1	緒方惣助→山崎央	明治34年 6 月 2 日		
436	83-10	手紙	1	緒方惣助→山崎央	明治34年 6 月 3 日		
437	83-10	手紙	1	久光英夫→山崎央	明治34年 6 月19日		
438	83-10	手紙	1	山内藤五郎→伊七郎	明治34年10月21日		
439	83-10	手紙	1	桑野弘人→山崎央	明治35年 2 月 9 日		
440	83-9	手紙	1	山内重太郎→山崎央	明治35年 2 月19日		
441	83-10	手紙	1	手柴巳之吉→山崎央	明治35年 4 月12日		
442	83-10	手紙	1	手柴巳之吉→山崎央	明治35年 4 月26日		
443	83-9	手紙	1	庄野金十郎→山崎央	明治35年 4 月26日		
444	83-10	手紙	1	平島孫士郎→山崎央	明治35年 5 月11日		
445	83-10	手紙	1	山崎直記→山崎央	明治35年 6 月19日		
446	83-10	手紙	1	山崎直記→山崎央	明治35年 7 月 3 日		
447	83-10	手紙	1	萱島秀山→山崎央	明治35年 7 月 5 日		
448	83-10	手紙	1	山崎直記→山崎央	明治35年 7 月24日		
449	83-10	手紙	1	山崎直記→山崎央	明治35年 7 月30日		
450	83-10	手紙	1	山崎直記→山崎央	明治35年 8 月 1 日		
451	83-10	手紙	1	山崎直記→山崎央	明治35年 8 月 5 日		
452	83-10	手紙	1	山崎直記→山崎央	明治35年 8 月 8 日		
453	83-9	手紙	1	山崎直記→山崎央	明治35年 8 月11日		
454	83-9	手紙	1	久光英夫→山崎央	明治35年 8 月13日		
455	83-10	手紙	1	山崎直記→山崎央	明治35年 8 月18日		
456	83-9	手紙	1	松村音吉→山崎央	明治35年 9 月16日		
457	83-10	手紙	1	手柴久米二→山崎央	明治35年11月 5 日		
458	83-9	手紙	1	山崎直記→山崎央	明治35年11月25日		
459	83-10	手紙	1	大久保嘉平次→央	明治35年12月29日		
460	83-6	手紙	1	平山善三郎→山崎央	明治36年 5 月27日		
461	83-6	手紙	1	嘉戸吉→山崎央	明治36年 6 月17日		
462	83-6	手紙	1	井手得平→近藤伝三郎→山崎央	明治36年 7 月26日		
463	83-6	手紙	1	手柴巳之吉→山崎央	明治36年 8 月 8 日		
464	83-6	手紙	1	内田正右衛門→央	明治36年 8 月28日		
465	83-5	手紙	1	片山春吉→原田局長	明治36年11月 2 日		

番号	整理番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品質形状	備 考
466	83-6	手紙	1	手柴巳之吉→山崎央	明治36年12月9日		
467	83-6	手紙	1	太宰府局→原田局長	明治37年1月7日		萱嶋秀山
468	83-6	手紙	1	緒方惣助→山崎央	明治37年1月19日		
469	83-9	手紙	1	山内乙次郎→山崎央	明治37年7月28日		
470	83-9	手紙	1	山崎カツノ→山崎央	明治38年4月14日		
471	83-9	手紙	1	松原孫一郎→山崎央	明治38年5月7日		
472	83-9	手紙	1	松原孫一郎→山崎央	明治38年5月16日		
473	83-9	手紙	1	熊本局→山崎喜三郎	明治38年5月20日		
474	83-9	手紙	1	原田又□→山崎央	明治38年6月1日		
475	83-9	手紙	1	手柴巳之吉→山崎央	明治38年6月6日		
476	83-9	手紙	1	山内竹次郎→山崎央	明治38年6月27日		
477	83-9	手紙	1	井上淳→山崎央	明治38年10月13日		
478	83-9	手紙	1	中村孝助→山崎央	明治38年10月17日		
479	83-9	手紙	1	村山直吉→山崎央	明治38年10月24日		
480	83-9	手紙	1	松原孫一郎→山崎央	明治38年12月18日		
481	83-9	手紙	1	河村幸雄→山崎央	明治38年12月18日		
482	83-5	手紙	1	敬神会事務所 →山崎央	明治38年12月		
483	83-5	手紙	1	井手弥七郎 →山崎局長	明治39年8月21日		
484	83-6	手紙	1	桶崎大吉→山崎直記	明治40年7月3日		
485	83-9	手紙	1	城山正エ門→山崎央	7月18日		
486	83-9	手紙	1	原田□□→山崎央	7月13日		
487	83-9	手紙	1	山内吉太郎→山崎央	10月22日		
488	83-9	手紙	1	井手忠介→山崎央	5月31日		
489	83-9	手紙	1	勘三郎→山崎央	7月26日		
490	83-9	手紙	1	緒方惣助→山崎央	10月19日		
491	83-1	手紙	1	平川芳夫→山崎央	12月29日		
492	83-1	手紙	1	□山傳男→山崎央	12月4日		
493	83-3	手紙	1	手柴久米二→山崎央	10月28日		
494	83-9	手紙	1	山崎直記→山崎央	9月28日		
495	83-9	手紙	1	内田重太郎→山崎央	11月29日		
496	83-9	手紙	1	桑野弘人→山崎央	7月14日		
497	83-9	手紙	1	埋金寅造→原田局長	7月28日		
498	83-9	手紙	1	市川政治→山崎央	3月29日		
499	83-10	手紙	1	桑野弘人→山崎央	12月7日		
500	83-6	手紙	1	手柴五右衛門 →山崎三四郎	11月14日		
501	83-6	手紙	1	かどや→山崎央	3月18日		
502	83-10	手紙	1	筑紫氏子→山崎央	8月11日		
503	83-10	手紙	1	山内武雄→山崎央	8月10日		
504	83-10	手紙	1	弘人→山崎央	5月30日		
505	83-6	手紙	1	五右衛門→山崎央	11月19日		
506	83-6	手紙	1	山崎央→手柴伊三次	3月12日		仏事案内
507	83-6	手紙	1	央→内田正右衛門	3月12日		仏事案内
508	83-6	手紙	1	央→手柴又右衛門	3月12日		仏事案内
509	83-6	手紙	1	西方寺→山崎央			
510	83-6	手紙	1	平島嘉戸吉→山崎央	10月22日		

番号	整理番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品質形状	備 考
511	83-6	手紙	1	御笠銀行→山崎央			
512	83-6	手紙	1	ヤマサキ→山崎央	10月19日		
513	83-6	手紙	1	矢野慶吉郎→勘三郎	6月18日		
514	83-6	手紙	1	緒方惣助→山崎央	7月8日		
515	83-6	手紙	1	市川政治→山崎央	10月4日		
516	83-6	手紙	1	山崎央→山崎美他7	6月13日		
517	83-6	手紙	1	西方寺→山崎央	旧11月25日		
518	83-6	手紙	1	吉正→山崎	5月24日		
519	83-9	手紙	1	市川政治→山崎央	9月22日		
520	83-10	手紙	1	久光英夫→山崎央	8月15日		
521	83-9	手紙	1	勘三郎→山崎央	19日		
522	83-9	手紙	1	山崎直記→山崎央	8月21日		
523	83-9	手紙	1	山内重太郎→山崎央	12月30日		
524	83-9	手紙	1	弘人→山崎央	30日		
525	83-6	手紙	1	平山真平→山崎央	1月10日		
526	83-6	手紙	1	綾部彦次郎→山崎央	12月1日		
527	83-6	手紙	1	矢野大太郎→山崎央	10月30日		
528	83-9	手紙	1	黒田伊作→山崎央	7月10日		
529	83-6	手紙	1	手柴久米次→央	10月31日		
530	83-9	手紙	1	田中利三郎→山崎央	12月17日		
531	83-10	手紙	1	山崎勘三郎→山崎央	8月6日		
532	83-10	手紙	1	市川政治→山崎央	12月19日		
533	83-9	手紙	1	松村音吉→山崎央	10月15日		
534	83-10	手紙	1	平瀬彦太郎→山崎央	旧10月7日		
535	83-6	手紙	1	山崎勘三郎→山崎央			
536	83-6	手紙	1	ヤマサキ→山崎央	8月22日		
537	83-6	手紙	1	矢野彦吉郎→勘三郎			
538	83-6	手紙	1	大神理平太→山崎央	7月12日		金屏風の件
539	83-6	手紙	1	桜井豊太→山崎央	11月8日		
540	83-9	手紙	1	松村清吉→山崎央	5月13日		
541	83-9	手紙	1	大石吉太郎→山崎央	4月10日		
542	83-9	手紙	1	城山正エ門→山崎央			
543	83-9	手紙	1	不詳→山崎央			
544	83-9	手紙	1	西方寺→山崎央			
545	83-1	手紙	1	味酒安陸→山崎央			
546	83-10	手紙	1	鳥居建設周旋人中			
547	83-10	手紙	1	山内幸次郎→山崎央			
548	83-10	手紙	1	久米二→山崎央			
549	83-9	手紙	1	山内弥九郎→山崎央			
550	83-9	手紙	1	山崎勘三郎→山崎央			
551	83-6	ハガキ	1	矢野大太郎→山崎央	明治26年6月20日		
552	83-6	ハガキ	1	かつの→山崎央	明治30年6月15日		
553	83-6	ハガキ	1	山崎勘三郎→山崎央	明治36年1月9日		
554	83-6	ハガキ	1	山崎直記→山崎央	明治36年6月26日		
555	83-6	ハガキ	1	山崎勘三郎→山崎央	明治36年9月1日		
556	83-6	ハガキ	1	吉岡弥蔵→山崎央	明治36年9月2日		
557	83-6	ハガキ	1	園部→山崎央	明治36年9月12日		
558	83-6	ハガキ	1	篠田定規→山崎央	明治36年11月16日		甘木郵便局

番号	整理番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品質形状	備 考
559	83-6	ハガキ	1	松尾繁→山崎羊三郎	明治36年12月3日		
560	83-6	ハガキ	1	石松密雲→山崎央	明治37年8月27日		
561	83-1	ハガキ	1	西方寺→山崎央	明治時代		
562	83-9	案内状	1	上原田請元→山崎央	9月19日		影人形興行
563	83-9	案内状	1	西方寺→山崎央	9月15日		
564	83-6	運動会の案内状	1	長井磯之丞→山崎央			
565	83-9	総会通知書	1	筑紫銀行→山崎央	明治39年1月19日		
566	83-6	総会通知書	1	筑紫銀行→山崎央	明治36年12月31日		
567	83-6	通知	1	筑紫銀行→山崎央	明治36年12月15日		
568	83-6	通知	1	筑紫銀行→山崎央			
569	83-10	速誉負祐善女口記并法事ニテ	1	山崎央	明治10年1月11日		
570	83-9	願書	1	西方寺→山崎央			
571	83-10	歌	1	山崎喜三→山崎央	明治35年8月2日		山崎央還暦祝

## ■ 写真・絵ハガキ

572	1	山崎央肖像写真	1		明治時代		
573	2	山崎サツ肖像写真	1		明治時代		
574	83-8	陸海軍将校肖像(写真)	1	東京日日新聞	明治32年1月1日	印刷/一紙	
575	83-10	筑紫宮神殿・拝殿	1	藤澤(博多)			
576	83-10	筑紫宮表参道	1	藤澤(博多)			
577	83-10	筑紫宮東参道	1	藤澤(博多)			
578	83-1	絵ハガキ(筑前篠栗名所)	3				
579	83-1	絵ハガキ(神湊町)	8				
580	83-1	絵ハガキ(筑前芥屋大門)	5				
581	83-1	絵ハガキ(熊本百景)	23				
582	83-1	絵ハガキ(熊本名勝)	9				
583	83-1	絵ハガキ(肥後名勝)	6				
584	83-1	絵ハガキ(阿蘇山)	8				
585	83-1	絵ハガキ(阿蘇山)	16		昭和初期		
586	83-1	絵ハガキ(別府名所)	9				
587	83-1	絵ハガキ(長崎名所)	5				
589	83-1	絵ハガキ(小浜名所)	4				
590	83-1	絵ハガキ(宮崎名勝)	10				
591	83-1	絵ハガキ(日向名勝)	6				
592	83-1	絵ハガキ(日向青島)	8				
593	83-1	絵ハガキ(日向)	17				
594	83-1	絵ハガキ(日向青島珍植物)	6				
595	83-1	絵ハガキ(日向青島珍植物集)	10				
596	83-1	絵ハガキ(青島熱帯植物)	10				
597	83-1	絵ハガキ(鹿児島名所)	11				
598	83-1	絵ハガキ(鹿児島の名勝)	8				
599	83-1	絵ハガキ(鹿児島言葉)	12				
600	83-1	絵ハガキ(桜島)	3				
601	83-1	絵ハガキ(桜島大爆発)	10		昭和初期		
602	83-1	絵ハガキ(桜島大爆発記念)	11				
603	83-1	絵ハガキ(岩屋風景)	7				

番号	整理番号	名 称	員数	製作者等	時 代	品質形状	備 考
604	83-1	絵ハガキ (出雲日御碕)	8		昭和時代		
605	83-1	絵ハガキ (出雲の旅)	8				
606	83-1	絵ハガキ (出雲)	12				
607	83-1	絵ハガキ (松江名所)	9				
608	83-1	絵ハガキ (那智御瀧)	4				
609	83-1	絵ハガキ (大島一周)	7				
610	83-1	絵ハガキ (千古遺影)	9				
611	83-1	絵ハガキ (浅間山之噴煙)	4				
612	83-1	絵ハガキ (金沢兼六公園)	12				
613	83-1	絵ハガキ (妙義山)	10				
614	83-1	絵ハガキ (沼津名勝)	9				
615	83-1	絵ハガキ (桃山御陵)	12				
616	83-1	絵ハガキ (東京名所)	29				
617	83-1	絵ハガキ (大東京)	23				
618	83-1	絵ハガキ (東京)	8				
619	83-1	絵ハガキ (世界一周旅行)	20		大正時代		
620	83-1	絵ハガキ (平壤名所と古跡)	10				
621	83-1	絵ハガキ (肥後温泉)	6				
622	83-1	絵ハガキ (別府温泉名勝)	14				
623	83-1	絵ハガキ (白浜温泉)	8				
624	83-1	絵ハガキ (城崎温泉)	17				
625	83-1	絵ハガキ (白溪湯崎)	3				
626	83-1	絵ハガキ (伊勢屋旅館)	4				
627	83-1	絵ハガキ (宗像神社)	8				
628	83-1	絵ハガキ (英彦山神社)	9				
629	83-1	絵ハガキ (宇美八幡宮)	13				
630	83-1	絵ハガキ (宇佐八幡宮)	4				
631	83-1	絵ハガキ (宇佐神宮)	8				
632	83-1	絵ハガキ (宮崎神宮)	8				
633	83-1	絵ハガキ (出雲神社)	6				
634	83-1	絵ハガキ (出雲大社)	4				
635	83-1	絵ハガキ (伊勢大廟)	8				
636	83-1	絵ハガキ (本願寺)	3				
637	83-1	絵ハガキ (平和記念東京博覧会)	28				
638	83-1	絵ハガキ (大阪城観覧記念)	8				
639	83-1	絵ハガキ (工業博覧会)	7				
640	83-1	絵ハガキ (三宅外科開講記念)	8				
641	83-1	絵ハガキ (五十億円記念)	6		昭和時代		
642	83-1	絵ハガキ (釈迦堂落成記念)	11		昭和初期		
643	83-1	絵ハガキ (陸軍特別大演習記念)	3		明治時代		福岡県
644	83-1	絵ハガキ (陸軍特別大演習記念)	3		明治時代		久留米
645	83-1	絵ハガキ (陸軍特別大演習記念)	37		明治時代		
646	83-1	絵ハガキ (陸軍特別大演習)	35				
647	83-1	絵ハガキ (海軍大演習)	15				
648	83-1	絵ハガキ (陸軍士官学校予科)	10				
649	83-1	絵ハガキ (歩兵学校軍用丈)	9				
650	83-1	絵ハガキ (飛行機)	6				
651	83-1	絵ハガキ (太宰府天満宮)	2				

番号	整理番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品質形状	備 考
652	83-1	絵ハガキ (菅公歴史館)	13				
653	83-1	絵ハガキ (全国青年東京帝国)	3				
654	83-1	絵ハガキ (福岡高等学校)	7		昭和初期		
655	83-1	絵ハガキ (松江高等学校)	7				
656	83-1	絵ハガキ (福岡中学校)	10				
657	83-1	絵ハガキ (米国カウボーイ)	7				
658	83-1	絵ハガキ (菊人形)	7				
659	83-3	写真集	1		明治時代	印刷/折本	表紙破損
660	83-1	絵ハガキ (その他)	54				

## ■ 学校関係

661	83-6	原田村公立小学校上等第4級 生徒出席簿	4		明治15年1月		
662	83-6	勤怠表綴	1	西小田小学校	明治17年7~12月	墨書/書冊	
663	83-1	筑紫・原田・西小田小学校出 納表	1		明治18年11月		
664	83-1	高等女学校学資金登記簿	1	山崎波津江	大正8年4月8日		

## ■ 鉄道・交通関係

665	83-5	大阪市街圏附人力車賃金表	1	旅館川興	明治35年10月5日		
666	83-1	東京市新地図	1	日報社	明治36年1月1日		東京日日新聞付
667	83-1	旅行便覧地図	1	地理研究会	明治42年2月25日		
668	83-1	大日本鉄道地図	1	山平太陽館	明治42年3月7日		
669	83-10	軌道敷設説明	1		明治38年		
670	83-5	九鉄原田駅汽車駅時間表	1	原田井手酒場	明治39年2月		
671	83-1	汽車時刻表	1	三井銀行福岡支店			
672	83-10	朝倉軌道(株)発起趣意書	1				
673	83-1	北米航路案内	1	大阪商船株式会社	大正8年6月		
674	83-3	南米航路案内	1	大阪商船株式会社	大正8年6月		
675	83-3	台湾航路案内	1	大阪商船株式会社	大正8年6月		

## ■ 戦争関係

676	83-6	二旅団会計	1			墨書/書冊	
677	83-6	軍夫名簿	1	山崎央カ		墨書/一紙	
678	23	勲章	8				山崎直記
679	14-1	勲章	1				日露戦争で授賞
680	23	記章	2				山崎直記
681	14-3	略章	1				
682	28	勲記	1				
683	14-2	勲記	4				
684	28	勲記	1				
685	83-4	日本海々戦記念会々員名簿	1	味酒安胤・山崎央			
686	83-6	起草会日誌	1			印刷/書冊	

番号	整理番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品質形状	備 考
687	89-1	陸軍軍帽	1	上原商店(東京麴町)	明治30年代	ラシャ製	日露戦争で使用
688	89-2	陸軍軍帽	1	上原商店(東京麴町)	明治30年代	ラシャ製	日露戦争で使用
689	89-3	陸軍軍帽	1	上原商店(東京麴町)	明治30年代	ラシャ製	日露戦争で使用
690	23	防塵マスク	1				山崎直記
691	83-4	徴兵保険証券	1	日本徴兵保険(株)	大正13年3月25日		
692	83-4	謝状	1	帝国在郷軍人会会長 →山崎直記	昭和10年7月30日		
693	83-4	委嘱状	1	大政翼賛会総裁 →山崎直記	昭和16年1月11日		

## ■ 辞令・表彰状等

694	83-4	叙勲	1	宮内大臣→山崎直記	明治33年3月3日	印刷/綴	
695	83-4	表彰状	1	福岡県神職会長 →山崎央	大正5年3月13日		
696	83-4	辞令	1	逓信省→山崎直記	大正9年12月20日		給3級手当
697	83-4	辞令	1	逓信省→山崎直記	大正9年12月20日		給4級手当
698	83-4	表彰状	1	福岡県筑紫支会長 →山崎央	大正14年3月5日		
699	83-4	感謝状	1	筑紫村長→山崎直記	昭和2年5月4日		小学校新築二件

## ■ 衣 類

700	78-1	男児綿入長着	1		明治時代	縮緬	身丈86×両衿72
701	78-2	男児祝着	1		明治時代	正絹	身丈93×両衿74
702	81	山高帽	1				
703	82	女兒祝着	1		明治時代	正絹	身丈90×両衿72
704	86-1	男物襦袢(夏用)	1		明治時代	さらし木綿	
705	86-1	男物襦袢(冬用)	1		明治時代	ネル地	
706	86-1	男物袴	1		明治時代	絹	丈90
707	86-1	男物袴	1		近代	絹	丈90
708	86-1	男物袴	1		近代	絹	丈100
709	86-1	兵児帯	1		近代	絹	
710	86-1	男物長着(夏用)	1		近代	ウール地	
711	86-1	男物長着(夏用)	1		近代	擬紗	
712	86-1	男物長着(袷)	1		近代	絹	
713	86-1	男物袴	1		近代	絹	
714	86-1	男物袴	1		近代	ウール地	
715	86-1	羽織(夏用)	1		近代	絹	
716	86-1	羽織(夏用)	1		近代	紗	
717	86-1	羽織(夏用)	1		近代	絹	
718	86-1	羽織(夏用)	1		近代	紗	
719	86-1	羽織	1		明治時代	絹	
720	86-1	羽織	1		近代	絹	
721	86-1	羽織	1		近代	絹	
722	86-1	羽織	1		近代	絹	
723	86-1	羽織	1		近代	絹	

番号	整理番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品質形状	備 考
724	78-3	男児祝着	1		昭和時代	正絹	身丈95×両衿98

## ■ 食 具 等

725	56	惣朱五分高惣金輪本膳	20人前		明治32年 8 月		2 箱
726	42-1,2	惣朱金輸入吸物膳入	20人前		明治32年 8 月		2 箱
727	42-1,2	黒色会席膳	10組				2 箱
728	57	二の膳	3				箱入
729	58	二の膳	1		明治32年 8 月		猫足付き
730	35	木具膳	1				1 箱
731	44	木具膳	5 組				
732	59	仏事用の膳	一式				
733	63	朱塗霊膳	1				
734	42-1,2	惣朱金輸入本椀	20人前				2 箱
735	30	黒色吸物椀	20人前				2 箱
736	31	栗色吸物椀	20人前				2 箱
737	32,33	茶色吸物椀	40人前				2 箱、欠品あり
738	36	雑煮椀	1 箱				
739	60	椀	1 箱				本膳用
740	65	金匳入中皿	20人前				1 箱
741	50	盛台	3				箱入
742	51	盃・盃台	1 箱				
743	53	総朱三宝	10人前		明治32年 8 月		
744	43	吸物膳 (ハッスン盆)	12				1 箱
745	47,62	ハッスン盆	2				
746	37	重箱	1				5 段重
747	38	重箱	1				3 段重
748	40	重箱	4				
749	39	割子	1				
750	54	割子	1				
751	55	割子	1				
752	45	割子	1				
753	73	割子	1				
754	74	割子	1				
755	22	盃洗	1				
756	61	網代籠	2				
757	34	急須	2			真鍮製	箱入
758	46	イグリ	1			コルク樫製	
759	71	弁当箱	6			アルミ製	箱入

## ■ 生活関連用具

760	83-5	かよけの粉	7	真香園	明治37年ごろ		定価 1 銭 5 厘
761	10	文机	1		明治時代		山崎央使用
762	25	帳簞笥	1				
763	79	湯桶	2				
764	69	風鈴	3				箱入

番号	整理番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品 質 形 状	備 考
765	67	アンカ	1				
766	70	アンカ	1				
767	76	提灯	2				箱入
768	19	灯明	1		近代	ガラス製	
769	20	灯明	1		近代	磁器	
770	72	ランプ	1				
771	72	ランタン	1	上海光華燈廠			
772	15	櫛・笄	一括				1箱入り
773	9	印籠	1				
774	4	カヤの吊手	一括				
775	10	文机	1				山崎央使用
776	16	筥狭子	1		近代		
777	13	漆塗箱	1				
778	84-1	トランク	1		昭和初期	革製	38×72×19,5
779	84-2	トランク	1		昭和初期	革製	19×51×14,5
780	75	洗面器	1				
781	64	巻煙草セット	1				
782	66,68	電気ポット	2				箱入
783	80	結納茶	46	田中知新堂	近代		桐箱入り
784	48	結納台	一式				

## 宮座等関係資料目録

筑紫野市の原田・筑紫には、筑紫神社を祭る本座・新座・筑紫座、筑紫神社の末社である若宮神社を祭る若宮座、その他の祭座として恵比須座、弁財天座、金比羅座、祇園座、宮地嶽座がある。下記は、それぞれの座の頭元が持ち送りする文書の目録である。

■筑紫神社・本座 本報告書の山内（花）家文書目録のうち、資料番号132～146。

■筑紫神社・新座

番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品 質 形 状	備 考
1	筑紫宮御神座帳	1		慶応2年11月20日 ～明治9年11月	墨書／書冊	
2	新座溜金預人名簿	1	頭人中	明治26年11月～ 明治34年11月20日	墨書／書冊	
3	新座溜金預人名簿	1		明治33年11月～ 昭和27年11月25日	墨書／書冊	
4	産神新座帳	1		大正1年12月 ～昭和17年2月6日	墨書／書冊	
5-1	諸雑用取立	1		明治9年	墨書／長帳	5-1～5-41一綴
5-2	諸品一切雑用帳	1	横尾卯三郎	明治19年11月20日	墨書／長帳	
5-3	諸品一切雑用帳	1	山内弥七郎	明治20年11月20日	墨書／長帳	
5-4	筑紫神社御神座入用諸品買入簿	1		明治21年11月20日	墨書／長帳	
5-5	御神座入用諸品買入簿	1	山内助雄	明治22年11月20日	墨書／長帳	
5-6	諸品一切雑用帳	1	山内卯二郎	明治23年11月	墨書／長帳	
5-7	諸品一切扣帳	1	多田太三郎	明治24年11月20日	墨書／長帳	
5-8	筑紫神社御神座入用諸品費入簿	1	山内弥吉	明治25年11月20日	墨書／長帳	
5-9	筑紫神社御神座諸雑費買入控帳	1	山内太七	明治26年11月	墨書／長帳	
5-10	新座諸費控帳	1	山内貞七	明治27年11月20日	墨書／長帳	
5-11	御神座入用素緒品買入簿	1	山内武三郎	明治28年11月20日	墨書／長帳	
5-12	御神座諸入費扣帳	1	浦山逸八	明治29年11月20日	墨書／長帳	
5-13	新座諸買物控	1	松尾	明治30年11月	墨書／長帳	
5-14	新座諸費控帳	1	山崎七三郎	明治31年11月20日	墨書／長帳	
5-15	新座諸費控帳	1	山内弥七郎	明治36年11月19日	墨書／長帳	
5-16	新座諸費控帳	1	横尾次吉	明治37年11月20日	墨書／長帳	
5-17	新座諸費控帳	1	山崎利平	明治38年11月20日	墨書／長帳	
5-18	筑紫神社新座諸費控	1	山内久米次郎	明治33年11月	墨書／長帳	
5-19	新座諸費控帳	1	大石利三郎	明治35年11月19日	墨書／長帳	
5-20	新座諸費控帳	1	山内幸右衛門	明治34年11月19日	墨書／長帳	
5-21	新座諸費控帳	1	山内卯二郎	明治39年11月20日	墨書／長帳	
5-22	新座諸費控帳	1	山内資雄	明治40年11月20日	墨書／長帳	
5-23	新座諸費控帳	1	多田太四郎	明治41年11月20日	墨書／長帳	
5-24	新座諸費控帳	1	山内幾次郎	明治42年10月27日	墨書／長帳	
5-25	氏神新座諸費控帳	1	山内富三郎	明治43年12月6日	墨書／長帳	
5-26	新座諸費控帳	1	山内種木	明治44年12月6日	墨書／長帳	

番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品質形状	備 考
5-27	新座計算帳	1	山内武三郎	大正1年12月6日	墨書/長帳	
5-28	新座計算帳	1	浦山逸八	大正2年12月6日	墨書/長帳	
5-29	新座計算帳	1	宗貞金右衛門	大正3年12月6日	墨書/長帳	
5-30	新座計算帳	1	山内幸右衛門	大正4年12月6日	墨書/長帳	
5-31	新座計算帳	1	大石利三郎	大正5年12月6日	墨書/長帳	
5-32	新座計算帳	1	山内弥七郎	大正6年12月6日	墨書/長帳	
5-33	新座計算帳	1	横尾卯一郎	大正7年12月6日	墨書/長帳	
5-34	新座計算帳	1	山崎伝男	大正8年12月20日	墨書/長帳	
5-35	新座計算帳	1	山内資雄	大正9年11月30日	墨書/長帳	
5-36	新座計算帳	1	山内卯次郎	大正10年11月20日	墨書/長帳	
5-37	新座計算帳	1	多田倉次	大正11年12月8日	墨書/長帳	
5-38	新座諸費控帳	1	山内幾次郎	大正12年12月15日	墨書/長帳	
5-39	新座諸雑費控帳	1	山内富三郎	大正13年10月	墨書/長帳	
5-40	新座諸雑費控帳	1	山内種木	大正14年11月22日	墨書/長帳	
5-41	新座諸雑費控帳	1	山内武雄	大正15年11月	墨書/長帳	
6	新座諸雑費控帳	1	山内次男	昭和13年10月28日	墨書/長帳	
7	新座諸雑費控帳	1	浦山栄	昭和14年12月21日	墨書/長帳	
8	新座諸雑費控帳	1	山内金七	昭和15年11月25日	墨書/長帳	
9	新座諸雑費控帳	1	山内正太郎	昭和16年11月25日	墨書/長帳	
10	筑紫宮新座記録	1		昭和28年～	綴	
11	神様祭りについて	1		平成3年	墨書/一紙	
12	宮座当渡式次第	1		昭和時代	墨書/一紙	
13	献立	1			墨書/一紙	
14	献立	1			墨書/一紙	
15	献立	1			墨書/一紙	
16	領収書				墨書/一紙	
17	領収書		吉原	12月15日	墨書/一紙	
18	領収書		吉原酒店→資雄		墨書/一紙	
19	領収書	1	吉原→浦山	12月11日	墨書/一紙	
20	領収書	1	横雄商店	大正12年12月14日	墨書/一紙	
21	領収書	1	武石商店	大正時代	墨書/一紙	
22	領収書	1	多田商店	12月14日	墨書/一紙	
23	領収書	1	多田商店→資雄	11月29日	墨書/一紙	
24	地券	1	福岡県→松尾真申	明治12年10月31日	墨書/一紙	
25	地券	1	福岡県→松尾真申	明治12年10月31日	墨書/一紙	
26-1	新座溜金預人名簿	1	頭人中	明治10年12月	墨書/綴	26-1～26-3一袋
26-2	米借用証	1	山崎七三郎→新座惣代	明治32年11月20日	墨書/一紙	
26-3	地所	1		明治21年1月5日	墨書/一紙	

■筑紫神社・筑紫座 福岡県文化会館編『福岡県古文書等緊急調査報告書(旧筑紫郡)』1982年のうち、「筑紫神社文書」。

■若宮座(本座)

1	原田若宮大明神祭頭人次第証文			寛文9年→平成2年	墨書/巻物	
2	若宮神社御神座申し合わせ			明治18年11月12日		
3	若宮神社御神座献立		頭人中	明治30年11月改	墨書/書冊	
4-1	若宮神社御神座諸入費記帳		頭元 山崎直記	昭和15年11月23日	墨書/長帳	
5	山崎敏夫座にて話合事項			昭和26年11月23日	墨書/巻物	
6	若宮座当渡式次第			昭和45年秋日	墨書/巻物	

番号	名 称	員数	製 作 者 等	時 代	品質形状	備 考
4-2	若宮神社御神座諸入費帳		頭元 山崎幸太郎	昭和19年11月23日	墨書／長帳	
4-3	若宮神社御神座諸入費記帳		頭元 山内範造	昭和18年11月23日	墨書／長帳	
4-4	若宮神社御神座諸入費記帳		頭元 吉田徳次郎	昭和17年11月23日	墨書／長帳	
4-5	若宮神社御神座諸入費記帳		頭元 浦山栄	昭和16年11月23日	墨書／長帳	

■若宮座（新座）

1	若宮神社座帳	1		明治16年11月23日	墨書／書冊	
2	若宮神社座帳	1	座連中	明治24年11月	墨書／長帳	
3	若宮神社座帳	1		明治33年11月21日	墨書／書冊	
4-1	若宮神社収入簿	1	座本藤島卯吉	明治38年11月23日	墨書／長帳	
4-2	大正2年度座取立	1	座本藤島卯次郎		墨書／長帳	
4-3	大正5年度取立	1	山内嘉市	12月23日	墨書／長帳	
5	明治41年度半利子	1	卯次郎	11月21日	墨書／長帳	
6	若宮神社帳簿	1		昭和2年12月～ 昭和59年12月18日	墨書／書冊	
7	昭和32年度収入	1				
8	筑紫宮飛地若宮神社	1	御座連中	昭和35年12月以降	ノート	
9	若宮座田地購入ニ付釀金方法	1			墨書／一紙	

■恵比須座 本報告書の山崎（洋）家資料目録のうち、資料番号146～172。

■弁財天座

1	弁財天御神座帳	1		安政6年10月	墨書／書冊	
2	弁財天宮御神座連名并溜銭一 順年指引根帳	1		安政6年10月	墨書／書冊	
3	弁財天雑用帳	1		明治14年4月	墨書／長帳	
4	弁財天御酒諸入費	1		明治17年4月	墨書／長帳	
5	諸品買物附立帳	1		明治18年10月	墨書／長帳	
6	弁財天座一切買立	1		明治24年10月	墨書／長帳	
7	[利子取立帳]	1	座主山内喜平	明治25年10月亥日	墨書／長帳	座員15名
8	弁才天御神酒上雑用控	1		明治26年10月	墨書／長帳	
9	弁才天御神座雑用控	1	鹿毛伝三郎	明治27年10月	墨書／長帳	
10	御酒上雑用	1		明治28年	墨書／長帳	
11	利金取立帳	1		明治29年10月	墨書／長帳	
12	弁財天神座利子取立帳	1	当元山内弥吉	明治31年10月	墨書／長帳	
13	弁財天御座利子金取立帳	1	当元山内徳四郎	明治32年10月	墨書／長帳	
14	弁財天御座利子取立并雜費控	1	当元山内久米次郎	明治34年10月7日	墨書／長帳	
15	弁財天御神座并溜金貸附控帳	1		明治34年10月	墨書／長帳	
16	弁財天御座利子金取立帳	1	当元山内弥作	明治37年10月6日	墨書／長帳	
17	弁財天御神座金取立帳	1	当元大石友平	明治38年10月12日	墨書／長帳	
43	弁財天御神座利子金取立帳	1	当元山内卯次郎	明治39年10月		
18	弁財天御神座利子金取立帳	1	鹿毛伝三郎	明治40年10月	墨書／長帳	
19	弁財天御神座利子金取立帳	1	山内善治郎		墨書／長帳	
20	元利友立控	1		明治42年10月	墨書／長帳	
21	弁財天座溜金利子取立控 并雜費控	1	山内幾次郎	明治44年11月15日	墨書／長帳	
22	弁財天神座貯金帳	1	山内弥七郎	大正5年12月	墨書／長帳	
23	弁財天神座諸費控帳	1	山内善左郎	大正11年11月27日	墨書／長帳	
24	弁財天神座諸雜費控帳	1	山内久次郎	大正12年11月10日	墨書／長帳	

番号	名 称	員数	製作者等	時 代	品質形状	備 考
25	弁財天神座諸費控	1	山内徳七	大正14年11月11日	墨書／長帳	
26	雜費控	1	山内富三郎	大正15年11月6日	墨書／長帳	
27	弁財天神座当番人名并預金帳	1		昭和3年11月	墨書／書冊	
28	弁財天神座諸費控帳	1		昭和26年以降	墨書／書冊	
29	覚	1			墨書／書冊	
30	貸付金利子取立	1			墨書／一紙	
31	借用仕候証文之事	1	武吉→御連中	酉10月	墨書／一紙	
32	耕地質入証書	1	山内弥作→弁財天座連中	明治8年10月	墨書／一紙	
33	借用仕候証文之事	1	弥市→御連中	明治6年10月	墨書／一紙	
34	借用仕候証文之事	1	善次→御連中	明治6年10月	墨書／一紙	
35	借用証文之事	1	喜右衛門→御連中	明治6年10月	墨書／一紙	
36	借用証文之事	1	喜次郎→御連中	明治6年10月	墨書／一紙	
37	借用証文之事	1	源三郎他2名	明治6年10月	墨書／一紙	
38	借用証文之事	1		酉10月	墨書／一紙	
39	領收書	1		□□18	墨書／一紙	
40	領收書	1	平伝店→山内富三郎	同月5□	墨書／一紙	
41	領收書	1	岡部多美造→山内	昭和7年5月14日	墨書／一紙	
<b>■金比羅座</b>						
1	金比羅宮御神座帳	1		明治41年12月10日	墨書／書冊	
2	金比羅宮御神座帳	1	金比羅神座御座総代	大正6年12月	墨書／書冊	
3	琴平宮御神座帳	1		昭和3年12月	墨書／書冊	
<b>■祇園座</b>						
1	須賀神社御神座根帳	1	当元預	明治21年改	墨書／書冊	
2	須賀神社御神座元帳	1	当元預	明治28年改	墨書／書冊	
3	須賀神社御神座米金貸付台帳	1	当元預	明治28年改	墨書／書冊	
4	借用証書	1	天本茂三郎→浦山逸八	明治37年11月15日	証紙	
<b>■宮地嶽座</b> 関係資料不詳。						

IV.  
資  
料  
集

(一) 鬼木家文書

諸通執行定 天地 (鬼木文書1)

長崎御奉行

一御先觸到着次第写<sup>越</sup>以御料端宿御代官<sup>ヲ</sup>御用勤衆<sup>江</sup>註進之事

附<sup>リ</sup>御用聞郡奉行<sup>江</sup>註進之事

一御登達七原田<sup>ヲ</sup>神崎御泊<sup>リ</sup>迄外聞指立聞合<sup>ハ</sup>趣御代官<sup>ヲ</sup>御用人衆<sup>江</sup>註進之事

附<sup>リ</sup>御用聞郡奉行<sup>江</sup>註進右外聞之者<sup>式</sup>人

苦勞一日<sup>老</sup>人<sup>ニ</sup>付<sup>リ</sup>錢<sup>貳</sup>百文宛郡切立渡<sup>リ</sup>之事

一御下向之節<sup>ハ</sup>左之処之外聞船<sup>ヲ</sup>註進次第黒崎御代官<sup>ヲ</sup>直飛脚<sup>越</sup>以御用勤衆註進之事

附<sup>リ</sup>御用聞郡奉行<sup>江</sup>註進右飛脚實郡渡<sup>リ</sup>之事

一御乗船 一蒲刈辺 一本山辺 一小倉御着船

右外聞<sup>ハ</sup>御用聞<sup>ヲ</sup>御船方申談若松御船頭才判<sup>ニ</sup>勿小早船<sup>老</sup>艘指出置右之所々

承合<sup>ハ</sup>趣黒崎御代官<sup>江</sup>申達<sup>ハ</sup>付<sup>リ</sup>右之通夫々註進

右小早船乗組之御加子<sup>ヲ</sup>為漕送黒崎丸木舟<sup>老</sup>艘差出<sup>ハ</sup>事

但水夫<sup>老</sup>人一日<sup>米</sup>老<sup>升</sup>實<sup>米</sup>七合<sup>老</sup>勺<sup>四</sup>才

御当用渡<sup>リ</sup>黒崎御代官<sup>ヲ</sup>受取相渡<sup>ハ</sup>事

一御領内御入込御通路相濟<sup>ハ</sup>、御領端宿与<sup>リ</sup>註進有之間<sup>之</sup>宿々<sup>ハ</sup>別条無之<sup>ハ</sup>ハ、不及註進<sup>ハ</sup>、御通路無別儀相濟<sup>ハ</sup>段先宿<sup>ヘ</sup>申送<sup>リ</sup>端宿<sup>ヲ</sup>一同<sup>ニ</sup>註進先方<sup>ヲ</sup>贈物等之註進右<sup>ニ</sup>準<sup>シ</sup>ハ<sup>事</sup>

一先觸到着之上人馬手当大庄屋<sup>老</sup>屋御代官<sup>ヲ</sup>才判<sup>ハ</sup>之事

一御玄関前御門前<sup>并</sup>宿内盛砂<sup>ハ</sup>之事

一遠見差出<sup>ハ</sup>事

一表御門<sup>江</sup>御紋付御挑灯<sup>式</sup>張蠟燭<sup>ハ</sup>御当用渡<sup>リ</sup>之事

一兩替所宿内<sup>ケ</sup>所相立金銀相場者手先通状<sup>之</sup>趣<sup>越</sup>以相定<sup>ハ</sup>事

一置肴野菜之事

御泊<sup>リ</sup>之所 肴一種 野菜二種

但肴無<sup>之</sup>ハ、鳥類<sup>ニ</sup>勿<sup>茂</sup>

白米五升 塩<sup>老</sup>升 醬油<sup>老</sup>升 酢<sup>老</sup>升

酒五升 白味噌<sup>式</sup>升 (御休所肴一種 野菜二種)

白米三升 塩五合 醬油五合 酒三升

白味噌<sup>老</sup>升 酢五合

右品々所有合<sup>越</sup>以指出酒者<sup>老</sup>升<sup>ニ</sup>付 損料錢三拾文宛、肴野菜之分<sup>ハ</sup>損料丁錢百五拾文御当用渡<sup>リ</sup>、其外之品<sup>ハ</sup>損料不被相渡<sup>ハ</sup>事

一旅飯之事

一上御<sup>老</sup>人<sup>ニ</sup>汁五菜酒肴<sup>老</sup>升<sup>ツ</sup>吸物菓子共<sup>ニ</sup>片賄<sup>リ</sup>丁錢九百四拾八文宛<sup>内</sup>式拾八文先

方<sup>ヲ</sup>受取相殘分<sup>ハ</sup>御当用渡<sup>リ</sup>御夜食出<sup>ハ</sup>、酒肴共<sup>丁</sup>錢百三拾六文不殘御当用渡<sup>リ</sup>之事

御家頼中<sup>一</sup>汁五菜酒肴共片賄<sup>老</sup>人<sup>ニ</sup>付<sup>リ</sup>丁錢百八拾八文宛<sup>内</sup>式拾八文先方<sup>ヲ</sup>受取相殘分<sup>七</sup>御当用渡<sup>リ</sup>之事

但御振廻有之節侍分<sup>ハ</sup>二汁五菜酒肴吸物菓子ホ出片賄<sup>老</sup>人<sup>ニ</sup>付<sup>リ</sup>錢四拾文宛増

足錢御当用渡<sup>リ</sup>事、下々<sup>ハ</sup>一汁三菜肴<sup>式</sup>酒出<sup>ス</sup>足錢右同斷御当用渡<sup>リ</sup>之事

供馬<sup>老</sup>足<sup>ニ</sup>付<sup>リ</sup>宵朝飼料丁錢貳百文宛<sup>内</sup>五拾六文先方<sup>ヲ</sup>受取相殘分<sup>ハ</sup>御当用渡<sup>リ</sup>之事

一於山家御進物<sup>ニ</sup>添<sup>ハ</sup>鯉郡方<sup>江</sup>手当有<sup>之</sup>分御通駕御日限相極<sup>ハ</sup>上大庄屋<sup>ヲ</sup>山家御代官<sup>江</sup>相納<sup>ハ</sup>事

一自然火災之節御立退所手当<sup>ハ</sup>之事

一御先拂御側筒被指出<sup>ハ</sup>付<sup>リ</sup>郷足輕不及出<sup>ハ</sup>事

一川越役御足輕頭被指出<sup>ハ</sup>付<sup>リ</sup>其村受持川々庄屋組頭人足共罷出<sup>ハ</sup>事

但洪水之節<sup>ハ</sup>定格<sup>ニ</sup>拘<sup>ラ</sup>す其時之趣<sup>ニ</sup>応<sup>シ</sup>川越夫相増船渡<sup>之</sup>場所共右<sup>ニ</sup>準<sup>シ</sup>ハ<sup>事</sup>

一御先掃除庄屋<sup>老</sup>人<sup>夫</sup>式<sup>人</sup>郡次<sup>ニ</sup>勿指出<sup>ハ</sup>事

一人馬繼所<sup>江</sup>下代<sup>老</sup>人<sup>袴</sup>着罷出<sup>ハ</sup>事

一御休泊共御本陣<sup>江</sup>為御挨拶服紗平服<sup>ニ</sup>御代官出方之事

一御本陣亭主為御案内御着御立之節共綿服麻上下着罷出外事

一宿内押<sup>江</sup>下代老人袴用其外組頭一兩人罷出外事

一用心人馬才判下代老人<sup>并</sup>組頭老人宿次<sup>ニ</sup>差出外事

駕籠三挺 老挺<sup>ニ</sup>三人掛<sup>リ</sup>

馬 三疋

一御代官<sup>江</sup>被下物何品<sup>ニ</sup>与らず先格之通受用之事

但下代御本陣亭主<sup>并</sup>川越才判之庄屋組頭人足共右<sup>ニ</sup>準<sup>シ</sup>外事

一御本陣入用之堅炭ハ御当用受之内<sup>ヨ</sup>御代官吟味之上御本陣亭主<sup>江</sup>相渡外事

一右同庭繩藁右同断之事

一右同薪草履御代官吟味之上郡屋<sup>ヨ</sup>受取御本陣<sup>江</sup>相渡外事

一右同油蠟燭御本陣亭主<sup>江</sup>自分<sup>ヨ</sup>指出外事

一御進物才料下代老人袴着持人ハ御手人代<sup>リ</sup>宿<sup>ヨ</sup>指出外事

一薩州鹿兒嶋 薩摩守様

七拾七万八百石

一肥後熊本 越中守様

五拾四万石

一肥前佐嘉 肥前守様

三拾五万七千石余

一筑後柳川 左近将監様

拾一万九千六百石

一肥後人吉 壱岐守様

二万二千百石

一肥前大村 信濃守様

二万七千九百七十石

右御通路御用心 駕籠三挺 馬三疋 老挺<sup>ニ</sup>付三人掛<sup>リ</sup>

一御先觸到着次第写<sup>越</sup>以御領端宿之御代官<sup>ヨ</sup>御用勤衆註進之事

附<sup>リ</sup>御用聞郡奉行<sup>江</sup>註進之事

一薩摩守様越中守様壱岐守様御登<sup>リ</sup>達ハ南関迄、左近将監様ハ柳川迄山家<sup>ヨ</sup>外間

差出、肥前守様信濃守様轟木迄原田与<sup>リ</sup>外間差出、右間合之趣御代官<sup>ヨ</sup>御用勤

衆註進之事

附<sup>リ</sup>御用聞郡奉行<sup>江</sup>外間之者ハ式人宛苦勞老人一日<sup>ニ</sup>付丁錢貳百文宛郡

切立渡<sup>リ</sup>之事

一御領内御入込御通路相濟之儀共御領端宿<sup>ヨ</sup>註進有之間之宿<sup>ハ</sup>別条有之<sup>ハ</sup>得<sup>ズ</sup>不

及註進<sup>ハ</sup>、御通路無別儀相濟<sup>ハ</sup>段先宿<sup>江</sup>申送<sup>リ</sup>端宿<sup>ヨ</sup>一同註進先方<sup>ヨ</sup>被下物等

之註進<sup>茂</sup>右<sup>ニ</sup>準<sup>シ</sup>外事

一御先觸到着之上人馬手当大庄屋問屋御代官才判<sup>ニ</sup>外事

一御玄関前御門前<sup>并</sup>宿内共盛砂之事

一遠見差出外事

一兩替所宿内<sup>ケ</sup>所相定金銀相場ハ手先通状之趣<sup>越</sup>以相定外事

一自然火災之節御立退所手当之事

一御先拂御側筒被指出<sup>ニ</sup>付郷足輕差出<sup>ニ</sup>不及外事

一川越役御足輕頭被指出<sup>ニ</sup>付其村受持川之庄屋組頭人足共差出外事

但洪水之節ハ定格<sup>ニ</sup>不拘其時之趣<sup>ニ</sup>應<sup>シ</sup>川越夫相増船渡場所<sup>茂</sup>右<sup>ニ</sup>準<sup>ル</sup>事

一御先掃除庄屋老人夫式人郡次<sup>ニ</sup>差出外事

一人馬次所<sup>江</sup>下代老人袴着罷出外事

一御泊休共御本陣<sup>江</sup>為御挨拶御代官服紗平服<sup>ニ</sup>出方之事

一御本陣亭主為御案内宿口迄御着御立之節<sup>与</sup>茂<sup>ニ</sup>綿服麻上下着罷出外事

一宿内押<sup>江</sup>下代老人袴着用其外組頭一兩人罷出外事

一用心人馬才判下代老人<sup>并</sup>組頭老人宿繼<sup>ニ</sup>差出外事

駕籠三挺 老挺<sup>ニ</sup>付三人掛<sup>リ</sup> 馬三疋

一御代官江被下物何品ニ与らす先格之通受用事

但下代御本陣亭主并川越才判之庄屋組頭人足共右ニ準シ事

一御本陣入用之堅炭七御当用渡受之内御代官吟味之上御本陣亭主へ相渡事

一右同蔭蔕繩藁右同断之事

一右同薪草履御代官吟味之上郡屋受取御本陣亭主江相渡事

一右同油蠟燭ハ御本陣亭主多指出事

一壹岐守様信濃守様江ハ左之御駕籠立場水茶屋野雪隠共御手当無之事

一御駕籠立場三ヶ所之所之事

山家御代官受持 山家村抱

壹ヶ所 西山峠

内野御代官受持 内野村抱

壹ヶ所 冷水峠

黒崎御代官受持 香月村抱

壹ヶ所 石坂

一水茶屋式ヶ所之事

山家御代官受持 山家村抱

壹ヶ所 西山峠

黒崎御代官受持 香月村抱

壹ヶ所 石坂

但有来之家見合手当火鉢水田子かゝる茶碗火入薄縁之類御茶屋御道具之内

出ス、右入用茶半斤宛御当用渡リ才判与し而組頭老人差出外事

一野雪隠七ヶ所之事

山家御代官受持 岡田村抱

壹ヶ所 杉馬場

右同断 山家村抱

壹ヶ所 大日峠

内野御代官受持 内野村抱

壹ヶ所 冷水峠

右同断 豆田村抱

壹ヶ所 原

木屋瀬御代官受持 鶴田村抱

壹ヶ所 おかち

黒崎御代官受持 香月村抱

壹ヶ所 石坂

右同断 尾倉村抱

壹ヶ所 ころ与う

但水田子かいい郡仕調相渡、切組ハ四尺五寸四方家上藁蔕蔕蔕葛結外囲柴

垣、右入用之竹木ハ山方渡リ藁蔕蔕蔕葛之類ハ郡多出事

一左近将監様江安永六酉多丑迄御儉約被執行御馳走御断ニ付年限之間ハ川越御

足輕頭不被指出外、川々ハ庄屋組頭弥致出精船渡之場所七入念渡方御荷物等一

切簾抹無之様取斗外事

一右ニ付御先拂御側筒郷足輕越茂不被指出御案内庄屋兩人宛物馴外者吟味之上郡

次ニ差出此兩人多御先拂掃除才判ヲ兼相勤外事

一右福岡役人不被指出外ニ付るハ末々心得違之儀茂可有之哉一切簾抹之儀無之様

取斗外事

一筑後久留米 有馬玄蕃頭様

廿一万石

一肥前嶋原 松平主殿頭殿

七万石

一肥前唐津 水野左近将監殿

六万石

一肥前小城 鍋嶋紀伊守殿

七万三千二百五十石余

一肥前蓮池

鍋嶋甲斐守殿

五万二千六百石

一肥前鹿嶋

鍋嶋丹後守殿

二万石

一肥前平戸

松浦肥前守殿

六万七千百石

一筑後三池

立花出雲守殿

壹万石

一肥後宇土

細川和泉守殿

三万石

右通路御用心

式挺 老挺ニ付三人掛、馬三疋

一御先觸到着次第<sup>越</sup>以御領端宿御代官与<sup>リ</sup>御用勤衆<sup>江</sup>註進之事

附<sup>リ</sup>御用聞郡奉行<sup>江</sup>註進、尤左近将監殿ハ御城下通路ニ付町奉行<sup>江</sup>註進之事

一御領内御入込御通路相濟<sup>ハ</sup>儀共御領端宿<sup>ハ</sup>註進有之間之宿々ハ別条無之<sup>ハ</sup>不及註進<sup>ハ</sup>、御通路無別儀相濟<sup>ハ</sup>段先宿<sup>江</sup>申送<sup>リ</sup>端宿<sup>ハ</sup>一同ニ註進先方<sup>ハ</sup>贈物等之註進<sup>茂</sup>右ニ準<sup>シ</sup>ハ事

一御先觸到着之上人馬手当大庄屋問屋<sup>江</sup>ハ御代官与<sup>リ</sup>才判之事

一御玄関前御門前盛砂<sup>并</sup>宿内<sup>ハ</sup>蒔砂之事

一遠見差出<sup>ハ</sup>事

一両替所宿内<sup>ケ</sup>所相定金銀相場ハ手先通状之趣<sup>ヲ</sup>以相定<sup>ハ</sup>事

一自然火災之節御立退所手当之事

一御先拂ハ黒崎原田郷足輕式人宛御領中通<sup>シ</sup>ニ相勤事

一左近将監殿御先拂者前原御境目<sup>ハ</sup>黒崎御界迄ハ福岡御足輕<sup>ハ</sup>通<sup>シ</sup>ニ相勤<sup>ハ</sup>、下<sup>リ</sup>ハ黒崎<sup>ハ</sup>箱崎迄郷足輕罷越箱崎<sup>ニ</sup>ハ福岡御足輕<sup>与</sup>致交代<sup>ハ</sup>事

一川越之所<sup>ニ</sup>其村庄屋組頭夫召連罷出<sup>ハ</sup>事

一御先掃除庄屋<sup>ハ</sup>人夫式人郡次<sup>ニ</sup>ハ指出<sup>ハ</sup>事

一人馬繼所<sup>江</sup>下代<sup>ハ</sup>人袴着罷出<sup>ハ</sup>事

一御休泊共<sup>ニ</sup>御本陣<sup>江</sup>為御挨拶御代官服紗平服<sup>ニ</sup>ハ出方之事

一御本陣亭主宿口迄為御案内御着御立之節綿服麻上下着罷出<sup>ハ</sup>事

一宿内押<sup>江</sup>下代<sup>ハ</sup>人袴着用其外組頭一兩人罷出<sup>ハ</sup>事

一用心人馬才判下代<sup>ハ</sup>人<sup>并</sup>組頭<sup>ハ</sup>人宿繼<sup>ニ</sup>ハ指出<sup>ハ</sup>事

一駕籠式挺 壹丁三人懸<sup>リ</sup>馬式疋

一御代官<sup>江</sup>被下物何品<sup>ニ</sup>与らず先格<sup>ハ</sup>之通受用<sup>ハ</sup>事

但下代御本陣亭主<sup>并</sup>川越才判之庄屋組頭人足共<sup>ニ</sup>右ニ準<sup>シ</sup>ハ事

一御本陣入用之堅炭者御当用請之内与<sup>リ</sup>御代官吟味之上御本陣亭主<sup>江</sup>相渡<sup>ハ</sup>事

一御本陣入用之蔦蔦繩菓右同断之事

一右同新草履御代官吟味之上郡屋<sup>ハ</sup>受取御本陣亭主<sup>江</sup>相渡<sup>ハ</sup>事

一右同油蠟燭御本陣亭主<sup>ハ</sup>指出<sup>ハ</sup>事

一唐津御領主御通路御馳走向一切明和五<sup>子</sup>年被任御断御城下<sup>ニ</sup>ハ御仕向<sup>ハ</sup>被相省<sup>ハ</sup>得共郡方取斗ハ本文之通今<sup>ニ</sup>ハ不相替<sup>ハ</sup>事

一甲斐守様長崎御出之節郷足輕式人長者町御境目迄差出御帰路之節ハ三国堺目与<sup>リ</sup>長者町迄罷出<sup>ハ</sup>事

一御先掃除才判庄屋夫共御代官<sup>ハ</sup>申附不及御郡奉行<sup>ハ</sup>直<sup>ニ</sup>申付有之事

一人馬才判手付之者遣<sup>ニ</sup>ハ不及<sup>ハ</sup>事

一宿内盛砂之事

一不見分之所致掛蔦<sup>ハ</sup>事

一町茶屋御小休之節御門前<sup>ニ</sup>罷出<sup>ハ</sup>事

但名付披露有之

一御立之節者御門前<sup>ニ</sup>罷出居申事

一御帰路之節ハ関番前<sup>ニ</sup>罷出居申事

4

一 御往来共ニ町茶屋江被為入上御機嫌伺ニ罷出御中老衆江御機嫌伺事

一 宿内下代老人庄屋年寄押へ罷出外事

一 関番道具建置外事

### 日田御郡代

一 先觸到着次第写<sup>越</sup>以御領端宿御代官御用勤衆江註進之事

附リ御用聞郡奉行江註進尤御城下通路之節ハ町奉行江註進之事

一 御領内入込之儀通路相濟外儀共御領端宿御註進有之間之宿々ハ別条無之得七

不及註進外、通路無別儀段先宿江申送り端宿御一同ニ註進先方御贈物等之註進

茂右ニ準外事

一日田口入込之儀七穂坂村庄屋御甘木迄註進いたし其趣同所御堺目奉行御福岡

へ註進、宰府参詣有之得ハ同所御造營奉行御註進之事

一 先觸到着之上人馬手当大庄屋問屋江御造營奉行御境目奉行御才判之事

一本陣御茶屋江手当之事

但御茶屋無之所ハ相応之家宅ニ手当之事

一 御玄関前御門前盛砂、宿内蒔砂之事

一 表御門江御紋付御挑灯巻張蠟燭ハ御当用渡之事

一 旅飯之事

上御老人二汁五菜酒肴吸物菓子共片賄丁錢九百四十八文宛内式拾八文先方御

請取、相残外分ハ御当用渡、御夜食外得七吸物酒肴共丁錢百三拾六文不残御

当用渡之事

手代并侍分一汁五菜酒肴共片賄老人丁錢百八拾八文宛内式拾八文先方御受取、

相残ル分御当用渡之事

下々一汁三菜酒肴共片賄百五拾八文宛内式拾八文先方御請取、相残ル分御当用

渡リ之事

手代斗通路之節<sup>茂</sup>右同断之事

供馬老足ニ付宵朝飼料丁錢式百文宛内五拾六文先方御受取、相残分御当用之

### 事

一 先掃除庄屋老人夫式人共郡次ニ御指出外事

一 先拂御足輕式人被指出外事

一 川越之所々其村庄屋組頭人足共罷出外事

但洪水之節ハ定格ニ不拘其村之趣ニ応<sup>シ</sup>川越夫相増船渡之場所<sup>茂</sup>右ニ準事

一 休泊共本陣江為御挨拶御代官服紗平服出方之事

一 自然火災之節立退宿手当之事

一本陣亭主宿口迄為御案内立着之節綿服麻上下着罷出外事

一 宿内押下代老人袴着用其外組頭老人二人罷出外事

一 用心人馬才料下代老人組頭老人宿繼ニ御指出外事

駕籠三挺<sup>卷丁ニ付</sup>三人掛り<sup>馬式足</sup>

一 御進物才料下代老人袴着持人七御手人代リ宿夫御差出外事

一本陣入用之堅炭ハ御当用受之内御代官吟味之上本陣亭主御相渡外事

一本陣入用之蕨蔕繩藥右同断之事

一 右同薪草履御代官吟味之上郡屋御受取本陣亭主御相渡外事

一 右同油蠟燭ハ本陣亭主自分御指出外事

### 御料御代官

長崎御代官別格之訳奥ニ記ス

一 先觸到着次第写<sup>ヲ</sup>以御領端宿御代官御用勤衆御註進之事

附リ御用聞郡奉行<sup>ハ</sup>茂註進尤御城下通路之節ハ町奉行<sup>ハ</sup>茂註進之事

一 御領内入込之儀通路相濟外儀御領端宿御註進有之間之宿々者別条無之得七不

及註進外、通路無別儀外段先宿江申送り端宿御一同ニ註進先方御贈物等之註進

茂右ニ準外事

一 先觸到着之上人馬手当大庄屋問屋御代官御才判之事

一 玄関前盛砂門前宿内共蒔砂之事

一 遠見差出外事

一 旅宿町茶屋<sup>ノ</sup>手当之事

一 先掃除庄屋<sup>ノ</sup>人夫<sup>ノ</sup>共郡次<sup>ニ</sup>る指出<sup>ノ</sup>事

一 表門<sup>ノ</sup>御紋付御挑灯<sup>ノ</sup>卷張、蠟燭御当用渡<sup>リ</sup>之事

一 旅飯之事

上御<sup>ノ</sup>人香物共一汁四菜、手代待分未々迄香物<sup>与</sup>茂一汁三菜上下無指別片賄

丁錢百三拾六文内六拾文先方<sup>ノ</sup>受取、相残分御当用渡<sup>リ</sup>尤酒肴<sup>ニ</sup>三種出<sup>シ</sup>入切分賄代之外<sup>ニ</sup>御当用<sup>ノ</sup>被相渡<sup>レ</sup>事

但酒上通<sup>リ</sup>卷升百貳拾文、次通<sup>リ</sup>ハ卷升九拾文宛之事

御夜食<sup>ニ</sup>吸物<sup>ノ</sup>卷<sup>ツ</sup>菜<sup>ノ</sup>卷<sup>ツ</sup>小付飯酒肴<sup>ニ</sup>二種出<sup>シ</sup>代錢六拾文不殘御当用渡之事

一 自然火災之節<sup>ニ</sup>立退宿手当之事

一 川越之所々其村庄屋組頭人足共罷出<sup>ノ</sup>事

但洪水之節<sup>ニ</sup>定格<sup>ニ</sup>不拘其時之趣<sup>ニ</sup>応<sup>シ</sup>川越夫相増渡船場所<sup>茂</sup>右<sup>ニ</sup>準<sup>レ</sup>事

一 人馬繼所<sup>ノ</sup>下代<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>袴着罷出<sup>ノ</sup>事

一 休泊共旅宿<sup>ノ</sup>為御挨拶御代官服紗平服出方之事

一 宿内押<sup>ハ</sup>下代<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>袴着其外組頭<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>罷出<sup>ノ</sup>事

一 旅宿亭主綿服麻上下着宿口迄立着之節罷出<sup>ノ</sup>事

一 用心人馬才判下代<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>并組頭宿繼<sup>ニ</sup>る罷出<sup>ノ</sup>事

駕籠式挺 卷挺三人掛<sup>リ</sup> 馬式疋

一 旅宿入用之堅炭者御当用受之内<sup>ノ</sup>御代官吟味之上旅宿亭主<sup>ノ</sup>相渡<sup>レ</sup>事

一 右同蕙蔴繩<sup>ノ</sup>右同断之事

一 右同薪草履御代官吟味之上郡屋<sup>ノ</sup>受取旅宿亭主<sup>ノ</sup>相渡<sup>レ</sup>事

一 右同油蠟燭<sup>ハ</sup>旅宿亭主自分指出之事

一 高木作右衛門殿安永八年亥正月通路之節入用人馬先觸前不殘無賃錢<sup>ニ</sup>る指出<sup>ノ</sup>事

一 右之節旅飯<sup>ニ</sup>上下無指別一汁三菜酒肴出<sup>シ</sup>片賄<sup>レ</sup>人<sup>ニ</sup>付丁錢百五拾文宛御当用<sup>ノ</sup>被相渡<sup>レ</sup>間先方<sup>ノ</sup>ハ賄錢少<sup>茂</sup>受取申間敷旨<sup>ノ</sup>事

一 右之外御馳走向一切御料御代官同様之事

御陸目附

支配勘定

御普請役

一 先觸到着次第<sup>茂</sup>以御領端宿御代官<sup>ノ</sup>御用勤衆<sup>ノ</sup>註進之事

附<sup>リ</sup>御用聞郡奉行<sup>ノ</sup>茂註進之事

一 御領内入込之儀通路相済<sup>レ</sup>儀共御領端宿<sup>与</sup>註進有之間之宿々<sup>ニ</sup>別条無之<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>及註進通路無別儀相済<sup>レ</sup>段先宿<sup>ノ</sup>申送<sup>リ</sup>端宿<sup>ノ</sup>一同<sup>ニ</sup>註進先方<sup>ノ</sup>贈物等之註進<sup>茂</sup>右<sup>ニ</sup>準<sup>レ</sup>事

一 先觸到着之上人馬手当御代官<sup>ノ</sup>問屋<sup>ハ</sup>才判之事

一 旅宿町茶屋<sup>ノ</sup>手当之事

一 玄関前門前共蔴砂宿内<sup>ハ</sup>掃除斗<sup>リ</sup>之事

一 表門<sup>ノ</sup>御紋付挑灯<sup>ノ</sup>卷張宛御当用渡之事

一 遠見指出<sup>ノ</sup>事

一 旅飯之事

上<sup>ノ</sup>人前<sup>ニ</sup>汁五菜酒肴<sup>ノ</sup>卷<sup>ツ</sup>吸物菓子共<sup>ニ</sup>片賄<sup>レ</sup>丁錢九百四拾八文宛内式拾八文先方<sup>ノ</sup>受取相残分<sup>ハ</sup>御当用渡夜食出<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>吸物酒肴共<sup>ニ</sup>丁錢百三拾六文不殘御当用渡之事

家頼中<sup>ニ</sup>汁五菜酒肴共片賄<sup>レ</sup>人<sup>ニ</sup>付丁錢百八十文宛内式拾八文先方<sup>ノ</sup>受取相残分御当用渡<sup>リ</sup>之事

一 先掃除庄屋<sup>ノ</sup>人夫<sup>ノ</sup>共郡次<sup>ニ</sup>る指出<sup>ノ</sup>事

一 川越之所々其村庄屋組頭人足共罷出<sup>ノ</sup>事

但洪水之節<sup>ニ</sup>定格<sup>ニ</sup>不拘其時之趣<sup>ニ</sup>応<sup>シ</sup>川越夫相増渡船場所<sup>茂</sup>右<sup>ニ</sup>準<sup>レ</sup>事

一 人馬繼所<sup>ノ</sup>下代<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>袴着罷出<sup>ノ</sup>事

一 休泊共旅宿<sup>ノ</sup>為挨拶御代官服紗平服<sup>ニ</sup>る出方之事

一宿内押<sup>レ</sup>下代<sup>レ</sup>老人<sup>レ</sup>袴着用<sup>レ</sup>其外<sup>レ</sup>組頭<sup>レ</sup>一人<sup>レ</sup>罷出<sup>レ</sup>事  
一用心<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>馬才<sup>レ</sup>料<sup>レ</sup>組頭<sup>レ</sup>老人<sup>レ</sup>宛<sup>レ</sup>宿繼<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>罷出<sup>レ</sup>事

駕籠<sup>レ</sup>挺宛<sup>レ</sup> 老人<sup>レ</sup>掛<sup>レ</sup> 三人<sup>レ</sup>掛<sup>レ</sup> 馬<sup>レ</sup>老<sup>レ</sup>疋宛

一旅宿亭主<sup>レ</sup>宿口<sup>レ</sup>迄<sup>レ</sup>立着<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>節<sup>レ</sup>綿服<sup>レ</sup>麻<sup>レ</sup>上下<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>罷出<sup>レ</sup>事

一被<sup>レ</sup>下物<sup>レ</sup>才料<sup>レ</sup>下代<sup>レ</sup>老人<sup>レ</sup>袴着用<sup>レ</sup>持人<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>手<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>リ<sup>レ</sup>宿夫<sup>レ</sup>差出<sup>レ</sup>事

一旅宿入用<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>堅炭<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>当<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>之内<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>官<sup>レ</sup>吟味<sup>レ</sup>之上<sup>レ</sup>旅宿亭主<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>事

一右同<sup>レ</sup>蔭蔕<sup>レ</sup>繩<sup>レ</sup>藁<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>同<sup>レ</sup>断<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一右同<sup>レ</sup>薪草<sup>レ</sup>履<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>官<sup>レ</sup>吟味<sup>レ</sup>之上<sup>レ</sup>郡家<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>旅宿亭主<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>事

一右同<sup>レ</sup>油蠟燭<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>旅宿亭主<sup>レ</sup>自分<sup>レ</sup>指出<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

日<sup>レ</sup>田<sup>レ</sup>本<sup>レ</sup>ノ<sup>レ</sup>手<sup>レ</sup>代

支<sup>レ</sup>配<sup>レ</sup>勘<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>格

一先<sup>レ</sup>觸<sup>レ</sup>到<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>次第<sup>レ</sup>寫<sup>レ</sup>ヲ<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>領<sup>レ</sup>端<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>官<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>勤<sup>レ</sup>衆<sup>レ</sup>註<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

附<sup>レ</sup>リ<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>聞<sup>レ</sup>郡<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>ノ<sup>レ</sup>茂<sup>レ</sup>註<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一御<sup>レ</sup>領<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>込<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>儀<sup>レ</sup>斗<sup>レ</sup>致<sup>レ</sup>註<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>外<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>儀<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>七<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>註<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>事

一遠<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一案<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>庄<sup>レ</sup>屋<sup>レ</sup>老人<sup>レ</sup>郡<sup>レ</sup>次<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>指<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事

一旅<sup>レ</sup>飯<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

上<sup>レ</sup>老人<sup>レ</sup>前<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>汁<sup>レ</sup>五<sup>レ</sup>菜<sup>レ</sup>酒<sup>レ</sup>肴<sup>レ</sup>吸<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>菓子<sup>レ</sup>共<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>片<sup>レ</sup>賄<sup>レ</sup>丁<sup>レ</sup>錢<sup>レ</sup>九<sup>レ</sup>百<sup>レ</sup>四<sup>レ</sup>拾<sup>レ</sup>八<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>宛<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>貳<sup>レ</sup>拾<sup>レ</sup>八<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>先<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>

ノ<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>殘<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>リ<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

夜<sup>レ</sup>食<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>七<sup>レ</sup>吸<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>酒<sup>レ</sup>肴<sup>レ</sup>共<sup>レ</sup>丁<sup>レ</sup>錢<sup>レ</sup>百<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>拾<sup>レ</sup>六<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>殘<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>リ<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

家<sup>レ</sup>頼<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>汁<sup>レ</sup>五<sup>レ</sup>菜<sup>レ</sup>酒<sup>レ</sup>肴<sup>レ</sup>共<sup>レ</sup>片<sup>レ</sup>賄<sup>レ</sup>老人<sup>レ</sup>前<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>丁<sup>レ</sup>錢<sup>レ</sup>百<sup>レ</sup>八<sup>レ</sup>拾<sup>レ</sup>八<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>宛<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>貳<sup>レ</sup>拾<sup>レ</sup>八<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>先<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>

受<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>殘<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>リ<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一宿<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>押<sup>レ</sup>組<sup>レ</sup>頭<sup>レ</sup>兩<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>罷<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事

一船<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>場<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>限<sup>レ</sup>晴<sup>レ</sup>雨<sup>レ</sup>組<sup>レ</sup>頭<sup>レ</sup>夫<sup>レ</sup>召<sup>レ</sup>連<sup>レ</sup>罷<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>判<sup>レ</sup>仕<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>外<sup>レ</sup>川<sup>レ</sup>々<sup>レ</sup>七<sup>レ</sup>川<sup>レ</sup>越<sup>レ</sup>夫<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>尤<sup>レ</sup>川<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>趣

ニ<sup>レ</sup>ノ<sup>レ</sup>庄<sup>レ</sup>屋<sup>レ</sup>組<sup>レ</sup>頭<sup>レ</sup>夫<sup>レ</sup>召<sup>レ</sup>連<sup>レ</sup>罷<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>判<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一人<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>次<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>役<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>斗<sup>レ</sup>罷<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事

一旅<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>町<sup>レ</sup>茶<sup>レ</sup>屋<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>手<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一休<sup>レ</sup>泊<sup>レ</sup>共<sup>レ</sup>旅<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>挨<sup>レ</sup>拶<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>官<sup>レ</sup>服<sup>レ</sup>紗<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>服<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一旅<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>亭<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>袴<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>口<sup>レ</sup>迄<sup>レ</sup>立<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>節<sup>レ</sup>罷<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事

但<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>節<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>官<sup>レ</sup>綿<sup>レ</sup>服<sup>レ</sup>麻<sup>レ</sup>上下<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>勤<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>料<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>老人<sup>レ</sup>袴<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>手<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>リ<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>夫<sup>レ</sup>差<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事

代<sup>レ</sup>リ<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>夫<sup>レ</sup>差<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事

一旅<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>堅炭<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>之内<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>官<sup>レ</sup>吟味<sup>レ</sup>之上<sup>レ</sup>旅<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>亭<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>事

一右<sup>レ</sup>同<sup>レ</sup>薪<sup>レ</sup>草<sup>レ</sup>履<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>官<sup>レ</sup>吟味<sup>レ</sup>之上<sup>レ</sup>郡<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>旅<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>亭<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>事

一右<sup>レ</sup>同<sup>レ</sup>蠟<sup>レ</sup>燭<sup>レ</sup>油<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>旅<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>亭<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>自分<sup>レ</sup>指<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

長<sup>レ</sup>崎<sup>レ</sup>町<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>寄

一先<sup>レ</sup>觸<sup>レ</sup>到<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>次第<sup>レ</sup>寫<sup>レ</sup>ヲ<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>領<sup>レ</sup>端<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>官<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>勤<sup>レ</sup>衆<sup>レ</sup>註<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

附<sup>レ</sup>リ<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>聞<sup>レ</sup>郡<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>ノ<sup>レ</sup>茂<sup>レ</sup>註<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一御<sup>レ</sup>領<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>込<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>儀<sup>レ</sup>通<sup>レ</sup>路<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>濟<sup>レ</sup>儀<sup>レ</sup>共<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>領<sup>レ</sup>端<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>註<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>間<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>々<sup>レ</sup>七<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>条<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>七<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>註<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>事

一不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>註<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>、通<sup>レ</sup>路<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>儀<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>濟<sup>レ</sup>段<sup>レ</sup>先<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>送<sup>レ</sup>端<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>一同<sup>レ</sup>註<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>先<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>贈<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>等<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>註<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup> 茂<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>準<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>事

進<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup> 茂<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>準<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>事

一先<sup>レ</sup>觸<sup>レ</sup>到<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>之上<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>手<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>庄<sup>レ</sup>屋<sup>レ</sup>間<sup>レ</sup>屋<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>官<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>判<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一組<sup>レ</sup>頭<sup>レ</sup>老人<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>ケ<sup>レ</sup>ン<sup>レ</sup>致<sup>レ</sup>案<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>事

一旅<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>町<sup>レ</sup>茶<sup>レ</sup>屋<sup>レ</sup>手<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事

一川<sup>レ</sup>越<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>々<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>村<sup>レ</sup>庄<sup>レ</sup>屋<sup>レ</sup>組<sup>レ</sup>頭<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>足<sup>レ</sup>共<sup>レ</sup>罷<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事

但<sup>レ</sup>洪<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>節<sup>レ</sup>七<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>格<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>拘<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>趣<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>応<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>川<sup>レ</sup>越<sup>レ</sup>夫<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>增<sup>レ</sup>船<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>場<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup> 茂<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>準<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>事

一人<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>次<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>役<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>斗<sup>レ</sup>罷<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事

一休<sup>レ</sup>泊<sup>レ</sup>共<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>官<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>判<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup> 与<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>挨<sup>レ</sup>拶<sup>レ</sup>事

但<sup>レ</sup>袴<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>用

一被<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>節<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>官<sup>レ</sup>服<sup>レ</sup>紗<sup>レ</sup>麻<sup>レ</sup>上下<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>務<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>料<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>老人<sup>レ</sup>袴<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>手<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>リ<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>夫<sup>レ</sup>差<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事

一立<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>共<sup>レ</sup>旅<sup>レ</sup>宿<sup>レ</sup>亭<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>袴<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>門<sup>レ</sup>前<sup>レ</sup>迄<sup>レ</sup>罷<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事

阿<sup>レ</sup>蘭<sup>レ</sup>陀<sup>レ</sup>人

附添役人

一先觸到着次第ヲ以御料端宿之御代官御用勤衆ニ註進之事

附リ御用聞郡奉行ニ註進之事

一御領内入込之儀通路相濟儀共御領端宿与リ註進有之間之宿々ハ前条無之ハ得  
之不及註進ハ、通路無別儀相濟ハ段先宿ニ申送端宿ハ一同註進先方ニ贈物等之  
註進ニ準シハ事

一先觸到着之上人馬手当御代官大庄屋問屋ニ才判之事

一旅宿町茶屋ニ手当之事

一旅宿前蔀砂宿内ニ掃除之事

一旅宿前御紋付御挑灯壹張蠟燭御当用渡リ之事

付添役人上下無指別一汁五菜酒肴共片賄壹人ニ付丁錢百八拾八文宛内式拾八  
文先方ニ受取相残分御当用渡リ之事

一川越之所々其村庄屋組頭人足共罷出ハ事

但洪水之節ハ定格ニ不拘其時之趣ニ応シ川越夫相増船渡之場所ニ準ハ事

一人馬次所ニ下代老人袴着罷出ハ事

一沐浴共附添役人ニ為挨拶御代官服紗平服ニ出方之事

一附添役人ニ被下物有之節ハ御代官服紗麻上下着用相勤ハ、才料ニ下代老人袴着

持人ニ御手人代リ宿夫ニ指出ハ事

一立着共宿亭主門前迄袴着罷出ハ事

一宿押ニ組頭兩人罷出ハ事

一用心人馬才料組頭老人宛宿次ニ差出ハ事

駕籠式挺 三人掛 馬壹疋

一宿亭主ニ贈物等受用之事

一兩替所宿内ニ所相立金銀相場ハ手先通状之趣以相定ハ事

一旅宿入用之堅炭御当用受之内ニ御代官吟味之上旅宿亭主ニ相渡ハ事

一右同蔀蔕繩右同断之事

一右同新草履御代官吟味之上郡家ニ受取旅宿亭主ニ相渡ハ事  
一右同油蠟燭ハ旅宿亭主自分指出之事

御料漂着異国人

一先觸着之上不及註進御領内入込之儀通路相濟儀斗御領端宿御代官御用勤衆  
ニ註進之事

附リ御用聞郡奉行ニ註進之事

一先觸着之上人馬手当御代官大庄屋問屋ニ才判之事

一旅飯之事

付添役人上一汁五菜酒肴共片賄丁錢百八拾八文宛内式拾八文先方ニ受取相  
残分御当用渡リ之事

下々并異国人共一汁三菜酒肴共片賄丁錢百五拾文宛内式拾八文ハ先方ニ受取  
相残分御当用之事

一先拂郷足輕老人差出ハ事

一付添役人ニ泊休共御代官ニ下代使ニ挨拶之事

但袴着用

一宿内押ニ組頭差出ハ事

一異国人乘馬壹疋ニ付荷添夫老人宛才料ハ宿夫ハ人柄相撰脇指セ老人宛其外才判

組頭式人は又脇差帶宿次ニ差出ハ事

一旅宿町茶屋手当之事

一宿居住之醫師老人宿次ニ差出行駄昇人足ハ相渡ハ事

一洪水之節ハ川越夫等指出シ船渡之場所ニ差支無之様御代官才判之事

一立着共ニ旅宿亭主門前迄袴着用罷出ハ事

一異国人老人ニ付菅笠壹ツ赤合羽壹ツ宛御当用買立黒崎ニ相渡御領中相用原田

ニ追テ黒崎ニ差返ハ事

御状箱

御用物

- 一御状箱御用物共ニ到着之上御代官ヲ宿役之者召集送り状前ニ引合委敷相改入念ヲ時付ヲ以送遣ハ事
- 一前宿送り状前ニ少ニ有茂改出シ有之ハ得七其趣請取證據ニ書載断置先宿ノ之送状ニ茂改出之分委敷書載送り遣ハ事
- 一洪水之節七川方角村ヲ川越夫差出入念可申ハ、夫共ニ渡不相成ハハ最寄村ノ持込置送り出宿ヲ不寝番上才判人等茂指遣川明ハハ無油断早々送り出シ遅滞之訳七其所庄屋ヲ證文書調送状ニ差添ハ事
- 一持夫ハ御代官ノ問屋ノ才判人柄相撰差出ハ事
- 一夜中持送りハ挑灯松明見合せ燈ハ事
- 一但蠟燭松明ハ郡渡之事
- 一御用物上包ハ晴雨ニ応ジ蕙七嶋越以丈夫ニ仕調差出ハ事
- 一但蕙七嶋繩共ニ郡渡之事
- 一御用物之依多少才料ハ組頭ノ相応ニ差出ハ事
- 一品ニ与リ泊之節七町茶屋へ宿手当不寝番持人等差添宿庄屋組頭罷出下代折節罷越見ケハ事

唐銀

上納銀

- 一付添役人旅宿ハ銀子入ハ蔵有之衆ノ手当之事
- 一銀子着之上先方立合ニ有宿役之者共銀箱封之前等損有無之儀相改蔵ニ入用之為防戸前七明ケ置下代宿役人中銀箱持人茂相応ニ相揃置倉之内外不ニ無之様何茂不寝番之事
- 一付添役人旅宿銀子入ハ倉共御紋付御挑灯老張宛蠟燭ハ御当用渡之事
- 一火之廻リ組頭ヲ致上番無油断宿内廻ハ事
- 一銀箱預證文宿役之者共ヲ差出ハ様先方申ハハ證文出置出立之節銀箱相渡右證文引取ハ事

一銀老駄ニ荷添夫老宛才判七宿夫之内人柄相撰脇指させ老宛其外才判組頭式

人是又脇差帶宿次ニ有差出ハ事

一宿内見ケノ為案内組頭老宛罷出ハ事

一宿内押ノ下代老宛袴着罷出ハ事

一洪水之節七川越夫等差出船渡之場所茂差支無之様御代官才判之事

一立着共旅宿亭主袴着門口迄罷出ハ事

一旅飯之事

一付添役人上下無差別一汁五菜酒肴与茂ニ片賄老人丁錢百八拾八文宛内式拾八

一文先方ヲ受取相残分御当用渡リ之事

一支配勘定ヲ付添ハ節ハ一切御馳走向常通路之格ニハ事

御用之鳥獸

- 一町茶屋ノ宿手当不寝番持人差添宿庄屋組頭共ニ罷出下代折節罷越見ケハ事
- 一餌飼之品ハ先觸之通宿々手当之事
- 一才料七相応ニ組頭ヲ指出ハ事

嘉永五壬子年

三月中浣写之

# 元治二年丑日記 (鬼本文書3)

茂藏 甚平弟松次郎  
武吉悱 ノ吉 五郎弟善九郎

元治二年村方多差出ス

正月元日、日和、例年之通頭方致出方

同 二日、右同、例之通所々年始状送り出ス

同 三日、雨天、肥州木屋瀬宿陣之面々不残引払相成外事

同 四日、雨上リ

同 五日、日和

与一郎四三島へ年始遣ス、例年之通年玉肴代送ル、本道寺幸五郎年始二来ル

同 六日、雨

一 田中殿へ福岡客来有之付、為見廻肴式尾朔藏兩人ニ送ル

一 大塩方多節会案内有之付、肴志鉢送ル

同 七日、同

一 上座甘木飯塚二日市江書状送り出ス

同 八日、同

正月九日、日和

頭方ニ多役所開、帳面仕立而、肥州藩中人馬継方之儀ニ付両三人役所へ来ル

同 十日、く茂リ

頭方出福、朔藏付添、御境目庄屋重平、菊三郎、善兵衛、野町組頭、山ノ口久

五郎来ル、我家へ茂、左平之祝儀与し而肴代共遣シ付酒出ス

一 兒玉嘉平太殿江年礼、左六同道罷越ス、酒肴升兩人ニ多遣ス、此預リ左六出シ

子十二月廿七日

一 卷ノ八十文 蕙代

内六百文去子年蕙代 多朔藏出ス

一 御状箱請持夫左之通

善八悱善太郎 次七悱辰次

又吉 佐平悱千吉

ノ

同 十一日、同

同 十二日、同

三四郎方へ節会致外ニ付罷越ス

同 十三日、日和

馬市儀平一件ニ付阿しき仙十郎へ書状送ル

同 十四日、雨

同 十五日、片日和

武藏彦次郎初入二来ル酒類遣ス也、三四郎家内里步行ニ遣ス

同 十六日、日和

同 十七日、片日和

自分少々不快ニ多打臥外事

同 十八日、日和リ

馬市儀平一件ニ付同村組頭忠七周平文ニ多来ル

当年ハ他村出不相成外ニ付米式俵半面役米出ス処ニ相極也

正月十九日、日和

同 廿日、右同

頭同道才府参詣致ス

同 廿一日、右同

天山斎参致ス

同 廿二日、雨

同 廿三日、同

同 廿四日、同

同 廿五日、同、米巻俵松屋多ル

赤坂村庄屋惠助ニ村状繼之儀ニ付参ル、依嘉表ス使者原田泊ニ付其趣註進致ス  
同廿六日 日和

一 浜地信八江郷足輕日割一件懸合置也

一 六百文定平方へ祝儀同役三人分御用錢ニ<sub>ニ</sub>置也

同廿七日 同

同廿八日 同

一 屋敷疊出来<sub>ハ</sub>ニ付敷込

一 二日市問屋弥平<sub>ヲ</sub>頭引越夫参リ貨錢送リ遣也

一 頭衆出福人足式人宛ニ相成宿賄夜具持込ニ不及、飯米塩噌代共遣ニ不及旨廻  
達来ル

同廿九日 同

頭方御家内才府参<sub>ハ</sub>ニ付与一郎付添遣ス

同晦日 同

二月三日飯塚へ頭衆御打寄之儀懸合来<sub>ハ</sub>ニ付山家<sub>ヲ</sub>返しニ相成<sub>ハ</sub>様同所役所へ

懸合<sub>ハ</sub>事

一 浅香精一殿へ書状送ル

同二日 雨

日田手代通路先觸来ル

同三日 日和

日田手代通路済、頭方飯塚行左六付添

同四日 く茂リ

黒岩参、頭方家内同道致ス

同五日 日和

同六日 雨

一 式百文 同役三人ニ<sub>ニ</sub>見廻致ス

二月七日 雨

同八日 く茂リ

同九日 同断

屋敷客御家内共同道ニ<sub>ニ</sub>出福致ス

同十日 日和

浅香江祝儀ニ罷越ス

一 五百文 浜地信八へ進物、左六治郎助分取遣置

同十一日 右同

同十二日 右同

帰宿致ス

同十三日 右同

同十四日 右同

同十五日 昼比雨天

城山参詣致、大塩方家内、左六家内<sub>与</sub>ミ与、三四郎妻同道致ス

同十六日 雨

同十七日 日和

同十八日 雨

同十九日 日和

同廿日 右同

同廿一日 右同

一手中宗旨判形いたし<sub>ハ</sub>事

同廿二日 右同

卯七同道、高田へ病人見廻罷越<sub>ハ</sub>処同方致死去<sub>ハ</sub>事

同廿三日 右同

才府へ五京滞在ニ付同所御造營奉行手附兩人ニ<sub>ニ</sub>及不足<sub>ハ</sub>ニ付山家原田<sub>ヲ</sub>下

代卷人宛助勤之儀奉行衆<sub>ヲ</sub>懸合来ル

同廿四日 右同

同廿五日 右同

同廿六日 右同

五京衆才府御滯座ニ付御造管奉行手付為介勤出役致、御代官古野忠右衛門殿被  
參ハニ付御造管役宅江相滞リ賄ハ富屋ヲ仕出ス

同廿七日 日和

同廿八日 夜ノ雨

日々延寿院江詰切ノ事

同廿九日 右同

三月朔日 雪

肥州藩中上野垣江泊ニ相成ハニ付宿々渡方ニ相成ハ金子之儀、問屋半蔵同道引  
合置ノ事

一筆致啓上ハ、肥前宿陣荷物送人馬入用高左之通相對雇人馬壹人迄<sub>茂</sub>無之  
処ニ相示談相濟ハ左様御承知可被遣ハ、尤正月二日ノ五日迄一日ニ着代<sub>与</sub>  
シ而正金壹兩壹步宛繼所々々ニ相渡ハ段ヲ<sub>茂</sub>致示談ハ条是又御承知可被成ハ、  
此段為可得御意如斯御座ハ、已上

十二月廿八日

田中 李次郎

津田 半内殿

尚以来文之趣下宿ハ<sub>茂</sub>御通達可被遣ハ

十二月廿七日

一人足百人

同廿九日

一人足百人

正月元日

一人足百人

一馬 拾疋

同二日

一人足百人

一馬 拾疋

但此二日ノ着代有之

同三日

一右同断

同四日

一右同断

同五日

一右同断

ノ

佐嘉宿陣引弘之節、正月二日ノ五日迄壹兩壹步宛着代<sub>与</sub>シ而相渡ハ儀ニ付、  
御頭様ヲ李次郎殿江御懸合ニ相成、右宿陣懸リ肥藩引弘之節之相受持綾部新  
五郎、此節太才府江五京衆御守衛出役ニ相成居ハ趣御座ハ間、御宿宿役ヲ以  
御取合被遣度此段役所ノ御答いたしハ様談ニ相成ハ条、宜御取斗可被遣ハ、  
右御答如斯御座ハ、  
以上

木屋瀬御代官役所

二月廿六日

原田宿

御代官役所

高倉次八郎弟

林平

関 作八弟

与三

今般御取締ニ付木屋瀬宿御番所御取建ニ相成ハニ付依詮儀其方共右番人助勤  
申付ハ、依之御雇勤之間、式人扶持宛被下ハ、御番所作法筋相守居宿御代官  
得差圖入念可相勤ノ事

丑 二月

右本役八下代三人ニ米三俵宛被相渡由ニ休

三月二日 日和

同三日 〃

同四日 〃

同五日 雨

四三島百右衛門来ル

一書状式通

才府同役 并有村四左衛門 江送ル

宅之丞殿嘉平太殿出福被致休

三月六日 日和

同 七日 同

同 八日 同

同 九日 同

頭方出府不快之旨懸合来休間、卯六与一郎一夕泊リニ見廻ニ遣ス

同 十日 〃

大村丹後守様御先觸来ル、郡役所へ註進致ス

同 十一日 〃

同 十二日 〃

同 十三日 雨

同 十四日 〃

同 十五日 日和 御作事繩代ニ卷ノ五百文恵助へ渡置

武蔵行致也

同 十六日 日和

大村様外聞注進致

同 十七日 同

長崎役人豊村彦三郎先觸相達休ニ付郡役所へ註進致ス

同 十八日 雨

同 十九日 日和

同 廿日 〃

才府参詣致、同所医者へ痛所見る

同 廿一日 雨

同 廿二日 日和

町茶屋守一件ニ付山家内野へ書状遣ス

同 廿三日 〃

肥前出勢之木屋瀬宿陣引弘之節宿々 江人馬貸銭心付有之一件ニ付同所 江懸合休

事 同 廿四日 くら茂リ

同 廿五日 日和

同 廿六日 〃

宮本小八郎殿へ頭不快之儀懸合

同 廿七日 〃

児玉嘉平太殿へ一手宿役ノ難渋之訳歎入休得共聞入無之

同 廿八日 日和

同 廿九日 〃

四三島佛事致休ニ付罷越ス

四月朔日 〃

宮本小八郎殿へ半蔵同道ニ勿罷越ス、西山峠ニ勿出合休ニ付山家迄道々咄也

一上酒式升

右一手宿役中ニ勿送ル

同 二日 〃

同 三日 〃

一四百文〃

右頭不快見廻ニ浜焼送ル、但同役三人ニ勿

一山口勘助悴へ茅代四ノ文内場渡置也

同 四日 //

同 五日 //

同 六日 //

下浦村庄屋外一御境目筋之儀ニ付参ル

同 七日 //

夜須郡下浦村御境目筋筑後本郷手荒之取斗致仕坎ニ去月未、同所相届ケ其砌追々双方近村庄屋共度々出会ニ及示談由ニハ共いまた相片付不申趣、昨日又々下浦庄屋外一申出仕、併今一会相催趣茂相咄居仕条、夫ニ相整不申仕ハ其元山部与右衛門被申合、立入示談被致度、頭方茂不快ニ暫引入いまた快氣無之ニ付、此趣役所懸合致仕様被申聞仕、以上

田中宅之丞

役所

四月七日

長田村庄屋

松岡九平殿

昨日ハ遠路御出浮御苦勞奉存仕、御咄之趣、頭方へ茂逐一申達置仕、右ニ付同日仰之通大庄屋衆之処ニ示談相整仕ハ、重畳之事ニ御座仕へ共自然其儀出来不致仕ハ松岡九平へ御頼可被成、尚当役所茂同人へハ懸合置申仕、何様旧地之処相整仕様御心配可被成仕、以上

高嶋 文八

四月七日

下浦

外一様

四月八日 //

宮本小八郎殿御家内与茂泊リニ相成仕

同 九日 //

山家御代官へ罷越、頭方引入之儀留ニ相成仕様頼、御境目内見分昼比左六遣ス

同 十日 夜大雨大らい

同 十一日 日和

秋月郡方土生専右衛門、高田村庄屋平田甚右衛門下浦村庄屋外一、三人参リ御境目筋一件委敷相咄也

同 十二日 //

庄屋与次平方へ泊、今朝引取仕事

同 十三日 //

御咄出ニ付致出福

同 十四日 //

四ツ時、御館大頭役所へ致出方仕処米三俵頂戴被仰仕事

四月十五日 日和

齊藤五三郎方へ罷越仕御境目之儀茂内咄致置仕事

一酒式升 一手中名札ニ五三郎勝蔵兩人へ送り頭之一条頼入置仕尚懸リ役所

大和利平へ茂咄入置仕

同 十六日 //

頭方退勤願岡本和心殿へ指出ニ相成仕趣、石松左司馬殿与リ被申仕

同 十七日 //

同 十八日 //

久佐殿へ左六同道ニ罷越ス

同 十九日 少々茂リ

左六同道ニ致帰宿

同 廿日 日和

同 廿一日 //

甲斐守様長崎御越座之旨秋月御郡奉行衆懸合来ル

同 廿二日 //

福岡役々長崎行之先觸来<sup>ル</sup>

同廿三日 〃

同廿四日 〃

石松左司馬殿福岡<sup>ノ</sup>直<sup>ニ</sup>当宿入込<sup>ニ</sup>相成申<sup>ハ</sup>

甲斐守様明廿五日御越駕被遊<sup>ハ</sup>付、御往来共原田御小休被遊由、秋月御郡奉行衆<sup>ノ</sup>懸合<sup>ニ</sup>相成居<sup>ハ</sup>処御先觸手元<sup>江</sup>不致承知<sup>ニ</sup>付御休泊相分不申、其村<sup>江</sup>御郡方出役<sup>ニ</sup>相成居<sup>ハ</sup>ハ、此趣被引合<sup>ハ</sup>上否可被申越<sup>ハ</sup>、以上

田中宅之丞

四月廿四日

役所

中牟田村庄屋間次

武次郎殿

尚<sup>茂</sup>本文昨日<sup>ニ</sup>茂 秋月表引合可申<sup>ハ</sup>処、頭方引入山家<sup>ノ</sup>間次<sup>ニ</sup>相成<sup>ハ</sup>処、頃日出福彼是<sup>ニ</sup>多行届不申乍延引其元迄及聞合<sup>ハ</sup>、以上

四月廿五日、日和

甲斐守様長崎御越駕被為濟<sup>ハ</sup>

同廿六日、同

田中宅之丞殿退勤願之通御聞濟相成<sup>ハ</sup>事

同廿七日、雨

宅之丞殿出福被致<sup>ハ</sup>事

同廿八日 同

同廿九日 同

同 晦日 同

田中家内引越<sup>ハ</sup>事

五月朔日 雨

同 二日 雨

対州奥方才府参通路之事

同 三日 日和

同 四日 〃

同 五日 〃

甲斐守様御先觸来

同 六日 〃

同 七日 〃

甲斐守様長崎御帰座五ツ半時頃、町茶屋<sup>ニ</sup>多御小休無滞御通駕相濟<sup>ハ</sup>事

同 八日 〃

同 九日 〃

同 十日 大雨

同 十一日

同 十二日 日和

同 十三日 〃

一考通、四三島両庄屋<sup>ハ</sup>御境目一件之儀懸合

同 十四日 〃

田中宅之丞殿引越人馬証拠申刻付<sup>ニ</sup>多送出ス

五月十五日 日和

年号改<sup>ル</sup>慶応<sup>与</sup>今日<sup>ノ</sup>諸證拠可仕出旨懸合来<sup>ル</sup>

同 十六日 〃

下泷御境目一件<sup>ニ</sup>付秋月郡奉行土井勝右衛門殿、郡方土生千右衛門永末幸蔵両人、山家<sup>ハ</sup>付添来<sup>ル</sup>

從中牟田村庄啓上仕<sup>ハ</sup>、先以昨日<sup>ハ</sup>御遠路御運被下、其上御迷惑之儀御頼申上大<sup>ニ</sup>御面倒可被思<sup>ハ</sup>、併程能御引合被下、役頭初於私共別多忝儀奉存<sup>ハ</sup>、将又御馳走被下、大<sup>ニ</sup>御無礼相働申<sup>ハ</sup>、然<sup>ニ</sup>是式聊之品<sup>ニ</sup>御座<sup>ハ</sup>共持合居申<sup>ハ</sup>間さし上申<sup>ハ</sup>、御笑留被下<sup>ハ</sup>本懐奉存<sup>ハ</sup>、以上

五月十七日  
高寫文八様

永末 幸藏  
土生千右衛門

貴札拜見仕、如仰昨日ハ於山家寛々拜顔大慶奉存、私儀ハ折悪敷室痛仕、  
多何之御執持<sup>茂</sup>出来不仕失敬相働、段々慮外御役頭様、宜被仰上置可被下様奉  
願、然<sup>ニ</sup>今日ハ存懸<sup>茂</sup>無御座、紫金苔九御惠贈被下千萬難有少し<sup>ニ</sup>茂 毎々痛  
入仕合奉存、何<sup>レ</sup>其内得貴顔萬々御礼可申上、得共不取敢、書中貴報旁如斯  
御座、恐惶謹言

高寫 文八

五月十七日

土生千右衛門様  
永末 幸藏 様

五月十七日 日和

同十八日 //

同十九日 //

同 廿日 //

同廿一日 //

同廿二日 //

同廿三日 雨

同廿四日 雨

秋月郡奉行<sup>与</sup>石松殿<sup>与</sup>於中牟田村<sup>ニ</sup>御境目一件<sup>ニ</sup>付出会被致、原田<sup>ノ</sup>左  
六出浮也

同廿五日

一正金三步式朱八

切手式百式十文

右ハ諸岡大庄屋<sup>ノ</sup>半藏手元<sup>ハ</sup>送越<sup>ハ</sup>付請取置也

同廿六日 日和  
同廿七日 //

一切手九ノ四百文  
右田中殿引越人馬貨錢

平山仙十郎<sup>ノ</sup>送来也

同廿八日 //

同廿九日 大雨

古野殿引越日限懸合来<sup>ル</sup>

閏五月朔日 雨

田植致ス

平寫幸次郎 幸五郎 日永田 幸七

惣三郎 惣七 久市

同 二日 同

同 三日 雨

寅元日 日和

頭方血忌中<sup>ニ</sup>付五日<sup>ニ</sup>相廻、外事

同 二日 雨天

同 三日 日和

同 四日 //

同 五日 //

頭方忌明<sup>ニ</sup>付年始 茂致出方、外事

同 六日 //

大塩方<sup>ハ</sup>節会<sup>ニ</sup>罷越

同 七日 雨

次郎助方方節会案内致<sub>レ</sub> へ与茂不快ニ断ル

同 八日 〃

新三郎方節会案内致<sub>レ</sub> へ共不快ニ付与一郎名代ニ遣ス

同 九日 日和

同 十日 〃

四三島重平、久五郎来<sub>ル</sub>

同 十一日 〃

三四郎方節会

同 十二日 〃

上浦下浦草水庄屋年始ニ来<sub>ル</sub>

同 十三日 〃

同 十四日 雨

同 十五日 日和

頭、黒崎方引取ニ相成<sub>レ</sub>

同 十六日 〃

下浦村御境一件ニ付松岡九平へ書状送<sub>ル</sub>

右頭不帰服ニ付送出ス由ニ<sub>レ</sub>

同 十七日 〃

同 十八日 〃

与一郎宇美へ参詣いたし<sub>レ</sub>

同 十九日 〃

同 廿日 〃

松岡九平、下浦外一、前日方参御境目一条申談<sub>レ</sub> 事

同 廿一日 雨

石田惠藏方松口曾平之書状、松隈弥一を送<sub>リ</sub> 越、返書取具<sub>レ</sub> 様懸合来<sub>ル</sub>

同 廿二日 〃

同 廿三日 〃

同 廿四日 〃

同 廿五日 〃

同 廿六日 〃

朔藏出福致ス、田中奥方方見廻<sub>レ</sub> 与し而しんしやうか潰送<sub>リ</sub> 来<sub>ル</sub>

同 廿七日 〃

自分出福致<sub>レ</sub> 事

正月廿八日 日和

才府詣<sub>リ</sub> 致し与一郎高田へ遣ス

同 廿九日 〃

同 卅日 〃

頭方へ与次平一同振廻ニ呼<sub>レ</sub> 事

二月朔日 〃

同 二日 〃

同 三日 〃

同 四日 〃

同 五日 〃

同 六日 く茂<sub>リ</sub>

山家御代官御境目廻<sub>リ</sub> 二被参<sub>レ</sub> 事

頭方出福被致<sub>レ</sub>

小兒殿半季請越ニ相成<sub>レ</sub> 旨廻文ニ為知来<sub>ル</sub>

同 七日 日和

同 八日 日

同 九日 少々雪

同 十日 〃

同 十一日 日和

同 十二日 右同

同 十三日 右同

同十四日 右同 判形致  
同十五日 少々雨  
城山参詣致休事  
同十六日 日和  
同十七日 〃  
高原善七郎之結構為知遣ス  
同十八日 〃  
同十九日 〃  
同 廿日 雨  
天山寺参致ス  
同廿一日 〃  
同廿二日 日和  
同廿三日 〃  
高原善七郎之賀勝送リ来ル  
同廿四日 〃  
二月廿五日 雨  
同廿六日 日和  
才府参詣致ス  
同廿七日 〃  
四三島へ仏参致ス  
同廿八日 〃  
四三島之帰ル  
同廿九日 〃  
三月朔日 日和  
乙金善七郎祝ニ付次郎助同道罷越ス  
同 二日 〃  
同 三日 雨

同 四日 〃  
同 五日 雨  
同 六日 日和  
同 七日 〃  
同 八日 雨  
御境目一件九平之申出ル  
同 九日 日和  
同 十日 〃  
同 十二日 雨  
与ミ与十一日祝致休事、大塩へハ酒肴代遣ス  
ば、へ礼致也、昼比之四三島菊三郎祝ニ付罷越ス  
同 十三日 日和  
同 十四日 〃  
四三島之引取也  
同 十五日 〃  
才府参詣致ス  
同 十六日 〃  
同 十七日 〃  
柿原示談役介山部貞右衛門来ル  
同 十八日 〃  
同 十九日 〃  
同 廿日 雨  
同 廿一日 日和  
規世之呼ニ参休付罷越ス  
同 廿二日 日和  
下浦庄屋外一武藏之引取ニ立寄休付絵図相渡ス  
同 廿三日 〃

同廿四日 〃

規世ノ阿イ參居ハニ付送ル

同廿五日 〃

四三島ノ小兒連越來ル

同廿六日 雨

中町ハ滯留ニ相成居ハ御足輕頭ハ見廻

同廿七日 同

頭方御境目見分ニ被相越ハ、左六、小平、付添也

公義御目付今日二日市御入込之由ニ付、前日ノ朔藏出役ハ

一森山ノ与ミ見廻与し而、同人參ル

同廿八日 〃

同廿九日 〃

二日市ハ御目付御滯座ニ付出役致ス、四月三日ニ引取

同晦日 〃

御目付博多ノ二日市ハ入込ニ相成ハ事

四月朔日 〃

御目付小林平之丞殿其外御徒目付御小人目付役共才府參詣ニ相成ハ

同 二日 雨天

与一郎甘木江步行ニ罷越ス

同 三日 日和

自分二日市ノ帰ル

同 四日 雨天

関番所ハ押物有之、頭ノ評義之事

御状箱相札一件茂同断、宿役共ハ評義之事

四月五日 雨

同 六日 日和

御笠江觀世音札所被立ハニ付一夕泊リ罷越ス

同 七日 〃

前夕二村太郎次方ハ泊、阿しき仙十郎宅ニる昼致帰ル

同 八日 〃

関番所ハ指押江米四俵、隈村庄屋田中伊助ハ引渡、浦山甚平不行届事有之

付、同人ハ頭方ノ禁足被申付ハ事

同 九日 昼比ノ雨

左六出福いたしハ

同 十日 日和

ちくし和三郎ハ新三郎世話一件頼遣ス

同 十一日 同

四三島ハ茶ツミニ遣ス、左六福岡ノ帰ル

同 十二日 雨

同 十三日 日和

四三島ノ富与帰ル

同 十四日 〃

松岡九平江御普請料相渡ス、勿論請取書取置ハ事

同 十五日 〃

頭方草水村ハ被相越ハ、朔藏付添

同 十六日 〃

同 十七日 〃

郡左近殿并御右筆頭取分見方并介役与茂原田泊ニ相成、諸持山隈村庄屋不致出

方ニ付、御境筋分口不都合出来ハニ付岡部百右衛門、桑野芳助同道ニ参ハ事

付無事相済申ハ事

同 十八日 〃

朝五ツ半頃ノ皆々出立被致ハ事

四月十九日 日和

佐藤卯六身退願之通被仰付ハニ付呼出ニ出ル

同 廿日 //

同 廿一日 //

同 廿二日 //

同 廿三日 //

頭方奥方同道ニ参ル

同 廿四日 //

浅香清一殿江書状送ル、下浦御境目一件ニ付九平、外一書状遣ハニ付、頭、

左六付添出郷致ス

同 廿五日 //

頭方、児玉方家内かたほたる見、町茶屋ニ参致ス

大塩方家内ニ参ル

同 廿六日 //

福岡人參ハニ付奥方出福相成ハ

同 廿七日 //

与平福岡病人ニ聞ニさし立ハ事

同 廿八日 //

頭方、左六共御境目引取

同 廿九日 雨

五月朔日 //

頭、朔藏出府致ス

同 三日 日和

福岡五番下病人死去被致ハ趣申来ハニ付何レモ為知遣ス

同 四日 //

才府へ四藩被參ハ御面々取締之廻達參ハニ付写留、甘木送ル

同 五日 //

同 六日 //

山隈村庄屋康兵衛、為名代下高場庄屋啓三郎参ル

忠右衛門殿、朔藏福岡引取ニ相成ハ事

同 七日 雨

五月八日 雨

自分四三島へ罷越ス、山家一件百右衛門へ頼置

同 九日 //

同 十日 //

下浦村庄屋外一江田植相濟ハ、ハ早々両本郷江立会相催ハ様申談ハ様懸合遣ス

同 十一日 //

内作分田植相濟ハ也

同 十二日 //

同 十三日 //

同 十四日 //

下浦庄屋外一江頭在宿之儀尋遣ス

同 十五日 日和

村中籠リ有之ハニ付参詣致ス

同 十六日 //

同 十七日 //

屋永村大庄屋井上藤右衛門、下浦村庄屋外一御境目出会之儀ニ付參ハニ付委細申談、九平へ左之通懸合遣ス

夜須郡下浦村与筑後兩本郷与去年来之末、同地出会申談ハ由之処□□御普請相濟迄与答置ハ由、然ニ右御普請相濟ハニ付近々出会相催度趣申出ハ、右ニ付ハ四三島兩人茂出方可致ニ付其方江茂出会出方可被致ハ、日限ホ之儀ハ外一不可申談ハ条其心得可有之ハ以上

古野忠右衛門

五月十六日

長田

松岡九平殿

五月十八日 日和

頃日ハ御出ニ被成<sub>レ</sub>ハ、共何事<sub>茂</sub>不申述、井上氏<sub>ハ</sub>ハ遠路御苦身殊ニ御土産<sub>茂</sub>御深志忝奉存<sub>レ</sub>、御序之刻宜御礼奉頼<sub>レ</sub>、且其節御仰付被成<sub>レ</sub>通、本郷<sub>江ハ</sub>出会前御出<sub>ウ</sub>き被成<sub>レ</sub>度、少々之事<sub>ハ</sub>向村限<sub>リ</sub>御談合出来<sub>レ</sub>様有御座度、於下拙<sub>茂</sub>相望<sub>レ</sub>儀ニ御座<sub>レ</sub>、右御挨拶旁如斯御座<sub>レ</sub>、以上

五月十八日

下浦

外一様

鬼木 左六

高畠 文八

同十九日 雨

同 廿日 //

同 廿一日 //

同 廿二日 同

熊次郎方<sub>ハ</sub>三周忌仏事ニ罷越<sub>ス</sub>

四三島百右衛門<sub>ノ</sub>下浦外一<sub>ノ</sub>出会案内不致趣尋遣<sub>レ</sub>ニ付、外一<sub>江</sub>急<sub>ク</sub>出会催<sub>レ</sub>様懸合也

同 廿三日 //

同 廿四日 //

同 廿五日 //

夜須郡下浦村<sub>ノ</sub>四三島村之間、御境建殿重被仰付旨、頭方出福中<sub>ノ</sub>懸合来、尚

又近々分見方出郷ニ相成<sub>レ</sub>由ニ付其趣村々<sub>ノ</sub>申入致也

五月廿六日 少々雨

三四郎方<sub>ハ</sub>帯懸祝致ニ付罷越、高田又右衛門方<sub>ノ</sub>赤飯送<sub>ル</sub>

同 廿七日 日和

下浦<sub>与</sub>兩本郷<sub>与</sub>出会之儀、弥来<sub>ル</sub>朔日ニ相催<sub>与</sub>し外一<sub>ノ</sub>申出、尚又示談役松岡九平<sub>ノ</sub>此節ハ出会出方致<sub>□□</sub>遣<sub>レ</sub>事

同 廿八日 雨

頭、帰宿ニ相成<sub>レ</sub>事、下浦<sub>ノ</sub>四三島迄之処、御境建御用人衆御聞濟ニ相成<sub>レ</sub>ニ付、松岡九平、四三島岡部百右衛門、柿原山部与右衛門四三島古賀一平立入致世話<sub>レ</sub>様、井手勘兵衛殿<sub>ノ</sub>懸合来<sub>ル</sub>、尤百右衛門、与右衛門<sub>ハ</sub>、秋月御郡奉行<sub>ノ</sub>達ニ相成<sub>レ</sub>様懸合ニ相成<sub>レ</sub>由<sub>ニ</sub>付

六月朔日 //

同 二日 //

同 三日 //

肥州出勢之儀ニ付人馬手当其外万事手当筋之儀本府<sub>ハ</sub>相伺<sub>レ</sub>事

同 四日 //

永々講受取<sub>レ</sub>事

六月五日 日和

同 六日 右同

肥州出勢ニ付外聞註進致<sub>ス</sub>

四三島市平、百右衛門<sub>ノ</sub>書状遣<sub>ス</sub>、去<sub>ル</sub>朔日下浦<sub>与</sub>兩本郷<sub>与</sub>出会相催取替<sub>レ</sub>書物送来<sub>ル</sub>

同 七日 雨天

肥州出勢之儀ニ付大庄屋呼<sub>ニ</sub>遣、繼人馬之儀同人江申談<sub>ル</sub>

同 八日 日和

旅飯錢之儀ニ付市右衛門木屋瀬迄差越

一兒玉殿家内出福ニ付役所<sub>ノ</sub>先觸出し、人足四人為取<sub>レ</sub>事

同 九日 雨

同 十日 〃

同 十一日 日和

同 十二日 〃

肥州出勢延引ニ付諸々江懸合出ス

同 十三日 〃

筑後、柳河出勢先觸来ル、四三島百右衛門、市平自祝ニ来ル

夜須郡

四三島村庄屋

古賀市平

質素手堅年来精越 出し相勤追々数ヶ村庄屋役加役ヲ茂 申付置外処受持筋功者  
ニ有之村方宰判方茂 行届外段相達及御沙汰外、依之以格別其方一代大庄屋格  
ニ申付外、弥出精可相達外事

四三島村

庄屋

古賀市平

夜須郡村々御境目筋取調子ニ付示談役助兼受持申付掛リ役々得指図入念可相  
勤外事、岡部百右衛門江ハ越後かたひら壹反御本家様ヲ頂戴被仰付外由秋月  
御郡奉行外御渡ニ相成外由之事

同 十四日 〃

柳河出勢三百人斗原田へ致止宿外

同 十五日 朝雨

石松殿江四三島岡部百右衛門古賀市平参外ニ付自分茂 □□壹升致持参外御罷越  
ス

柳河出勢百三十人余、夫与茂 当宿泊ル

同 十六日 日和

同 十七日 〃

同 十八日 〃

肥州出勢之儀ニ付人馬方々仁三郎外聞ニ指立外、尤山家ヲ茂 一人指立外事  
同 十九日 〃

同 廿日 昼比夕夕立

同 廿一日 少々雨

同 廿二日 〃

同 廿三日 大雨

同 廿四日 日和

肥州出勢通路之筈之処降雨ニ御延引之事

同 廿五日 〃

肥州家中役所へ参外下見川世話致具外様相頼ニ付其趣大庄屋并下見庄屋へ申  
付外事

六月廿六日 日和

肥州出勢鷹之助山家泊ニ御致通路、繼人馬之儀ハ百人式十疋御頼談前之処ハ無  
異儀不出外ハ不相濟様子

同 廿七日 右同

同 廿八日 〃

同 廿九日 〃

七月朔日 朝少々風雨

古森三四郎御用ニ付出福為致外

同 二日 日和

同 三日 〃

同 四日 〃

頭、西山峠ニ御三宿相寄、左六付添也

同 五日 〃

夜須郡御境立之儀今暫見合外様申来外

一日向御使者参外へ共本府へハ届ケ不申外

同 六日 〃

同七日 〃

同八日 〃

同九日 〃

同十日 〃夕立

柳河御使者夜半参<sup>ハ</sup>共註進不致<sup>ハ</sup>

同十一日 同断

頭方御用ニ付<sup>ニ</sup>出福、下浦外一<sup>ノ</sup>長田九平書状指越<sup>ハ</sup>也

同十一日 同 頭、出福

同十二日 帰宿被致

一老通ハ下浦上浦草水庄屋<sup>ハ</sup>御境建之儀申入<sup>ハ</sup>通下調子取懸<sup>ハ</sup>様役所<sup>ノ</sup>懸合遣<sup>ハ</sup>

〃事

七月十三日 日和

四三島御用<sup>口</sup>有之<sup>ハ</sup>付<sup>ニ</sup>充之通送<sup>ル</sup>

一あヶ与ふ婦三ツ 百右衛門<sup>ハ</sup>

一なし七ツ

一同 三ツニ同七ツ 茂七<sup>ハ</sup>

一なし五ツ 定一郎<sup>ハ</sup>

同十四日 〃

御軍艦目付山本録之助早追<sup>ニ</sup>夜中罷通<sup>ハ</sup>事

同十五日 〃

例之通頭方<sup>ハ</sup>式日出方いたし<sup>ハ</sup>事

肥州藩中致通路<sup>ハ</sup>共頭分無之<sup>ニ</sup>付不致註進

同十六日 〃

肥州家中羽室平四郎致通路<sup>ニ</sup>付関番人<sup>ノ</sup>問合<sup>ハ</sup>処、御軍事<sup>ニ</sup>付福岡表<sup>ハ</sup>罷越<sup>ハ</sup>

〃与の趣<sup>ニ</sup>付<sup>ハ</sup>註進<sup>ハ</sup>不致<sup>ハ</sup>

同十七日 〃

同十八日 少々曇<sup>リ</sup>

天山寺<sup>ハ</sup>弥作母参<sup>ハ</sup>付野菜代香典送<sup>ル</sup>

朔藏方御用<sup>ニ</sup>付下浦<sup>ハ</sup>早朝<sup>ノ</sup>罷越<sup>ス</sup>

同十九日

朔藏方下浦四三島御用談相仕廻<sup>ハ</sup>引取<sup>也</sup>

同 廿日 〃

同廿一日 日和

湯町江行、伝次郎方<sup>ハ</sup>一宿致<sup>ス</sup>

同廿二日 〃<sup>茂<sup>リ</sup></sup>

朝六ツ時<sup>ノ</sup>引取<sup>ル</sup>

同廿三日 〃

四三島<sup>ハ</sup>病人有之<sup>ハ</sup>付、与一郎見廻<sup>ニ</sup>遣<sup>ス</sup>

同廿四日 〃

同廿五日 〃

七月廿六日 日和

才府詣<sup>ニ</sup>参善七郎方<sup>ハ</sup>悔<sup>ニ</sup>罷越<sup>ス</sup>

湯町<sup>ニ</sup>一宿致<sup>ス</sup>

同廿七日 〃

湯町<sup>ノ</sup>外七同道<sup>ニ</sup>引取<sup>ル</sup>

同廿八日 〃

同廿九日 〃

湯町江行

同 晦日 七ツ頃<sup>ノ</sup>雨天

頭并充六御境目一件<sup>ニ</sup>付山隈江致出役<sup>ハ</sup>事

自分外右衛門同道<sup>ニ</sup>参湯町<sup>ノ</sup>帰<sup>ル</sup>

八月朔日 雨天

同 二日 日和

同 三日 〃

佐嘉藩中木屋瀬宿陣引拂且公義軍目付御徒目付御小人目付共一同通行被致事

同 四日 雨天

同 四三島へミ与、かた連罷越也

同 五日 //

同 六日 //

同 七日 //

御郡奉行杉山来殿庄屋宅へ泊ニ相成事

同 八日 //

杉山来殿出立被致事

同 九日 日和

同 十日 //

堀井春泉

同人 母

同人 妻

同 兄一人

同 女一人

右ハ堅粕佐藤七右衛門殿ニゆかり有之与の由ニ付其旨越茂申出ル

八月十二日

同 十三日 日和

同 十四日 //

同 十五日 //

上野忠藏殿宿元へ書状被送事ニ付二日市宅次江相渡ス

同 十六日 //

同 十七日 //

公義御目付小林甚六郎殿才府御卿衆へ御出会之上引返し原田宿へ入込相成事与の趣ニ付、宿内掃除等為致事、御入込無事

同 十八日 //

軍御目付今日原田御泊之先觸来ル

同 十九日 //

四三島へ佛事ニ罷越ス

同 廿日 //

同 廿一日 雨

四三島へ帰ル

同 廿二日 日和

秋月御郡方専右衛門并上浦庄屋李八下浦庄屋外一、御境目御用有之由来ル  
同 廿三日 //

山崎 卯七

碎角一

山崎卯七

平日心得方不宜我儘遊惰恣ニいたし且不胜之筋ニ茂携リ一族朋友之異見ヲ茂不相用、第一宿内人氣之妨ニ相成事、将又最前妻離別之次才等不実之取斗有之歎ニ相達、様々致風説、彼是重々ふ届之至事、依之訖度手筋江申出可被相糺之処、此節迄ハ加不便同姓卯七代番之処指留事、以後恐入相慎可申事

寅八月

碎角一事委細相達事通不博之次才ニ付、畢竟其方ヲ示方不行届ニ付一家混雜いたし役柄ニ対し不似合之儀ニ付、就右事ハ父子共一同手筋江可申出処、加用捨先ハ不相糺以後訖度遂勘弁、角一示方緩かせ之取斗致間敷事

寅八月

同 十二日 日和

小倉落人岡番所へ申出事ニ付兼る御達ニ相成事ニ付直飛脚越以届ル

小倉

庄屋与次平の客案内いたし、共前日の不快なる秋月郡方へ茂不出合ニ付相断  
外事

同廿四日 〃

同廿五日 〃

同廿六日 同七ツ頃を疊リ

同廿七日 日和

同廿八日 〃

同廿九日 〃

同晦日 〃

九月朔日 日和

内海八之丞殿被参泊ニ相成外事

忠右衛門殿朔藏付添福岡の分見方同道下浦村へ被罷越外事

同 二日 〃

仁三郎返しニ相成外事

同 三日 〃

仁三郎昼頃を罷越、付御用会之儀懸合遣外事

同 四日 〃

頭、左六帰リ外事

同 五日 〃

利八甘木江行、付森山へ肴送ル

同 六日 〃 夜ル雨

同 七日 日和

同 八日 〃

同 九日 〃

軍目付荷物木屋瀬を佐嘉迄送ル

同 十日 〃

頭方内野宿へ御用会被相越、付付添同所へ三夜泊ル

同十一日 〃

同十二日 〃

同十三日 夜ル雨

内野宿を引取、留主中兒玉殿、則立殿被参、由ニ而別レ見知り外事有之由、当

用方安永六郎、為聞合与し而罷越、由

同十四日 朝雨日和ニ相成

同十五日 日和

兒玉殿引越ニ付見立ニ罷越ス、六郎参、一件、具ニ咄有之

同十六日 〃

自分一件ニ付恕助順平江書状<sup>越</sup>以頼遣、恕助を委敷返書遣ス

同十七日 〃

御境目一件ニ付下浦庄屋呼出ス

九月十八日 〃

上浦下浦庄屋兩人参ル、御境目一件委敷申談ル

同十九日 〃

石松左司馬殿の朔藏同道罷出、様被申聞、付致出方、下拙慎方之儀被申

聞、付畏リ罷帰ル、原田郷足輕山家関番所助番出方御免被成、趣御達ニ相成

外事

同 廿日 〃

同廿一日 〃

同廿二日 〃

博多白土屋三右衛門死去致、付与一郎悔ニ遣ス

秋月御郡方を飛脚参、付廿三日御郡奉行出浮之処廿四日 □遣ス

同廿三日 〃

同廿四日 雨天

秋月郡奉行土方彦四郎殿付添土生千右衛門、永末幸蔵来ル、同日古野ニ御用  
談、同夕町茶屋へ泊、翌廿五日庄屋与次平方迄否遣、付八ツ過ニ四三島通被

相越、菊三郎宅江泊リ相成由、左六ハ宮ニ参ニ罷越由ニ付、同所ニゑ土方殿  
多振舞被下由

同廿六日 〃

同廿七日 〃

同廿八日 〃

十月朔日

同 二日 〃

境目御用ニ付頭初左六出福致ス

同 三日 〃

同 四日、く茂リ

同 五日 日和

同 六日 〃

同 八日 〃

御境目見、頭出郷、自分、源藏付添

十月九日 〃

四三島泊、則立殿、甚平付添来ル

同 十日 〃

馬蒔場見物し而ハツ時頃、原宿致ス

同 十一日 〃

同 十二日 〃

同 十三日 〃

秋月御郡奉行へ中牟田ニゑ出会有之、朔藏左六罷越ス

同 十四日 〃

天山寺へ参る、家上吹与右衛門雇

同 十五日 〃

同 十六日 〃

同 十七日 〃

同 十八日 〃

同 十九日 〃

御境目一件ニ付、頭、左六出福事

同 廿日 寒風

同 廿一日 日和

同 廿二日 〃

同 廿三日 〃

頭方、左六共福岡多帰る

同 廿四日 夜る少々雨

同 廿五日 日和

同 廿七日 〃

同 廿八日 〃

同 廿九日 〃

同 晦日 〃

十一月朔日

同 十日迄ハ欠書致

同 十一日 日和

同 十二日 〃

同 十三日 〃

同 十四日 〃

同 十五日 〃

同 十六日 〃

原田次郎助浅香殿江戸下リ祝儀惣代与し而指遣ス

十一月十七日 日和

同 十八日 〃

原田次郎助帰宿致ス

同 十九日 〃

同 廿日 〃

同 廿一日 雨

同 廿二日 雨天

同 廿三日 同断昼後夕上る

郷足輕三人御呼出之儀申来ル

同 廿四日 日和

同 廿五日 〃

同 廿六日 〃

郷足輕三人福岡夕引取、山家出方精勤いたしハニ付為御褒美青銅三百文ツ、被

下ハ事

同 廿七日 〃

同 廿八日 〃

同 廿九日 〃

同 晦日 〃

十二月朔日 同

同 二日 雨天

同 三日 〃

同 四日 日和

同 五日 〃

同 六日 〃

万延二年酉正月 公用日記 (鬼木文書6)

正月元日 日和

例年之通、頭方へ年礼出方致ス也

同 二日 右同

改年之御慶不可有際限御座外、各様弥御堅勝被成御越年奉欣喜外、次ニ下拙儀無異加年致外、御祝詞為可申述乍略儀一紙越以如斯御座外、尚期永日之時外、恐惶謹言

正月二日

上原団左衛門

六宿内宿所々ニ当ル

山家同役二日市類役江茂下代中々年始送ル

同 三日 右同

御通方請庄屋惣代山家武六、若江岡田天山庄屋参ル、下見重三郎同断、牛嶋あしき庄屋同断、

正月四日 雪

萩原庄屋五右衛門名代利平来ル

原田徳十郎給米之内式俵ツ、卯七三四郎へ相渡外、尤山内卯右衛門手元へ預置外ニ付其後懸合置也、岡部甚助、同卯平、同勇右衛門、宮崎定一郎、原門語、

長谷川白銅、山田徳右衛門、田中伊助、針摺庄屋円次郎来ル

同 五日 右同

水城正次郎山田勘右衛門常松庄屋宮崎佐七立明寺庄屋勝右衛門大庄屋平山仙十郎来ル、

一筆致啓上外、旧臘十九日於改所、黒大豆呷入式俵指押江本府江相伺根元久留米御領分々下関へ持越居外由ニ付、荷主へ如元指返外様御差函ニ相成、其後左之通御称普被仰付難有仕合奉存外、此段為御知為可申述如斯御座外、以上、

正月二日

吉村遠内

同役中へ

関番江茂

平嶋守一

去ル十九日於改所呷入黒大豆指押へ心懸宜奇特之至及御沙汰外、依之為褒美青銅三百文宛相渡外事

申二月

同 六日 く茂リ

山口庄屋左衛門永岡甚十郎年始ニ来ル

改年之御慶不可有休期御座外、弥御堅固被成御迎年奉珍重外、御嘉詞為可申述如是御座外、猶期永日之時外、恐惶謹言

正月 日

上原団左衛門

井上庄左衛門様

土井勝右衛門様

白石左右衛門様

人々御中

右之通相認中牟田庄屋へ為持遣外、

一大庄屋平山仙十郎へ山ノ口一件頭方々懸合ニ相成外事、藤平聶喜助組頭又兼

役山ノ口介之処懸合ニ相成也、

一三角五郎七方々団左衛門殿へ懸合之返し今日送り出ス

正月七日 雨

同 八日 右同

同 九日 片日和

例年之通役所開キ、長崎々致帰府外定役家族賄之儀上宿々申来ル、山家々申参外ニハ上下無指別一汁四菜之御達有外へ共手元ニハ半分かね外、

同 十日 日和

御境目庄屋野町山隈四三島兩人来ル

同 十一日 右同

町内太右衛門筋悪敷所行いたし<sup>ニ</sup>付前々村蔵へ入<sup>ハ</sup>与<sup>フ</sup>兵蔵へ談置<sup>ハ</sup>ニ付其趣組頭<sup>ノ</sup>届<sup>ケ</sup>来<sup>ル</sup>

同十二日 右同

諸家中衆通行<sup>ニ</sup>付宿助之儀新三郎申出<sup>ハ</sup>ニ付人足式拾五人馬五足役所<sup>ノ</sup>仙十郎へ申遣<sup>ス</sup>

同十三日 右同

同十四日 右同

松嘶見<sup>ニ</sup>与<sup>ミ</sup>召連れ罷越、十九日帰宿致<sup>ス</sup>、此間之事<sup>ハ</sup>相省<sup>ク</sup>

同 廿日 日和

少将様旧臘廿八日御登城被任中將、同廿八日御登城以来御鎗三本平日為御持被成<sup>ハ</sup>様被<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>蒙<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>段御到来有<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>、少将様御唱之儀中將様<sup>与</sup>可奉称<sup>ハ</sup>事

二月十三日

正月廿一日 日和 当番

御用物先觸山家<sup>ニ</sup>送<sup>ル</sup>、下<sup>リ</sup>御状箱<sup>ヲ</sup>来<sup>ル</sup>

同廿二日 右同

去<sup>ル</sup>八日御状致拜見<sup>ハ</sup>、平戸侯<sup>ノ</sup>拜領金配当之儀旧冬追々木屋瀬<sup>江</sup>懸合<sup>ニ</sup>相成<sup>ハ</sup>由之<sup>ハ</sup>年内<sup>ニ</sup>ハ相片付<sup>ハ</sup>様懸合来<sup>ハ</sup>、未<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>以其儀無<sup>之</sup>ニ付如何<sup>ニ</sup>茂同宿等閑之<sup>ハ</sup>致方不得其意趣御委細御懸合致承知<sup>ハ</sup>、然<sup>ル</sup>手元<sup>江</sup>何たる懸合<sup>茂</sup>不参、其御御手元へ御答申述置<sup>ハ</sup>通<sup>ニ</sup>御座<sup>ハ</sup>、与<sup>フ</sup>而其節之取斗振、居宿郷足輕へ木屋瀬<sup>ノ</sup>問合無<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>ハ小子共<sup>ノ</sup>申入様無<sup>之</sup>、左様御承知可被遣<sup>ハ</sup>、右御答如斯御座<sup>ハ</sup>以上

正月十一日

上原團左衛門役所

森惣右衛門様御役所

右一覽送進申<sup>ハ</sup>、御落手可被遣<sup>ハ</sup>、旧冬木屋瀬<sup>ノ</sup>掛合振之未<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>以何たる儀<sup>茂</sup>無<sup>之</sup>如何<sup>ニ</sup>茂不博之取斗方<sup>与</sup>被存申<sup>ハ</sup>、右御同意<sup>ニ</sup>ハハ上筋へ早々被仰通可被遣<sup>ハ</sup>、右為可被御意如斯御座<sup>ハ</sup>、以上

正月十六日

森惣右衛門役所

森三右衛門様御役所

右一覽送進<sup>ハ</sup>、御落手可被成<sup>ハ</sup>、手元へ<sup>茂</sup>山家同意<sup>ハ</sup>間各方御同意<sup>ニ</sup>ハハ、木屋瀬<sup>ノ</sup>相片付<sup>ハ</sup>様取斗相成<sup>ハ</sup>様御通達可被遣<sup>ハ</sup>、以上、

正月十七日

森三右衛門役所

尾崎与左衛門様御役所

右一覽送進申<sup>ハ</sup>、当<sup>茂</sup>内野同意<sup>ニ</sup>ハハ急速御片付相成<sup>ハ</sup>様奉存<sup>ハ</sup>、否之儀此本紙<sup>ニ</sup>御書記御返可被遣<sup>ハ</sup>、以上、

正月十八日

尾崎与左衛門役所

平賀伝左衛門様御役所

右一覽送進いたし<sup>ハ</sup>、御落手可被遣<sup>ハ</sup>、被下之金子旧冬御送可申奉存<sup>ハ</sup>別紙之通申出<sup>ハ</sup>条則さし出<sup>ハ</sup>申<sup>ハ</sup>、宜御承知可被遣<sup>ハ</sup>、町茶屋石橋甚三郎頃日眼病快相成<sup>ハ</sup>間、明廿日与<sup>リ</sup>原田宿へ罷越、被下御金子請取<sup>ハ</sup>様申付置<sup>ハ</sup>間、同人帰宅いたし<sup>ハ</sup>ハ、直<sup>ニ</sup>宿<sup>江</sup>御懸合可申述<sup>ハ</sup>間左様御承知被遣、下筋へ<sup>茂</sup>何卒右之段御伝通可被遣<sup>ハ</sup>、已上、

正月十九日

平賀伝左衛門役所

尾崎与左衛門様御役所

口上

一平戸様御参勤達宿々御手付様方<sup>ノ</sup>被下金、山家宿<sup>ノ</sup>当<sup>ニ</sup>御渡方<sup>ニ</sup>相成<sup>ハ</sup>段御懸合<sup>ニ</sup>相成<sup>ハ</sup>段被仰付<sup>ハ</sup>ニ付原田宿<sup>ノ</sup>先日<sup>ノ</sup>罷出<sup>ハ</sup>御出<sup>ハ</sup>可仕<sup>ハ</sup>筈之<sup>ハ</sup>、眼病<sup>ニ</sup>何分難罷出<sup>ハ</sup>間、正月早々同方へ罷出委細可申上<sup>ハ</sup>、何卒春迄御待被仰付可被為<sup>下</sup>様奉願上<sup>ハ</sup>此段宜御聞通被仰付可被為<sup>下</sup>奉願上<sup>ハ</sup>、以上

申十二月

町茶屋守 甚三郎

申十二月

平賀伝左衛門様御役所

右之通正月廿二日木屋瀬甚三郎山家権平同道<sup>ニ</sup>及相談<sup>ハ</sup>間、金子式百足甚三郎へ相渡<sup>ハ</sup>、併木屋瀬役所懸合振あしく<sup>ニ</sup>付其訳権平甚三郎へ委敷申入置也

正月廿一日 日和

同 廿二日 右同

御用物三箇未刻頃田代ノ到来致ハ付例之通相改山家ニ送ル、山近権平木屋瀬  
甚三郎平戸侯被下金之儀ニ付来ル、卯七三四郎申談金子相返ス也

同 廿三日 雨

右一覽木屋瀬ノ之本紙与送返申ハ御落手可被遣ハ同所町茶屋守甚三郎爰  
元ハ罷越、殊ニ貴宿山近氏御同伴ニ付郷足輕之処相談相整申ハ、此段先々御伝  
通可被下ハ、已上

上原団左衛門役所

二月廿三日

森惣右衛門様御役所

幸便得貴意申ハ、昨日ハ御出被下ハ御承知之通ニ何之御構茂不申上失敬  
御用捨可被下、御帰路夜ニ入御難被成奉察ハ、併御聞被成ハ通甚三郎ハ参  
外ハ急埒仕間敷ハ処畢竟貴兄御口添ニ郷足輕之処承知仕於私共茂安心仕ハ、  
且甚三郎ノ為挨拶御酒預恵□□痛入申ハ、今日少々不塩梅ニ打臥リ居申ハ間  
代筆御免可被下ハ、已上、

高嶋文八

正月廿三日

山近権平様

同廿四日 小茂リ

同廿五日 日和

宿馬一件徳右衛門新三郎兩人咄ニ来ル

正月廿六日 日和

山家権平書状遣置ハ其返シ来ル

同廿七日 右同

同廿八日 右同

同廿九日 右同

御状箱上リ下リ来ル

二月朔日 右同

同 二日 右同

鎌田弥三太夫殿留守居藤田儀右衛門、頭方ハ来ル、明細書取引取ハ事、  
同 三日 右同

松平□一郎様御参勤達人馬寄方ニ付觸捨之趣宿々ノ願出ハ由ニ付、

原田ニ御用会打奇之儀懸合来ル

同 四日 右同

下向御普請役柳川勇右衛門通路

同 五日 右同

内海八之進殿引取相成ハ

同 六日 右同

御普請奉行月成仲殿遊獵ニ被参ハ付、松屋外右衛門宅ハ見込也、  
為見廻酒老升三人ニ送ル、右酒ハ文八出前也、

同 七日 右同

月成殿引取ニ相成ハ事

同 八日 昼前ノ少雨

一筆啓上仕ハ、各様愈御堅固可被成御勤珍重之儀奉存ハ、然ハ私儀兼テ持病之  
疝邪有之、一円相治不申ハ付去冬身退之儀相願置ハ御詮議之上此節願之趣  
御指留被仰付ハ段左之通御書付ヲ以昨廿八日御郡奉行所ノ被仰達之旨越以頭手  
元迄申参当於役所頭方ノ被相達難有仕合奉存ハ、此段乍略儀御吹聴申上度如斯  
御座ハ、恐惶謹言

久芳八郎

正月廿九日

高倉治八郎様 占部栄次様 関作八様 村上新一郎様

大穂喜平次様 石田武内様 古海利右衛門様 吉田吉右衛門様

樋口代七様 柴田忠蔵様 須藤治八様 平嶋守一様

吉村遠内様 山近権平様 高島文八様 松尾朔蔵様

鬼木左六様 (原文一人一行)

尚々御名順不同御免可被下尚乍御面御御序御順達奉願<sup>レ</sup>、御頭様方<sup>へ</sup>御序呈被仰上可被下重疊奉願<sup>レ</sup>、已上

写

黒崎宿下代 久芳八郎

当年四十八才罷成兼<sup>る</sup>疝邪之持病有之、近来別<sup>る</sup>手強何分御奉公難相勤、身退之儀相願無<sup>レ</sup>趣<sup>ニ</sup>、<sup>レ</sup>共同近く賞誉<sup>茂</sup>申付御用達いたし居<sup>レ</sup>儀<sup>ニ</sup>付願之趣指留<sup>レ</sup>、加保養弥入念可相勤<sup>レ</sup>事

正月

二月九日 日和

山家<sup>々</sup>森惣右衛門殿被参<sup>レ</sup>、四三しま山ノ口久五郎御境目之事<sup>ニ</sup>付来<sup>ル</sup>

同 十日 右同 当番

同 十一日 右同

一登御状箱来<sup>ル</sup>

同 十二日 右同

一下<sup>リ</sup>御状箱来<sup>ル</sup>

同 十三日 右同

頭方家内方城山参詣被致<sup>答</sup>、付古賀市平岡部菊三郎<sup>ノ</sup>其趣懸合書状出<sup>ス</sup>

一下高場藻兵衛徳十郎一件<sup>ニ</sup>来<sup>ル</sup>

同 十四日 右同

同 十五日 右同

頭方御家内城山参詣被致<sup>レ</sup>、自分付添也

同 十六日 雨

西小田太作<sup>々</sup>挑灯借用いたし<sup>レ</sup>、付態<sup>々</sup>人指立四三しま勇右衛門市平菊三郎<sup>へ</sup>茂

昨日之礼書送也、

一山内外右衛門良平二日市<sup>へ</sup>御呼出之上、良平原田宿庄屋被仰付、右跡役<sup>右</sup>

衛門下見村<sup>ノ</sup>被仰付也

一組頭、組頭取村中惣代<sup>与</sup>し而兼々願之通被仰付<sup>レ</sup>、付参<sup>レ</sup>也、

同 十七日 右

同 十八日 日和

同 十九日 右同

同 廿日 雨天

御用会打寄有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>、

同 廿一日 右同

同 廿二日 右同

二月廿三日 日和

御代官并手付共夫々引取之事

一御用物諸品次送<sup>リ</sup>致失念<sup>レ</sup>、付其趣山家<sup>々</sup>懸合来<sup>ニ</sup>付相認<sup>レ</sup>送也

二月廿七日<sup>ノ</sup>出福、内海殿<sup>ノ</sup>酒五升祝儀<sup>ニ</sup>送<sup>ル</sup>、夫<sup>々</sup>頭方結構<sup>ニ</sup>付三月三日<sup>ニ</sup>帰

宅いたし二三日之祝<sup>ニ</sup>、<sup>レ</sup>日記<sup>茂</sup>不付

滞留中頭結構有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>、付当用方自由<sup>ニ</sup>案内被致<sup>レ</sup>、引取之上一手宿役其外荒々

案内被致<sup>レ</sup>、付三月三日帰宿、四日<sup>ノ</sup>十四日迄ハ取紛日記<sup>茂</sup>不付<sup>レ</sup>事

三月十五日 日和

同 十六日 雨

同 十七日 日和

宿役共田代<sup>へ</sup>罷越<sup>レ</sup>様申付置<sup>レ</sup>刻付御状箱来<sup>ル</sup>

一山家宿役通<sup>リ</sup>方庄屋、頭方<sup>へ</sup>為祝儀来<sup>ル</sup>

同 十八日 右同

畑詰村庄屋精五郎、頭方<sup>へ</sup>祝儀来<sup>ル</sup>

同 十九日 右同

同 廿日 右同

同 廿一日 右同

同廿二日 〃

同廿三日 〃

同廿四日 〃

同廿五日 〃

同廿六日 〃

同廿七日 〃

同廿八日 〃

同廿九日 〃

同 晦日

四月朔日 日和

鍋嶋丹後守殿御泊之事

同 二日 右同

松浦肥前守様御昼休ニ御通路

同 三日 右同夜雨

同 四日 日和

同 五日 く茂リ

一 拝領金壹両ツ、被下

一 御酒吸物頂戴被仰付事

五月分略ス

西六月朔日 日和

私用ニ付東小田ヲ四三しまへ罷越ニ夜泊ル、三日ニ帰

同 二日 右同

同 三日 右

同 四日 右同日和

公義役々原田ニ御昼休ニ御客屋共不分之儀申立付ニ付頭ヲ示シ書被相渡付、尤

櫻や平三郎ハ深切ニ致心配付ニ付其次第書付被相渡付事

以手紙申述付、拙者儀愈年齢及老衰御奉公難相勤身退申度段兼御願書指出置付

処、今日四ツ時御用召ニ御名代悴召連御館江罷出申付処右願之通被仰付、悴三

之丞之家督無相違拝領被仰付、勤方之儀ハ是迄之通被仰付旨、御月番信濃殿

被仰渡難有仕合ニ奉存付、此段為御知申入付 已上

五月十一日

猶以御連名略儀之段御免可被下付、夫々為知遣不申付間於御宿内御心寄之処江

ハ御序ニ御噂被成可被遣付、已上

六月五日 日和

同 六日 右同

内海八郎右衛門殿福岡帰、原田泊ニ付一手中其外弥一郎周平兵吉相加リ鶏一羽

進物ニ送ル

同 七日 右同 当番

同 八日 右同

同 九日 右同

怡土志摩早良粕屋宗像鞍手嘉麻穂波遠賀上座下座夜須御笠那珂席田右筑前拾五

郡也

同 十日 右同大夕立

公義役々伝習御用ニ御長崎へ罷下リ内野出立原田直通路致付事

同 十一日 右

同 十二日 右

同 十三日 右

同 十四日 右

同十五日 右〃

一下リ金致通路の事

同十六日 右同

一下リ御状箱夜半ニ来ル、与一郎名代ニ遣ス

六月十七日 日和

長崎奉行支配組頭長持亭次郎殿通路元觸到来致ハニ付例之口々註進いたしハ事

同十八日 右同

同十九日 右同

口上覚

私支配原田宿郷足輕原田徳十郎事病身ニ多何分当役難相勤身退之義最前相願ハ

処いまた年若之者ニ付保養越加ハ相勤ハ様被仰付ハニ付可相勤答之処、又々

別紙之通願出申ハ間色々相諭ハ与茂何様無規御座ハ条不得止事願書指出申ハ、

且又養家之祖父平蔵初一族之者共内談申合、跡抱代人之儀横折越以申ハ間是又

指出申ハ、此段願之通被仰付度奉存ハ、以上

上原団左衛門

六月

肥塚次郎右衛門様

矢野太左衛門様

同 廿日 右同

一筆啓上仕ハ、甚暑之節ニ御座ハ得共各様御安康御勤被成珍重御儀奉存ハ、然

者当村去秋之頃ハ牛馬病流行仕、追々斃牛馬不少、邪氣追等之手数は迄色々取

斗ハ与茂今以相定不申村中大ニ難渋仕ハ、

就ハ此節秋月表ハ願出ハ上鉄砲太鼓等ニ邪氣追仕度ハ、万ニ御支筋之儀共

ハ無御座ハ哉一応御問合申上ハ、否ハ、為御知可被下ハ、以上

中牟田出張

六月廿日

永末幸蔵

上原団左衛門様御役所

御請持御衆中様

尚御支筋無御座ハ、来ル廿三日廿四日両夕間邪氣追取斗申度ハ

已上

御状致拜見ハ、甚暑之節御座ハ共弥御安全被成御勤珍重奉存ハ、然中牟田去

秋之頃ハ牛馬病流行いたし追々死牛馬不少邪氣追等之手数は迄色々御取斗被成

ハ得共今以相止不申村中大ニ難渋之由、右ニ付此節秋月表ハ願出之上鉄砲太鼓

等ニ而邪氣追被成度趣万一支筋共ハ無之哉之旨委細御問合之旨致承知ハ、被入

御念御儀与奉存ハ、何さハ手元ハ指問筋無御座ハ、右御答迄如斯御座ハ、以上

上原団左衛門役所

六月廿日

中牟田村御出張

永末幸蔵様

同 廿一日 右同

六月三日大目付ハ相達

大目付江

彈正儀退身相願ハ共請持筋別多端之処身分越不厭御為宜様踏込致精勤追々

其證相頭、此先別御大事之御時節ニ付願之儀指留心力ヲ尽シ御為宜相勤可

申旨御委御直々被仰付御手自御刀身被下尚又彈正名山城与改ハ様被仰出ハ、右

之趣口々相心得以後役所御直宰被遊ハ条御改革筋万端聊無撓様手先々末々江茂

相施御時勢ニ応し加勤弁何与茂一度ニ申合山城得指図立入致精勤ハ様可相達旨

被仰出ハ、被得其意諸口江茂早々可被相達ハ事、右ハ及口達

ハ

同 廿二日 右同

御用物来ル

同 廿三日 昼後少々雨

同廿四日 日和

同廿五日 右同

同廿六日 右同

原田徳十郎身退願書横折与茂持参ニ而出府致当用方齊藤五三郎石津勝蔵へ相頼

筆人有之ニ付認替指出置外事

同廿七日 右同

早朝夕帰宿いたし外事

同廿八日 右同少々夕立

同廿九日 右同

七月朔日 日和

古森文平死去致外ニ付頭江届自分三四郎左六共忌中引入ル

同 二日 右同

葬式相仕廻外事

同 三日 右同

同 四日 右同

原田徳十郎并源蔵御呼出相成外事

同 五日 右同

頭并左六源蔵出府いたし外事

同 六日 右同

原田徳十郎身退願之通被仰付跡役松尾源蔵新抱被仰付外事

同 七日 右同

頭初左六源蔵帰宿

同 八日 右同

同 九日 右同

同 十日 右同

二村次ニ多森山の書状送ル

同 十一日 右同

福岡行次助与右衛門指立申外事

同 十二日 右同

九郎右衛門事 伊丹大内蔵

広右衛門事 久野一角

中園左馬権頭殿内八木蔵人当五月廿九日京都発足出雲国大社肥後国□□の為御

代参罷越御領内通路致趣通達有之、右御取扱ハ無之旨御用人衆被相達外事条御

心得□□申入外事条宿手人馬等無指支様御申付置可有之外、以上、

肥塚次郎右衛門

七月七日

郡代代官の当ル

七月十三日 日和少々夕立

原田徳十郎が為挨拶頭方へ大ほしふく壹把半紙壹束左六へ半紙壹束外七の壹束

自分の小千ふく壹把打綿壹斤、相贈外也、

同 十四日 右同少々夕立

同 十五日 朝大雨四ツ頃夕日和

当四月長崎江戸表へ罷登外唐人共付添役々帰路先觸来ル

同 十六日 日和

蘭人付添四月末罷登外者茂帰ル

同 十七日 右同

四三しまへ佛参致ス

同 十八日 右同

同 十九日 右同

三四郎願自分勿七横折共本府へ送り出ニ相成外事

同 廿日 右同

豎紙願

御支配御関番古森文平儀病死仕代人之悴無御座外ニ付恐多奉存外へ共私に被下

置外御給米指上、文平代人ニ相成申度外、御慈悲之上願之通被仰付被為下外様

偏ニ奉願ハ、以上

高嵩三四郎

平山仙十郎殿

七月廿一日 朝夕降立、暮迄大雨少々風茂有之ハ

同 廿二日 日和

例之通御用物来ル

同 廿三日 右同

同 廿四日 右同

对州家中本国夕引取先觸下次ニ多相違ハニ付大庄屋ハ人馬觸付申入ル

寺崎助一郎鈴木卓太郎長崎ハ帰路先觸相違ハニ付問屋ニ渡ス

同 廿五日 右同

田代夕本国ハ罷越ハ面々帰宿致ハ事

同 廿六日 右同

同 廿七日 右同

同 廿八日 右同

同 廿九日 右同

古森文平殿關役松口善藏殿忌中引入ニ付多ハ各方近番与相察郷足輕并手伝役夕

助番為致度旨頭方ハ相伺置ハ尤与被存ハニ付明晦日夕老人ツ、助勤出方致ハ

様懸合致ハ条本役夕老人御出方可被成ハ、此段為承知如斯御座ハ、以上

七月廿九日

上原団左衛門役所

関番衆中

古森文平松口善藏引入ニ付助勤致ハ様郷足輕中江懸合置ハ事

同 晦日 右同

朔藏出府致ス

八月朔日 日和

同 二日 右同

阿蘭陀通詞兩人通路先觸相違ハ処甚指向ハニ付限若江下見三ヶ村ハ直觸致ス

同 三日 右同

同 四日 雨天

偏ニ奉願ハ、以上

七月

上原団左衛門様

横折

口上之覚

私共一族古森文平儀文化三寅年原田宿郷足輕新抱被仰付、天保五年午十二月御

関番ニ御繰上被仰付当年迄都合五十六ヶ年難有相勤居申ハ、然ル処此節病死仕

代人之悴無御座ハニ付同人実子郷足輕高嶋三四郎文平代人ニ相成度奉存ハ間別

紙願之通被仰付被為下ハ様御執成奉願ハ、以上、

山崎 卯七

高嶋 文八

七月

上原団左衛門様

私支配原田宿関番古森文平儀致病死、代人之悴無御座ハニ付郷足輕相勤居申ハ

高嵩三四郎給米指上文平跡抱被仰付旨相願申ハ、遂詮儀ハ処相違無御座ハニ付

願之通被仰付直ニ関番勤被仰付被下度奉存ハ、

此段宜御執成奉願ハ、以上

七月十九日

上原団左衛門

肥塚次郎右衛門様

矢野太左衛門 様

中津家中長崎表ハ御呼出非常通行先觸別紙之通新三郎夕申出ハハ共休泊日限等

不分ニ付上宿ニ聞繕ハ上ニ多其元ハ可為懸合旨申聞置ハ処今日内野立ニ多当宿

通路之旨又々先觸相違ハ由、何分指向ハ儀ニ付宿方ニ多無指支次立申付置ハ、

右ニ付仕辰夫追多懸合可申ハ条為承知此段申入置ハ、以上、

七月六日

上原団左衛門役所

阿しき大庄屋

前夕夜半頃大風相催シ与一郎関番助番ニ出ス

同 五日 日和

村中願就成宮籠リ有之氏子角力外事

同 六日 右同

同 七日 右同

同 八日 少し雨

同 九日 日和

同 十日 右同

同 十一日 右同 昼頃少雨

原田徳十郎宗旨受私相片付尤宗旨奉行<sup>へ</sup>茂懸合相成外事

同 十二日 雨天

同 十三日 日和

四三しま弥八妻致死去<sup>へ</sup>趣為知来<sup>へ</sup>ニ付左六梅ニ遣ス

同 十四日 少々雨

三四郎与一郎御呼出ニ付支度いたし外事、与ミ迎ニ遣ス、森山<sup>へ</sup>茂四三嶋迄之

帰リニ御呼出之趣懸合遣<sup>へ</sup>也

八月十五日 日和

頭初三四郎与一郎致出福

同 十六日 雨天

三四郎文平跡ニ被仰付与一郎郷足輕ニ被仰付外事

同 十七日 右同

下リ御状箱来ル

同 十八日 日和

頭初左六三四郎与一郎本府<sup>へ</sup>引取ル

同 十九日 右同

三四郎方四拾九日佛事いたし外事

同 廿日 雨天

四三しま宅右衛門呼ニ遣置<sup>へ</sup>処来ル

同 廿一日 日和

同 廿二日 右同

杉山殿庄屋<sup>へ</sup>泊ニ相成外事

同 廿三日

五嶋讀岐守殿通路ニ付黒崎役所<sup>へ</sup>米良主膳殿御取扱同様之旨通状ニ申来<sup>へ</sup>ニ

付当宿<sup>江</sup>ハ米良殿通行旧例無之ニ付山家役所<sup>へ</sup>間合<sup>へ</sup>処左之通山家<sup>へ</sup>返書来ル

写

一米良主膳通路先觸相違<sup>へ</sup>上御用人衆御用聞郡奉行<sup>江</sup>註進之事

一先觸添状ニ<sup>る</sup>参府之節ハ内野<sup>へ</sup>繼送<sup>リ</sup>下<sup>リ</sup>達ハ本陣<sup>へ</sup>先觸ニ書状相添松崎<sup>へ</sup>

註進可申事

一人馬大庄屋<sup>へ</sup>手当朝日大庄屋<sup>江</sup>ハ馬瀉東小田両川<sup>へ</sup>川越夫申越、

一宿内掃除之儀庄屋<sup>へ</sup>申付組頭老人宿内案内之事

一御取扱ハ無之<sup>へ</sup>共金銀兩替直段御領中迎ニ有之<sup>へ</sup>ハ不相濟<sup>へ</sup>条手元<sup>へ</sup>相

定可申外事

一郡繼先掃除指出ニ不及外事

御領内<sup>へ</sup>入込之註進ニ不及外事

但黒崎註進斗可致外事

ス

右 天保十三年寅三月分

御状致拜見<sup>へ</sup>、五嶋讀岐守殿御通路ニ付黒崎宿<sup>へ</sup>通状ニ米良主膳殿御通行ニ準

シ<sup>へ</sup>之趣ニ<sup>る</sup>米良殿御取扱御問合被成致承知<sup>へ</sup>、則別紙写指出申<sup>へ</sup>、御落手

可被遣<sup>へ</sup>、五嶋<sup>与</sup>米良之御取扱ハ大ニ相違いたし<sup>へ</sup>間手元ハ矢張是迄之通取斗

可申<sup>へ</sup>、右御答如斯御座<sup>へ</sup>以上

八月廿三日

上原団左衛門様御役所

森 惣右衛門役所

八月廿四日 日和

同 廿五日 少々雨天

同 廿六日 日和

下向御奉行先觸来ル

同 廿七日 右同

下向御奉行通路済

同 廿八日 雨天

御定役出役通路

同 廿九日 片日和

九月朔日 日和

同 二日 右同

三四郎源藏与一郎三人自祝御宮ニ参相仕廻レ

同 三日 雨天

下リ御状箱来ル

同 四日 日和

同 五日 右同

前 外国奉行其外役々通路相済

同 六日 右同

後 御勘定吟味役其外役々通行

同 月七日 日和

下向御目付御徒目付御小人目付与茂内野立ニ参通行相済レ事

同 八日 右同

御境目先觸出ス

同 九日 右同

同 十日 雨天

御境目見改雨天ニ付見合延引之先觸出ス

同 十一日 日和

在々町茶屋御覆修見分肥塚次郎右衛門殿被参答之処山家ノ直ニ二日市泊所へ被

相越レニ付牧坂吉作方与大工武次郎兩人当所ニ来ル

同 十二日 同

森惣右衛門殿被参レ

一下リ御状箱来ル

同 十三日 同

大庄屋平山仙十郎忌中引入レ処今日御免ニ相成レ趣届ケ来ル

同 十四日 同

隈村庄屋山内弥一郎ノ踊案内申来ル

同 十五日 雨天

同 十六日 日和

隈村願成就有之レニ付見物ニ罷越ス

同 十七日 右同少々茂リ

同 十八日 日和

同 十九日 右同

同 廿日 右同

同 廿一日

先觸来ル御用聞郡奉行斗註進

九月廿二日 日和

帰府御普請役先觸来ル

同 廿三日 右同

同 廿四日 右同

御普請通路相済

同 廿五日 右同

同 廿六日 右同

同廿七日 雨天

肥前様神崎御出立ニ 多山家御泊爰元御通行相済

同廿八日 日和

頭初手付中へ 茂慶事ニ 付御能拜見被仰付旨廻達山家多来ル

同廿九日 右同

長崎御奉行支配組頭永持亭次郎殿家族定役横山何かし外国奉行支配調役田中謙

七郎通路先觸来ル、例之口々註進致ス

同廿九日 右同

同 晦日 右同

御能拜見ニ 出福致ス

十月朔日 右同

御能拜見被仰付外事

同 二日 右同

同 三日 右同

本府多帰宿致外事

同 四日 少々雨

同 五日 雨天

鍋嶋加賀守様御通行当所御昼休并唐通事 同様桜やニ 多昼休致外事

十月六日 日和

同 七日 右同

同 八日 右同

同 九日 昼頃多雨天

同 十日 日和

同 十一日 右同

同 十二日 右同

御境目書物送リ 出相成外へ 共自分出方不致与一郎遣ス

同 十三日

今日多四三しまへ 罷越

十六日 帰ル

同 十七日 日和

同 十八日 右同

同 十九日 右同

同 廿一日 右同 夜雨

与一郎角一、西小田御境多 久留米富之丞様御先拂ニ 罷越ス

同 廿二日 日和

朔蔵縁談願相済来ル

十一月三日

新町の恵比須へ 参いたし 外多六日ニ 帰ル

同 七日 日和

同 八日 右同

草水村御境普請所見分先觸出ス

同 九日 雨天

草水行延引之 追觸出ス

同 十日 日和

十一月廿日 雨天

各様弥御堅固被成御勤珍重奉存外、然ハ私儀根元村上姓ニ 付復已前本姓ニ 相改度 段願出置外 処願之通被仰付、将又名大作 与 相改申外、此段乍略儀一紙 越 以為御知 申上度如斯御座外、恐惶謹言

勝野作平改

十一月十一日

村上大作

高倉次八郎様

占部 栄次様

関 作八様

井上新三郎様

大穂喜平次様

石田 武内様

古海利右衛門様

樋口 代七 様

吉田吉右衛門様

柴田 忠蔵 様

須藤 次八 様

平嶋 守一 様

吉村 遠内 様

山近 権平 様

高嶋 文八 様

松尾 朔蔵 様

鬼木 左六 様

尚々御名次第不同御免御序ニ御順達可被下外、以上

戌正月元日 雨天

例年之通頭方へ出方致ス、同日暮頃下リ御状箱来ル、宿役新三郎同夕夜半頃登御状箱来ル、新三郎代吉助出方致ス

同 二日 日和

三並庄屋真鍋与内年始ニ来ル、大工五平家上吹恵助悴同断、

同 三日 雨天

山田徳右衛門 岡部 甚助

天山 卯七 諸田 円七

若江 佐平 平城 良平

田中 伊助 改役 徳平

井手勘次郎 米店喜一郎

右之面々年始来ル

諫早豊前通路先觸来、人馬ハ大庄屋へ懸合宿内ハ上下ニ孫四郎出方組頭吉人

出方手当申入置

同 四日 右同

同 五日 少々雪

諫早豊前通路八ツ時々也、孫四郎利平へ為挨拶吉朱ツ、被下外、

同 六日 日和

四三しまの年始ニ罷越

同 七日 右同

同 八日 大雪

四三島々帰ル 上下御状箱来ル、与一郎相仕舞

同 九日 日和

例之通役所披キ、与一郎森山へ遣ス

同 十日 朝雨後日和

御境目庄屋来

同 十一日 日和

# 安政六年未<sup>ヨリ</sup> 当戌年迄御休泊御名元

(鬼木文書?)

安政六年

御徒目付飯田孫三郎様御家来御昼

長山寛吉様

御上下式人

下向御目付都筑金三郎様

宰府御参詣之節御供中

御望ニ付小漬飯差出

御上下式拾六人

同 七年申

御目付都筑金三郎様御家来為御迎 泊

御上下四人

下向御目付小倉九八郎様

宰府御参詣之節御供中

御望ニ付小漬飯差出

御上下式拾七人

同申年

長崎御奉行支配定役仮塚讀之進様御家族御登リ達 泊

御上下三人

文久元酉年

下向御目附有馬帶刀様

宰府御参詣之節御供中

望ニ付小漬飯差出

御上下式拾三人

下向蕃書調所頭取古賀謹一郎様御支配 泊

長 保之助様

御上下式人

蒸気船製作為御用下向之役々 泊

小野左太夫様

肥田源五郎様

朝夷捷次郎様

村瀬源三郎様

鍛冶職

兼太郎様

松太郎様

御上下式拾式人

对州下向御吟味役立田録助様

宰府御参詣之節御供中

望ニ付小漬飯差出

御上下三拾式人

唐通事御登リ達 御昼

清河磯次郎様

御上下五人

長崎御奉行岡部对馬守様御家族御登リ達

宰府御参詣之節御供中望ニ付

小漬飯差出

御上下三拾人

森惣右衛門様

御役所

同酉年

長崎船番筆頭手付町用定乗手付 泊

増田 一造様

荒木 作治様

御上下五人

文久二戌年

松本良順様御門人御登り達 泊

佐藤 舞海様

御上下四人

同戌年

長崎御奉行御支配調役並

上原賢治様御家族登達 御泊

御家族御上下拾人

原田宿町茶屋守

孫四郎

十月

(二) 山内(花)家文書

(朱書)

第一千六百九拾九号

## 酒造減石願 (山内文書 110)

是迄八十四石清酒釀酒御免被仰付置候処、先般佐賀県動搖<sup>ニ</sup>付召仕之者出夫御触付<sup>ニ</sup>相成候<sup>ニ</sup>付、釀酒相見合居候処、季節相後<sup>レ</sup>仕込方出来不仕候間、左之通減石仕度此段御聞置被為下度奉願上候也

一酒造八拾四石

内

貳拾五石貳斗 此節減石奉願上分

第十二大区三小区原田村七十九番屋敷居住農

明治七年第四月五日

山内万代雄

福岡県令立木兼善殿

戸長 山内平四郎 ④

副戸長 山内三郎 ④

保長 山内淑郎 ④

(朱書)

書面願之趣聞届候事

明治七年四月九日 ④ (福岡県)

三國峠開鑿費之儀 付願<sup>(御操)</sup> 替願

(山内文書127)

〔山神祭壇上飾式〕 (山内文書134-2)

山神祭壇上飾式 略式者□□ヲ以テ可任心ニ

五形幣ハ兜幣也 其外イミ竹ノ繩ヲ以テノ通リ

雉子一雙

壇上三重 略式なりトモ山神祭ニ段ヲ

余ク左文なし打敷又ハ荒薦ヲ敷

置鳥

上壇

中壇

御燈 二重 但シ略ニハ三宝ニテモ

下壇

置鳥 略ニハ何鳥ニテモ一隻

御笠郡原田村三國峠開鑿ノ儀先般出願仕候、未未夕<sup>マツル</sup>為何御□合無之候得共、過般  
 景官御出張ノ節御申談之趣ニ拠リ着手致シ既ニ過半落成之場合ニ相成候処、該地買  
 上ケ代金及ヒ諸之人夫賃等多額之金員ニシテ是迄兎ヤ角借り入レヲ以テ相償居申候  
 処、一統不融通之折柄ニテ甚困却仕必至ト指支居申候間、特別之御詮議ヲ以左記之  
 通地方稅補助金御下渡シ被成候上御操替奉願候、左候ハ、百事相運速ニ落成為致可  
 申候間、願意御採用被下度此段□願候也

一金 百五十拾円

ノ

御笠郡原田村外一ヶ村戸長

山内淑郎 ㊤

明治十六年一月十五日

郡長小河久四郎殿

(割印) (朱書)

第八号

書面願立趣聞届候条受取方可申立候事

明治十六年一月十五日

御笠席田郡長 小河久四郎 ㊤

上菓子

鏡餅重

真中ニ三段ノ若松ノ前ニ菱ノ餅五重ヲ置菱ト松ノ間ニ勝栗菱ノ餅ノ左脇ニ

勸請幣 金

角堅桔枝堅 饗膳 置也

但シ勸請紙 銀

食ハ宝玉ノ握食 右大根亦ハ青朱類紙ニ包水引ニテ結老ノ波ヲ懸ル右ノ向ニ鯛ニツ腹合ニシテ紙ニ包ミ水引ニテ結切考ノ波ヲ懸ル真中ニ山いも豎

上茶

各々土器成金銀ノ鶴ヲ置

花

手掛 略ニハ六角ノ三宝

盛物 小鳥 まき鯛 かまほこ 串鮑 ムシロ 亦ハ結契斗ニテモ

真中ニ櫛ヲ立夫ニ白幣麻苧ヲ付金銀ノ鶴ヲ置

置鳥

蝶形并根松小笹鶴

瓶子 一对 三宝ニツ土器

香爐 蝶形并根松小笹鶴

瓶子 一对 三宝ニツ土器

堤子

肉丸物

是ハ鳥免ノ掛物ノ事也

置鯉 鯉ト

是ヲ□ノ広物 二尾置事本式

□ノ迫物ト云 鯉 鯛

是ヲ海川ノ二魚ト云

祭山川神祝文 (山内文書 134-1)

維 天保二歲次辛卯初冬 謹<sup>テ</sup>以<sup>ニ</sup>牲<sup>一</sup>牢<sup>一</sup>香<sup>一</sup>酒<sup>一</sup>之<sup>一</sup>奠<sup>一</sup>祭<sup>ル</sup>于<sup>ニ</sup>境<sup>一</sup>山<sup>一</sup>川<sup>一</sup>之<sup>一</sup>神<sup>一</sup>  
 天地之始<sup>メ</sup> 疏<sup>レ</sup>山<sup>ラ</sup> 澹<sup>レ</sup>川<sup>ラ</sup> 所<sup>下</sup>以<sup>ニ</sup>應<sup>シ</sup>天<sup>一</sup>文<sup>一</sup> 列<sup>ニ</sup>地<sup>一</sup>紀<sup>一</sup> 限<sup>ニ</sup>夷<sup>一</sup>夏<sup>一</sup>  
 宣<sup>ル</sup>風<sup>一</sup>雷<sup>一</sup> 為<sup>ル</sup>神<sup>者</sup>ノ必<sup>ス</sup>靈<sup>有</sup>ル<sup>ル</sup>祈<sup>ル</sup>者<sup>ノ</sup>必<sup>ス</sup>應<sup>ス</sup> 盖<sup>シ</sup>山<sup>一</sup>川<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>之<sup>一</sup>府<sup>一</sup> 神<sup>一</sup>  
 為<sup>ニ</sup>ル<sup>ハ</sup>也<sup>一</sup> 人<sup>一</sup>之<sup>一</sup>主<sup>一</sup>也 禍<sup>レ</sup>淫<sup>ニ</sup>福<sup>ス</sup>善<sup>ニ</sup>神<sup>其</sup>レ掌<sup>ル</sup>之<sup>一</sup> 故<sup>ニ</sup>聖<sup>一</sup>人<sup>一</sup>列<sup>ニ</sup>典<sup>一</sup>禮<sup>一</sup> 国<sup>一</sup>  
 家配<sup>ス</sup>干<sup>群</sup>望<sup>ニ</sup> 所<sup>ニ</sup>冀<sup>ニ</sup>發<sup>シ</sup>善<sup>一</sup>者<sup>一</sup>之<sup>一</sup>福<sup>一</sup>神<sup>一</sup> 殲<sup>ニ</sup>不<sup>一</sup>善<sup>一</sup>者<sup>一</sup>之<sup>一</sup>屍<sup>一</sup>骨<sup>一</sup> 惟<sup>レ</sup>神<sup>一</sup>  
 惟<sup>レ</sup>景<sup>ニ</sup>天<sup>一</sup>地<sup>一</sup>之<sup>一</sup>命<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>リ<sup>一</sup>山<sup>一</sup>川<sup>一</sup>之<sup>一</sup>靈<sup>一</sup> 照<sup>ニ</sup>我<sup>一</sup>懇<sup>一</sup>誠<sup>一</sup> 贊<sup>ニ</sup>我<sup>一</sup>兵<sup>一</sup>力<sup>一</sup> 使<sup>下</sup>收<sup>メ</sup>  
 功<sup>ラ</sup>於<sup>ニ</sup>須<sup>一</sup>臾<sup>一</sup> 誠<sup>中</sup>元<sup>一</sup>惡<sup>一</sup>ヲ干<sup>一</sup>頃<sup>一</sup>刻<sup>一</sup> 尚<sup>ク</sup>ハ饗<sup>ヨ</sup>

右

明治十八年十一月廿日改

### 御神座記録 (山内文書 144)

定

一 当明治十八年三月廿八日、御神座連中協議之上、是迄之溜金百拾七円七拾弍銭有之候ヲ、金九拾九円ヲ以テ原田村百七拾番地字巡り尾田式反九步下作米九俵之処ヲ買求候ニ付、宮座盛方等左之方法ヲ以テ入切ニ而相仕廻候事

一米九俵巡り尾下作米之内ヨリ右ニ係ル地租諸掛物及ヒ是迄之宮田地租諸掛り物等一切相仕廻、余米ヲ以テ御備物一切并肴乾物土器折敷等其外献立向入用之品

ニ前当后五人ニ而一切世話致シ仕約ヲ取斗候事

一 献立之儀式ハ前当後五人協議之上余米之金高ニ見合時宜ニ依リ献立取斗候事

宮田下作米

一米三俵壹斗七升

内

米三升三合

御神座御備物

打卷

全巻俵ハ

御供并本膳之時赤飯共

全巻俵

糎米

全巻俵壹斗三升七合

酒

但シ手製

又

右ハ頭元ヲ引受候事

一来明治十九年ヨリ御祭典相济候迄座連中袴着用致シ候事

一 御神座入用新并肴合之野菜ハ頭元ヲ仕出シ候事

一 御七五三打之御備物神官賄等ハ頭元ヲ一切仕出之事

一 給使人、芸者謝礼等ハ頭元ヲ相仕廻候事

一 当山内平次迄ハ手製之酒出来合不申ニ付、金壹円当年一ト達助合候事

(右一項の上に貼紙)

一 当山内平治座ヲ一順壹円宛助合候事

但金五拾銭ハ給仕人、芸者謝銭、山内善次郎座ヲ一順助合候事

一 料理人老人ハ余米之内ヨリ謝礼取計候事

但山内善次郎座ヨリ一順金五拾銭宛日当相渡可申候

右明治十八年十一月二十日山内平次座ニ而座連中協議之上相極メ候事

連名(注・氏名は明治十八年当時のものとし、その後の変更分は省略)

す

山内善次郎

山寄 央

山内五市

山崎善作

山内篤三郎

山内卯定

山崎半三郎

山内孫九郎

山内伊七郎

久光丈七

山崎利三

山内理七郎

山崎利八

中村 稔

山内平次

山内七郎

山崎勇三郎

山内大助

山内勝平

横尾善助

御社筑紫神社祠官兼

権大講義

城山正節

明治三十一年十一月二十日御神座連中協議之上左之通相極メ候事

一御神座連中之内盛衰ニ依リ御神座盛方出来不致場合ニ立至、跡引受人相当之親族無之、他ニ御神座株売却致シ候時ハ、座連中ヨリ買上ケ本人身代持直シ候上加  
入相望候時ハ買上代元金差出候上ハ、本人子孫之者ハ加入為致候事

昭和八年十一月廿日名義変更者多数ノタメ左ニ連名ヲ記ス

連名(注・その後の変更分は省略す)

山内末次郎

山崎直記

山内吉三郎

山内萬代雄

山内卯次郎

山崎敏夫

右

山内恒光

山内範造

山崎駒雄

山内利衛

山崎百造

多田太八郎

山内乙八

山崎大助

山内資夫

横尾磯吉

# 郷社神宮郷社氏子筑紫両村ニ対スル規約

(山内文書 142)

## 郷社神宮郷社産子筑紫原田両村ニ対スル規約

一 先般來連合会決議ノ未独リ該郡内一般神官給与ヲ廃シ、単ニ人民ノ信仰ニ放任セラレ候ニ付、這般更ニ筑紫原田両村ニ対シ規約ヲ約ビ一層敬神ノ御聖旨ニ基キ奉仕神社ノ神宮タル本分ヲ尽サントス、其条例如左項

### 第一項

一 一月八年始祭トシテ三日早天ニ氏子安全ノタメ筑紫神社ニテ祭典勤行、但御鏡餅御神酒御懸魚野菜海菜等ハ村方ヨリ仕調ノ事

### 第二項

一 新曆旧曆共元日ヨリ三日迄、献備祭典等ハ従前ノ通り

### 第三項

一 一月上旬ニ当年ノ五穀豐饒氏子安全ノタメ筑紫神社ニ於テ祭典勤行之上、新年ノ大麻旧年ノ歳越ノ御祈禱トシテ毎戸ニ大麻ヲ授与ス

### 第四項

一 五月ニ八月違月次安全病難除并蝗除ノタメ四月廿八日筑紫神社ニテ御祈禱ノ上、病難除并蝗除ノ御札毎戸ニ授与ス

一 但蝗除ノ御札ハ一戸ニ付五枚宛リ授与ス

### 第五項

一 九月ニ八月違月次安全ノタメ九月月違御祈禱守護ノ御守札八月廿八日奉仕神社ニテ祈禱(禱カ)ノ上、御守ヲ毎戸ニ授与ス

一 六月十二月両度ノ大祓ハ筑紫神社々頭ニテ勤行御制規ノ通り

### 第七項

一 二月御米占祭、六月夏祭、九月神嘗祭、十二月除夜神饌等ハ従来ノ通り献備神官ヨリ仕調ノ事

但シ毎月式月ノ神饌ハ神官ヨリ仕調従前ノ通り

右年中七項ノ祭典御祈禱勤行スルヲ以テ神宮ノ本務トシ、年始大麻五月月次安全病難除并蝗除ノ御札九月月次安全御守ノ神璽ヲ毎戸ニ授与シ、本分ヲ尽シテ奉仕神社ニ事エ義務ヲ以テ筑紫原田両村ニ報ヒ隨テ毎戸幾分神納ノ給与ヲ乞ヒ、両村ノ産神ニ奉仕セバ第レハ御神慮ニ叶ヒ奉仕神官モ亦満足スル所ナリ、乞フ特別ノ御高評ヲ仰カン事希望ス

郷社筑紫神社神官

城山正節

明治十四年一月

戸長

山内淑郎殿

筑紫村々吏

原田村々吏

御中

(表紙)

明治十二年四月

# 村會議員承諾書 (山内文書147)

承諾書

原田村筑紫村議員当選正<sup>ニ</sup>承諾候事

原田村平民

佐藤利三郎 ㊤

明治十二年四月十六日

原田村筑紫村戸長

山内淑郎殿

(以下同文につき議員名のみ記す)

原田村平民	山内孫九郎
原田村平民	山内忠次郎
原田村平民	山内弥三郎
原田村土族	松尾 繁
筑紫村平民	山崎甚六
筑紫村平民	石橋徳平
筑紫村平民	古賀外四郎
原田村平民	山内勝平
原田村平民	山崎利平
原田村平民	山内伊七郎
原田村土族	山崎 央
原田村平民	山内文吉

原田村平民	山崎半三郎
原田村平民	山崎喜三
筑紫村平民	加藤周平
原田村平民	城戸太作

# 兩村連合会日誌 (山内文書 149 4)

(明治十四年十一月) 抜すい

## 議案

村社管繕費予算

一金 七拾八円五拾錢

### 内訳

金七拾五円 家上小板葺修繕費

金三円 議員日当

金五拾錢 会議費

✕

### 右賦課法

戸数割 七歩

地価割 三歩

✕

### 説明

村社筑紫神社拝殿及ヒ渡り殿家上小板葺破損ナシタルハ各員ノ目撃スル所ニシテ是ヲ此俛ニ措クトキハ大破ニ至ルヤ喋々ヲ要セザル所ナリ、因テ其修繕ヲ目論見セシムルニ凡坪数拾五坪ニシテ一坪ニ付材木外職賃共併テ金五円五拾錢ヲ以テ修繕スヘキ旨職業ノ者ヨリ申出タリ、而リ然レトモ一坪五円五拾錢ハ少シク高価ナランカト思量スルヲ以テ、是ヲ一坪金五円ニテ修繕セシムルモノト見積リ、坪数拾五坪分、則金七拾五円且議員日当一人一日金五拾錢、書記日当金三拾錢、紙墨其他ノ諸費ヲ式拾錢ト見積リ、本案ノ金額ヲ予算スルモノナリ

# 御笠郡原田村総計 (山内文書 262)

満二十一年以上 七人

満三十年以上 二人

満四十年以上 一人

満五十年以上 一人

女合数 十人

満十三年以上 二人

満二十年以上 七人

満三十年以上 一人

満四十年以上 一人

満五十年以上 一人

一孝子 一人

一貞婦 一義僕

一篤行 一人

一窮民 一人

一棄児 一人

一痲疾 三人

内 三人

盲人 三人

聾 三人

風癩 白痴

一逃亡 六人

一失踪 二人

一囚獄 二人

一懲役 二人

右人員総計ノ外 男八人

死亡 十四人

内 女六人

一社数 一

一寺数 一

一戸数 百六拾一

一寄留戸数

右総計 百六拾三戸

一士族戸主 男十人

一平民戸主 男百五十七人

右人員総計八百三拾六人

内訳男女ノ年齢

五年十一月以下 百四人

自満六年 男五十六人

至満十三年十一月 女四十八人

自満十四年 男五十九人

至満廿年十一月 女七十三人

自満廿一年 男四十七人

至満三十九年十一月 女四十七人

自満四十年 男百廿八人

至満五十九年十一月 女百三十一人

自満六十年 男八十二人

至満七十九年十一月 女九十一人

自満七十九年十一月 男三十四人

至満八十年以上 女三十七人

満八十年以上 男三人

右人員総計ノ内 女三人

夫婦 三百二十四人

出生 二十三人

婚姻 十人

上戸数総計ノ内建築数

上戸数総計ノ外廃家数

戸主家族合計五十五人

戸主家族合計七百八十一人

男七十二人

女三十三人

男百廿七人

女百九十一人

男二百廿七人

女百九十一人

男百廿七人

女百九十一人

男百廿七人

女百九十一人

男百廿七人

女百九十一人

男百廿七人

女百九十一人

男百廿七人

女百九十一人

男百六十二人

女百六十二人

私生 一人

合計 一人

男一人

女一人

男一人

五年十一月以下 三人 女三人

滿六年以上 一人 男一人

滿十四年以上 一人 男一人

滿二十一年以上 一人 女一人

滿四十年以上 四人 男四人

滿六十年以上 七人 男四人 女三人

滿八十年以上 一人 男一人 女一人

逃亡失踪八十以上ニテ除籍ノ者

一戸数ニ 比例シテ建築一年平均ノ数

一戸数ニ 比例シテ廢家一年平均ノ数

一人員ニ 比例シテ夫婦ノ数 二人六歩ニ 一ノ割合

一夫婦ニ 比例シテ出生一年平均ノ数 拾四人七歩ニ 一ノ割合

一人員ニ 比例シテ婚姻一年平均ノ数 八拾三人六歩ニ 一ノ割合

一人員ニ 比例シテ孝子平均ノ数

一人員ニ 比例シテ貞婦平均ノ数

一人員ニ 比例シテ篤行者平均ノ数

一人員ニ 比例シテ癯疾ノ数 二百七拾八人六歩ニ 一ノ割合

一人員ニ 比例シテ 平均ノ数

一人員ニ 比例シテ囚獄ノ数

一人員ニ 比例シテ懲役ノ数

一人員ニ 比例シテ死亡一年平均ノ数 五拾九人七歩ニ 一ノ割合

一五年以下 幼兒ノ数ニ 比例シテ其死亡一年平均ノ数 男一人 女十六人ニノ割合

一滿六年以上 十三年マテノ 兒女ノ数ニ 比例シテ其死亡一年平均ノ数 男一人 女一人

一出生ニ 比例シテ私生一年平均數

一人員ニ 比例シテ義僕平均數

一人員ニ 比例シテ棄兒平均數

右相違無之候也

明治十三年一月三十日

戸長

山内淑郎

㊤

# 御笠郡筑紫村総計 (山内文書 262)

一社数

一寺数

一戸数 七十九

一寄留戸数

右総計 七十九戸 上戸数総計ノ内建築数一戸  
上戸数総計ノ外廃家数

一士族戸主 男二人 女一人 家族 男二人 女三人 戸主家族合計 七人 男四人 女三人

一平民戸主 男七十三人 女三人 家族 男百廿八人 女百八十人 戸主家族合計三百八十四人 男二百一人 女百八十三人

右人員総計 三百九十一人 男二百五人 女百八十六人

内訳男女ノ年齢

五年十一月以下 四十三人

自満六年 六十八人

自満十三年十一月 四十五人

自満十四年 百十九人

自満廿一年 七十七人

自満三十九年十二月 三十七人

自満四十年 二人

自満五十九年十二月 二人

自満六十年 二人

自満七十九年十二月 二人

自満八十年以上 二人

右人員総計ノ内

夫婦 百五十人 男七十五人 女七十五人

出生 十一人 男七人 女四人

婚姻 二 男二人 女二人

婚姻男女ノ年齢

内

私生 一人 男一人 女一人

合計 人 男一人 女一人

男合数 二人

女合数 二人

満二十年十一月以下 一人

内

満二十一年以上 一人 老一人

満三十年以上 一人

満四十年以上 一人

満五十年以上 一人

女合数 二人

満十三年以上 一人

満二十年以上 二人

満三十年以上 一人

満四十年以上 一人

満五十年以上 一人

一孝子 一人

一貞婦 一人 一義僕

一篤行 一人

一窮民 一人

一棄児 一人

一癩疾 二人 男二人

内

盲人 二人 男二人

聾 一人

風癩 一人

一逃亡 六人 男四人 女二人

一失踪 十四人 男六人 女八人

一囚獄 一人

一懲役 一人

右人員総計ノ外

死亡 七人 男三人 女四人

内

五年十一月以下 男二人

滿六年以上 人 男一人 女一人

滿十四年以上 人 男一人 女一人

滿二十一年以上 男一人 女一人

滿四十年以上 男一人 女一人

滿六十年以上 五人 男二人 女三人

滿八十年以上 五人 男二人 女三人

逃亡失踪八十以上ニテ除籍ノ者 女一人 男一人

一戸數ニ 比例シテ建築一年平均ノ數

一戸數ニ 比例シテ廢家一年平均ノ數

一人員ニ 比例シテ夫婦ノ數 二人六歩ニ 一ノ割合

一夫婦ニ 比例シテ出生二年平均ノ數 十三人六歩ニ 一ノ割合

一人員ニ 比例シテ婚姻一年平均ノ數 百九十五人五歩ニ 一ノ割合

一人員ニ 比例シテ孝子平均ノ數

一人員ニ 比例シテ貞婦平均ノ數

一人員ニ 比例シテ篤行者平均ノ數

一人員ニ 比例シテ癡疾ノ數 百九拾五人五歩ニ 一ノ割合

一人員ニ 比例シテ 平均ノ數

一人員ニ 比例シテ囚獄ノ數

一人員ニ 比例シテ懲役ノ數

一人員ニ 比例シテ死亡一年平均ノ數 五拾五人八歩ニ 一ノ割合

一五年以下 幼兒ノ數ニ 比例シテ其死亡一年平均ノ數 男十三人ニ 一ノ割合 女一人

一滿六年以上 十三歳マテノ 兒女ノ數ニ 比例シテ其死亡一年平均ノ數 男一人 女一人

一出生ニ 比例シテ私生一年平均數

一人員ニ 比例シテ義僕平均數

一人員ニ 比例シテ棄兒平均數

右相違無之候也

明治十三年一月三十日

戸長

山内淑郎

㊤

# 御笠郡原田村職分総計 (山内文書 246)

他管轄ヨリ寄留

官員	漢学	官員ヨリ雇入迄ノ家 族并ニ僧尼ノ弟子共	人員総計	男 人	女 人
神官二人 男二人	欧米学				
兵隊	兵学				
從者	医術一人 男一人				
僧 一人 男一人	武術				
尼	算術				
本邦学	筆学				
農四百七拾八人 男二百五十四人 女二百廿四人	雜業十五人 男九人 女六人				
工二人 男一人	雇人 八人 男五人 女三人				
商四人 男三人 女一人	人員総計五百十人 男二百七十六人 女一百三十四人				
他管轄へ寄留					
官員	從者				
神官	本邦学				
華族	漢学				
士族	欧米学				
兵隊	兵学				
僧	医術				
武術	算術				
筆学	尼				
農	工				
商	雜業				
雇人	修行人				
囚獄	人員総計				
懲役					

官員	神官
華族	士族
兵隊	僧
從者	本邦学
漢学	欧米学
兵学	医術
武術	算術
筆学	尼
農	工
商	雜業
雇人	修業人
官員ヨリ雇入迄ノ家 族并ニ僧尼ノ弟子共	囚獄
懲役	人員総計
右相違無之候也	

明治十三年一月三十日

戸長 山内淑郎 ㊤





一旗 一本

一纏 一本

一高張 一本

一手提灯 組頭一張ツ、

一梯子 二挺

一大熊手 一本

一指股 一本

一大团扇 四本

一鷹口 拾挺

一斧 一ツ

一カマス 一房

一水荷桶 四ツ

一釣瓶 二ツ

一掛ヶ矢 一ツ

一手田子 百

第二条

消防組担当割

一龍吐水掛リ 二組

一手田子掛リ 拾組

右水掛リトス

一器械掛リ 四組

但シ器械ハ各組ニ分掌ス

右火掛リトス

一纏持 二人

但シニヶ年間定夫以テス

一標旗持 二人

但同上

一標燈持 二人

但同上

第四章

消防組頭心得

第一条 組頭ハ消防ニ関スル万般之事務ヲ総督ス

但、組頭ハ白地ニ組頭ノ名称ヲ記シタル小旗ヲ携フベシ

第二条 総則第一条ニ拠リ消防組名簿ヲ製シ一年度毎ニ増減ヲ更正スベシ

第三条 消防夫心得第五条ニ掲ル不参者ノ処分ヲナシ及ヒ出火場ニ繰出シタル人員ヲ検査スヘシ

第四条 出火場ニ在テハ水利ヲ示シ器械ノ運用ヲ便ニシ消防ノ障碍ヲ禦クラ要ス

第五条 火災ノ場ニ於テハ出張警察官及ヒ各戸長ト協議シ消防之事ニ従事スベシ

第六条 火勢ノ己ニ延焼セント見認ルトキハ屋根ヲ剝キ火氣ヲ炎上セシメ横炎セ

サル様小頭ノ指揮着手セシムベキ

第七条 鎮火之節ハ消防組ヲ引揚 器械ヲ点検シ名簿ニ星ヲトルヘシ

第五章

消防組小頭心得

第一条 消防小頭ハ出火ヲ報スル鐘、太鼓ヲ聞クトキハ直ニ消防夫ヲ引纏メ出火

場ニ駆付ベシ

但 小頭ハ白地ニ其組ノ名称ヲ記シタル小旗ヲ携フヘシ

第二条 消防夫ノ駆引ヲ指揮シ傷痍者ナキ者注意スヘシ

第三条 小頭ハ常ニ組中ノ者ヲ教諭シ善事ニ勸導シ出火ノ節ハ組中ヲ監督シ其組

中ニ於テ拔群ノ働ヲナスカ或ハ怠惰ノ者ヲ組頭ニ申告スヘシ

第六章

消防夫心得

第一条 消防夫出火ヲ報スル鐘、太鼓ヲ聞クトキハ直ニ整粧シ小組ト共ニ出火場ニ赴クヘシ

但、最モ近火之節ハ直ニ出火場ニ趣キ小頭之指揮ヲ受ベシ

第二条 消防夫ハ必ス担当ノ器械ヲ携帯スヘシ

第三条 出火場ノ進退駆引ハ総テ組頭小頭之指揮ニ從ヒ自俛ニ掛リ口ヲ定メ消シ

口等ヲ争フヘカラズ

第四条 火災ノ場ニ在テハ自身ノ災害ト相心得、同心協力勉勵シ亦タ危害ナキ様

注意スヘシ

第五条 出火ヲ報スル鐘、太鼓ヲ聞キナガラ現場ニ至ラサルカ、或ハ遅参シ其事

由ヲ小頭ニ届サルモノハ約定ニ拠リ違約金ヲ徴シ消防費ニ充ツルモノトス

但、病氣又ハ他行等ニ由リ不参スルモノハ組中五名以上ノ保証ヲ以テ組頭ニ届出、

組頭之ヲ点検シ止ヲ不得分ニ限り違約金ヲ免スルモノトス

第六条 消防夫ハ其村ノ纏ヲ目的トシ、掛リ口ヲ定メ、各自本任ノ事ニ従事シ自

俛ニ散乱スヘカラス

第七条 消防夫ハ組頭以上ノ指揮ヲ受ケ、決シテ違背スル事ナカルヘシ

第八条 鎮火之節ハ組頭小頭ノ指揮ヲ受ケ、往來ノ妨害トナラサル様整列シテ引

揚ヘシ

## 第七章

### 消防予備組設置法

第一条 消防予備組ハ満四捨五歳以上ヨリ満五捨五歳迄ノ者ヲ以テ之ニ充ツ

第二条 消防予備組ハ予備組中ヨリ投票ヲ以テ予備組々頭三名ヲ設置ス

第三条 消防予備組出火アリト聞クトキハ直ニ整粧シ組頭ノ指揮ヲ受ケ本任ノ事

ニ従事スヘシ

第四条 居村出火ノ節ハ直ニ出火場ニ駆付ケ組頭ノ指揮ニ從ヒ火災ニ遭イ遭ハン

トスル者ノ家財運輸ノ事ヲ尽力スベシ

第五条 他村火災ノトキハ予備組頭ハ左ノ手配ヲナスヘシ

第一 予備組中ヨリ兼テ定員ヲ設ケ出火アリト聞クトキハ直ニ小高キ所ニ登シ出火ノ方角村内ニ通報スル事

第二 消防組出払後、出火盜難ノ取締ヲナス事

第三 時宜ニ拠リ繰出シタル消防組ノ弁当ヲ取纏メ現場ニ運送スル事

第四 繰出シタル消防組引揚、夜ニ入ラント見認ルトキハ、一村ノ標燈及ヒ組

頭小頭ノ提灯ヲ取纏、時間ヲ不失出火場ニ運送スル事

第五 居村出火ノトキハ最寄溜井ヨリ水ヲ仕掛ケ水利ノ便ヲ計ル事

出火<sup>二</sup>付御届 (山内文書303)

福岡県筑前国御笠郡

原田村平民医師

火元全戸消失

島 宗潤

同村平民農

類焼全戸

山内磯吉

同村平民農

類焼全戸

岡部浅次郎

同村平民農

同全戸

山内茂七

同村平民農

同全戸稲屋一棟

山内丑之助

同村平民農

同全戸

山内勝平

同村平民農

同全戸稲屋一棟

山内壮三

同村平民農

同全戸稲屋一棟

山内与六

同村平民農

同全戸稲屋一棟

永川弥吉

同村平民農

同全戸

山内鶴次

同村平民農

同全戸稲屋一棟

久光久次

同村平民農

同全戸稲屋一棟

山内乙次郎

同村平民農

同全戸

山内武三郎

同村平民農

同全戸

山内忠次郎

同村平民農

同全戸

佐藤利作

同村平民農

同全戸稲屋一棟

山内孫四郎

同村平民農

同全戸

山下外吉

同村平民農

同全戸

山下次平

同村平民農

同全戸

山内篤三郎

外 四名共有

同村平民農

同全戸

山内孫次郎

同村平民農

同全戸稲屋一棟

原田 誠

同村平民農

同全戸

永川与平

同村土族農

同全戸

山崎 央

同村平民農

同全戸

山崎たま

同村平民農

同全戸

山崎藤七

外二

電信柱 三本

右ハ明治十六年九月廿九日午前第一時頃出火之趣ヲ聞クヤ居村人民及ヒ巡查一同  
消防尽力致候得共、山間ノ僻地ニテ隣村等モ相隔リ何分集合スルモノ少ク、為メニ  
数戸類焼ニ及フ、其内追々村民駆集リ、消防尽力致シタルヲ以テ全四時ニ至リ  
鎮火仕候、火ノ原因ハ前頭寫宗潤方ヨリ発火シタルモノニテ、何レノ火ヨリ起リタルモ  
ノナルヤ不詳ニ候条、別紙面図面相添此段御届仕候也

御笠郡原田村外一ヶ村

戸長 山内淑郎

明治十六年九月廿九日

福岡警察署

二日市分署 御中

# 〔思水会会則〕(山内文書 364)

(前欠)

舶来品之(欠)

除之外左ニ掲クル品目ハ価格ノ高下ニ拘ラス購求セサル事

羅紗類 吳呂 金巾 澤井ユルハ 袖口 裾ユルハ 裾ユルハ 裾繼等ニ用

フラ子ルノ類 ケット シウタン等ノ敷物 帽子 襟卷

蝙蝠傘

但シ從來ノ所持品ハ之ヲ用ユルモ苦カラス 最舶来品ノ摹型(模)ニシテ我国製造ノ

蝙蝠傘或ハ舶来ノ綿ヲ以糸ニ製シ織立タル(地)字織ノ類ハ限外トス

## 第二条

内国品ト雖モ徒ラニ外見ヲ飾リ無益ノ品物美麗ノ絹布類ハ購求セサル事

## 第三条

婚姻賀宴及ヒ棟上等ノ儀式ハ質素節略ヲ旨トシ葬礼ハ分限ニ応シ冗費ヲ省リヘ

キ事

## 第四条

旧正月五節句(いぬご)文猪髪置春秋彼岸会等之習慣式ヲ廃シ及ヒ羽子板破魔弓雛兜盆燈

籠等之陋酬ヲ停止スル事

## 第五条

神社祭礼ノ外平常演劇等之興業ヲ停止スル事

## 第六条

節儉結約ハ向五ヶ年ヲ一期ト定ル事

右條々結約候上ハ堅可相守事

明治十三年十二月

(三) 山崎 (洋) 家資料

(表紙)

御 触

(山崎文書1)

覚

一、旅人往来之切手者其所之役人ノ之手形見届、領内之者之往来ハ此方役人之切手見届通可申外。若不審之躰相見候ハ、代官様子承届、先宿迄人ヲ附遣シ可申外。尤切手所持不仕疑敷体之者ハ通不申、跡宿江送返可申外。女者別而入念改可申外事。

一、惣而荷物之仕立差札等心を附相改、若疑ハしきもの有之候ハ、代官様子承届跡宿へ送返可申外事。

一、他国ノ御国江入来候女ハ城代頭ノ代官江対シ切手可遣候間、其切手ヲ留置代官ノ他国江往来之切手出シ可申外事。

一、原田ノ黒崎・前原江すくに通り申旅之女者代官ノ黒崎・前原代官江添手形遣シ可申外事。

一、近国之往来切手三十日迄ハ其所之御代官ノ切手差出可申外。尤其所之庄屋并頭分之者請合書物取置可被申外。三十日越候ハ、切手者代官頭江可申出外事。

一、他領日帰之商買ニ罷越候者只今迄之通其所頭分之者ノ遂吟味御代官江申出候様可被仕外事。

從他領科人送来候節、請取宿繼ニ而送遣申次第之覚

一、此科人生国何国之者如何之科依有之生国江送遣候間、段々送届候様ニと申来科之次第生国共ニ慥ニ極たる者ハ請取宿繼村繼ニ而他領迄送り遣外様可被仕外事。附送人此方請取候手形出シ申候ハ、他領渡外時他領ノ之請取を取置可被申外事。

一、科之次第并生国も慥ニ申来ものたり共、他領ノ送来リ原田口ニ而請取、併若他領請不申時者必元ニ送戻可申外間、其節者無異儀請取可申との手形證拋取置候

而送人請取段々他領迄送遣外様可被仕外事。

一、科之次第不分明生国も慥ニ申来科人とはかり申来リ外もの款、或ハ何国之者何方へかつたへ居申ニ付送遣候杯と申来迄之者者請取不申様可被仕候事。

右之通勘左衛門殿江御内意申上相極申入外条、被得其意向後此通ニ支配可有外事。

寅八月

伊丹九郎右衛門  
藪角右衛門

樋口長五郎殿

(四) 佐賀県基山町

基山6区区有文書

(表紙)

# 御境石建覚書

從文化二乙丑年

同四丁卯八月<sub>二</sub>至

三國境割塚石建  
筑前境枯松跡石建 記録

御境目筋覚書

文化二乙丑二月十九日、御寄附<sub>江</sub>被召出御手代役原永介殿与<sub>リ</sub>御達被成<sub>レ</sub>者筑前御境三國松之儀枯木いたし<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>、先年植繼<sub>二</sub>相成<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>、何者之仕業共不相知取除<sub>ケ</sub>得共、吟味手掛<sub>茂</sub>無之其儘差置<sub>レ</sub>。然<sub>レ</sub>外、此節御国与<sub>リ</sub>御用<sub>二</sub>付<sub>一</sub>、大東茂右衛門殿・小柳吉左衛門殿越被成、右御境目筋之被蒙仰候由<sub>二</sub>付<sub>一</sub>、近<sub>レ</sub>向合筑前原田村庄屋<sub>江</sub>取合いたし<sub>レ</sub>外様被仰付<sub>レ</sub>。申向様之儀<sub>者</sub>其御領境際<sub>二</sub>植立置<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>松之儀、御存知之通枯木<sub>二</sub>相成見苦敷<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>、近<sub>レ</sub>引除<sub>ケ</sub>申度御座候。就夫、御境印之儀樹木等植込<sub>レ</sub>而<sub>者</sub>往<sub>レ</sub>御田地之木景<sub>二</sub>茂<sub>一</sub>相成御迷惑相察候間、此節石<sub>越</sub>御境之真際<sub>二</sub>建置度<sub>レ</sub>。依<sub>而</sub>者石出来次第御知らせ可申進候間、其節<sub>者</sub>乍御苦勞御立会被下<sub>レ</sub>外様希存<sub>レ</sub>。右之通原田庄屋<sub>江</sub>申向候<sub>二</sub>而<sub>一</sub>二月廿一日、原田庄屋<sub>李</sub>七方<sub>へ</sub>使<sub>越</sub>以申遣候<sub>者</sub>少<sub>レ</sub>用事<sub>茂</sub>有之、明日<sub>者</sub>御見廻申度御座<sub>レ</sub>。其御元差間有之間敷哉<sub>与</sub>申遣<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>、<sub>李</sub>七今朝<sub>多</sub>福岡<sub>江</sub>罷出甚多用<sub>二</sub>付<sub>一</sub>、五日程逗留之<sub>二</sub>御座<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>、罷帰候<sub>ハ</sub>御知らせ可申段申来。

一、二月廿八日、<sub>李</sub>七福岡<sub>多</sub>罷帰<sub>レ</sub>哉使<sub>越</sub>以尋遣<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>、罷帰居<sub>レ</sub>得共相痛<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>、快方次第御知らせ可申段返答有之。

徳介曾祖父藤兵衛

一、三月二日、御本役多田源右衛門様、御用掛大東茂右衛門様御会席<sub>江</sub>御手代役吉松善左衛門殿、岩谷順左衛門殿、<sub>李</sub>之平、徳介<sub>茂</sub>被召出、右松之事段<sub>レ</sub>御問被成<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>、正保、元禄式枚之村絵図及近来之松之場小絵図壹枚徳介祖父何某之覚書等入御覽、扱又筑後<sub>。先年小松御植繼之儀<sub>二</sub></sub>・筑前<sub>・肥前</sub>御三國之御境塚漸<sub>レ</sub>洗崩形小<sub>レ</sub>相成候段申上、右三國割塚築添之儀<sub>越</sub>原田<sub>江</sub>最前<sub>二</sub>咄向<sub>一</sub>、其後、自然<sub>与</sub>松場所之境石建<sub>二</sub>きまり寄<sub>レ</sub>様取計<sub>レ</sub>而<sub>者</sub>何分御座<sub>レ</sub>哉<sub>与</sub>奉窺<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>、其通可然被仰付<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>、父子引取<sub>レ</sub>。

一、三月三日、使<sub>を</sub>以原田庄屋<sub>江</sub>申遣候<sub>者</sub>貴様御痛何分<sub>二</sub>候哉<sub>一</sub>、御快方候<sub>ハ</sub>少<sub>レ</sub>用事有之見込申度段申遣候<sub>外</sub>、<sub>李</sub>七返答、拙者去年庄屋役請持候後、徳介殿方<sub>へ</sub>無音仕居候得共、いまた全快不致失礼罷過候。御出被下候<sub>ハ</sub>可忝段返答有之。右<sub>二</sub>付<sub>一</sub>、翌四日御寄附<sub>江</sub>口上手覚書<sub>越</sub>以御窺申上<sub>レ</sub>趣。昨三日原田<sub>江</sub>人遣仕<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>庄屋<sub>李</sub>七与<sub>リ</sub>之返答、去年以来無音仕居<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>、頃日<sub>多</sub>相痛、尤少<sub>レ</sub>快方<sub>二</sub>御座候得共<sub>一</sub>、未其元迄参程<sub>二</sub>無御座<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>間、貴様御出被下候<sub>ハ</sub>可忝段答来<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>、明五日私原田<sub>江</sub>参可申<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>。咄向様之儀<sub>者</sub>一昨日御衆議之通御三國境割塚築添之儀、先談合松場所石建之儀<sub>者</sub>追<sub>レ</sub>熟談取計可申候得共、若又向方<sub>多</sub>之模様<sub>二</sub>依松之年数場所之論<sub>二</sub>茂<sub>一</sub>至間敷事<sub>二</sub>無御座<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>。猶又以後為心得左之次第奉伺候。

一、对州領之儀<sub>者</sub>慶長三年<sub>二</sub>被成下候領地<sub>二</sub>而<sub>一</sub>其時分右之場所<sub>江</sub>松為有之由、其松者枯木<sub>与</sub>相成<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>、万治年中植繼申たる松<sub>二</sub>御座候<sub>一</sub>。尤御境目松<sub>二</sub>無之<sub>レ</sub>付<sub>一</sub>、御領<sub>多</sub>御立会等<sub>茂</sub>無之<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>。此節<sub>者</sub>御立会<sub>越</sub>請、真境際石<sub>越</sub>建置申度存<sub>レ</sub>旨申入度存<sub>レ</sub>。

一、三月五日、下老入召連原田駅庄屋<sub>李</sub>七方<sub>江</sub>罷越<sub>二</sub>互<sub>一</sub>挨拶一通<sub>リ</sub>相済<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>、直<sub>二</sub>盃差出、三献<sub>二</sub>而<sub>一</sub>後茶漬等出打喧之餐<sub>レ</sub>有之<sub>レ</sub>付<sub>一</sub>、見合咄向<sub>外</sub>者御三國境割塚之儀、漸<sub>レ</sub>大雨<sub>二</sub>而<sub>一</sub>洗落<sub>レ</sub>而<sub>至</sub>而形小<sub>レ</sub>相成<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>、御立会之上<sub>二</sub>互<sub>一</sub>築添申度希存<sub>レ</sub>。御同意<sub>二</sub>候<sub>ハ</sub>筑後御領三沢村<sub>江</sub>御同然申向度御座<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>、申候得<sub>者</sub>李七答、如何様其形纒<sub>二</sub>相成居仰之通筑添可然存<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>。尤当方内<sub>レ</sub>相調<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>上御答可申段申<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>。

三月十一日原田江遺状

尚く御内々御調候。若御濟被置候ハ、三沢之方ニ茂

一筆致啓上ハ。弥御堅勝可被成御勤珍重奉存ハ。急ニ御同然申遣度奉存候。左様御承知宜御心配、先日者致参上段々御丁寧之預、御馳走別而被下ハ様奉頼候以上。忝次第御座ハ。然者其節御相談申置ハ御三國境割塚之儀、右之俣ニ召置候ハ、當年梅雨中ニ大雨毎ニ洗落、弥形茂相変可申ハ間、願く者農際只今之内ニ相濟置候様致度奉存ハ、御繁用半御面倒之儀ニ御座候得共、其御方御内々御調、乍此上猶又急埒之道御心配之程重々奉希ハ。右御相談先日之御礼旁為可得貴意如此御座ハ。恐惶謹言

梁井徳介

三月十一日

山内李七様

右李七江之状遣候得共、甚取紛罷在ハ間、追御答可申由ニ其後迎茂書不來ハ、山口村大庄屋殿御境目村々庄屋ハ咄向ハ而者急埒之道茂可有之与ノ事ニ付、書漬ケ可然三月十九日山口村大庄屋高野門七方江参候処、門七井同村庄屋仁内茂常松村川普請所ニ数日相詰罷在ハ由ニ付、萩原村庄屋和介呼ニ参、頓而和介相見、寛々咄仕ハ内盃出和介相伴ニ而手輕三献ニ後茶漬等有之。其後庄屋仁内方ハ見舞可申段申ハ得者則和介誘引致候得共、仁内茂常松村江参居ハ。然処、又々盃出ハニ付、緩々仕候内咄仕ハ者原田庄屋被替ハ後無音仕居ハ間、当日始李七殿方ハ参候。其節咄置候者御三國境割塚漸々雨洗ニ而崩落形小く相成居ハニ付、築添之儀相談仕候処、李七殿江尤ニ被存、併内々相調ハ候上返答可申与被申、其後五六日経ハ而願く者春内農際ニ相濟度段手紙ニ而申遣ハ、御取紛ニ付、追而御答可被成与被申聞候得共、いまた何共不申來ハ。李七殿御内々御調ハ与有之ハ者大庄屋元ハ御相談ニ茂哉与相察ハ。貴様御近辺之儀門七殿御噂共ハ御聞不被成哉与尋ハ、和介答、未承、尤大庄屋江者定而申出有之たるニ而可有御座存ハ。手前杯右之場所不委ハ。扱又宮浦、園部庄屋衆交代ニ而子息方御相統ニ就而者祝詞ニ茂可忝雉子狷な与茂仕度、兼々近村庄屋咄合いたし居ハ与申ハニ付、何卒御出相待可申、何比御出

可被成哉与申候得者いつれ当日月中ニ者川普請茂相濟可申ニ付、来月始大庄屋及原田才平等寺迄庄屋中相催、先貴様方ハ可参ハ間、其節彼ノ場所杯相談茂可有之和介申ハニ付、随分其通可然段約諾仕、夜四ツ比罷帰。

筑前江遺状

尚く門七様御出之程希遣置ハ間、猶又各様々宜被仰上、何卒御出被下ハ様御取持之程奉頼ハ以上。

一筆致啓上ハ。各様弥御堅勝可被成御勤珍重奉存ハ。先日高野門七様方ハ致参上候節者和介様段々御取持被下忝次第奉存ハ。仁内様御方ハ致推参ハ、折節郷方御出勤ニ而不掛御目御留主御家内様与御馳走被下別而忝奉存ハ。其節和介様迄粗御相談申置ハ儀、定而仁内様江茂御承知被下候半与奉察ハ。雉子御狷何卒来月初御差支無御座候ハ、被示合三日四日比御出被下ハ様奉希ハ。何之奥茂無御座候得共外ニ茂少く御相談致度儀御座ハ間、拙宅江御一宿被下候ハ、可忝ハ。且又、宮浦、園部庄屋共江茂罷出ハ通申置ハ様可致ハ間、其御方与り茂李七様、茂次郎様、与七郎様被仰合御同伴被下ハ、重々忝可奉存候。右先日之御礼旁為可得貴意如斯御座候。恐惶謹言

恐惶謹言

梁井徳介

三月廿八日

高野仁内様

草野和介様

一筆啓上仕ハ。弥御健康可被成御勤珍重御事奉存ハ。先日者為御見廻致参上ハ、折節御郡内御出勤ニ而不得拜顔御留守種々御丁寧之御馳走被仰付、御厚志之至不浅忝奉存候。其節和介様ハ粗御噂申置ハ。御境目御庄屋衆来月初当村才宮浦、園部辺迄雉子狷ニ御出之儀御約諾申置ハ。就夫何之奥茂無御座候得共、貴公様江茂何卒御慰ニ御來臨被下ハ、別而忝次第可奉存ハ。先日之御礼且右之段御何申度旁為可得貴意如斯御座ハ。恐惶謹言

梁井徳介

三月廿八日

高野門七様

一、三月廿八日、筑前御境目大小庄屋江手紙遣候得共返答延引ニ付、四月四日公儀御役人様御通路ニ付、御境目村庄屋中原田江出浮居ハニ付、何比参ハ哉尋遣ハレ、来七日ニ可参段申来ハレ。然レ、六日暮方、山口村庄屋仁内与リ人遣仕ハ者明七日参上可仕申遣置ハレ、御用ニ付大庄屋明日ハ福岡江罷出答ニ相成四五日茂日間取可申、扱又我々者立明寺村、針摺村出入筋出来ハニ付、繕ニ取掛旁差支、先者日取茂難極御座ハ間、御伝被下間敷仁内申遣候段申来。右之通ニ付、四月九日又々原田江手紙遣。

一筆致啓上候。漸々暖和ニ相成ハレ。弥御堅勝可被成御勤珍重奉存ハレ。然者先月十一日御頼談申遣ハ御三國御境目割塚之儀ニ付、其御方御内々御調ハ之儀其節御取紛ニ付、追而御報可被仰下由使之者ハ被仰聞致承知ハレ。就夫又々御催促候、申遣兼候得共、其御方御調ハ之上御同然ニ三沢之方ニ申遣彼方差支無之時、今五七日茂日間取可申、其上御三方御立会申御衆議之御熟談等茂可被下候得者唯今与リ申遣不置ハ而者梅雨前農際之内ニ者出来兼可申、若又彼方取紛之筋茂有之ハ時者弥以相延可申奉存、急々彼方江申遣度御報越茂相伝不申、又々此段御頼談申遣ハ間、宜御聞得被下何卒夏作收納前相済ハ様御心配之程重々奉希ハレ。右之段為可得貴意如此御座ハ。恐惶謹言

四月九日

梁井徳介

山内李七様

右状使武右衛門持参ハレ、李七対面ニ而申ハ者拙者儀徳介殿御出後、又々相痛いまた何方江茂咄得不申御答延引之段氣之毒仕ハレ。少々快方候ハ、申談御報可申段申ハレ。

山口ハ来ハ状写

一筆致啓上ハレ。林雨之節ニ相成益御安全可被成御座奉珍重ハレ。先達而者久敷振ニ御見廻被下出違居申、甚御不礼申分茂無御座、其段御免被仰付可被下ハレ。然者久敷御出会茂不仕ハニ付、罷越ハ様度々御人被下ニ萬前仕合奉存上ハレ。左候得者昨十三日同役中御用ニ付合仕ハ付申談ハレ、段々御人被下候故可罷越之処、内々相

さわりの事出来仕ハレ付、何分五七日者参得不申上ハレ付、私代ニ而右御断申上置候様平等寺、萩原申談相成ハレ付、乍憚申上置ハレ。此段宜御聞置可被下ハレ。乍慮外宮浦西東江茂且被仰可被下ハレ。いつれ其内参上萬々御断可申上ハレ。重疊奉頼上ハレ以上。

四月十四日

高野仁内

梁井徳介様

乍憚御隠居様江宜敷被仰上可被下ハレ。御機嫌御尋ニ茂御不礼仕居申段乍慮外宜被仰上可被下ハレ。いつれ近く以参上御尋可申上ハレ以上。

一、四月十五日、大庄屋青木與介并徳介御役所江被召出、右割塚之儀原田返答延引ニ付大庄屋ハ山口村大庄屋江手紙越以申向ハ様被仰付、依之同十七日山口江遣ハ書状写左ニ記之。

未得御意候得共一筆致啓上候。弥御堅康可被成御勤珍重之御事ニ奉存ハレ。然者貴御領与筑後御領、当領ハ御三國境割塚之儀漸々崩落至而形小ニ相成ハレニ付、築添之儀御三領御熟談取斗度趣当方役筋ハ内々被申聞ハレ。依之、先達而原田駅庄屋全七殿江城戸村庄屋徳介ハ御頼談申置候得共、御病中之由ニ而いまた御答茂無之、然レ、追々梅雨ニ茂押移候ハ、弥以塚形相変可申哉、希者其前築添申度拙者ハ御頼談申遣。右為可得御意如斯御座候。恐惶謹言

四月十七日

青木與介

高野門七様

右状山口村江遣ハレ。返書左之通

御状致拜見ハレ。先以御安康被成御勤珍重ニ奉存ハレ。然者御三國境割塚崩落形小ニ相成候ニ付、築添之儀被仰聞致承知ハレ。当方役筋ハ申遣差図之上否返答可申述ハレ。右御報如此御座候。恐惶謹言

四月十七日

門七様  
高野全左衛門

青木與介様

四月廿八日、原田駅庄屋ハ人遣有之ハニ付、翌廿九日御役所江手覚書越以申上ル。口上手覚

昨廿八日、私儀川御普請所ハ罷出居ハレ、原田駅庄屋ハ人遣有之たる由家内ハ為

知<sup>レ</sup>ハ<sup>二</sup>付罷帰見候処、又介、久次<sup>与</sup>申者兩人参居口上申候者我儀庄屋李七使<sup>二</sup>御座<sup>ハ</sup>。先頃<sup>者</sup>御状被下<sup>ハ</sup>外、相痛罷在御答不申失礼仕<sup>ハ</sup>。漸近日少<sup>レ</sup>快方<sup>二</sup>御座<sup>ハ</sup>。被仰聞置<sup>ハ</sup>割塚築添之儀於<sup>レ</sup>当方<sup>者</sup>御同意<sup>二</sup>御座<sup>ハ</sup>。尤入梅前<sup>二</sup>者何分被参申間敷、今暫御延被下<sup>ハ</sup>ハ、御立会申度存<sup>ハ</sup>。扱又、三沢<sup>二</sup>方御談合何分相成居<sup>ハ</sup>哉、且築添斗<sup>二</sup>可致哉、又<sup>者</sup>右段石建などハ如何御座<sup>ハ</sup>哉、様子承<sup>ハ</sup>様李七申遣<sup>ハ</sup>外段申候。私申候<sup>者</sup>先達<sup>而</sup>申遣置候通三沢<sup>二</sup>方<sup>江</sup>者御同然申向度存念<sup>二</sup>御座<sup>ハ</sup>間、其御方御答相伝罷在<sup>ハ</sup>。然<sup>レ</sup>外、右<sup>二</sup>之通被仰下<sup>ハ</sup>付、近日<sup>二</sup>茂御連名<sup>二</sup>而申遣度、扱又右段石建等随分可然存候。何連御三方御談合可申<sup>与</sup>申<sup>ハ</sup>得ば兩人申候<sup>者</sup>李七<sup>江</sup>者御同意之儀<sup>二</sup>御座<sup>ハ</sup>間、三沢<sup>二</sup>方<sup>者</sup>乍憚御当所<sup>レ</sup>御談<sup>レ</sup>被下返答之趣<sup>者</sup>便宜<sup>二</sup>李七<sup>ハ</sup>茂御知らせ被下度、我<sup>レ</sup>御頼申上<sup>ハ</sup>与申<sup>ハ</sup>付、私答、左候ハ、其通仕、彼<sup>レ</sup>方返答有之次第為御知可申<sup>ハ</sup>。全体右割塚築添之儀形なく不成内御三領御熟談取計度趣、当方役筋より内<sup>レ</sup>被申聞<sup>ハ</sup>。依之、李七様迄御談申入置<sup>ハ</sup>。尤御病中<sup>二</sup>追<sup>レ</sup>申遣<sup>ハ</sup>茂不遠慮之儀<sup>二</sup>付、当月半比当郷大庄屋<sup>レ</sup>貴御郡山口村大庄屋元迄御頼談申遣置<sup>ハ</sup>与咄仕候得<sup>者</sup>左様之儀<sup>二</sup>ハ哉、何連<sup>与</sup>茂追<sup>レ</sup>御熟談可被申<sup>与</sup>申兩人罷帰申候。

四月廿九日

城戸村庄屋

徳介

五月朔日大庄屋青木與介<sup>ハ</sup>山口村大庄屋<sup>ハ</sup>遣候書状左之通

一筆致啓上<sup>ハ</sup>。弥御堅勝可被成御勤珍重奉存<sup>ハ</sup>。然<sup>者</sup>御三領境割塚築添之儀<sup>二</sup>付、去月十七日得御意置<sup>ハ</sup>外、御役筋之被仰出被得御差<sup>レ</sup>圖<sup>ハ</sup>上否御答可被仰聞旨被仰下、其以來折節相待罷在<sup>ハ</sup>外、去ル廿八日原田駅庄屋李七殿<sup>与</sup>城戸村庄屋徳介<sup>江</sup>人遣有之、右塚築添之儀御同意之趣被申越<sup>ハ</sup>外段徳介<sup>ハ</sup>申出<sup>ハ</sup>。最新御返答之趣<sup>二</sup>而<sup>者</sup>否<sup>者</sup>可被仰下哉<sup>与</sup>奉存勿論<sup>レ</sup>李七殿<sup>ハ</sup>徳介<sup>江</sup>之御使之趣決<sup>而</sup>間違可有御座<sup>与</sup>者不奉存候得共、為念此段得御意<sup>ハ</sup>。恐惶謹言

五月朔日

青木與介

高野李右衛門様

右返書

御状致拜見<sup>ハ</sup>。先以御堅勝被成御勤珍重奉存<sup>ハ</sup>。然<sup>者</sup>御三領境割塚築添之儀先比御掛合被成<sup>ハ</sup>外段内<sup>レ</sup>手筋<sup>二</sup>申遣<sup>ハ</sup>外、御問合之趣御同意之旨<sup>二</sup>御座<sup>ハ</sup>間、拙<sup>者</sup>江茂御同意<sup>二</sup>奉存候条、其段原田村庄屋李七<sup>江</sup>申付置<sup>ハ</sup>。右<sup>二</sup>付城戸村庄屋徳介<sup>殿</sup>人遣仕<sup>ハ</sup>旨、委細被仰下致承知候。徳介殿方<sup>江</sup>李七<sup>ハ</sup>人遣仕<sup>ハ</sup>趣間違之儀無御座<sup>ハ</sup>。前文之次第早速御答可申述<sup>ハ</sup>外、多用取紛延引<sup>二</sup>相成申<sup>ハ</sup>。光沢村御熟談相済候ハ、田方根付後原田村庄屋李七指出可申<sup>ハ</sup>外、割塚築添之儀徳介殿<sup>ハ</sup>日限等之儀李七<sup>江</sup>御掛合有之<sup>ハ</sup>様被仰付置可被遣<sup>ハ</sup>。右御答申述度如此<sup>二</sup>御座<sup>ハ</sup>。

恐惶謹言

五月三日

青木與介様

門七事  
高野李左衛門

右之通申来<sup>ハ</sup>付、五月五日三沢懸合之儀被仰付、翌六日書状遣。

一筆啓上<sup>ハ</sup>。漸<sup>レ</sup>暖氣<sup>二</sup>相成<sup>ハ</sup>。弥御堅勝可被成御勤珍重奉存<sup>ハ</sup>。然<sup>者</sup>御三領境目印割塚之儀大雨之節洗崩、近来殊外形小<sup>レ</sup>相成右之俵<sup>二</sup>致置候<sup>ハ</sup>ハ、弥崩落目印<sup>二</sup>成兼候様可相成候間、唯今之内其御方<sup>与</sup>原田<sup>ハ</sup>御熟談申遣御三方御立会<sup>越</sup>以築添候<sup>又</sup>者石<sup>二</sup>而茂<sup>建置<sup>ハ</sup>様取計度趣当方役筋<sup>与</sup>内<sup>レ</sup>被申聞候<sup>二</sup>付御相談申遣<sup>ハ</sup>。御同意被思召候<sup>ハ</sup>ハ、近<sup>二</sup>茂<sup>取整申度奉存<sup>ハ</sup>間、何卒無御伏臆御熟談之上宜御心配被下<sup>ハ</sup>様奉希<sup>ハ</sup>。右御相談為可得貴意如此御座<sup>ハ</sup>。</sup></sup>

恐惶謹言

五月六日

花田卯八様

梁井徳介

猶<sup>レ</sup>原田庄屋李七<sup>江</sup>頃日席有之咄向候<sup>レ</sup>外、随分同意之由尤同人昨今病氣<sup>二</sup>而未得<sup>与</sup>快方<sup>二</sup>無之由<sup>二</sup>候得<sup>者</sup>近日<sup>二</sup>者出会<sup>茂</sup>難成趣<sup>二</sup>相聞候得<sup>者</sup>快方次第可及御熟談奉存候。猶<sup>又</sup>、御報次第彼方<sup>江</sup>申遣候様可致<sup>ハ</sup>。以上

同返書

御礼拜見仕<sup>ハ</sup>。如仰追<sup>レ</sup>暖氣向弥御安全可被成御勤奉珍賀<sup>ハ</sup>。然<sup>者</sup>御三領境目印割塚之儀大雨之節洗崩形小<sup>レ</sup>相成其儘致置候<sup>ハ</sup>ハ、崩落目印<sup>二</sup>成兼候様可相成<sup>ハ</sup>間、唯今之内築添<sup>ハ</sup>、石<sup>二</sup>而茂<sup>取立<sup>ハ</sup>外、取計申度趣被仰聞承知仕<sup>ハ</sup>。如仰唯今之通</sup>

二而召置<sub>レ</sub>而者相濟不申<sub>レ</sub>間、随分御立会築添申度奉存<sub>レ</sub>。左様被思召<sub>レ</sub>御世話原田方<sub>江</sub>茂御掛合日被下<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>迎<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰越候<sub>ハ</sub>、御立会可申候。右御報如斯御座<sub>レ</sub>。以上

五月六日

花田卯八

梁井徳介様

二〇立会日限且人足等<sub>茂</sub>召連候<sub>而者</sub>難成奉存<sub>レ</sub>間、日限人夫高御元<sub>ノ</sub>御極被仰越被<sub>レ</sub>下度奉頼<sub>レ</sub>。

一、五月八日、使重右衛門を以三沢庄屋卯八返答之趣原田<sub>江</sub>申遣<sub>レ</sub>候、李七答、徳介殿御心配被<sub>レ</sub>下三沢之方<sub>茂</sub>同意之段御知らせ被<sub>レ</sub>下御苦勞之儀<sub>ニ</sub>御座<sub>レ</sub>。築添<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>欵、石建之方<sub>ニ</sub>可極哉<sub>者</sub>追<sub>而者</sub>御相談可申徳介殿<sub>江</sub>申入置被<sub>レ</sub>下候得<sub>与</sub>李七申<sub>レ</sub>。

一、同月十日、石建仕法為相談重右衛門、九郎右衛門兩人<sub>江</sub>委細申合原田庄屋へ遣<sub>レ</sub>候、李七申候<sub>者</sub>其儀<sub>者</sub>近<sub>レ</sub>徳介殿<sub>江</sub>懸御目御相談可仕<sub>与</sub>斗申<sub>レ</sub>付、右兩人<sub>茂</sub>緩<sub>レ</sub>たばこな<sub>与</sub>給居、又<sub>レ</sub>談し掛候得共四五日中徳介殿へ御目掛直談可仕<sub>与</sub>李七申<sub>レ</sub>付<sub>ニ</sub>付兩人罷帰。

一、同廿日、三沢村耆百姓十次郎参申<sub>レ</sub>候、先頃御相談被<sub>レ</sub>下御三領割塚築添之儀<sub>者</sub>何比<sub>ニ</sub>被成<sub>レ</sub>哉、其後様子不承<sub>レ</sub>付<sub>ニ</sub>付尋参<sub>レ</sub>候卯八申付候趣申来。徳介答、去<sub>レ</sub>ル十日李七方へ相談人遣仕候<sub>者</sub>拙者<sub>江</sub>直談可仕<sub>与</sub>の事<sub>ニ</sub>付相待罷在<sub>レ</sub>得共<sub>レ</sub>いまた相見不申<sub>レ</sub>候。李七方存念承<sub>ハ</sub>、早速御知らせ可申段卯八殿へ申入置被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>得<sub>与</sub>答遣<sub>ス</sub>。

一、六月四日、原田より之使太助<sub>与</sub>申者参<sub>レ</sub>口上。庄屋李七申進<sub>レ</sub>。先月十日建石仕法之為御相談御兩人被遣<sub>レ</sub>節<sub>者</sub>兩日中<sub>ニ</sub>茂<sub>茂</sub>参候<sub>而</sub>御直談可申由御答申進置候<sub>者</sub>其後又<sub>レ</sub>相痛漸昨日髪月代仕<sub>レ</sub>。尤七日迄<sub>ハ</sub>差障有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>得共、其後八日より<sub>ハ</sub>何時<sub>茂</sub>宜御座<sub>レ</sub>。尤毎<sub>レ</sub>御世話なから三沢<sub>江</sub>茂御談し之上日取御極被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>候ハ<sub>ハ</sub>出会可仕段申来。

一、六月六日、三沢庄屋へ使重右衛門<sub>越</sub>以申遣候<sub>者</sub>原田<sub>ノ</sub>建石仕法相談出会之儀申来<sub>レ</sub>間、御差合無<sub>レ</sub>之候<sub>ハ</sub>、来九日十日兩日之内<sub>ニ</sub>極度段申遣<sub>レ</sub>候、字八申候<sub>ハ</sub>九日<sub>ニ</sub>相極四ツ比割塚<sub>江</sub>耆百姓兩人つゝ召連出会候<sub>而得</sub>見斗相談可仕由申<sub>レ</sub>付、同七日原田庄屋<sub>江</sub>使九郎右衛門<sub>越</sub>以右之段申遣。

割塚立会之節時宜見計原田李七<sub>江</sub>可申入手覚左<sub>ニ</sub>記之。

御存知之通御境際<sub>ニ</sub>植立置<sub>レ</sub>松枯木いたし<sub>レ</sub>。就夫御境印之儀樹木等植込候<sub>而者</sub>往<sub>レ</sub>御田地之木景<sub>ニ</sub>相成御迷惑相察<sub>レ</sub>間、此節石<sub>越</sub>御境之真際<sub>ニ</sub>建召置度御座<sub>レ</sub>。石出来候<sub>ハ</sub>、御知らせ可申進候間、其節<sub>者</sub>乍御苦勞御立会被<sub>レ</sub>下候様希存<sub>レ</sub>。

一、対州領之儀<sub>者</sub>慶長三年<sub>ニ</sub>被成<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>領地<sub>ニ</sub>而其時分之松枯木いたし<sub>レ</sub>付、万治年中<sub>ニ</sub>植続申たる松<sub>ニ</sub>御座<sub>レ</sub>。尤御境目松<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>付、其御領<sub>ノ</sub>御立会等<sub>茂</sub>無<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>。此節<sub>者</sub>御立会<sub>越</sub>請真境際<sub>ニ</sub>石<sub>越</sub>建置申度存候。

右手覚先之ケ条<sub>者</sub>相扣<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>規時宜<sub>ニ</sub>ハ<sub>ハ</sub>可申入相成候<sub>ハ</sub>、相加<sub>江</sub>可置趣御達有<sub>レ</sub>之。

御役所<sub>江</sub>差上<sub>レ</sub>口上手覚

昨九日、原田庄屋李七・組頭又介・武七、三沢庄屋卯八・耆百姓十次郎・幸介、当村与<sub>リ</sub>私・重右衛門・九郎右衛門、九ツ比割塚場所立会<sub>レ</sub>候、李七申<sub>レ</sub>候<sub>者</sub>いか様御氣付通至<sub>而</sub>形小<sub>ニ</sub>相成候。此外御境地変<sub>ニ</sub>茂<sub>及</sub>候様之之所<sub>者</sub>何連御熟談<sub>ニ</sub>出入無<sub>レ</sub>之様<sub>ニ</sub>仕度旨被申<sub>レ</sub>付、尤<sub>ニ</sub>存候段、致挨拶建石之仕方凡衆儀仕<sub>レ</sub>方<sub>江</sub>立寄<sub>レ</sub>られ候様申<sub>レ</sub>候、李七<sub>者</sub>参度様子<sub>ニ</sub>相見候得共、卯八近日<sub>越</sub>相痛、何分参得不申段達<sub>而</sub>申候<sub>ニ</sub>付、白坂新左衛門宅へ誘引<sub>レ</sub>而寛<sub>レ</sub>咄会建石之儀、別紙之通<sub>ニ</sub>夕村石工<sub>江</sub>李七<sub>ノ</sub>頼被呉候様相談仕<sub>レ</sub>候。扱、私方用意之品取寄、三献<sub>ニ</sub>茶漬等差出<sub>レ</sub>。盃半過私李七<sub>江</sub>咄向<sub>レ</sub>者貴様先刻<sub>茂</sub>被仰<sub>レ</sub>通、御境目筋地交出来<sub>レ</sub>様之所<sub>者</sub>兼<sub>レ</sub>立会前方之地形<sub>越</sub>見合御熟談相極置度存候。且先刻<sub>茂</sub>被見掛<sub>レ</sub>通往還北<sub>江</sub>植置候松枯木いたし最早久敷相成見<sub>レ</sub>苦敷御座<sub>レ</sub>。尤跡樹木等植込候<sub>而者</sub>其御領往<sub>レ</sub>御田地之木景<sub>ニ</sub>相成御迷惑相察<sub>レ</sub>候<sub>ニ</sub>付、此節石<sub>越</sub>御境之真際<sub>ニ</sub>立置度御座<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>候、卯八いか様見<sub>レ</sub>苦敷御座<sub>レ</sub>。有来之場所其儘<sub>ニ</sub>茂<sub>相</sub>濟間敷被申<sub>レ</sub>付、私又申<sub>レ</sub>候<sub>者</sub>南<sub>ニ</sub>樹木植候<sub>而者</sub>原田方御迷惑<sub>与</sub>相察<sub>レ</sub>候<sub>ニ</sub>付、真境際<sub>ニ</sub>石<sub>越</sub>建度石出来候<sub>ハ</sub>、御知らせ可申<sub>ニ</sub>付、其節<sub>者</sub>乍御苦勞李七様御立会被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>様希存<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>候<sub>者</sub>李七何連御熟談可申<sub>与</sub>計申候。左候<sub>而</sub>暮<sub>ニ</sub>及<sub>レ</sub>双方引取申候。

六月十日

城戸村庄屋

徳介

六月廿六日徳介原田庄屋江遣口上手覚

割塚建石之儀二村江御頼被下上、石工積り書頃日又助殿持參為御見被下委細承知仕候。則当領石之書付別紙之通乍御面御清書之上為御彫可被下候。

一、往還北御境際ニ植置ハ松枯木いたし見苦敷御座ハ得共、又々樹木等植付候而者往々其御領御田地之木景ニ相成御迷惑察候ニ付、御境印此節石越真境際ニ建

置度、其節御立会被下様去ル九日白坂ニ御立会之節御咄申置候處、頓而建石茂致出来ハ付、日限之儀追而可申進候間、其節彌貴様御立会被下度希ハ為念此段又々得貴意置候。

六月廿六日

別紙書付

肥前国対州領 但、是者最前之申極通ニ而

後相談替ハ付石彫ハ

銘文者左ニ記之

同日原田ハ相違ハ口上手覚

先刻重右衛門殿御出之節御口上之趣致承知ハ。

一、三国境建石之儀追々切立居申ハ付、何様近日得御意委曲可致御相談ハ。

一、往還北御境松枯木いたしハ付、御境石御建方之儀被仰聞致承知ハ。右御境

松代リニ御境石御建方ニ相成候ハ、於此方ニ茂同様石ヲ背合ニ建可申ハ。此段得

貴意置ハ。以上

六月廿六日

右ニ付答、翌廿七日重右衛門越以原田江申向ハ趣左ニ記之

昨日御使之人口上手覚書之趣委細承知仕ハ。往還北建石之儀御同様御建之思召ニ

候ハ、是亦催合ニ仕、東者其御領之書付、西者当領之書付仕候而者如何、又者石式

ツニ候ハ、台石者一ニノ両立石鑿込候而者如何可有御座哉御相談申ハ段、卯刻李

七方ハ重右衛門參ハ申向ハ處、李七被申よふ者何連其内徳介殿方ハ罷越御相談

可仕与の事ニ付重右衛門罷帰候。

一、六月廿八日昼八ツ比、原田庄屋使又助相見ハ申ハ者近比追々被仰聞候往還北

松之場所御建石之儀者御三国割塚筋相濟ハ後ニ被成被下度存ハ。扱又、御面談不申ハ而

不叶儀御座ハ間、昨廿九日欵七月二日欵ニ李七參可申ハ。御差支有御座間敷哉御伺申ハ様李七申付ハ与申ハ間、随分差障無之段返答申候。

口上手覚

七月二日、原田庄屋李七組頭又助下老人召連參ハ次第御役所江差上ハ趣左之通。

昨二日、原田駅庄屋李七、組頭又助、小者老人召連昼九ツ半比私宅ハ參申ハ者先

達而御三領申談ハ建石之儀役筋ハ申出ハ處、則役筋より被仰ハ者御三国境割塚印

石熟談相調候上ニ而石拵等御而領ハ此方ハ被任置儀ニ候ハ、必鹿抹之仕方等無之

様念越入ハ様、就夫御境筋ニ被掛置ハ早良郡田嶋村庄屋惣七、李七ハ立会ハ様被

仰付、則惣七相見ハ別紙仕方書出来ハ由ニ而李七持參致ハ付、被入御念御儀忝存ハ

段申述ハ。

一、盃差出三献ニ而取持仕、半過比私申候者先達而白坂ニ而粗御咄申其後使重右衛

門口上手覚書越以申進ハ往還北松之儀、何ノ場所相中真境与リハ得ク此方ハ引

取ハ而植置ハ松ニ御座候處、頃日其御方之口上手覚書ニ御境松与被申遣ハ所

此方ハ者此ニ熟念いたしハ。併、其御方御如在ニ而被仰儀ニ而茂有之間敷哉、何連

此節石越建候ハ、相中真際ニ建申度ハ。左様御承知被置被下ハ様申ハ處、李七

返答、何ノ方ニ而者是迄御境松与申伝ハ候ニ付、右之通申進ハ。併、所之老人な

与ハ承見可申ハ。何連割塚成就之上ニ而御相談可与申ハ。其後茶漬等差出、暮ニ

及罷帰候。

七月三日

城戸村庄屋

徳介

一、七月三日、三沢耆百姓十次郎相見ハ者未成就ニ者不至候得共、盆前之事故筑前

之方ハ石工賃之内錢百匁且石屋見廻ニ式升樽一肴一籠遣答ニ御座候間、此段御

知らせ申ハ与申来。右之段翌四日同様ニ仕度段申出則錢百匁与樽肴料大当ニ

拾匁相渡ス。

一、七月六日、重右衛門三沢村庄屋ハ右筑前ハ来ハ繪図持參之上去ル二日李七此

方へ参申間ハ通越咄述ハ外ハ、三沢庄屋卯八筑前方重々被入念儀共委細承知仕ハ段徳介殿へ御申入被下ハ様、扱貴様事度々御苦勞ニ存ハ段、重右衛門へ挨拶有ハ之候ニ付、重右衛門申ハ者、爰許銘文者直ニ原田へ御遣し被下ハ様申ハ外ハ、近日書遣へく段卯八申ハ。

一、御領分銘文七月七日九郎右衛門原田へ持参、扱又石屋見廻し而塩鯛二尾式升樽石工賃之内銭百匁持せ遣。但、三沢茂同様之申談。

此石長六尺差渡壹尺廻リ三尺余之

三国境

但 丸石三領催合ニノ建ハ付、三国境之銘三方之ハ

基肄郡城戸村抱

従是西南

但 此石長三尺五寸之

肥前国对州領

六寸角御三領ハ一石宛

文化ニ乙丑七月建之

一、七月十六日、原田へ重右衛門遣石組用ニ寄せハ石之大小之儀相談ニ遣ハ外ハ、

三沢銘文延引ニ付、三沢へ申向呉ハ様李七申聞ル

一、七月十七日、右之段三沢庄屋へ重右衛門を以申遣ハ外ハ、卯八申ハ者、長々之早

ニ付、雨乞且配水等ニ取紛銘文失念仕居ハ。兩日中近辺之医師ニ共為書直ニ原

田へ可遣与相答ハ。

一、同廿日、原田組頭武七参ハ而申ハ者、今以三沢銘文不参ハ付、毎々申兼ハ得

共、又々三沢へ御催促被下ハ様李七御頼申上ハ与申聞ハ。

一、同廿一日、昨日原田与リ之使之趣、重右衛門を以申遣ハ外ハ、卯八他出ニ付帰

次第右之趣可申聞段者百姓ハ挨拶有之。

一、同廿四日、石組用之石寄ニ人夫召連罷出居ハ外ハ、原田ハ又助参申ハ者、三沢ハ

に今銘文不來ハ付、石屋茂相休居甚迷惑仕ハ間、三沢之方へ御申向被下ハ様

李七深く御頼申進ハ段申ハ付、左ハハ、此方ハ老人相添可申ニ付責殿直ニ参

卯八方へ委敷申入ハ得と申ハ外ハ、毎々乍御苦勞此節迄者御元ハ催促被下ハ得と

又助申ハ付、又々重右衛門三沢庄屋へ申遣ハ外ハ、者百姓中も打寄居庄屋卯八申ハ者、毎々御苦勞ニ存ハ。拙者義最初上役筋及大庄屋元江も不申出一了簡ニ而

是迄取計ハ付、内もめに相成ハ所与リ銘文書遣ハ義も難相成、今更不面目之仕合ニ付。併、何連申談通取計不申ハ而、不叶儀ハ間、今暫御双方建方御延被

下ハ様返スハ卯八申ハ付、重右衛門答、左様之儀ハ哉、扱御笑止ニ存ハ。

原田へも其段咄置可申ハ得共、成丈急ニ事濟ハ様御取計被成度段申ハ而直ニ原

田へ参李七へ右之段咄申ハ外ハ、李七申ハ者、始者いさき与キ様子ハ外ハ、扱々笑

止之成行ニ付。双方之迷惑ニ不成様一刻も早く取計出来ハ得かハと被申ハ。

一、七月廿六日、原田庄屋ハ使武七参申ハ者、一昨廿四日三沢之模様重右衛門殿ハ

委細承氣之毒之様子ニ御座ハ。御互ニ建之与銘彫茂致置ハ付、押ハ、当月中ニ者

成就不仕ハ而者、此方御上向相濟不申ハ付、此段三沢江委細御申遣被下ハ様李

七被申ハ与申ハ。拙者申ハ者、御互同然之儀ハ間、此方ハ者、老人可遣ハ間、貴

殿直ニ三沢へ参ハ而委しく申向被下度存ハ段申ハ外ハ、随分三沢へ参可申段申ハ

付、当村重平同道三沢ニ遣武七与リ庄屋卯八江委細申入ハ外ハ、卯八返答、御

双方共御尤ニ存ハ。併、爰許上へ向茂凡取直ハ付、明廿七日・廿八日之兩日

ニ者、郡方役与リ一応見方有之筈ハ間、今暫御待被下ハ様御双方共ニ宜被申入

置被下度頼存ハ。畢竟拙者手落有之ハ所々ケ様之日間取いたし李七殿、徳介殿

思召甚以恥敷次第ニ付、成丈者、兩所江之間へ無之様取計度了簡ニ而様々手入仕

たる事ハ得共、余り延引ニ相成無扱委細咄仕ハ。尤右申ハ通郡方役見分相濟

ハ得ば直ニ熟談通仕儀ニ御座ハ外ハ、何連今暫御待被下ハ様頼存ハ与卯八被申ハ

付、武七・重平又申ハ者、原田者、是迄履石見立与リ原田迄之取寄人夫三拾人余召

使ハ城戸者、石組用之石寄ニ四拾人程召使ハ外ハ、履石越原田与リ割塚迄取寄之

儀者、御村方ハ人夫御出被下度段申ハ外ハ、随分三沢ハ人夫差出可申段卯八被申ハ。

一、右廿七八兩日共ニ筑後方見分之様子見積不申ハ付、翌廿九日朝、重右衛門

を以三沢へ尋遣ハ外ハ、右兩日雨天故ハ哉見分役相見へ不申与卯八申聞ハ事。

一、八月朔日、原田庄屋ハ之使又助参申ハ者、筑後方内もめ之様子、去月廿四日、

廿六日具ニ承御互氣之毒仕ハ。未た数日日間取可申哉此方へ者御境目方田嶋村

庄屋惣七、七月廿日逗留<sup>二</sup>而建方之日を相待被居<sup>一</sup>。遠方之人故四五日共<sup>二</sup>坤

三国境石

明儀<sup>二</sup>ハ、留置可申、日取難極御座<sup>一</sup>ハ、先此節<sup>者</sup>被帰<sup>一</sup>通可仕<sup>一</sup>間、三沢  
之方へ此段御問合被下<sup>一</sup>様李七申遣<sup>一</sup>由。尤当方<sup>二</sup>付又助直<sup>一</sup>引取<sup>一</sup>間、同<sup>二</sup>  
日朝、重右衛門三沢庄屋へ遣右之段申入らせ<sup>一</sup>由、卯八申<sup>一</sup>者<sup>二</sup>郡方役見分<sup>一</sup>極  
居<sup>一</sup>得共外<sup>二</sup>急用事出来<sup>一</sup>由<sup>二</sup>見分延引<sup>一</sup>及<sup>一</sup>間、原田方へ<sup>者</sup>百姓十次郎  
を以右之段断可申遣<sup>一</sup>申聞直<sup>二</sup>重右衛門同道<sup>一</sup>原田<sup>江</sup>罷越、此方へ<sup>者</sup>三沢<sup>江</sup>幸  
介来右之趣申聞。

一、八月九日、三沢十次郎<sup>江</sup>手紙を以申来<sup>一</sup>者<sup>二</sup>昨八日郡方役見分有之模様能近日  
内可被仰渡<sup>一</sup>間、此段内<sup>二</sup>徳介方へ<sup>一</sup>知らせ置<sup>一</sup>様卯八申<sup>一</sup>段申来。尤銘文從是  
東南久留米領三沢村抱<sup>与</sup>極<sup>一</sup>様子<sup>二</sup>御座<sup>一</sup>由申来。

一、同日、重右衛門を以原田庄屋へ申遣<sup>一</sup>者<sup>二</sup>一昨八日三沢之方郡方役見分相濟  
模様能御座<sup>一</sup>由、尤銘文東南久留米領<sup>与</sup>相成趣<sup>二</sup>相聞<sup>一</sup>へ<sup>一</sup>。当領<sup>与</sup>筑後境<sup>茂</sup>其  
御元<sup>江</sup>認被下<sup>一</sup>給<sup>一</sup>面通無相違相見<sup>一</sup>。然<sup>一</sup>由、右之東南<sup>与</sup>被致趣<sup>ハ</sup>其御方<sup>二</sup>お  
いて<sup>一</sup>ハ如何被思召<sup>一</sup>哉<sup>与</sup>申遣<sup>一</sup>由、李七答、此方<sup>茂</sup>申分なき事<sup>ハ</sup>いたし不召置  
段申聞重右衛門申<sup>一</sup>者<sup>二</sup>御尤<sup>一</sup>存<sup>一</sup>。扱、給<sup>一</sup>面之境未引<sup>者</sup>凡何問程之御積<sup>一</sup>り<sup>二</sup>  
被認置<sup>一</sup>哉<sup>与</sup>尋<sup>一</sup>得<sup>者</sup>李七其儀<sup>者</sup>拙<sup>者</sup>も存知不申<sup>一</sup>、何連銘文書来<sup>一</sup>ハ、御境  
目役惣七相招了簡可承<sup>一</sup>。右南之事<sup>茂</sup>先頃<sup>ハ</sup>此方へも粗承、就夫惣七申<sup>一</sup>者<sup>二</sup>此  
節三沢<sup>江</sup>郡方役見分之儀上<sup>一</sup>、筑後御境目和談方行徳龍助参<sup>一</sup>得かし。左<sup>一</sup>へ<sup>者</sup>  
右様之儀随分安<sup>一</sup>く<sup>一</sup>由申<sup>一</sup>与<sup>一</sup>李七咄仕<sup>一</sup>。

一、八月十八日、九郎右衛門を以原田李七方へ申遣<sup>一</sup>者<sup>二</sup>三沢<sup>江</sup>今以何共不申来<sup>一</sup>、  
其御元へ銘文書直<sup>二</sup>参居<sup>一</sup>共<sup>二</sup>無御座<sup>一</sup>哉<sup>与</sup>尋遣<sup>一</sup>由、李七申<sup>一</sup>者<sup>二</sup>末参<sup>一</sup>、此  
方も最早待疲居<sup>一</sup>間、老<sup>一</sup>人相添同然<sup>二</sup>銘文催促可仕<sup>一</sup>与<sup>一</sup>被申<sup>一</sup>付、則武七・九  
郎右衛門同道<sup>二</sup>三沢庄屋へ参、何卒急<sup>一</sup>博明<sup>一</sup>様御取計被下<sup>一</sup>度、李七、徳介申  
遣<sup>一</sup>与<sup>一</sup>申<sup>一</sup>由、卯八答、尤千万存<sup>一</sup>。最初手前存<sup>一</sup>与<sup>一</sup>上<sup>一</sup>向大<sup>二</sup>間違日間取  
由。明日<sup>者</sup>久留米へ罷出熟談通是非申請<sup>一</sup>心組<sup>一</sup>間、此段兩人衆へ宣申入吳  
由へと申<sup>一</sup>。

一、八月廿三日、三沢庄屋卯八・使十次郎割塚銘文下書内<sup>二</sup>御目掛<sup>一</sup>由<sup>二</sup>持参。

傍示石銘文（從是東南筑後国三沢村分

文化<sup>二</sup>乙丑年七月建之

右之通有之<sup>一</sup>付、徳介申<sup>一</sup>者<sup>二</sup>あ之場所<sup>一</sup>其御領へ南相見へ不申<sup>一</sup>、如何之思  
召共<sup>一</sup>哉<sup>与</sup>申<sup>一</sup>得<sup>者</sup>十次郎答、頃日郡方役御見分之節右銘文此所東筑後国<sup>与</sup>  
いたし<sup>一</sup>者<sup>二</sup>夫<sup>一</sup>能<sup>一</sup>得共、御両国同然之儀<sup>二</sup>付、從是<sup>一</sup>与<sup>一</sup>書<sup>一</sup>得<sup>者</sup>東南<sup>与</sup>無之  
<sup>一</sup>者<sup>二</sup>難濟、從是之文字ハ其場<sup>一</sup>不限事故、東南<sup>与</sup>可書<sup>一</sup>差<sup>一</sup>有之。尤銘文本書  
出来<sup>一</sup>ハ、御郡方へ入御覽<sup>一</sup>様<sup>与</sup>の事<sup>二</sup>付、本書<sup>者</sup>久留米へ遣<sup>一</sup>。近日下り次  
第持参可致<sup>一</sup>得共、南之字加<sup>一</sup>り<sup>二</sup>付、先下書御目<sup>一</sup>為掛<sup>一</sup>、卯八遣<sup>一</sup>与<sup>一</sup>申聞。  
一、同廿四日、右之段庄屋徳介<sup>江</sup>申出<sup>一</sup>付、原田方<sup>与</sup>其方談合之上南之字除<sup>一</sup>  
様三沢<sup>へ</sup>取合可仕<sup>一</sup>哉、御答御郡方御差<sup>一</sup>図と有之<sup>一</sup>へ<sup>者</sup>取合<sup>一</sup>而<sup>二</sup>急<sup>一</sup>持付  
申聞敷奉存<sup>一</sup>。

御問、筑後是非南之字書入<sup>一</sup>時<sup>者</sup>如何存<sup>一</sup>哉、御答、御手入<sup>二</sup>御座<sup>一</sup>得共、  
右之近辺式三丁之所筑後境之当り<sup>一</sup>、此方<sup>江</sup>御境石を被<sup>一</sup>立<sup>一</sup>而<sup>二</sup>何分御座<sup>一</sup>  
哉<sup>与</sup>申上<sup>一</sup>由、明後廿六日罷出<sup>一</sup>様被仰付。

一、八月廿六日、庄屋徳介役所<sup>江</sup>罷出<sup>一</sup>由、御手代中を以被仰付<sup>一</sup>者<sup>二</sup>筑前之方節  
与<sup>一</sup>申談<sup>一</sup>而<sup>一</sup>双方<sup>江</sup>筑後取合仕、何連南ノ字徐<sup>一</sup>様心配相働<sup>一</sup>通被仰付、依之  
明廿七日、原田<sup>江</sup>出浮談<sup>一</sup>合可仕段申上引取。

口上手覚

八月廿七日原田庄屋へ参<sup>一</sup>次第、翌廿八日手覚書を以申上左<sup>二</sup>記之

昨廿七日、私原田駅庄屋方へ参<sup>一</sup>由、李七大庄屋元へ参居<sup>一</sup>付、早速呼<sup>二</sup>参、  
私<sup>江</sup>盃差出組頭又助相伴<sup>三</sup>献<sup>二</sup>後茶漬等出居<sup>一</sup>内、李七罷帰一通り挨拶相濟  
由上、筑後銘文下書<sup>一</sup>為見<sup>一</sup>而<sup>一</sup>委細咄仕<sup>一</sup>由、李七申<sup>一</sup>者<sup>二</sup>先頃<sup>ハ</sup>南ノ字之事承<sup>一</sup>  
得共、其場<sup>江</sup>南無之<sup>二</sup>付衆儀之上<sup>一</sup>而<sup>一</sup>押詰南之字除<sup>一</sup>可申事共哉<sup>与</sup>存罷在<sup>一</sup>由、  
弥南加度存念と相聞、扱<sup>一</sup>不得其意事<sup>一</sup>由。此方<sup>江</sup>給<sup>一</sup>図を差出<sup>一</sup>申分無<sup>一</sup>之様<sup>二</sup>

不致置<sub>レ</sub>付。扱又從是<sub>与</sub>此所<sub>与</sub>の訳纒式三間之事共<sub>ニ</sub>ハ、此所とも書可申<sub>レ</sub>得共、方角をさし<sub>レ</sub>付<sub>而</sub>者從是<sub>与</sub>可致事<sub>ニ</sub>存<sub>レ</sub>付。此上<sub>者</sub>割塚<sub>江</sub>再会いたし方角糺<sub>レ</sub>様可仕<sub>与</sub>被申、其後寛く咄合仕居<sub>レ</sub>付、卯八<sub>ノ</sub>下書<sub>越</sub>先<sub>ニ</sub>為見<sub>者</sub>自分<sub>茂</sub>心体<sub>ニ</sub>不任、無<sub>レ</sub>様子共<sub>ニ</sub>而<sub>者</sub>無<sub>レ</sub>之哉、若其通<sub>ニ</sub>ハ、内談之致様<sub>茂</sub>可有<sub>レ</sub>之、又自身<sub>茂</sub>南を加度了簡と相見<sub>レ</sub>ハ、不得止事出会之上方角を糺し幾重<sub>ニ</sub>茂理を尽し見可申<sub>ニ</sub>付、先三沢十次郎を私方<sub>ニ</sub>招<sub>レ</sub>付<sub>而</sub>得と申合、卯八内存承見<sub>レ</sub>付可然<sub>与</sub>相談仕、猶又李七儀工夫仕追<sub>レ</sub>可及内談可申<sub>レ</sub>付。其後私申<sub>レ</sub>付<sub>者</sub>割塚右之通鬼哉角日間取<sub>レ</sub>付、此間<sub>ニ</sub>往還北御境石相濟度段申<sub>レ</sub>付、李七答<sub>尤</sub>ニ存<sub>レ</sub>付得とも割塚日間取<sub>ニ</sub>付<sub>而</sub>者拙者<sub>茂</sub>甚不首尾之仕合御座<sub>レ</sub>得<sub>者</sub>何分今程役筋へ申出<sub>茂</sub>難成御座<sub>レ</sub>付間、何連此筋<sub>者</sub>割塚成就之上<sub>ニ</sub>致<sub>レ</sub>呉<sub>レ</sub>様申<sub>レ</sub>付。右之通御座<sub>レ</sub>付間、今日三沢十次郎私方へ参<sub>レ</sub>付様申<sub>レ</sub>置<sub>レ</sub>付。

丑 八月廿八日

一、八月廿八日三沢村十次郎德介方へ相招委敷申合、猶又絵図面方角割之事共委細咄聞<sub>レ</sub>付、得心<sub>ニ</sub>而<sub>者</sub>罷帰。翌廿九日<sub>ニ</sub>又<sub>レ</sub>私方へ参申<sub>レ</sub>付<sub>者</sub>昨日之次第卯八へ委細申聞<sub>レ</sub>付、御両人之思召同人<sub>茂</sub>尤<sub>ニ</sub>請<sub>レ</sub>付間、早速大庄屋へ申出、大庄屋名代彦人<sub>与</sub>卯八、耆百姓式人今日久留米へ被罷出<sub>レ</sub>付。否<sub>者</sub>帰次第御答可被申<sub>レ</sub>得共、先<sub>レ</sub>右之段為御知申<sub>レ</sub>付<sub>与</sub>申<sub>レ</sub>付。

一、同晦日、暮方又<sub>レ</sub>十次郎参申<sub>レ</sub>付<sub>者</sub>卯八被申<sub>レ</sub>付廿八日被申聞<sub>レ</sub>付次第具<sub>ニ</sub>承知仕尤<sub>ニ</sub>存<sub>レ</sub>付<sub>ニ</sub>付、役筋へ罷出理を尽し申見<sub>レ</sub>得共、南之字除<sub>ケ</sub>付儀叶不申少<sub>ニ</sub>而<sub>茂</sub>掛<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>付<sub>ニ</sub>付、南之字不入置<sub>レ</sub>付<sub>而</sub>者後<sub>ニ</sub>至庄屋勿論百姓迄<sub>茂</sub>不調<sub>レ</sub>之沙汰<sub>ニ</sub>可及段役筋与<sub>レ</sub>被申<sub>レ</sub>付<sub>ニ</sub>付、何分拙者存念<sub>ニ</sub>不任<sub>レ</sub>付。左様御承知被下<sub>レ</sub>様庄屋被申<sub>レ</sub>付由申<sub>レ</sub>付。德介申<sub>レ</sub>付<sub>者</sub>先日<sub>茂</sub>其元へ申<sub>レ</sub>付通、其御領あ之場へハ巳之方<sub>ニ</sub>少く掛<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>付。其事を役筋<sub>ノ</sub>被仰儀<sub>ニ</sub>付哉、扱又、頃日被申聞<sub>レ</sub>付此所<sub>与</sub>彫<sub>レ</sub>得<sub>者</sub>其御領東<sub>ニ</sub>而<sub>者</sub>相濟<sub>レ</sub>付哉<sub>与</sub>尋<sub>レ</sub>付、十次郎答、此所<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>得<sub>者</sub>東斗<sub>ニ</sub>而<sub>者</sub>相濟<sub>与</sub>申事<sub>慥</sub>不承<sub>レ</sub>付間、此儀<sub>者</sub>明日<sub>ニ</sub>茂為御知可申<sub>与</sub>申罷帰<sub>レ</sub>付。

一、閏八月朔日朝、三沢村幸介別紙書附持参仕<sub>レ</sub>付<sub>而</sub>則御役所江差出。

三沢書付之写

覚

一、割塚傍示石銘文之儀從是東南筑後国<sub>与</sub>致書載<sub>レ</sub>付時<sub>者</sub>傍示石之裏<sub>ニ</sub>何ノ何歩迄<sub>与</sub>書載彫<sub>レ</sub>付<sub>而</sub>茂可然<sub>レ</sub>付事。

一、右銘文此所東筑後国<sub>与</sub>致書載<sub>レ</sub>付<sub>而</sub>者御両国共此所<sub>与</sub>御書載有御座度<sub>レ</sub>付事。  
右之通御相談御極被仰越可被下<sub>レ</sub>付。以上

閏八月朔日

三沢村

城戸村

原田村

右書付差上<sub>レ</sub>付、何連原田<sub>与</sub>請合同然<sub>ニ</sub>三沢へ立合仕<sub>レ</sub>様庄屋德介へ申達。然<sub>レ</sub>、頃日原田町方之者、福岡<sub>江</sub>奉公<sub>ニ</sub>罷出居仕損有<sub>レ</sub>付由申来。庄屋、組頭福岡へ御呼出有<sub>レ</sub>付段承<sub>レ</sub>付、李七罷帰<sub>レ</sub>ハ、右三沢取合相談<sub>ニ</sub>可参答<sub>ニ</sub>而<sub>者</sub>翌二日九郎右衛門三沢書付持参<sub>ニ</sub>而<sub>者</sub>原田<sub>江</sub>遣<sub>レ</sub>付、李七帰居、明三日德介殿方へ相談<sub>ニ</sub>参覚悟<sub>ニ</sub>付<sub>与</sub>申<sub>レ</sub>付、九郎右衛門罷帰。

一、閏八月三日、原田駅庄屋李七、組頭又助、武七参<sub>レ</sub>付、重右衛門、九郎右衛門<sub>茂</sub>召寄、三猷<sub>ニ</sub>而<sub>者</sub>茶漬差出扱三沢取合之儀色<sub>ノ</sub>評儀仕<sub>レ</sub>上、割塚江致同道針越立見<sub>レ</sub>付、弥三沢之方へ南可入様無<sub>レ</sub>之、李七申<sub>レ</sub>付<sub>者</sub>様<sub>ニ</sub>成行<sub>レ</sub>上<sub>者</sub>最早可急事<sub>ニ</sub>茂無<sub>レ</sub>之<sub>付</sub>。拙者<sub>茂</sub>役筋<sub>江</sub>筑後之模様申出、内<sub>レ</sub>得差<sub>レ</sub>付上<sub>レ</sub>而<sub>者</sub>又<sub>レ</sub>会合仕<sub>レ</sub>付而<sub>者</sub>御互三沢取合可仕<sub>レ</sub>付。尤今四五日<sub>者</sub>相伝<sub>レ</sub>様申<sub>レ</sub>付。

一、同十一日、当村重右衛門、原田武七、三沢村庄屋江参申<sub>レ</sub>付<sub>者</sub>李七德介申<sub>レ</sub>付其御領傍示石<sub>ニ</sub>南之字御加へ之事兩領<sub>ニ</sub>おいてハ不得心<sub>ニ</sub>御座<sub>レ</sub>付。如何之思召<sub>ニ</sub>御座<sub>レ</sub>付哉、御尋申<sub>レ</sub>付<sub>与</sub>申<sub>レ</sub>得<sub>者</sub>卯八答、右之場<sub>江</sub>南<sub>者</sub>無<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>得共<sub>ニ</sub>三十間<sub>茂</sub>谷越<sub>レ</sub>こし<sub>レ</sub>得<sub>者</sub>南有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>付、南之字加置度段百姓中存念<sub>ニ</sub>御座<sub>レ</sub>付。猶又先頃見分之役筋<sub>茂</sub>同然之事<sub>ニ</sub>付、南之字を加<sub>レ</sub>度存<sub>レ</sub>付。重右衛門、武七又申<sub>レ</sub>付<sub>者</sub>当月朔日御当所与<sub>レ</sub>被遣<sub>レ</sub>御書付<sub>ニ</sub>何之何歩迄と有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>付<sub>者</sub>何<sub>越</sub>目当<sub>テ</sub>ニ御極被成思召<sub>レ</sub>付哉、卯八答、其儀<sub>者</sub>委しく氣を付たる事<sub>ニ</sub>而<sub>茂</sub>無御座、全体此節南之字<sub>越</sub>

望<sub>レ</sub>者拙者<sub>ニ</sub>おゐてハ如何敷存<sub>レ</sub>得共、右申<sub>レ</sub>通百姓中<sub>与</sub>役筋被望<sub>レ</sub>付、不任心底申進事<sub>ニ</sub>付、目当石<sub>越</sub>建<sub>レ</sub>而傍示石<sub>ニ</sub>何之何歩何厘迄と致<sub>レ</sub>ハ、せめ而者<sub>对</sub>州御領之御氣取<sub>茂</sub>可然哉<sub>与</sub>存申進たる事<sub>ニ</sub>付。德介殿、李七殿<sub>江</sub>拙者心底を被組取無事御取計之道頼存<sub>レ</sub>間、返<sub>レ</sub>卯八申<sub>レ</sub>付、重右衛門、武七引取申<sub>レ</sub>。

一、閏八月十四日、三沢著百姓幸助參申<sub>レ</sub>者庄屋卯八申進<sub>レ</sub>南之字<sub>ニ</sub>付、段<sub>レ</sub>懸御心痛を<sub>レ</sub>段甚以氣之毒仕<sub>レ</sub>得共、無抛成行<sub>ニ</sub>付、委細<sub>者</sub>先日武七殿、重右衛門殿へ申入<sub>レ</sub>通<sub>ニ</sub>御座<sub>レ</sub>。何卒宜御工夫御頼申上度今日私を遣申<sub>レ</sub>与申<sub>レ</sub>付、德介答、卯八殿御心底之儀、度<sub>レ</sub>仰聞相察罷在<sub>レ</sub>得共、其場<sub>ニ</sub>無之南を被望<sub>レ</sub>處、何分難得其意<sub>レ</sub>。尤此節貴様口上之趣ハ承届<sub>レ</sub>。

一、右<sub>ニ</sub>付閏八月十六日朝、德介、李七方へ參咄合仕<sub>レ</sub>處、御境目筋加役田嶋村庄屋惣七儀、筑後和談方行德龍助<sub>江</sub>度<sub>レ</sub>致出会是迄口<sub>レ</sub>内談<sub>茂</sub>出来<sub>レ</sub>由<sub>ニ</sub>付、右筋<sub>茂</sub>惣七より龍助<sub>江</sub>内談之上取計せ見<sub>レ</sub>方可然<sub>与</sub>李七申<sub>レ</sub>付、其通頼罷帰。

一、同月廿二日、原田<sub>ヲ</sub>武七參申<sub>レ</sub>者去ル十六日御談シ申<sub>レ</sub>通惣七与<sub>レ</sub>龍助<sub>江</sub>内談為致<sub>レ</sub>處、行徳も筑後方之存念甚我意成事<sub>ニ</sub>付、暫日間取<sub>レ</sub>ハ、成丈取計見可申段龍助申<sub>レ</sub>由<sub>ニ</sub>付、同人<sub>ヲ</sub>一左右有<sub>レ</sub>之迄御互相伝可申段李七申遣<sub>レ</sub>趣申<sub>レ</sub>間、德介答、段<sub>レ</sub>御心配忝存<sub>レ</sub>。随分相待可申<sub>与</sub>申遣。

一、九月十二日、重右衛門を以行徳之取計いまた相分り不申哉、原田<sub>江</sub>尋遣<sub>レ</sub>得共李七留主<sub>ニ</sub>付、重右衛門罷帰。

一、同廿日、九郎右衛門様子為聞合原田<sub>江</sub>遣<sub>レ</sub>處、行徳之取計<sub>茂</sub>未何共不相分段李七答。

一、同廿七日、行徳龍助与<sub>レ</sub>藤本惣七迄申来<sub>レ</sub>者筑後傍示石銘文南之字之儀相除<sub>レ</sub>様是迄折角取計尽見<sub>レ</sub>得共、此節之儀何分届不申残念之仕合<sub>ニ</sub>御座<sub>レ</sub>。拙者内<sub>レ</sub>之取繕<sub>茂</sub>最早是迄<sub>ニ</sub>御座<sub>レ</sub>段申来<sub>レ</sub>由。依之惣七、李七福岡へ罷出役筋<sub>江</sub>右之段申上内<sub>レ</sub>得差図<sub>レ</sub>上、御相談可仕<sub>与</sub>之趣武七を以申来<sub>レ</sub>間、乍此上宜御心配被下度存<sub>レ</sub>旨答遣。

一、十月朔日、三国割塚<sub>江</sub>大勢見分之模様<sub>ニ</sub>相見<sub>レ</sub>段、村方<sub>ヲ</sub>德介<sub>江</sub>知らせ<sub>レ</sub>。

付、早速重右衛門を以様子伺せ<sub>レ</sub>處、福岡役筋与<sub>レ</sub>之見分<sub>与</sub>相聞<sub>レ</sub>。

一、十月六日、原田村組頭徳四郎參<sub>レ</sub>者御相談筋御座<sub>レ</sub>間、明日藤本惣七、庄屋李七御宅<sub>江</sub>參上仕度存<sub>レ</sub>。御差支無<sub>レ</sub>之哉御伺申上<sub>レ</sub>様李七申付<sub>レ</sub>段申<sub>レ</sub>間、随分差支無御座<sub>レ</sub>。御入来被下<sub>レ</sub>様答遣。

一、十月七日、藤本惣七、山内李七、組頭武七、下吉人四ッ比參<sub>レ</sub>付、惣七是迄段<sub>レ</sub>心配致し殊<sub>ニ</sub>初来之儀に付、盃差出、五献<sub>ニ</sub>而後茶漬等差出、重右衛門、九郎右衛門<sub>茂</sub>召寄為致相伴餐応仕<sub>レ</sub>。扱兩人申<sub>レ</sub>者筑後南之字望<sub>レ</sub>付、是迄行徳龍介取繕致<sub>レ</sub>得共、役筋聞入無<sub>レ</sub>之行徳<sub>ヲ</sub>及断<sub>ニ</sub>付、我々<sub>江</sub>其段役筋<sub>江</sub>申出<sub>レ</sub>處、役筋<sub>ヲ</sub>被申<sub>レ</sub>者筑後方全我意<sub>ニ</sub>付得共、熟談筋之儀<sub>ニ</sub>付、懸合<sub>ニ</sub>而理非申詰<sub>レ</sub>而者趣意違<sub>ニ</sub>相成<sub>レ</sub>間、筑後方氣取<sub>レ</sub>かず<sub>レ</sub>腹之取斗致<sub>レ</sub>様被申付<sub>レ</sub>間、傍示石を御三国割塚<sub>ニ</sub>不建、御三領共控石<sub>ニ</sub>而可建所<sub>ニ</sub>傍示石を建<sub>レ</sub>得者控石<sub>ニ</sub>不及、又筑後方西さへはぶき<sub>レ</sub>得者北東南迄<sub>者</sub>望<sub>ニ</sub>彫らせ<sub>レ</sub>而兩國<sub>ニ</sub>差支<sub>茂</sub>無<sub>レ</sub>之。尤傍示石与<sub>レ</sub>御三国境石迄之直繩之間數、方位等<sub>者</sub>取替證文<sub>ニ</sub>委細者載<sub>レ</sub>得者是亦却<sub>而</sub>最前之極与<sub>レ</sub>手堅く相成<sub>レ</sub>由<sub>ニ</sub>而則絵図持參仕<sub>レ</sub>付、私申<sub>レ</sub>者筑前御役筋思召被入御念御儀、扱又惣七心配之段<sub>レ</sub>致挨拶取持仕暮<sub>ニ</sub>及引取被申<sub>レ</sub>。

一、同八日、庄屋徳介御役所<sub>江</sub>右絵図差出委細口上申上<sub>レ</sub>處、筑前取計方尤<sub>ニ</sub>存<sub>レ</sub>間、早<sub>レ</sub>申談<sub>レ</sub>様御手代中を以被仰付<sub>レ</sub>付、即刻使重右衛門を以三沢<sub>江</sub>申遣<sub>レ</sub>。御相談筋御座<sub>レ</sub>間、李七、德介、明九日其元<sub>江</sub>參申度<sub>レ</sub>。差支有<sub>レ</sub>之間數哉尋遣<sub>レ</sub>處、随分參吳<sub>レ</sub>様卯八申<sub>レ</sub>付重右衛門<sub>者</sub>直<sub>ニ</sub>原田<sub>江</sub>參、右之通李七へ申向、夜半比罷帰。

一、十月九日、下吉人召連三沢十次郎方へ參待合居<sub>レ</sub>處、李七<sub>江</sub>頼<sub>而</sub>相見卯八方<sub>江</sub>兩人之土産樽着持參十次郎案内<sub>ニ</sub>庄屋卯八方<sub>江</sub>參<sub>レ</sub>處、村内者百姓六人召寄居直<sub>ニ</sub>盃差出九献<sub>ニ</sub>而後本膳差出餐応不輕<sub>レ</sub>。半比李七<sub>ヲ</sub>右絵図差出申<sub>レ</sub>者割塚立石之儀傍示石之建所存寄御座<sub>レ</sub>間、此絵図面之通仕度徳介殿<sub>江</sub>御相談申<sub>レ</sub>處、則对州御領御差支無<sub>レ</sub>之段御役筋<sub>ヲ</sub>被仰<sub>レ</sub>由<sub>ニ</sub>御座<sub>レ</sub>。貴様思召、猶又御当所御役筋如何御座<sub>レ</sub>哉<sub>与</sub>申<sub>レ</sub>處、卯八右絵図得<sub>レ</sub>与披見いたし申<sub>レ</sub>者此方

南之字を加度段、先達而申進ハ儀拙者江茂氣之毒ニ存ハ得共、不任心底所与り無  
抛申進、就夫者追々御取合ハ茂可被成与相察罷在ハ外、和熟之思召を以御双方与  
りケ様ニ御氣を被付被下ハ段千萬忝内甚以恥入存ハ。此仕法ニ何角与申儀毛頭  
無御座ハ得共、為念役筋江申出ハ上近日御答可申ハ間、夫迄猶豫致與ハ様申ハ  
ニ付、李七、徳介夜ニ入引取。

一、十月十六日、三沢村幸介参申ハ者去ル九日被仰聞ハ仕法通役筋江伺出ハ外、  
尤ニ被思召与の事ニ付、則銘文書せ原田江遣ハ。左様御承知可被下卯八申進  
外。

一、十一月廿二日、ハッ比李七ハ使武七を以申遣ハ者筑後傍示石今日迄出来ハ  
ニ付、御差合無御座ハハ、明日ハ建方ニ取掛可申、尤三沢江御問合被下御答被  
仰聞被下ハ様申来ハニ付、此方江差合無御座ハ間、三沢江申遣ハ同然ニ御答可  
申段返答いたし即刻九郎右衛門を以右之段申遣ハ外、三沢江差支無之則者百  
姓被差添ハニ付、九郎右衛門同道ニ而李七方江参、双方差合無之段申入、翌廿三  
日之建方手当申談罷帰。

一、十一月廿三日、三国御境石今日ハ建掛りハ段、御手代中迄九郎右衛門を以早  
天御届申上、九郎右衛門直ニ立石場所江参徳介、重右衛門、出夫拾人傍示石  
之履石其外諸道具取持せ五ツ頃場所江参居ハ外、頓而原田与り庄屋李七、組頭  
又介、武七、扱又藤本惣七相見ハ得共、三沢出浮延引ニ付、追々人遣仕ハ外、  
漸四ツ半比庄屋卯八、組頭十次郎、幸介、出夫拾人召連参ハニ付、直御三領傍  
示石之建所三方立会相極。扱又、惣七丸曲之法諸道具取出し方位を極十間調べ  
相済居ハ内二村江出来居ハ建石持来ハ得共、三国石ニ取掛ハ間無之御三領傍示  
石斗建方相済三方引取。

一、同廿四日、徳介、重右衛門、九郎右衛門、人夫拾人、筑前ハ惣七、李七、又  
介、武七、二村石工式人并出夫拾人、筑後ハ卯八、十次郎、幸介、出夫拾人、  
五ツ半比相揃御三国境割塚石建方ニ取掛、七ツ半比迄建方石組芝臥迄相済、三  
領催合拵させハ酒肴取寄、暮六ツ半比迄祝仕ハ。但、昨廿三日者三方催合ニ而出  
夫斗ニ酒給させハ。扱又、傍示石之履石迄者二村石工届兼ハ由ニ付、園部下村

石屋江拵させ三沢分茂頼ニ付、同然ニ拵ハ。

一、御三国御境石江

御領分御境石ハ方位巴式步式厘ニ当ル

直繩四拾九間三尺三寸

筑前御境石ハ方位申式步七厘ニ当ル

直繩三拾壹間老尺三寸

筑後御境石ハ方位亥ノ初ニ当ル

直繩三拾八間

右之通建方相済ハニ付御三方絵図ニ裏書證文を以取替し可仕段申談、絵図者御三  
領共藤本惣七江頼ハ。

一、文化三寅正月十四日、李七参申ハ者旧冬惣七へ御同然頼置ハ取替絵図出来差  
送ハ間、則持参仕ハ。且又裏書證文草案同人認遣ハ間、得与御披見ハ間、  
思召有之ハハ、御書入可被下、将又三沢江愛許ハ御遣ハ被下勿論御双方共  
御役筋之御内見可有之奉察ハ旁御手数相済ハハ、一日早々取かわし御互安  
心仕度御座ハ旨申ハニ付、御尤存ハ。扱、惣七殿始終之御世話被下忝次第二御  
座ハ間、聊御礼申伸度三沢与此方使して重右衛門儀今朝ハ田嶋村江差遣ハ。  
猶又、貴様ハ宜被仰入被下度段挨拶仕、扱又、往還北境石之儀当春中二者立  
申度存ハ段申ハ外、李七答、右證文取かわし相済ハハ、早速其筋御熟談可仕  
与申幕方罷帰ハ。

一、正月十五日、早朝右絵図及證文草案御役所江差上委細申上ハ外、則御何被下  
御会席御評議之次第被仰聞ハ者裏書證文草案者右之通ニ而可然絵図筆者之儀城  
戸村与原田村之取かわし絵図者肥前与筑後、筑後与筑前之境委細書載ニ不及  
城戸村与三沢村之取替絵図者肥前与筑前、筑前与筑後之境委細不及書載唯取  
かわし向合斗之境委細書載ハ通之下々書ニ付、此儀皆同様之仕立ニ何連之御  
境取替絵図毎ニ委數相分りハ通省之度被思召ハ間、早々三沢江相談之上同  
然ニ原田江申向ハ様被仰付ハ間、同日直三沢庄屋方江参挨拶相済、右絵図及  
裏書之草案差出ハ外、卯八寛々致披見ハニ付、右絵図面之儀同様之仕立ニ何

連之御境、委敷相分ハ様書載<sub>レ</sub>而、取替<sub>レ</sub>方可然存<sub>レ</sub>。貴様<sub>江</sub>者如何被思召<sub>レ</sub>哉  
与申<sub>レ</sub>処、卯八答、最前<sub>レ</sub>拙者<sub>茂</sub>其儀を存<sub>レ</sub>。全書載<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>社御三方熟談之趣意  
<sub>二</sub>茂<sub>一</sub>可相叶、希<sub>者</sub>原田<sub>江</sub>其通を申入度、尤拙者方ハ家内病人有之難差明<sub>レ</sub>間、貴  
様原田<sub>江</sub>御出被下<sub>レ</sub>ハ、此方<sub>レ</sub>ハ組頭差遣同然之存寄<sub>与</sub>申入<sub>レ</sub>方可然段卯八申  
<sub>レ</sub>付、随分其通可仕明日參<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>間、老<sub>人</sub>無間違御遣可有之<sub>与</sub>申談<sub>レ</sub>夜四ッ  
比罷帰<sub>レ</sub>。

一、藤本惣七段<sub>レ</sub>世話致<sub>レ</sub>付、城戸、三沢兩村<sub>レ</sub>之為挨拶金子百疋、百田紙卷  
束、正月十四日与<sub>レ</sub>重右衛門、田嶋村庄屋<sub>江</sub>持參<sub>レ</sub>処、惣七<sub>者</sub>中村之庄屋<sub>二</sub>而  
嶋村<sub>者</sub>近來之請持<sub>二</sub>而掛勤之由屋番平介与<sub>レ</sub>中村<sub>江</sub>人遣<sub>レ</sub>処、暮方惣七相見段  
<sub>レ</sub>取持有之一宿仕、翌十五日、福岡松はやし見物仕、同十六日罷帰。

一、同十六日、原田庄屋へ挨拶仕居<sub>レ</sub>内三沢与<sub>レ</sub>十次郎參、扱、段<sub>レ</sub>御世話被下  
<sub>レ</sub>取かわし絵圖之儀絵圖毎<sub>二</sub>御三領之境委敷書載致度、双方同然之存念<sub>二</sub>御座  
<sub>レ</sub>段申入<sub>レ</sub>処、李七答、左様之思召社無御遠慮被仰聞<sub>レ</sub>様先日<sub>茂</sub>申入置<sub>レ</sub>。早  
<sub>レ</sub>役筋へも申出<sub>レ</sub>而、御双方之思召通取計可仕、尤五六日は御待被下<sub>レ</sub>様申<sub>レ</sub>  
付、双方罷帰。

一、同廿七日、右様子為承重右衛門原田<sub>江</sub>遣<sub>レ</sub>処、李七右筋<sub>二</sub>付、山家宿代官所  
<sub>江</sub>參居<sub>レ</sub>。留守<sub>二</sub>付罷帰。

一、二月二日、様子為聞合三沢<sub>レ</sub>幸介參<sub>レ</sub>付、九郎右衛門差添原田<sub>江</sub>遣<sub>レ</sub>処、  
李七申<sub>レ</sub>者、御役筋<sub>江</sub>伺出置<sub>レ</sub>得共今以差圖無之、尤先頃德介殿、十次郎殿<sub>へ</sub>茂申  
<sub>レ</sub>通御兩領之御氣付通可宜存<sub>レ</sub>付、近日福岡<sub>江</sub>罷出御氣付通取計<sub>レ</sub>上御知ら  
せ可申<sub>レ</sub>間、此段兩庄屋<sub>江</sub>申入置<sub>レ</sub>様申<sub>レ</sub>付、九郎右衛門、幸介罷帰。  
一、同廿五日朝、德介原田李七方<sub>江</sub>參、右返答延引有之<sub>レ</sub>者如何之訳<sub>二</sub>付哉<sub>一</sub>与  
<sub>レ</sub>処、嘸<sub>レ</sub>御待遠<sub>レ</sub>可有御座、拙者<sub>江</sub>夫己存儀<sub>二</sub>御座<sub>レ</sub>得共、請持之役頭痛<sub>二</sub>  
付、衆儀延引仕<sub>レ</sub>間、今暫相待呉<sub>レ</sub>様李七申<sub>レ</sub>付罷帰。

一、三月四日、九郎右衛門原田<sub>江</sub>遣<sub>レ</sub>得共、未相分段李七相答。  
一、同七日、原田<sub>レ</sub>武七參<sub>レ</sub>者、取替<sub>レ</sub>絵圖之儀段<sub>レ</sub>延引仕<sub>レ</sub>得共、当月十五六  
日<sub>二</sub>掛<sub>レ</sub>而者、埒明可申<sub>レ</sub>間、夫迄御待被下<sub>レ</sub>様李七<sub>レ</sub>申進<sub>レ</sub>。

一、三月廿一日、德介原田<sub>江</sub>參<sub>レ</sub>処、李七出違<sub>二</sub>付、組頭又助召呼様子承<sub>レ</sub>得<sub>者</sub>  
李七<sub>口</sub>役筋<sub>江</sub>之御返答延引<sub>二</sub>付甚当惑仕、今日は山家宿之代官所<sub>江</sub>參様子<sub>二</sub>依  
直<sub>二</sub>福岡<sub>江</sub>參急埒仕様御願申覚悟<sub>二</sub>罷出居<sub>レ</sub>。何連帰次第御答可被申遣又助  
申<sub>レ</sub>付罷帰。

一、三月廿八日、又<sub>レ</sub>德介原田<sub>江</sub>參<sub>レ</sub>処、李七留主<sub>二</sub>付、組頭又助、武七、兩人  
召寄様子承<sub>レ</sub>処、李七義去ル廿三日今福岡<sub>二</sub>罷出追<sub>レ</sub>被願<sub>レ</sub>得共、役筋<sub>レ</sub>何共  
御答無之、甚不審<sub>二</sub>存廿六日罷帰<sub>レ</sub>処、昨廿七日御用之由申來、今朝<sub>レ</sub>福岡<sub>へ</sub>  
罷出<sub>レ</sub>。定<sub>而</sub>此節<sub>者</sub>相分可申哉<sub>二</sub>存<sub>レ</sub>段申<sub>レ</sub>付、德介<sub>レ</sub>尋<sub>レ</sub>先頃李七殿御  
咄<sub>二</sub>請持之御役頭御痛之由、其御役頭<sub>与</sub>申<sub>者</sub>御国中之御境目御請持<sub>二</sub>付哉、御  
苗字ハ何と申御方<sub>二</sub>而<sub>レ</sub>哉<sub>与</sub>申<sub>レ</sub>得<sub>者</sub>兩人申<sub>レ</sub>者、先年<sub>者</sub>御国中之御境目役有之  
由承居<sub>レ</sub>。近頃<sub>者</sub>其近辺之御代官<sub>レ</sub>御請持<sub>二</sub>而既<sub>二</sub>当村<sub>レ</sub>萩原、山口、平等寺村  
之権現迄<sub>者</sub>山家宿之代官原清七殿御請持<sub>二</sub>て権現<sub>レ</sub>西<sub>者</sub>埋金村之代官御請持<sub>二</sub>  
<sub>レ</sub>。当村<sub>レ</sub>東四五ヶ村<sub>者</sub>当駅之代官竹森唱生請持<sub>二</sub>付段申<sub>レ</sub>付、右御代官御  
格式ハ<sub>与</sub>尋<sub>レ</sub>処、山家、原田<sub>者</sub>御馬廻<sub>二</sub>而御座<sub>レ</sub>。余<sub>者</sub>存知不申<sub>レ</sub>、御役頭御痛  
与李七申<sub>レ</sub>者、御笠郡之奉行村上清内殿<sub>二</sub>而可有御座存<sub>レ</sub>。尤他領御境目之儀<sub>者</sub>  
御家老中<sub>江</sub>御聞被成<sub>レ</sub>之様<sub>二</sub>承<sub>レ</sub>段又助、武七申<sub>レ</sub>。

一、四月三日晚四ッ比、原田<sub>レ</sub>又助參<sub>レ</sub>者、李七唯今福岡<sub>レ</sub>罷帰<sub>レ</sub>得共、今以一  
件埒明不申、依之明日<sub>者</sub>山家<sub>二</sub>參又<sub>レ</sub>福岡<sub>へ</sub>參覚悟<sub>二</sub>御座<sub>レ</sub>。左様承知致<sub>レ</sub>様  
李七申遣<sub>レ</sub>付、翌四日早朝、德介原田<sub>江</sub>參様子承<sub>レ</sub>処、李七申<sub>レ</sub>者、役筋<sub>江</sub>申  
上<sub>レ</sub>得共、伺<sub>二</sub>差出置<sub>レ</sub>絵圖之在所<sub>茂</sub>不相分<sub>レ</sub>間、此節<sub>者</sub>御兩領与<sub>レ</sub>御催促度  
<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>間、何卒急埒被下<sub>レ</sub>通願書差出、山家代官之奥書を請郡奉行役所<sub>江</sub>差上、  
夫与<sub>レ</sub>御家老中<sub>江</sub>被差上被下<sub>レ</sub>様取計<sub>レ</sub>覚悟<sub>二</sub>御座<sub>レ</sub>。左<sub>レ</sub>ハ、御前御目附中  
欵御記録方<sub>二</sub>有之<sub>レ</sub>相分<sub>レ</sub>次第御差圖可有之<sub>二</sub>付、夫迄御待被下<sub>レ</sub>御兩領共<sub>二</sub>御  
役筋<sub>へ</sub>御断被仰上置被下<sub>レ</sub>得と李七申<sub>レ</sub>。

一、五月三日、右絵圖取かわし余<sub>レ</sub>打延<sub>レ</sub>付、様子承<sub>レ</sub>て三沢村十次郎參<sub>レ</sub>  
付、重右衛門差添原田<sub>へ</sub>遣<sub>レ</sub>処、李七相痛居<sub>レ</sub>付、快次第役筋<sub>へ</sub>罷出承<sub>レ</sub>  
上御答可申段申<sub>レ</sub>付、兩人罷帰。

一、六月十一日、原田与り武七参申外も李七之も長々相痛一円快方不仕外間、絵  
図之儀伺<sub>ニ茂</sub>罷出得不申外間、快方迄為御断御当所々三沢迄私差遣申外段申来。  
一、七月五日、原田又助参申外者取かわし外絵図之義御両領御氣付通仕外様役  
筋外被申付外間、近々絵図并書付委細相認御相談<sub>ニ</sub>不及段李七与り申進外。  
一、八月二日、絵図及記書付下地李七持参外<sub>ニ</sub>付、翌日差上三沢村<sub>江茂</sub>九郎右衛門  
を以差遣。

一、九月十二日、絵図取替之儀九郎右衛門を以申遣外処、双方共<sub>ニ</sub>記書付裏書共  
未出来不申由。

一、同廿四日、右取かわし之儀重右衛門を以申遣外処、原田<sub>者</sub>出来居外得共三沢  
出来不申外。

一、十月七日、又々重右衛門三沢へ遣外処、卯八申外<sub>者</sub>取替之絵図記書付裏書共  
出来外得共、拙者近頃相痛外<sub>ニ</sub>付、今暫取かわし之出会相延外様申遣。

一、十一月三日、九郎右衛門を以卯八痛之様子尋遣外処、快方<sub>ニ</sub>者外得共いまた歩  
行致程<sub>ニ</sub>無之、希ハ此節之出会<sub>ニ</sub>者参申度段卯八申外。

一、十一月十三日、三沢村幸介参申外<sub>者</sub>卯八<sub>江茂</sub>久々相痛外<sub>ニ</sub>付、絵図取かわし<sub>茂</sub>  
打延申外。尤近日全快仕外間、出会之日取相極申遣外様申来外。重右衛門差添  
原田<sub>江</sub>遣外処、李七痛<sub>ニ</sub>て日取難極兩人罷帰。

一、同廿日、重右衛門原田<sub>江</sub>遣外得共、李七相痛いまた出会仕得不申段答。

一、十二月二日、九郎右衛門原田<sub>江</sub>遣外処、李七<sub>江茂</sub>快方<sub>ニ</sub>而近日出会可仕段申外  
<sub>ニ</sub>付、九郎右衛門、又助同道<sub>ニ</sub>而直<sub>ニ</sub>三沢<sub>江</sub>参、来六日絵図取かわし日取極来。

一、十二月六日、御三領絵図為取替原田外李七、又助、武七、下老入、三沢外卯  
八、十次郎、幸介、下老入、此当々徳介、重右衛門、九郎右衛門、白坂新左門

宅<sub>江</sub>九ツ半比相揃挨拶相添直<sub>ニ</sub>三方之絵図裏書迄一々相改外処、三沢村之裏書  
證文<sub>ニ</sub>少々削外所有之<sub>外</sub>ニ付、李七、徳介与り申外<sub>者</sub>手跡<sub>者</sub>見事<sub>ニ茂</sub>外得共、大

切之取替證文<sub>ニ</sub>付、削直し外所有之<sub>外</sub>ニ付、何分難請取段申外得<sub>者</sub>卯八尤<sub>ニ</sub>存  
外。併、今日各請取不被申時<sub>者</sub>先今日之出合相止申<sub>ニ</sub>而可有之。左外時絵図与り

致居外ハ、冬内<sub>ニ</sub>者出来兼可申、左外<sub>而</sub>者余り打延外<sub>ニ</sub>付、先々取替被呉御役筋

御得心難被成趣<sub>ニ</sub>外ハ、追<sub>而</sub>書改引替可申段達<sub>而</sub>申外<sub>ニ</sub>付、先取替可仕段双  
方申外。扱又、原田与り此方<sub>江</sub>参外絵図裏書<sub>ニ</sub>書損有之、左<sub>ニ</sub>

○肥前国对州御領基肆郡城戸村與筑後国御原郡三沢村、筑前国御笠郡原田村  
此通可有之処

○肥前国基肆郡对州御領城戸村与  
右之通書載有之<sub>外</sub>ニ付、何分此通<sub>ニ</sub>而者難請取段徳介与り申外処、李七相驚前以  
幾編<sub>茂</sub>下地書取替相極置外処、筆<sub>者</sub>誤<sub>与</sub>者申なから拙者不氣付所無申分次第<sub>ニ</sub>

外。併先刻卯八殿被申外通冬中<sub>ニ</sub>者出来兼可申外<sub>ニ</sub>付、来陽早々書改引かへ可外  
外間、先今日<sub>者</sub>請取呉外様申外<sub>ニ</sub>付、卯正月<sub>ニ</sub>引替之申極<sub>ニ</sub>而三方押印相濟取か

わし仕外。  
但、今日出会入料<sub>者</sub>三方持寄酒食等仕夜九ツ比三方引取申外。

一、卯正月十三日、為年礼徳介原田<sub>江</sub>参外処、挨拶相濟外上李七申外<sub>者</sub>旧冬取替  
仕外絵図之裏書書損<sub>ニ</sub>付、仕立替召置外。近日持参引替可申外。扱又、去ル年

来時々被申聞置外御両国御境建石之儀、当春<sub>者</sub>早々役筋<sub>江</sub>申出得差図外上御互  
御熟談石立相濟安心仕度存罷在外<sub>与</sub>申外<sub>ニ</sub>付、何卒御急被下度存外段徳介外相

答。  
一、二月廿六日、李七参申外<sub>者</sub>正月<sub>ニ</sub>貴様御出被下外後相痛、是迄年礼延引甚失

礼之段相断。扱又、仕立替之絵図持参外<sub>ニ</sub>付、引替申外。  
但、去冬請取置外絵図<sub>者</sub>正月十五日申下<sub>ケ</sub>置外間、今日引替、尤引替外絵

図<sub>者</sub>二月廿七日差上ル  
口上手覚

一、昨五日八ツ比原田庄屋方<sub>江</sub>参外処、李七儀前日与り福岡<sub>江</sub>罷出居外間、私  
江<sub>茂</sub>其俣罷帰申外。然処昨六日、李七私宅<sub>江</sub>参申外<sub>者</sub>建石御相談之義段々延引

仕、尤昨五日役筋外被申付外<sub>者</sub>各建石御熟談之上、取計外通被申付外間、一刻  
早々為御知申度罷越外。石工之方<sub>者</sub>明日<sub>ニ</sub>茂拙者二村<sub>江</sub>参直<sub>ニ</sub>相頼可申、猶

又建所方角極等之義<sub>者</sub>追々相談可申外<sub>ニ</sub>付、御心配致呉外段挨拶仕。扱又、覆

又建所方角極等之義<sub>者</sub>追々相談可申外<sub>ニ</sub>付、御心配致呉外段挨拶仕。扱又、覆

石之儀者 近く私見立寄置可申筈<sup>二</sup>申組<sup>一</sup>。先く右之段申上<sup>一</sup>。

城戸村庄屋

四月七日

徳介

一、四月十五日、九郎右衛門を以原田<sup>江</sup>申遣<sup>一</sup>者 覆石之義近日寄可申<sup>一</sup>。凡八九十人<sup>二</sup>寄<sup>一</sup>程之石<sup>二</sup>茂可仕哉<sup>一</sup> 与 相談申遣<sup>一</sup>処、李七答六十人程も掛<sup>一</sup>石<sup>二</sup>而可然存<sup>一</sup>。

一、同十七日、人夫三人召連罷出所<sup>一</sup>見分致<sup>一</sup>内かたわら之石<sup>二</sup>極。尤右長過片小く<sup>一</sup>間、翌十八日園部下村石屋孫平老工<sup>二</sup>而石形<sup>一</sup>越造。

一、同十九日、右石寄人夫四拾八人<sup>二</sup>而暮方迄<sup>一</sup>場所へ寄<sup>一</sup>。但、双方深田<sup>二</sup>而難寄<sup>一</sup>間、昨十八日悻徳八を以御願申上置<sup>一</sup>間、今十九日、吉松軍治殿御出被成松木式間余之物拾本御伐渡被下、是を筑前領之田<sup>二</sup>敷置同所家之脇<sup>一</sup>引廻寄。

口上手覚

御境石之為覆石寄、当月十九日、人夫召連罷出居<sup>一</sup>処、二村石屋嘉助場所迄参申<sup>一</sup>者 原田庄屋<sup>一</sup>御境石式本急<sup>二</sup>出来<sup>一</sup>様申来、早速取掛石を割<sup>一</sup>処、少き出来<sup>一</sup>得共、夫<sup>二</sup>而御済し可被成哉、割直可申哉<sup>一</sup> 与 申来<sup>一</sup>付、翌廿一日、二村<sup>江</sup>私参見<sup>一</sup>上割直<sup>一</sup>様相談仕置、同廿五日為様子見重右衛門遣<sup>一</sup>処、後割之石<sup>一</sup>至<sup>一</sup>而宜御座<sup>一</sup>間、近く出来<sup>一</sup>通可仕段申聞<sup>一</sup>。然処、昨廿八日、原田庄屋李七私宅へ参<sup>一</sup>処、私儀大庄屋元へ罷出居<sup>一</sup>付、家内へ申置<sup>一</sup>者 此節石建方<sup>二</sup>付、思召承度筋有之罷越<sup>一</sup>へ共、御出違<sup>二</sup>付罷帰<sup>一</sup>。明日又々参申度<sup>一</sup>へ共、近日少く不快<sup>二</sup>付弥之所難申置何連其内御目掛咄可仕<sup>一</sup> 与 の趣申置<sup>一</sup>間、今朝早天私原田<sup>江</sup>参<sup>一</sup>処、李七申<sup>一</sup>者 昨日参<sup>一</sup>外之儀<sup>二</sup>無之、御境石建所之儀<sup>一</sup>者如何被存<sup>一</sup>哉 与 申<sup>一</sup>付、私答、此儀ハ去々年御取合申置<sup>一</sup>通樹木等植<sup>一</sup>付<sup>一</sup>而者往<sup>一</sup>御田地之木景<sup>二</sup>相成御迷惑相察<sup>一</sup>間、石建<sup>二</sup>相極場所<sup>一</sup>者 相中真境際<sup>二</sup>建可申段申遣置<sup>一</sup> 与 申<sup>一</sup>得者、李七申<sup>一</sup>者 於当領<sup>一</sup>者 御境松を取除其跡<sup>二</sup>立<sup>一</sup>義真境<sup>二</sup>可有之存<sup>一</sup> 与 申<sup>一</sup>付、其儀<sup>一</sup>者 如何之御證拠在之<sup>一</sup> 而 被仰義<sup>二</sup>付哉、既対州領<sup>一</sup>之儀<sup>一</sup>者 慶長三年<sup>二</sup>被成下<sup>一</sup>領地<sup>二</sup>而其時分之松枯木いたし<sup>一</sup> 付植統申たる松<sup>二</sup>而御座<sup>一</sup>。尤御境目松<sup>二</sup>而無<sup>一</sup>之<sup>一</sup>間、御領<sup>一</sup>御立会等<sup>一</sup>茂無<sup>一</sup>之<sup>一</sup> 与 私申<sup>一</sup>得者 李

七又申<sup>一</sup>者 其儀<sup>一</sup>者 御役筋之御記録<sup>二</sup>有之<sup>一</sup>哉、又申伝<sup>二</sup>而御座<sup>一</sup>哉 与 申<sup>一</sup>付、私答、御役筋御記録<sup>二</sup>茂定<sup>一</sup>而可委<sup>一</sup>与 相察<sup>一</sup>。右申<sup>一</sup>者 拙者家之覚書<sup>二</sup>而御座<sup>一</sup> 与 申<sup>一</sup>へ者 左<sup>一</sup>ハ、貴様方ハ対州御領始比<sup>一</sup>之御相統<sup>二</sup>付哉<sup>一</sup> 与 李七申<sup>一</sup>間、御尋<sup>二</sup>付御咄申<sup>一</sup>。拙者方<sup>一</sup>茂永正年以來当村相統仕<sup>一</sup>得者 右様之儀<sup>一</sup>者 先祖共留書<sup>二</sup>委しく致置<sup>一</sup>。右松<sup>一</sup>者 当村倉谷山<sup>一</sup> 与 申所<sup>一</sup>直し植置<sup>一</sup>、其時分見合之松<sup>一</sup> 与 而倉谷山<sup>一</sup>江植置<sup>一</sup>松有之、是<sup>一</sup>者 いた能栄へ居<sup>一</sup> 与 咄申<sup>一</sup>へ者 李七申<sup>一</sup>者 夫程委敷被仰<sup>一</sup>得共、取替之證文迎<sup>一</sup>茂無之儀<sup>二</sup>而当方役筋<sup>一</sup>江難申實、是迄松無之<sup>一</sup>ハ、此節之石立方<sup>二</sup>手入<sup>一</sup>茂有之<sup>一</sup>間敷存<sup>一</sup>。比方<sup>二</sup>而者 御境松と有之儀<sup>一</sup>ニて貴様思召通私之取計出来不申氣之毒仕<sup>一</sup>段申<sup>一</sup>付、私又申<sup>一</sup>者 先刻申<sup>一</sup>通御境目松<sup>二</sup>無之真境<sup>一</sup>引取植<sup>一</sup>故取替證文等無御座、素り御立会も無之段申<sup>一</sup>得者 李七暫何<sup>一</sup>と茂返答無之<sup>一</sup>間、貴様是迄御境目<sup>一</sup>与 被存居<sup>一</sup>所も見申度場所迄参<sup>一</sup>得かしと私申<sup>一</sup>得者 隨分参可申<sup>一</sup> 与 申同道仕、猶又彼之場所<sup>二</sup>而咄合仕<sup>一</sup>得共、相替儀無御座、尤も李七帰掛<sup>二</sup>申<sup>一</sup>者 御互行違之処彼筋へ不申出<sup>一</sup>而者 相濟間敷、併、今一応双方出合之上可申出、今日之儀ハ全御内<sup>二</sup>而御聞被下<sup>一</sup>様御互申出置、近日藤本惣七相招同人存寄を承見申度、希<sup>一</sup>者 御役筋之御取合<sup>二</sup>不相成<sup>一</sup>て建方成就仕度千万存<sup>一</sup> 与 申<sup>一</sup>付、拙者<sup>一</sup>江其通社希儀<sup>二</sup>御座<sup>一</sup>間、隨分惣七殿御出相待可申段相答双方罷帰居<sup>一</sup>処、石屋嘉助参申<sup>一</sup>者 石式本共九寸角<sup>二</sup>而長八尺六寸明朔日昼比迄<sup>一</sup>仕上<sup>一</sup>ケ仕<sup>一</sup>間、銘文書遣<sup>一</sup>様申来<sup>一</sup>へ共、右之振合<sup>二</sup>付今兩三日相待<sup>一</sup>様李七与<sup>一</sup>申聞罷帰申<sup>一</sup>。

卯四月廿九日

城戸村庄屋

徳介

口上

当日御祝詞申上<sup>一</sup>。只今原田李七<sup>一</sup>之使有之元禄年中之絵図前書有之<sup>一</sup>を写差遣<sup>一</sup>間、吟味之上致返答様申来<sup>一</sup>付、拙者義被見掛<sup>一</sup>通齒を相痛近日打臥罷在<sup>一</sup>間、快方次第此方<sup>一</sup>御答可申段答遣<sup>一</sup>。先く別紙入御覽<sup>一</sup>。私儀少く快方仕<sup>一</sup>ハ、明日<sup>二</sup>茂上<sup>一</sup>可仕<sup>一</sup>間、宜敷御衆儀被成下<sup>一</sup>様奉頼<sup>一</sup>。以上

卯 五月五日

城戸村庄屋

徳介

御手代

五月五日原田多相達ハ元禄年絵図之前書左ニ記之。元禄十三年三月五日、福岡表江御呼出ニ付御郡役所へ罷出ハ、御郡代柳瀬与兵衛殿被仰渡ハ此度絵図之儀ニ付、旧冬已来田代人吉田益右衛門出会ハ、先達而村役人共御境筋江立置ハ傍示田代多遂見分ハ、於彼之方も相違無之趣吉田益右衛門多申ハ、向後無違乱様傍示之通ヲ境筋与弥相心得ハ様重疊被仰付ハ、此節建ハ傍示之絵図絵師兵太夫江相頼為後年画置者也。

元禄十三年 辰 三月製之

○此印ハ今度傍示建ニ印

絵図面松之所ニ左之通傍示建ハ印面有之ハ。



口上手覚

今日四ツ比李七人遣有之、藤本惣七夜前相見ハ、貴宅へ同道可仕哉、貴様此方江御出可被下哉与申来ハ間、早速以参旁可申承之処、相痛罷在何分今日迄者参得不申ハ。得与御休息之上明日ニ私宅へ貴様同道被下ハ、可忝段返答申遣ハ、九ツ半比李七、惣七私宅へ相見ハ、相応之取持仕居ハ内惣七申ハ者此節御建石之儀ニ付、拙者江参ハ李七多毎々申越ハ得共、差掛ハ役用有之、是迄延引仕夜前参見ハ、御境筋御互思召行違有之、去ル廿九日御兩人御出会之上終日御論談有之ハ得共是非難分、尤貴様御家之御留書等至而委敷被申聞ハ段者李七多具ニ承ハ。併、原田江元禄年中田代御役人吉田益右衛門殿福岡役人へ御相对有之ハ絵図之前書等有之、其外役筋へ公儀御絵図仕立之節記録

ニ委敷可有之存ハ。扱、李七与リ写進置ハ絵図前書ニ付而者御返答承度兩人

罷越ハ段申ハニ付、私答、仰之通御境筋不存寄行違有之、去ル廿九日之次第者

具ニ御承知被有之ハ得者御出申ニ不及、昨日之御答筆談ニハ枝葉長ニ可有之

ニ付、拙者少々快方ハ、以参御答可申与存罷在ハ、幸今日御兩人御出被下

忝存ハ。扱、其御元絵図之前文於此方可申消様無之ハ。尤右松植ハ節之拙者

方覚書者於其御方ニ者如何被思召ハ哉与申ハ、李七申ハ者其儀も同然ニ存ハ。

併、御境目松与申儀是迄私方役筋ニ買居ハ得者今更貴様方覚書ニ任ハ儀難

叶、猶又其筋を取用度段申出候ハ、拙者役義如何与存ハ与申ハニ付、私申ハ

者貴様御役儀ニ相拘与承ハ而者押而難申述ハ。对州領小狹之儀与申ながら荒野

五尺七尺に相拘申儀有之間敷、依之、李七殿御内情之趣此方役筋へ打明拙者

多御欲申上ハ、御境石此方へ引取ハ而建ハ様被申ニ而可有之、併、弥御聞得

可有之与の御請合ハ難申ハ得とも各思召次第ニ右之通取計見可申哉与私申ハハ

李七返答無之□在ハ而惣七申ハ者纒之地御拘無之段者筑前逆同前之事ニ而可

有御座、尤も右李七懇念之所御察し被下度存ハ段申ハニ付、仰之通御尤ニ承

得ハ間、右之通申儀ニ御座ハ。何連宜御工夫可被下与申私暫引取申ハ。然ハ、

李七儀ハ急用有之ハ由ニ而家内多遣有之先ニ罷帰ハ。其後惣七申ハ者拙者存

寄之取繕可仕、右松者双方多出夫ニ而伐除根迄少不残堀取往還際杯不差間場

所之御境目ニ積立、腐リハ迄双方多不手差通堅相極メ、地形者平地一面ニ仕、

畝歩を改、歩之勺迄無相違ニツ割ニノ中ニ相当ル所ニ御双方之石を建被申度存

ハ。尤松を御境目双方ニ掛積置くさらしハ所貴様思召ニ者相叶申間敷相察ハ得

共、何とそ右之通ニ而得心仕ハ得、左ハ、原田江罷帰李七へも得心致させ上

右之取繕之事情委しく書状ニ認明朝差遣可申、左ハ而御違變無之段之御返書被

下ハ、明日中場所ニ御立会申方角を極御互銘文彫らせ置、其間ニ松を除急速

ニ建方相済可申、且又李七懇念之筋者拙者多取計江仕道可有之ニ付、即席返

答可承者差詰申ハニ付、私儀返答難差延凡請合申ハ。尤御大切之取合筋不奉窺

凡得心之体申ハ段千万奉恐入ハ。此段幾重ニ宜御執成被仰上可被下奉頼ハ。以

卯五月六日

城戸村庄屋

徳介

右手賞差上ハ処、御聞届相済ハ様御役筋ヲ被仰下ハ。翌七日、惣七於宿□□□

人遣□□□□申遣ハ処原田庄屋李七、田嶋村庄屋惣七ヲ取替之書付相達

左ニ記之。

三国枯松之儀ニ付、昨日田嶋村庄屋惣七罷越御熟談之上相決ハ覚

一、双方ハ人夫を出シ枯松伐除ケ株并根迄不残堀除ケ可申ハ事。

一、右伐除ケハ枯木者近辺之御境筋江持出捨置朽ハ迄双方ハ相障申間鋪事。

一、松株并根を不残堀除ケハ跡野地を能ナラシ致坪割野地之坪半分を肥前国ニ附、

野地之坪半分を筑前国江附ケ其中央ニ此度境石背合ニ建可申ハ。

右之通御相談相決ハ上者無違乱取計可申ハ。為念如件。

筑前国原田村

庄屋 李七 印

文化四年卯

五月七日

同国田嶋村

庄屋 惣七 印

肥前国対州領城戸村

御庄屋 徳介殿

三国枯松之儀ニ付、昨日田嶋村庄屋惣七殿被成御越熟談之上相決ハ覚

一、双方ハ人夫を出枯松伐除ケ株并根迄不残堀除ケ可申ハ事。

一、右伐除ケハ枯木者近辺之御境筋江持出捨置朽ハ迄双方ハ相障申間敷事。

一、松株并根迄不残堀除ハ跡、野地を能ナラシ致坪割、野地之坪半分を筑前国ニ

附、野地之坪半分を肥前国江附、其中央ニ此度御境石背合ニ建可申ハ。

右之通御相談相決ハ上者無違乱取計可申ハ。為念如件

肥前国対州領城戸村

文化四年

卯五月七日

筑前国田嶋村

御庄屋 惣七殿

同国原田村

御庄屋

李七殿

一、五月八日、枯松取除相談申遣。

一、同九日、枯松伐木挽三人、人夫拾人召連出、筑前ハ

惣七、李七立会。

一、同十日、同断。胴伐かた付、木挽四人、小取夫拾三人、

筑前夫拾三人、李七立会。

一、同十一日、右同断。木挽四人、人夫拾人、惣七立会。

一、同十二日、右同断。木挽四人、小取夫三人、筑前山口村ハ出夫拾三人。

一、同十三日、人夫拾人 筑前萩原村ハ人夫拾人。

一、同十四日、人夫八人 筑前山口村ハ人夫拾人。

一、同十五日、野地坪割、徳介、重右衛門、九郎右衛門、人夫八人、筑前ハ惣七、

李七、武七、又助、人夫八人。

右之人數立会野地廻り之田ニ横竪杭を打、小縄を張、坪々端坪迄合勺を改、イ

ロハ印之札を立割方野地形半分ニ取分ケ見ハ処、境石之建所相中与リ此方ニ寄

ハ得共、野地形之訳ニ而難取直、勿論筑前ハ野地形模様を幸ニ致、是非々々相中

ハ西江寄て立ハ通取計ハニ付、先立所を不極暮方ニ引取直ニ野地形并縄張坪割

之通ニ絵図を仕立、晚九ツ比迄ニ工夫付ハニ付、翌十六日、御役所江罷出右坪

割直之工風絵図入御覽、尤昨日之縄張を徳介ハ仕直ハ儀、筑前ニ対シ難致訳有

之庄屋内今卷人之立会を御願申上ハ処、則御聞通被成下姫方村庄屋定右衛門立

会ニ被仰付、即日同人江田代出会ハ而委相内談仕。

一、同十七日早朝、重右衛門を以原田江申遣ハ者一昨日野地坪割之次第昨日委敷役筋江も申聞ハ外、御囲ミ被成様委敷事共役筋江承得龍夫惣七殿御事遠方御越被成、数日御逗留之儀至而御苦勞御事ニ存是迄德介吉人之御相對ニ致置ハ段畢竟此方大方成次第ニ付、惣七殿ニ対し今日者庄屋内ハ今吉人罷出ハ様役筋ハ被申付ハ。依之、後刻何連之村カ庄屋吉人相加リ可申ニ付、此段得貴意置ハ趣申遣ハ外、惣七奎七申ハ者被入御念ハ御事ニ存ハ。併、御帯刀之御身分ハ御立会共ハハ、此方も其覚悟可仕与申ハニ付、重右衛門答、左様之儀ニ無之最前申ハ通之儀ニ御座ハ。惣七又尋ハ者御庄屋者何村カ御出ハハ哉、重右衛門答、德介今朝之咄ニ者若人之庄屋参ニ而可有之旨申居ハ。惣七、奎七申ハ者被仰下ハ趣委細承知仕ハ。後刻場所ニ而出会可仕段德介殿へ御申入ハ得与申ハニ付、重右衛門罷帰。

姫方村庄屋定右衛門江茂五ッ半比德介方へ参ハ間、猶又委細相談極極定右衛門、德介、九郎右衛門、重右衛門、大工安平、外出夫七人杭、竹・縄・間尺・其外諸道具取持セ参ハ外、筑前カ惣七、奎七、武七、又助出会挨拶相濟ハ上德介カ今朝重右衛門を以申遣ハ趣今一応申入、猶又定右衛門立会之趣意与申是迄御熟談中之儀ニ付、此方存寄通を致シ懸御目度存ハ。如何被存ハ哉与德介カ申ハ外、引統而定右衛門申ハ者拙者江茂前後不存与風御立会越申不遠慮ニ茂存ハ得共、全体御熟談中と承ハ得者当方之存寄通を繩張仕誠見申度御座ハ。何分被思召ハ哉与申ハ得者惣七答、御誠与有之ハ者隨分不差支儀ニ御座ハ。繩張出来ハハ、我々も其場所へ可参、夫迄者相控可罷在与申往還之松陰ニ惣七奎七休居ハニ付、十五日之杭繩札ニ不障様新ニ杭を打小繩を張、尤いまた坪積リ者不仕ハ得共、先一通見分ハ得与申遣ハ外、惣七、奎七直ニ参尤此方之積リ石之建所相中之此方見ぶり之宜所ニ立ハ様之割掛ケを致ハニ付、北之方西向之所ニ而野形悪敷纒なから野地之外ニ繩張出居ハ。惣七其所ニつと参、此所ハ如何之思召ニ而ケ様之繩張者被致ハ哉、坪を改此繩筋カ東之方坪数広クハ得者此野不切様ニ可相成ハへ共、此通ニては野切ニ相成ハ上、若又此繩筋カ西之方広クハ時者弥野切ニ相

成可申、左ハ時者如何被成ハ哉、御了簡を承可申与詰掛ハニ付、定右衛門申ハ者何連が広キと申所未相分坪を改見ハ上之衆儀ニ可仕与申ハ得者惣七又申ハ者其儀者相成不申、右之野切れニ不成通之仕様御了簡を承ハ上坪数改リ取掛可申与憤不輕眼色変而詰掛ハ。尤絵図面ニ而凡積リハ致見参ハ得共、図面之積ニ而者弥無是、此方皆々工夫致見ハへ共、此繩カ西之方、若坪数広クハ時、惣七坪数をニッ割ニ仕ハ得者坪之多少者無之ハ得共、野切ニ成ハ上相中カも西ふ入込イロ石立所相極、振合与申、殊ニ北之方纏悪敷相成ハ外何分難致、依之德介申ハハ双方之見形宜所ニ石建ハ而野地之割様者貴様改被参ハ通を用、出入ハ後取替ハ絵図面ニ委敷頭シハ様可仕与申ハ得共、惣七左様之仕法は相成不申与承引不仕、是非々々以前松有之ハ方ニ寄而此節之石越建ハ通之割掛を致ハニ付、去ル丑年御三国境石建ハ。其際ニ肥前、筑後之御境出入之形絵図面ニ書頭シ證文取替ハ者貴様素リ御存知之事ニ付、其通之仕法ニいたし、石を相中ニ建ハ外、又者繩張之内纏野闕ニ相成ハ外分を築添直繩ニ致双方之真中ニ石建ハ外、此兩段ニ相極可申全体此節之建石之儀御熟談之取計可仕与の儀者奎七殿、德介最前ニ申組たる事ニハ。然外、右之通被相募ハ而者御熟談之趣意相叶可申哉与定右衛門、德介理を尽申ハ得者惣七、奎七ハも少ハ面体を和ケハニ付、猶又熟意取計野闕之所、横七寸斗長七尺程築添直繩ニいたし西式拾坪三分壹厘肥前国ニ附、東式拾坪三分壹厘筑前国ニ附、横西カ式間四分九厘目、東カ式門四分九厘目、御境石背合之真中ニ成ハ。長拾壹間五分三厘内北カ六間目、南カ五間五分三厘目、同石之真中ニ当ル。

右之通相談相極双方引取申ハ。

一、五月十八日、定右衛門、德介、重右衛門、九郎右衛門、安平外ニ出夫六人、筑前カ惣七、奎七、武七、又助、出夫三人場所江出会双方カ之繩張、立札、杭取除、跡かた付仕、扱又、北南之御境石者中之御境石与リ傍シニ相成ハニ付、惣七丸曲之諸道具取出方位を極其上ニ而中御境石建ハ。覆石を居相濟段、證文取替ハ外左ニ記之。

證拠

三国御境野地之所、御境石可相建設申合今度御立会相改致坪割野地中<sup>ニ</sup>御境石相建<sup>ハ</sup>筈<sup>ニ</sup>付、左之通申合<sup>ハ</sup>事。

一、御境石銘文彫方出来不仕<sup>ハ</sup>付、御境石相建<sup>ハ</sup>場所<sup>ニ</sup>查石斗居置、追<sup>レ</sup>而石出来之上相建可申<sup>ハ</sup>事。

一、右野地南北之端<sup>江</sup>茂御境石、一石宛背合<sup>ニ</sup>相建可申<sup>ハ</sup>。是亦石出来迄之間、杭打置申<sup>ハ</sup>。尤方位間数左之通相改<sup>ハ</sup>事。

一、查石仕居置<sup>ハ</sup>御境石<sup>ノ</sup>南之御境石建<sup>ハ</sup>。

杭之心迄

直繩五間五分三厘 老間曲尺六尺五寸

方位午三分四厘<sup>ニ</sup>当ル

一、右同断北之御境石建<sup>ハ</sup>杭之心迄

直繩六間

右同断

方位子三分式厘<sup>ニ</sup>当ル

但、查石仕居置<sup>ハ</sup>御境石場所<sup>ノ</sup>南北野地端御境石建<sup>ハ</sup>所之杭迄<sup>者</sup>直繩通御境筋也。

右之通御互<sup>ニ</sup>申合<sup>ハ</sup>上<sup>者</sup>毛頭相違無御座<sup>ハ</sup>。御境石建方相濟<sup>ハ</sup>上、猶又絵図證文取替可申<sup>ハ</sup>。以上

筑前原田村庄屋

李七 印

同田嶋村庄屋

惣七 印

文化四年五月十八日

对州御領

姬方村御庄屋

定右衛門殿

同

城戸村御庄屋

徳介殿

此方<sup>ノ</sup>筑前<sup>江</sup>遣<sup>ハ</sup>前文右<sup>ニ</sup>同

肥前国对州領

城戸村庄屋

徳介 印

文化四年五月十八日

同

姫方村庄屋

定右衛門 印

筑前国

田嶋村御庄屋

惣七殿

同

原田村御庄屋

李七殿

一、同廿八日、重右衛門を以原田<sup>江</sup>申遣<sup>ハ</sup>者御境石銘彫之儀<sup>者</sup>未出来不申<sup>ハ</sup>哉、建方急度存<sup>ハ</sup>段申遣<sup>ハ</sup>处、石工之方承合近日御知らせ可申李相答。

一、六月九日、原田与り又助参申<sup>ハ</sup>者李七申進<sup>ハ</sup>御境石銘彫<sup>茂</sup>未出来不申、扱又、先月之大洪水<sup>ニ</sup>而<sup>当</sup>国内、夜須半郡、御笠、早良<sup>ニ</sup>かけ別<sup>而</sup>破損所兩井手所、其外用水溝、道橋之損都<sup>而</sup>急場之普請人夫積凡八万五千程之事<sup>ニ</sup>而<sup>役</sup>筋其外共殊外難<sup>ニ</sup>御座<sup>ハ</sup>間、右取繕凡相濟<sup>ハ</sup>迄右建之儀御延被下<sup>ハ</sup>様御頼談申進<sup>ハ</sup>与<sup>申</sup>付、其儀<sup>者</sup>御大切之御事随分相待可申答遣。

一、七月六日、原田<sup>ノ</sup>武七参申<sup>ハ</sup>者李七申進<sup>ハ</sup>二村<sup>ノ</sup>昨日人遣有之、御境石銘彫

茂全出来由申来<sub>レ</sub>得共、先頃日延申進<sub>レ</sub>込<sub>レ</sub>付、今暫御待被下<sub>レ</sub>様<sub>ニ</sub>有之度段申来<sub>レ</sub>間、承知致<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>相答。

一、八月二日、田嶋村庄屋惣七原田<sub>ノ</sub>武七召連参申<sub>レ</sub>者、御境石銘彫<sub>ニ</sub>茂得<sub>レ</sub>出来居<sub>レ</sub>外、夏之洪水故建方日延申進置破損所取繕<sub>ニ</sub>茂漸相濟<sub>レ</sub>付、石建方為御相談今朝<sub>ノ</sub>罷越<sub>レ</sub>。此節<sub>者</sub>乍御迷惑御宅<sub>江</sub>當時御世話<sub>ニ</sub>相成申度段申<sub>レ</sub>付、随分御逗留被下度相答。

一、同日、南<sub>ノ</sub>石根囲之篋拵、惣七指図通<sub>ニ</sub>拵掛<sub>ル</sub>人夫式人

一、同四日、篋拵大工老<sub>人</sub>、扱又篋之中<sub>ニ</sub>入<sub>レ</sub>小石寄人夫六人

一、同六日、御境石三本履石老<sub>二</sub>村<sub>ノ</sub>取寄上見重右衛門人夫四拾六人篋拵大工老<sub>人</sub>

一、同七日、石建<sub>ニ</sub>付徳介、重右衛門、人夫式拾六人、筑前<sub>ノ</sub>惣七、李七、武七、

又助、二村石屋嘉介、小工式人、人夫式拾六人、早朝場所<sub>江</sub>相揃建方道掛道具

双方<sub>ノ</sub>取寄先中之大石式<sub>ツ</sub>背合<sub>ニ</sub>建、扱南<sub>ノ</sub>石<sub>者</sub>深き所<sub>ニ</sub>立<sub>レ</sub>故、為根囲篋<sub>越</sub>

三尺余掘込篋半迄小石<sub>越</sub>詰、其上<sub>ニ</sub>履石<sub>越</sub>据へ、石式<sub>ツ</sub>背合<sub>ニ</sub>建履石<sub>ノ</sub>上<sub>へ</sub>又

小石<sub>ニ</sub>詰、其上南脇共<sub>ニ</sub>芝<sub>ニ</sub>築包、北<sub>ノ</sub>石<sub>者</sub>履石斗<sub>ニ</sub>式<sub>ツ</sub>背合<sub>ニ</sub>立、尤磁

石台丸曲之諸道具を以五月十八日取替し置<sub>レ</sub>証文面通問数方位毛頭無相違様相

改建方相濟右祝として惣人数酒給合<sub>レ</sub>。

一、同十七日中之御境石之頭<sub>ニ</sub>鑿をいたし双方一<sub>ツ</sub>鉛を鑄込、石を繋ぎ、道掛

を取除、徳介、重右衛門、人夫拾五人、筑前<sub>ノ</sub>李七、武七、又助、石工嘉介、

人夫拾五人、酒給合。

一、同日石屋嘉介<sub>江</sub>双方<sub>ノ</sub>樽代六百文、塩鯛式枚、惣濟之祝として遣。

### 建石銘文

従是西肥前国対州領 但 南石長五尺

六寸角

従是西肥前国対州領 但 中石長八尺六寸  
文化四丁卯五月建之 九寸角

従是西肥前国対州領 但 北石長四尺

六寸角

### 筑前建石銘文

従是東筑前国 但 南石長五尺

六寸角

従是東筑前国 但 中石長八尺六寸

九寸角

従是東筑前国 但 北石長四尺

六寸角

右<sub>者</sub>当八月迄<sub>ニ</sub>石建成就任追<sub>而</sub>証文為取替仕<sub>者</sub>申談置<sub>レ</sub>外、其後異論相生し證文之取替急<sub>ニ</sub>出来難仕及延引<sub>レ</sub>付、此後之記録<sub>ハ</sub>追<sub>而</sub>差上可申<sub>レ</sub>。以上

卯十二月

### 惣濟之祝仕<sub>レ</sub>。

一、同日、石屋嘉介へ双方与り樽代六百文、塩鯛式枚、惣濟之祝として遣。

一、八月廿日、立石絵図証文取替し近<sub>ク</sub>相濟度段、重右衛門を以原田江申遣。

一、同廿七日、李七私宅へ参<sub>レ</sub>者、裏書証文之草案出来筑前役筋<sub>ハ</sub>内見相濟<sub>レ</sub>間、

御領分思召有之ハ、可申聞旨<sup>二</sup>而草案持參。

絵図裏書證文

肥前国対州御領基肆郡城戸村<sup>与</sup>筑前国御笠郡原田村境ほのけみく<sup>尔</sup>与<sup>申</sup>所野地御境石無之<sup>二</sup>付、此度御互立会之上御境筋相極、野中<sup>与</sup>野之南北之端<sup>江</sup>御境石背合<sup>二</sup>建之、御境筋之方位間数相改絵図面<sup>二</sup>書記双方取替<sup>ハ</sup>処、毛頭相違無之<sup>ハ</sup>。自然、至後年違変申輩於有之<sup>者</sup>、此絵図證文を以何方<sup>江</sup>可被仰上<sup>ハ</sup>。其時一立之儀申間敷<sup>ハ</sup>。仍<sup>而</sup>為後年裏書證文如件。

筑前国御笠郡原田村

文化四丁卯年五月日

組頭 何某

同国同郡同村

組頭 何某

同国同郡同村

庄屋 李七

肥前国対州御領基肆郡城戸村

御庄屋 徳介殿

同国同御領同郡同村

御百姓中

一、右絵図之裏書證文筑前<sup>ノ</sup>之草案通<sup>二</sup>而御差支無之段被仰付<sup>ハ</sup>間、九月八日、原田<sup>江</sup>参右之訳を申絵図<sup>者</sup>先頃原田絵図同然<sup>二</sup>惣七<sup>ハ</sup>頼置<sup>ハ</sup>間、近<sup>ク</sup>出来<sup>ハ</sup>様李七迄申入罷帰。

一、九月廿八日、右絵図出来之催促<sup>二</sup>九郎右衛門を以李七迄申遣<sup>ハ</sup>処、近<sup>ク</sup>惣七方<sup>ハ</sup>人遣可仕段李七答。

一、十月四日、原田<sup>ノ</sup>武七参申<sup>ハ</sup>者李七申進<sup>ハ</sup>絵図之儀<sup>二</sup>付、惣七方<sup>ハ</sup>人遣致<sup>ハ</sup>

処、同人義御用<sup>二</sup>付、怡土郡<sup>ハ</sup>参居<sup>ハ</sup>間、右御用筋相済次第絵図持参仕、取替し相済可申段惣七答遣<sup>ハ</sup>間、今暫相待<sup>ハ</sup>様<sup>与</sup>の趣申来。

一、十月十四日、九郎右衛門を以原田<sup>ハ</sup>申遣<sup>ハ</sup>者惣七殿御用筋<sup>ハ</sup>また相済不申<sup>ハ</sup>哉、證文取替し急度存候段申遣候<sup>ハ</sup>、其訳近日惣七方<sup>ハ</sup>可申遣段李七相答。

一、同十七日、右様子承<sup>二</sup>九郎右衛門原田<sup>ハ</sup>遣<sup>ハ</sup>処、怡土郡之用事<sup>茂</sup>頼<sup>而</sup>相済申様子<sup>二</sup>付、近<sup>ク</sup>惣七参<sup>二</sup>而可有之李七相答。

一、同廿二日、重右衛門を以又<sup>ノ</sup>右之段申遣<sup>ハ</sup>処、近日<sup>者</sup>折角惣七<sup>越</sup>相待罷在<sup>ハ</sup>段李七答。

右之通李七迄每<sup>ク</sup>申遣<sup>ハ</sup>得共埒明<sup>ハ</sup>義無之段<sup>ク</sup>打延<sup>ハ</sup>二付、十月廿三日、御寄附<sup>江</sup>罷出御手代中迄申上<sup>ハ</sup>者絵図證文取替し之儀段<sup>ク</sup>打延<sup>ハ</sup>二付、御差支之儀無御座<sup>ハ</sup>ハ、私田嶋村庄屋惣七方<sup>ハ</sup>参可申、左<sup>ハ</sup>而惣七遠郷<sup>ハ</sup>参居<sup>ハ</sup>ハ、其所迄私参<sup>ハ</sup>而惣七<sup>ハ</sup>直談仕急速<sup>二</sup>取替し相済度段御伺申上<sup>ハ</sup>処、明日罷出<sup>ハ</sup>様被仰付罷帰。

一、翌廿四日罷出<sup>ハ</sup>処、昨日之次第御伺被成<sup>ハ</sup>御差支無之<sup>二</sup>付、早<sup>ク</sup>田嶋<sup>ハ</sup>罷越<sup>ハ</sup>様<sup>与</sup>之趣御手代中<sup>ノ</sup>被仰聞<sup>ハ</sup>二付、明廿五日<sup>ノ</sup>参可申段申上罷帰<sup>ハ</sup>処、惣七私宅<sup>ハ</sup>参居<sup>ハ</sup>間、挨拶相済<sup>ハ</sup>上絵図証文取替し之儀余<sup>リ</sup>延<sup>ク</sup>相成<sup>ハ</sup>間、既明日<sup>ノ</sup>拙者其元<sup>江</sup>参答<sup>二</sup>存立居<sup>ハ</sup>処、今日貴様御出被下置<sup>ハ</sup>存<sup>ハ</sup>段申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>惣七答、御尤千万、畢竟拙者多用隙掛故延引<sup>ハ</sup>。尤今日参<sup>ハ</sup>者御立石南之傍示石

与<sup>リ</sup>外<sup>二</sup>野地より筑前之田畔<sup>二</sup>纒ながら築被繼<sup>ハ</sup>所、原田村百姓懸念仕<sup>ハ</sup>。唯今<sup>二</sup>而者此節之儀野地限之境分<sup>ケ</sup>之御立石<sup>与</sup>申、殊<sup>ニ</sup>新規之築添<sup>与</sup>申儀相分<sup>リ</sup>居<sup>ハ</sup>得共、後年<sup>二</sup>至<sup>ハ</sup>而者畔中境<sup>二</sup>付、南之傍示石<sup>茂</sup>畔半<sup>二</sup>建<sup>ハ</sup>物<sup>与</sup>相見可申、

此所原田方百姓中甚不安氣<sup>ニ</sup>御座<sup>ハ</sup>間、此節御築添之分御取除被成<sup>ハ</sup>ハ、絵図證文取替<sup>ハ</sup>早<sup>ク</sup>相済可申段惣七申<sup>ハ</sup>二付、私答、右与<sup>リ</sup>畔中境を今更不安氣

など<sup>ノ</sup>被申<sup>ハ</sup>者扱<sup>ク</sup>迷惑千万、殊<sup>ニ</sup>此節纒之築添<sup>者</sup>傍示石之根囲之簗田之内<sup>二</sup>差出<sup>ハ</sup>二付、夫<sup>越</sup>築添<sup>三</sup>而包<sup>ハ</sup>。尤傍示与<sup>リ</sup>東畔半<sup>二</sup>此方之境印柵木植付置<sup>ハ</sup>。

所<sup>ノ</sup>築繼<sup>ハ</sup>事故必原田方<sup>ノ</sup>御懸念被下間敷様貴様<sup>ノ</sup>申入被下度存<sup>ハ</sup>段申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>惣七申<sup>ハ</sup>者左<sup>ハ</sup>ハ、今日<sup>者</sup>先原田<sup>江</sup>引取其趣李七<sup>ハ</sup>申聞其上御答可申<sup>与</sup>申

得<sup>者</sup>惣七申<sup>ハ</sup>者左<sup>ハ</sup>ハ、今日<sup>者</sup>先原田<sup>江</sup>引取其趣李七<sup>ハ</sup>申聞其上御答可申<sup>与</sup>申

得<sup>者</sup>惣七申<sup>ハ</sup>者左<sup>ハ</sup>ハ、今日<sup>者</sup>先原田<sup>江</sup>引取其趣李七<sup>ハ</sup>申聞其上御答可申<sup>与</sup>申

得<sup>者</sup>惣七申<sup>ハ</sup>者左<sup>ハ</sup>ハ、今日<sup>者</sup>先原田<sup>江</sup>引取其趣李七<sup>ハ</sup>申聞其上御答可申<sup>与</sup>申

夜ニ入立帰。

一、同廿五日朝、原田又助参申付。今日御立石之場ニ而李七御出会申度御座の間、御出浮被下様申進付申付。今日御山方役楠木見分有之筈。二付、拙者難差外明日出会可仕の間、李七殿江其通申入付得。答遣直ニ田代江参御

手代中へ右昨日之次第御咄申上、猶又慮意申上付。右纒築添付所野地之左右五六十間之畔境ニ拘引意味ニ而筑前ノ除度存付。相見へ。尤築前之地面高く御座付。付、高地越抱引畔者上へ之内ニ極事、御領分ニ而茂同然之事ニ者御座付得共、右之場所者畔半越境ニ申取度奉存付。依之、五月十五日、野地割之前刻右之論仕たる事ニ御座付。併、此節弥畔半境申論致掛り付ハ、御立石之

繪図證文取替し之儀者相止申。可有御座奉存付。尤此儀者五月十八日取替し置引證文ニ方位間数委細書載有之の間、後年相違可致様無之。扱又、右畔半境申事筑前与り弥其通と申程ニ可難極、論双方湛申ニ可有御座奉存付。尤私与り申立付所を筑前与り不得申廢時者則畔半境ニ極りたる道理ニ而当村之者

右場所之田作ニ茂并利宜御座付。乍然無用之論与被思召上付ハ、明日李七出会之刻与り私申様有之、猶又筑前ノ望通築添之分取除可申連而段之内可奉蒙御差図段申上付。御手代中被仰付者高地越抱引畔ニ付、畔中境之申立無寬束、尤於被成窺御一決之上御達可被成ニ付、明日李七出会之儀申延付様被仰付の間引取付。

一、同廿六日朝、九郎右衛門を以原田江申遣付。今日御境目御出会可仕段昨日答進置引得共、御山方楠木改今日迄ニ相濟の間、明日出会可仕段申遣置直ニ田代江罷出付。御手代中被仰付者御用筋有之、今日御寄会被成付ニ付、御境目筋之儀於御会席御伺申上付。繪図證文取替之儀最早立石も成就ニ至、殊ニ五月十八日取替し置引證文ニ方位間数委細書載有之の間、今一応取替スニ不及、扱又、畔半境之儀ハ尤ニ被思召上の間、弥心配相働付様、猶又築添之所纒ニ而茂取除可申様相心得明日早ニ李七へ出会仕付様被仰付の間、奉畏罷帰。

一、同廿七日之朝、重右衛門を以原田江申遣付。御境目御出会之儀故障有之而昨日延申進付。今日弥出会可仕の間、御差合無御座付ハ、御出浮被下度存付段

申遣付。早々可罷出段李七相答、則出会仕付次第者左之通ニ御座付。

口上手覚

昨廿七日四ツ頃、私、重右衛門、九郎右衛門、ミくに立石場江参付。原田ノ李七、武七、又助相見一通り挨拶相濟付。而李七申付。今日御出会之儀申進付。外之儀ニ無之、先日惣七与り粗御咄申置引通南之傍示石与り外野地ノ田畔ニ築被続引所、於当方者甚懸念仕付。尤此節之建石野地限之境石与者申ながら傍示石

外筑前之田畔ニ築繼ニ相成北之傍示石。同田畔之真中ニ向て境筋有之南北共畔見通しニ相成付。後年ニ至付。畔境之様ニ成行可申。難計、弥懸念仕付。南傍示石ノ外、野地与り畔々築繼希之分者素り此節之境石建熟談外之義ニの間、取除不被成付。而繪図證文取替し。難相濟メ御座付。申付ニ付、私申付者其儀

者先日惣七殿江略御答申置付。尤南傍示石ノ外之分取除地底く相成引。境筋江切可申様。無之の間、取除御望通ニ致度存付得共、最早建石成就ニ至役筋之見分。相濟引上之儀地形変引様之取計者致得不申付。扱又、五月十五日野地割之前刻何連なる小野地ニ傍示石可相建御互申談、則建所江致繩張引節惣七殿

貴様繩張之被成方拙者難得其意畔中境田境申論ニ相成付。惣七殿被仰付者先此論者後ニ廻し此節之傍示石者松之場野地ニ立引得。可為無事段被申の間、拙者其通得心仕双方石立相濟付。尤畔中境之儀此方へ前方ノ極り居引通之事

情元禄年ニ茂其御領江申通したる事ニ付得共、年久敷相成引故又々左之通畔論被成引ニ付、其儘ニ難打捨置、右立石成就之上者畔中境之儀貴様迄委細御咄可申心組ニ罷在付。石建ニ取掛引。惣七殿被仰付者夏比野地割之時畔論之事ハ跡ニ廻し置可申段其節申引得共、能く思案仕引得者其節之論不申不聞

与御互ニ打捨引得。此後論ニ茂不及、其御領ニおいてハ是迄其御方之御心得通被思召当領ニおいて茂是迄筑前之心得通榎木之有之。於筑前ニ者何木之有之

与申所氣付不申引得者夫ニ相濟申事ニ御座の間、何卒右之通存引得かし。与惣七殿被申引ニ付、御熟談中之事故拙者江茂其通相心得可申段答置、勿論貴様江も

右之御心得ニ可在之相察罷在付。此節畔中境之儀を被申廢度思召。相聞、左

得者於此方<sup>茂</sup>弥差捨置かたく御座<sup>ハ</sup>段申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>李七申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>於此畔<sup>者</sup>其御方之  
心得違<sup>ニ</sup>而可有之、何方<sup>ニ</sup>而茂高<sup>起</sup>地<sup>越</sup>抱<sup>ハ</sup>畔<sup>者</sup>上<sup>ハ</sup>之内<sup>ニ</sup>相極<sup>ハ</sup>旨申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>私申  
得<sup>者</sup>領内之事<sup>者</sup>其通之所<sup>茂</sup>可有之<sup>ハ</sup>得<sup>共</sup>、此所<sup>者</sup>領境國境之事<sup>与</sup>申、既<sup>ハ</sup>对<sup>江</sup>州  
御引渡之御役人様へ对<sup>州</sup>之御請取役人<sup>与</sup>拙者先祖藤兵衛<sup>与</sup>申者始終附添御境  
目通<sup>者</sup>立廻請取被置<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>扱又、当夏<sup>茂</sup>御取合<sup>ニ</sup>付、御咄申<sup>ハ</sup>通拙者家<sup>茂</sup>永正  
年以来<sup>者</sup>当所相続仕居<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>右様之儀<sup>者</sup>先祖共時<sup>之</sup>留書有<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>今更土手  
半分<sup>越</sup>私として其御方<sup>江</sup>進<sup>ハ</sup>義曾<sup>而</sup>相叶<sup>不</sup>申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>李七申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>畔中境<sup>与</sup>申取替<sup>シ</sup>  
之證文<sup>茂</sup>於<sup>当</sup>方<sup>者</sup>無<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>併、其節筑前<sup>与</sup>之立会<sup>者</sup>何某<sup>与</sup>申者<sup>江</sup>御立会<sup>被</sup>成  
得<sup>者</sup>御咄承度<sup>ハ</sup>と申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>付、私答、扱<sup>ハ</sup>次第<sup>ニ</sup>立入<sup>ハ</sup>氣之毒仕<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>畏言<sup>ナ</sup>から  
御咄不<sup>申</sup>得<sup>者</sup>事情不相分<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>当基肆<sup>・</sup>養父之両郡古<sup>者</sup>領主度<sup>被</sup>替<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>相見  
得<sup>者</sup>天正之比<sup>者</sup>筑紫惟門、広門<sup>ニ</sup>二代之領地<sup>ニ</sup>而天正之末<sup>与</sup>文祿年迄<sup>者</sup>小早川左  
衛門佐隆景之領地<sup>ニ</sup>成、其後慶長<sup>三</sup>年迄<sup>者</sup>羽柴中納言秀秋之領<sup>ニ</sup>ハ<sup>ハ</sup>慶長<sup>三</sup>  
年<sup>者</sup>御公料<sup>ニ</sup>相成、其年基肆<sup>・</sup>養父之御貢米<sup>口</sup>被<sup>取</sup>計<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>内、城戸、宮浦、園  
部迄<sup>之</sup>米<sup>者</sup>太宰府<sup>ニ</sup>差出、右藤兵衛<sup>与</sup>公儀御役人本田隼人<sup>与</sup>申御方へ納<sup>ハ</sup>申<sup>ハ</sup>  
然<sup>ハ</sup>処、其冬十月、对<sup>州</sup>領<sup>ニ</sup>相成、翌慶長<sup>四</sup>年之春、本田隼人様<sup>被</sup>引渡<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>付、  
藤兵衛<sup>茂</sup>御請取役人同然<sup>ニ</sup>御境目<sup>越</sup>立廻<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>留書仕置<sup>ハ</sup>得<sup>共</sup>、筑前<sup>ノ</sup>  
立会<sup>与</sup>申者<sup>相</sup>見<sup>不</sup>申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>答申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>李七又申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>右之本田隼人<sup>与</sup>申御方<sup>者</sup>当<sup>今</sup>本  
田何某様之御先祖<sup>ニ</sup>ハ<sup>ハ</sup>哉と申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>付、私申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>其儀<sup>者</sup>存知<sup>不</sup>申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>对<sup>州</sup>領<sup>ニ</sup>相  
成<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>時分<sup>者</sup>未<sup>タ</sup>秀吉公<sup>茂</sup>御存命<sup>与</sup>相見、全体<sup>者</sup>御神君<sup>ニ</sup>御任<sup>被</sup>成<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>時分<sup>与</sup>相見  
得<sup>者</sup>本<sup>田</sup>隼人<sup>与</sup>申御方<sup>関</sup>田家御<sup>当</sup>家何<sup>連</sup>之御内<sup>与</sup>申儀<sup>者</sup>相<sup>分</sup>り<sup>不</sup>申、尤<sup>公</sup>料  
之御貢米<sup>越</sup>被<sup>請</sup>取<sup>当</sup>所<sup>越</sup>对<sup>州</sup>領<sup>江</sup>被<sup>引</sup>渡<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>程<sup>之</sup>御方<sup>ニ</sup>而何<sup>連</sup>御<sup>両</sup>家<sup>之</sup>御内<sup>ニ</sup>相  
違<sup>者</sup>無<sup>之</sup>旨<sup>相</sup>見<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>扱、畔中境<sup>之</sup>儀<sup>右</sup>之通<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>ハ<sup>ハ</sup>元<sup>禄</sup>年御<sup>絵</sup>図<sup>仕</sup>立<sup>之</sup>節、此  
節<sup>之</sup>通<sup>其</sup>御<sup>領</sup>之<sup>畔</sup>全<sup>筑</sup>前<sup>之内</sup>被<sup>申</sup>掛<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>付、右<sup>当</sup>領<sup>分</sup>御<sup>渡</sup>被<sup>成</sup>得<sup>者</sup>時<sup>之</sup>事情<sup>拙</sup>  
者<sup>ノ</sup>五代<sup>前</sup>善<sup>右</sup>衛<sup>門</sup>与<sup>申</sup>者<sup>ノ</sup>其<sup>御</sup>領<sup>御</sup>立<sup>会</sup>之<sup>人</sup>江<sup>具</sup>ニ<sup>申</sup>通<sup>シ</sup>其<sup>上</sup>ニ<sup>而</sup>為<sup>後</sup>年  
右<sup>之</sup>柵<sup>木</sup>越<sup>植</sup>付<sup>置</sup>得<sup>者</sup>間、此<sup>以</sup>後<sup>逆</sup>茂<sup>柵</sup>木<sup>ニ</sup>御<sup>手</sup>差<sup>被</sup>下<sup>問</sup>敷<sup>ハ</sup>折<sup>節</sup>之<sup>儀</sup>故、呉<sup>々</sup>  
御<sup>頼</sup>申<sup>置</sup>得<sup>者</sup>申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>李<sup>七</sup>始<sup>原</sup>田<sup>方</sup>赤<sup>面</sup>之<sup>体</sup>相<sup>見</sup>得<sup>共</sup>、立<sup>腹</sup>不<sup>致</sup>得<sup>者</sup>其<sup>後</sup>  
暫<sup>在</sup>而<sup>李</sup>七<sup>申</sup>得<sup>者</sup>何<sup>連</sup>欲<sup>少</sup>之<sup>衆</sup>意<sup>不</sup>立<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>難<sup>叶</sup>訳<sup>有</sup>之<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>間、南<sup>之</sup>右<sup>之</sup>真<sup>際</sup>ニ<sup>水</sup>

落しをさけ可申。是者以前<sup>ノ</sup>水<sup>口</sup>有<sup>来</sup>之<sup>場</sup>所<sup>越</sup>新<sup>ニ</sup>築<sup>留</sup>被<sup>置</sup>得<sup>者</sup>所<sup>ゆ</sup>へ異<sup>儀</sup>有<sup>間</sup>  
敷<sup>段</sup>李<sup>七</sup>申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>付、私<sup>答</sup>、以前<sup>之</sup>通<sup>深</sup>く切<sup>落</sup>得<sup>者</sup>儀<sup>者</sup>相<sup>成</sup>不<sup>申</sup>得<sup>者</sup>。深<sup>さ</sup>五<sup>六</sup>寸<sup>之</sup>  
水<sup>落</sup>つ<sup>け</sup>られ<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>唯<sup>今</sup>ニ<sup>而</sup>茂<sup>差</sup>支<sup>不</sup>申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>。尤<sup>洗</sup>崩<sup>ハ</sup>又<sup>者</sup>漸<sup>々</sup>深<sup>まり</sup>得<sup>者</sup>節<sup>者</sup>元<sup>之</sup>  
通<sup>築</sup>上<sup>可</sup>申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>付、其<sup>通</sup>御<sup>聞</sup>得<sup>置</sup>得<sup>者</sup>申、則<sup>深</sup>五<sup>六</sup>寸、横<sup>巻</sup>尺<sup>四</sup>五<sup>寸</sup>之<sup>水</sup>落<sup>つ</sup>  
け<sup>さ</sup>せ<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>。左<sup>ハ</sup>而<sup>酒</sup>肴<sup>昼</sup>飯<sup>之</sup>覚<sup>悟</sup>茂<sup>仕</sup>居<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>付、七<sup>ッ</sup>比<sup>立</sup>石<sup>之</sup>場<sup>ニ</sup>而<sup>盃</sup>取<sup>始</sup>居<sup>ハ</sup>  
得<sup>者</sup>ハ<sup>ハ</sup>原<sup>田</sup>与<sup>り</sup>同<sup>覚</sup>悟<sup>有</sup>之<sup>酒</sup>給<sup>合</sup>得<sup>者</sup>内<sup>ニ</sup>ミ<sup>ク</sup>に<sup>江</sup>原<sup>田</sup>之<sup>居</sup>住<sup>いた</sup>し<sup>居</sup>得<sup>者</sup>源<sup>次</sup>与<sup>申</sup>  
者<sup>相</sup>招<sup>、</sup>酒<sup>食</sup>振<sup>舞</sup>得<sup>者</sup>上、私<sup>申</sup>得<sup>者</sup>貴<sup>殿</sup>此<sup>近</sup>辺<sup>田</sup>作<sup>被</sup>致<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>見<sup>受</sup>居<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>。就<sup>夫</sup>南<sup>北</sup>  
之<sup>畔</sup>有<sup>之</sup>ハ<sup>ハ</sup>く<sup>ち</sup>な<sup>し</sup>木<sup>者</sup>当<sup>領</sup>之<sup>境</sup>印<sup>木</sup>ニ<sup>ハ</sup>間、畔<sup>草</sup>伐<sup>其</sup>外<sup>共</sup>手<sup>さ</sup>し<sup>被</sup>申<sup>間</sup>  
敷、委<sup>細</sup>之<sup>義</sup>者<sup>李</sup>七<sup>様</sup>へ<sup>咄</sup>置<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>。貴<sup>殿</sup>唯<sup>々</sup>柵<sup>ニ</sup>鎌<sup>ニ</sup>而<sup>茂</sup>不<sup>被</sup>懸<sup>様</sup>相<sup>心</sup>得<sup>居</sup>得<sup>者</sup>  
与<sup>李</sup>七<sup>眼</sup>前<sup>ニ</sup>申<sup>渡</sup>得<sup>者</sup>。左<sup>ハ</sup>而<sup>幕</sup>ニ<sup>及</sup>、双<sup>方</sup>引<sup>取</sup>得<sup>者</sup>節<sup>李</sup>七<sup>申</sup>得<sup>者</sup>何<sup>連</sup>明<sup>日</sup>者<sup>惣</sup>七  
其<sup>元</sup>江<sup>參</sup>此<sup>後</sup>之<sup>手</sup>口<sup>御</sup>相<sup>談</sup>可<sup>申</sup>得<sup>者</sup>申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>繪<sup>図</sup>證<sup>文</sup>取<sup>替</sup>之<sup>事</sup>ニ<sup>而</sup>茂<sup>可有</sup>御<sup>座</sup>哉  
与<sup>奉</sup>存<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>。全<sup>体</sup>昨<sup>日</sup>之<sup>次</sup>第<sup>向</sup>方<sup>与</sup>之<sup>問</sup>詰<sup>ニ</sup>付、無<sup>規</sup>仕<sup>合</sup>与<sup>ハ</sup>申<sup>不</sup>奉<sup>顧</sup>前<sup>後</sup>  
舌<sup>長</sup>き<sup>申</sup>分<sup>不</sup>計<sup>多</sup>弁<sup>越</sup>盡<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>段<sup>千</sup>万<sup>恐</sup>入<sup>奉</sup>存<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>。此<sup>段</sup>宜<sup>御</sup>執<sup>成</sup>被<sup>仰</sup>上<sup>可</sup>被<sup>下</sup>奉<sup>頼</sup>  
得<sup>者</sup>。以上

卯 十月廿八日 城戸村庄屋 徳介 印

原治兵衛様  
青木勝右衛門様  
岩谷奎之介様

一、十月廿八日、惣七參<sup>ハ</sup>次第、手<sup>覚</sup>書<sup>越</sup>以<sup>申</sup>上、則<sup>左</sup>之<sup>通</sup>。

口上手覚

昨<sup>廿</sup>八<sup>日</sup>、筑<sup>前</sup>惣<sup>七</sup>私<sup>宅</sup>へ<sup>相</sup>見<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>付、私<sup>申</sup>得<sup>者</sup>昨日<sup>者</sup>立<sup>石</sup>場<sup>江</sup>李<sup>七</sup>殿<sup>御</sup>出<sup>会</sup>申  
得<sup>者</sup>。貴<sup>様</sup>江<sup>茂</sup>御<sup>出</sup>可<sup>被</sup>成<sup>存</sup>居<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>其<sup>儀</sup>無<sup>御</sup>座<sup>李</sup>七<sup>殿</sup>御<sup>咄</sup>之<sup>筋</sup>頃<sup>日</sup>貴<sup>様</sup>之<sup>承</sup>得<sup>者</sup>  
通<sup>之</sup>儀<sup>ニ</sup>付、入<sup>組</sup>事<sup>ナ</sup>から<sup>ケ</sup>様<sup>々</sup>之<sup>次</sup>第<sup>を</sup>咄<sup>仕</sup>得<sup>者</sup>申<sup>前</sup>日<sup>李</sup>七<sup>ハ</sup>申<sup>ハ</sup>得<sup>者</sup>通<sup>を</sup>

咄聞、扱又、李七殿御望通南之石真際ニ水口をつけ申付。尤漸く洗落深く相成  
ハ、唯今之通ニ築上ケ申答ニ極置付申付得。惣七申付者、右築添被成ハ分水  
口ノ西者、右之根囲ニハ、者、差支不申付。水口ノ東之分おくひ形之所新規事ニ御  
座ハ間、御除被成ハ、早々絵図證文ヲ取替し安心仕度段申付間、私答、昨日  
李七殿仕御望水口明ケ遣付付、絵図證文ヲ取替し之儀、無申迄、近日取済可申存  
罷在ハ、又々左様被仰ハ、甚氣之毒仕ハ。尤極与り外之事故、取除ケハ与  
も不苦儀ニ者ハ得共、境之極ハ此方ニ付ハ土を其御方ハ御懸置、有之ハ得者此  
方ハ、猶懸念仕ハ畔半分之事ニ者ハ得共、前方之次第先刻、御咄申付通之儀に  
御座ハ得者、今更私として其御方ハ進ハ儀相叶不申付。何卒右極与り外之儀、御  
懸念被下間敷様存ハ旨申付得者、惣七申付者、左ハハ、此節之絵圖を仕直ハ様可仕  
与申ハ付、私答先頃絵圖及裏書證文共御下た書其御方御役筋之御内見相済ハ  
由ニ御見セ被下ハ付、此方役筋ハ差出入内見置ハ間、書法ニ依ハ而者、仕直ハ  
難致御座ハ。尤貴様御存寄者、如何被成ハ哉与尋ハ得者、惣七申付者、南北共ニ畔之  
方墨越引捨ニ仕度旨申ハ付、私答、左ハハ、御境筋之朱引、傍示石与り外ニ  
出し墨同然ニ引捨テニ可致与申ハ得者、野地限之絵圖ニ付、左様ニ難致、先今日  
者引取李七ハ相談之上明日可被参与申暮方罷帰ハ。

城戸村庄屋

卯 十月廿九日

徳介

一、十一月三日、同四日、兩日之次第口上手覚書越以申上る則左ニ

口上手覚

一、昨三日暮方、原田組頭又助、武七兩人参申付者、御境田畔御論ニ付、原田百姓  
中、打寄是迄之様子調へ見ハ、先年ハ大洪水之時分右畔洗崩ハ事も聞々有之  
ハ付、以前之通取繕ハ節之杭杯、未残居ハ。扱又、戌亥之方畔端ニ前方石を  
居ハ有之ハ、原田与り之印ニ御座ハ。右様之時者、何共不被仰聞、此節畔半境与  
被申立ハ義於筑前者、難得其意百姓中右之御返答承度存念ニ御座ハ、申ハ付、

私答、畔半境を此方ハ申立ハ与被申ハ所全間違ニハ。於右境ニ者、頃日ハ惣七殿、  
李七殿ハ前方ハ之次第御咄申付者、貴殿杯も粗存知之前ニハ間、百姓衆心遣ニ  
不及事ニ存ハ。尤先年原田ハ被置ハ杭、扱又、石杯居被置ハ義如何様原田与  
り被成たる事ニ紛有間敷存ハ。全体御境筋ニ拘ハ儀者、破損等有之ハ節者、互ニ知  
らせ合立会ハ而、以前之通取計申答ニ御座ハ。既右場所杯ハ当村人家ハ凡十七  
八丁、隔リ居ハ事故、此以後逆、杭を打畔中ニ石越埋置ハ類隠々共被斗ハ時者  
此方毛頭氣付可申様無之ハ。唯々御互穩ニ在体成義を取計度、徳介ニおいてハ  
兼々存罷在ハ段百姓衆、申入ハ得与申ハ、兩人能帰ハ。

一、昨四日朝飯後、原田武七参申付者、惣七申遣ハ御咄申度義有之ハ、御立石場所  
江参居ハ間、御出浮被下度希ハ段申来ハ付、早速、私、重右衛門参ハ、惣  
七申ハ、去々丑年以来御三国御境石立与り御領国石立迄拙者懸念御取繕之筋ハ  
無御捨御用被下拙者、面目仕ハ。然ハ、此節田畔之境及御論御宅へも再三参上  
仕御築添之内纏おくひ形之所御除被下ハ様申入ハ共御承引不被下、李七共ニ内  
情難儀之仕合御座ハ。此上者、何分致方無御座ハ間、拙者義明日ハ引取可申ハ以  
後者、李七江御相对可被下、此段得御意置罷帰ハ。尤組ニて是迄御出浮之儀希ハ  
与申ハ。私答、扱々氣之毒成御咄承ハ事ニ御座ハ。寔御三国石建ニ至ハ時分、  
筑後方内もめニ付ハ、者、甚当惑仕ハ、全貴様口ハ御取計ニ成就ニ至、此節御  
両国御建石之儀、不残御世話一方ならざる御苦勞被下ハ上之儀、此節御望筋如  
何様ニ仕度ハ得共、御境筋ニ拘ハ義故不任心底ニせめて石立成就砌ハハ、  
仕直可申。尤其御方思召付御延引与申、越募申ニ而者、無之ハ得共、唯今ニ至ハ而者、仕  
直難相成、併貴様、李七殿聊、御手落ニ相成ハ、而者、於拙者も甚氣之毒仕ハ間、先  
今日者引取得く、私慮いたし見ハ、而、近日御答可申ニ付、先御帰者、暫御延被成度  
段相答、七ッ比引取申ハ。

右之通御座ハ、夜前五ッ比原田与り又助参申ハ、乍毎々明五日右場所江今  
一会被下ハ様惣七申遣ハ段申ハ間、随分参可申相答置ハ付、今日又々出会之  
上次第ハ明日可申上ハ。

城戸村庄屋

徳介

卯十一月五日

口上手覚

昨五日、私、重右衛門、御建石場、参見<sub>江</sub>御座、惣七、又助参居、惣七申<sub>者</sub>内咄之筋有之<sub>江</sub>間、又助暫退居<sub>江</sub>得、申<sub>二</sub>付、重右衛門、氣を付、又助同然場を扣へ居<sub>江</sub>御座、惣七申<sub>者</sub>御築添之内纜御除被下<sub>江</sub>様、斗頃日以来追々申入既昨日迄、内情不打明罷在<sub>江</sub>得共、最早差迫り無<sub>レ</sub>抛今日は深々御頼申上<sub>江</sub>。石立相濟<sub>江</sub>上当領役筋段々見分有之<sub>江</sub>内、高<sub>起</sub>役筋相見へ被<sub>レ</sub>氣付<sub>者</sub>南之石深き所立<sub>江</sub>故、篋之内<sub>二</sub>建<sub>者</sub>、最前取替し之石立方仮絵図<sub>二</sub>相見へ<sub>江</sub>得共、其上土手<sub>二</sub>築込<sub>者</sub>与申極<sub>者</sub>相見不申<sub>江</sub>間、此儀<sub>者</sub>右申極通取計<sub>江</sub>得<sub>者</sub>之事<sub>二</sub>付、築添之分御除被下<sub>江</sub>様申入<sub>江</sub>得共、其御領<sub>二</sub>おいて<sub>江</sub>御除難被成御内情有之<sub>江</sub>由、是亦此方<sub>何</sub>分可致様無御座、就<sub>者</sub>拙者勿論<sub>二</sub>李七共<sub>二</sub>役儀<sub>ハ</sub>素り如何様之御呵可有之<sub>者</sub>、難計、依之<sub>二</sub>千万申兼たる儀<sub>二</sub>得共、我々<sub>二</sub>兩人御取救被下<sub>江</sub>通其御領御役筋へ<sub>二</sub>兩人与<sub>者</sub>之御願宜御取成被仰上被下<sub>江</sub>様<sub>二</sub>与私<sub>江</sub>手をつき頭を下<sub>ケ</sub>幾遍<sub>茂</sub>申<sub>二</sub>付、私申<sub>者</sub>扱<sub>レ</sub>氣之毒成儀を承<sub>者</sub>事<sub>二</sub>御座<sub>者</sub>。尤石建方以前<sub>成</sub>就<sub>二</sub>至<sub>二</sub>迄各立念<sub>二</sub>而相濟<sub>メ</sub>事<sub>与</sub>申、立方證文西<sub>二</sub>八<sub>二</sub>扨たる儀<sub>茂</sub>無<sub>レ</sub>之<sub>与</sub>賞申<sub>者</sub>。扱<sub>レ</sub>又此方之地<sub>ハ</sub>此方分之畔<sub>二</sub>纜<sub>二</sub>築添<sub>者</sub>付、御兩人様、於其御領<sub>二</sub>夫程之御呵可被請事とも<sub>二</sub>慮意不存<sub>者</sub>与申<sub>者</sub>得<sub>者</sub>惣七申<sub>者</sub>右之事情打明し御願被下<sub>者</sub>而<sub>茂</sub>他領之役筋何分成行<sub>者</sub>迎無御存知事<sub>与</sub>有<sub>レ</sub>之儀<sub>二</sub>ハ<sub>レ</sub>不及力<sub>者</sub>得共、是迄之付合柄無御見捨、我々<sub>二</sub>身分無難<sub>二</sub>相成<sub>者</sub>通之思召<sub>越</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>付被下<sub>者</sub>様御役筋<sub>江</sub>御願申上<sub>者</sub>呉<sub>者</sub>様<sub>二</sub>与ひたすら頭を不上<sub>者</sub>得<sub>者</sub>申<sub>二</sub>付、扱<sub>レ</sub>又当惑<sub>者</sub>千万此儀<sub>者</sub>御即答不得申<sub>者</sub>間、先引取慮案いたし<sub>者</sub>而<sub>者</sub>御答可申段申罷帰<sub>者</sub>。

卯十一月六日

城戸村庄屋

徳介 印

一、同八日、右願筋之様子為承惣七私宅へ参<sub>者</sub>得共他出致居不致<sub>者</sub>対面<sub>者</sub>。  
一、同十一日朝、九郎右衛門を以原田<sub>江</sub>申遣<sub>者</sub>御咄申度筋御座<sub>者</sub>間、惣七殿願

境目へ御出会被下<sub>者</sub>様申遣<sub>者</sub>御座、頓て相見へ<sub>者</sub>付、私申<sub>者</sub>去<sub>者</sub>ル五日貴様被仰<sub>者</sub>趣<sub>二</sub>付、拙者<sub>江</sub>も是迄慮案いたし<sub>者</sub>得共、貴様被仰<sub>者</sub>趣何分当方役筋へ拙者<sub>者</sub>申出<sub>者</sub>儀難成御座<sub>者</sub>。其<sub>者</sub>既石建相濟<sub>者</sub>而<sub>者</sub>五六日<sub>茂</sub>經石建成就之趣役筋へ案内申出<sub>者</sub>付、其御国同様之事<sub>二</sub>而<sub>者</sub>役筋之見分<sub>茂</sub>三度有之、其内<sub>二</sub>者<sub>者</sub>絵図杯<sub>茂</sub>出来、対州へ被差越<sub>者</sub>様<sub>二</sub>承<sub>者</sub>居<sub>者</sub>得<sub>者</sub>唯今<sub>二</sub>至<sub>者</sub>右之<sub>者</sub>越<sub>者</sub>申出<sub>者</sub>ハ、石立成就之案内拙者早まり<sub>者</sub>杯と手落之沙汰<sub>二</sub>可<sub>者</sub>及<sub>者</sub>必定之儀、然者拙者呵を請<sub>者</sub>貴様方<sub>茂</sub>可<sub>者</sub>早所相察氣之毒打重り何分役筋へ申出<sub>者</sub>義致得不申<sub>者</sub>。貴様<sub>江</sub>者其後宜工風<sub>者</sub>出来不申哉<sub>与</sub>申<sub>者</sub>得<sub>者</sub>惣七申<sub>者</sub>工面<sub>茂</sub>尽<sub>者</sub>而<sub>者</sub>頃日之通御願申たる事<sub>二</sub>御座<sub>者</sub>。石建方證文之図之通、南之石与<sub>者</sub>外<sub>二</sub>者<sub>者</sub>野地無<sub>レ</sub>之<sub>者</sub>之<sub>者</sub>野地割之時分之仕法貴様御存知勿論<sub>二</sub>御座<sub>者</sub>、石外<sub>二</sub>少<sub>者</sub>之地不計出来、其上築添<sub>二</sub>而<sub>者</sub>弥原田方懸念仕、扱<sub>者</sub>又、役筋<sub>者</sub>極<sub>者</sub>たる時之杭<sub>越</sub>少北<sub>二</sub>寄<sub>者</sub>たる<sub>二</sub>而<sub>者</sub>無<sub>レ</sub>之<sub>者</sub>哉<sub>与</sub>之<sub>者</sub>疑有<sub>者</sub>之<sub>者</sub>相見へ居申<sub>者</sub>付、私申<sub>者</sub>其儀<sub>者</sub>取替置<sub>者</sub>證文面之間数<sub>二</sub>合石建方を貴様被取計<sub>者</sub>得<sub>者</sub>間数之間違毛頭無<sub>レ</sub>之<sub>者</sub>段<sub>ハ</sub>被申開度存<sub>者</sub>旨申<sub>者</sub>得<sub>者</sub>惣七申<sub>者</sub>者間数之間違<sub>者</sub>無<sub>レ</sub>之<sub>者</sub>得共、石之建所<sub>三</sub>所共<sub>二</sub>少北<sub>二</sub>寄<sub>者</sub>得<sub>者</sub>南<sub>二</sub>明地出来<sub>者</sub>御座<sub>者</sub>理<sub>二</sub>御旨申<sub>者</sub>付、成程其通致<sub>者</sub>ハ、南<sub>二</sub>明地出来<sub>者</sub>得共、右様之氣付<sub>者</sub>拙者<sub>者</sub>忤慮意<sub>二</sub>可<sub>者</sub>及<sub>者</sub>事<sub>二</sub>而<sub>者</sub>唯今貴様被咄聞<sub>者</sub>得<sub>者</sub>社其通之事<sub>与</sub>存<sub>者</sub>併、其節中<sub>二</sub>者御境石之履石を仕据其真中<sub>者</sub>引<sub>者</sub>出<sub>者</sub>て南北之杭之<sub>者</sub>心迄間数を極證文を取替<sub>者</sub>御座<sub>者</sub>。尤其御国与<sub>者</sub>之御工共<sub>二</sub>ハ<sub>レ</sub>此人家有<sub>者</sub>之<sub>二</sub>付、夜分杯<sub>二</sub>中<sub>者</sub>履石、南北之杭被扱<sub>者</sub>事<sub>茂</sub>可<sub>者</sub>相成哉、拙者方<sub>者</sub>数丁隔<sub>者</sub>居<sub>者</sub>上、人家近<sub>者</sub>所<sub>二</sub>参原田方不被知<sub>者</sub>様<sub>二</sub>中<sub>者</sub>履石据直<sub>者</sub>杭<sub>越</sub>扱<sub>者</sub>事何分<sub>者</sub>御座<sub>者</sub>可<sub>者</sub>相成事<sub>与</sub>被存<sub>者</sub>御座、併、夫程疑被申<sub>者</sub>ハ、幾重<sub>二</sub>糺<sub>者</sub>得<sub>者</sub>私風勢を<sub>者</sub>変<sub>者</sub>申<sub>者</sub>御座、惣七申<sub>者</sub>者<sub>者</sub>いや貴様<sub>越</sub>疑申<sub>者</sub>而<sub>者</sub>無<sub>レ</sub>之<sub>者</sub>。拙者貴様<sub>与</sub>懇意仕<sub>者</sub>得<sub>者</sub>其御領御為<sub>者</sub>宜様内談いたしたる共<sub>二</sub>而<sub>者</sub>無<sub>レ</sub>之<sub>者</sub>哉<sub>越</sub>拙者<sub>越</sub>役筋与<sub>者</sub>疑被申<sub>者</sub>御座、相察申<sub>者</sub>与<sub>者</sub>申<sub>二</sub>付、私又申<sub>者</sub>貴様<sub>江</sub>者<sub>是迄所<sub>者</sub>御境目筋<sub>二</sub>御務被成<sub>者</sub>御座<sub>者</sub>承居<sub>者</sub>。御任被置<sub>者</sub>御役筋右様之御疑可有事共存不申、猶又被申開度義<sub>二</sub>御座<sub>者</sub>与申<sub>者</sub>暫茶杯給居<sub>者</sub>御座、惣七申<sub>者</sub>先刻<sub>者</sub>拙者申様分<sub>者</sub>兼貴様御腹立被成<sub>者</sub>氣之毒仕<sub>者</sub>。聊御懸念被下<sub>者</sub>間敷<sub>者</sub>。御頼申置<sub>者</sub>御筋貴様御答之趣<sub>者</sub>李七<sub>江</sub>早<sub>者</sub>可<sub>者</sub>申聞、乍此上宜御工夫とも付<sub>者</sub>ハ、何卒願</sub>



(五) 筑紫神社文書

鎮西筑前之州於大築紫府

築紫宮を欲奉再興十方に請与力意趣

一金二百足 并銀三錢  
磯与三左衛門尉  
肥前国 本庄氏徳良

夫以当社大明神ハ彦座王之御孫坂上之長乎 桓武平城之大皇に奉事、臣之為レ  
道夫礼ニ不レ違、国を穩にし民を撫事堯舜ニ齊く徳の広きこと始皇ニ同からね、  
其道の賢、越ニ文皇、一我朝平均にして東夷西戎を掌の中にし阿黒王を滅すの功夫  
幾や。既ニ大政大臣の昇殿蒙ニ上一位一正ニ観音の現影に逢給 這達ニ佛縁一処  
なり、薨て之後田村大明神と号給、為レ奉レ令レ守ニ護皇地一にや、其威卒土に  
周遍し、貴賤捧ニ宝幣、願を祈る事勿レ謂レ不レ及、其神通の男女ねがひを充給  
ふ神力日々に新て威光月々にかさなる、時に大築紫府に祭込侍る、忝も延喜之御  
宇築紫宮大明神と号し勅宣を被下、宝祚延長を祈玉ふ、其謂于レ今あり、月卿雲  
客信上と齊し、萬民于レ爰帰依す、綾羅をちりハむるといへり、享徳二年之比、  
築紫能登守経門、同左近将監俊門、是を造宮し給、興殿樓閣雖レ荘ニ其粧、一年移  
り時さりぬ、社宝ハ悉く凶賊に奪れ、社家山林に隠れハ、神人在里に走る、舊き  
伝へも悉滅うしなへり、悲哉、是盛者必衰之謂也、適々残有宮居も星霜かさなり  
て式百年に餘りき、軒朽瓦落て漸其験て已有、誠に自滅此時に限、適々佛世に至  
り欲レ奉レ再ニ興之、敷地之氏子雖レ企レ之、宝祿難レ求、各寸志之請ニ勸進、  
感レ充レ願、庶幾貴賤高平多少に不限、抛ニ宝施、一使レ達ニ本願、一者、現世安穩  
可レ預ニ其信心、一後世善生之誓願ハ大慈大悲之眸にあつからね、神ハ依レ敬威を  
益し、利生之遲速ハ渴仰之可レ因ニ浅深一者欵、仍勸進述ニ志趣一

築紫宮

寛文九年二月吉日

社職敬白

名

勸進之願主

当社司官

藤原則重

## 筑紫神社縁起

夫日本者神国なり天祖者しめ基越ひらき日神なく統越つたへ給ふ、吾国のミ此こ与あり異朝<sup>二</sup>者そのたくひなし、この故<sup>二</sup>神国<sup>一</sup>与いふなり、そ茂く神道の事ハたやすくあらハさず与いふこ与あれど、根元越しられ者みたりが者しき端与茂なりぬへし、そのつるへ越すくハんためいさくしるし者んへりぬ、いニしへニ天地いまたわかれざりし与き渾沌<sup>一</sup>与しまるかれるこ<sup>一</sup>与鶏の子のご与し、くぐ茂り芽越ふくめりき、これ陰陽の元初未分一気なり、その気者じめぬわかれ清く明かなるハたなびき<sup>一</sup>天<sup>一</sup>与なり、重く濁れる者つゝ<sup>一</sup>地<sup>一</sup>与なる、その中<sup>一</sup>一物なれり、出たるかたち葦牙のご与し、すなハち化し<sup>一</sup>神<sup>一</sup>与なり玉ひぬ、国常立尊<sup>一</sup>与申た<sup>一</sup>まつる、此神<sup>二</sup>者水火木金土の五行の徳おハします、国常立尊<sup>一</sup>与申た<sup>一</sup>まつるハすなハち神代最初の国主なり、伊勢の外官の御神<sup>一</sup>与あがめた<sup>一</sup>まつる是なり、天神第一代<sup>一</sup>与称した<sup>一</sup>まつる茂のなり、次<sup>二</sup>水徳の神<sup>一</sup>あらハれさせ給ふ越国狭槌尊<sup>一</sup>与申た<sup>一</sup>まつる、天神第二代<sup>一</sup>与称する是也、次<sup>二</sup>火徳の神<sup>一</sup>あら者れ玉ふ<sup>一</sup>越豊斟淳尊<sup>一</sup>与申た<sup>一</sup>まつる、天神第三代<sup>一</sup>与称した<sup>一</sup>まつる是也、此三代ハいつれ茂<sup>一</sup>ミナ男神<sup>一</sup>者かり化生し玉ふ<sup>一</sup>与いへり、次<sup>二</sup>木徳の神<sup>一</sup>あら者れ玉ふ<sup>一</sup>越泥土煮尊沙土煮尊<sup>一</sup>与申た<sup>一</sup>まつる、天神第四代の御神なり、これより男神女神あひならん<sup>一</sup>化生し給ふ<sup>一</sup>与いへり、次<sup>二</sup>金徳の神<sup>一</sup>あら者れ玉ふ<sup>一</sup>越大戸道尊大苦辺尊<sup>一</sup>与申た<sup>一</sup>まつる、天神第五代の御神なり、次<sup>二</sup>土徳の神<sup>一</sup>あら者れ給ふ<sup>一</sup>越面足尊惶根尊<sup>一</sup>与申た<sup>一</sup>まつる、天神第六代の御神也、天神六代の間<sup>一</sup>天上<sup>一</sup>ニまし<sup>一</sup>く<sup>一</sup>人間<sup>一</sup>ニくたり給<sup>一</sup>者す、彼六代<sup>一</sup>者一切国土の主人公<sup>一</sup>ニま<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>ハ唐天竺其外の世界国土の衆生<sup>一</sup>皆此神<sup>一</sup>越天地万物の本主<sup>一</sup>与あかめた<sup>一</sup>まつる<sup>一</sup>へき事本意なり、陰陽二神伊弉諾伊弉册の尊よりこそ此国の衆生ハあれまし給ひ<sup>一</sup>ける<sup>一</sup>与そき<sup>一</sup>江<sup>一</sup>者ん<sup>一</sup>へる、爰<sup>二</sup>天神第七代の御神陽神<sup>一</sup>越伊弉諾尊<sup>一</sup>与申し陰神<sup>一</sup>越伊弉册尊<sup>一</sup>与申た<sup>一</sup>まつる、伊弉諾ハ本朝男子の初、伊弉册ハ女子の者しめ<sup>一</sup>与そ申<sup>一</sup>つた<sup>一</sup>侍る、是ハまさしく陰陽の徳<sup>一</sup>越<sup>一</sup>あら<sup>一</sup>者し<sup>一</sup>造化の元<sup>一</sup>与なり玉ふ、天祖国常立尊伊弉諾伊弉册の二神<sup>一</sup>

ミこ<sup>一</sup>与のりし<sup>一</sup>宜く豊芦原の千五百秋の瑞穂の地あり汝往<sup>一</sup>しらす<sup>一</sup>へし<sup>一</sup>与<sup>一</sup>すな者<sup>一</sup>ち天瓊矛<sup>一</sup>越さ<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>け<sup>一</sup>させ給<sup>一</sup>ふ、二神此矛<sup>一</sup>越さ<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>からせ給<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>天の浮橋の上<sup>一</sup>ニた<sup>一</sup>す<sup>一</sup>み<sup>一</sup>矛<sup>一</sup>越さ<sup>一</sup>し<sup>一</sup>下<sup>一</sup>し<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>かさ<sup>一</sup>く<sup>一</sup>り<sup>一</sup>給<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>しか<sup>一</sup>ハ滄海のミありき、その矛のさきよりした<sup>一</sup>り<sup>一</sup>越<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>る<sup>一</sup>潮<sup>一</sup>こ<sup>一</sup>り<sup>一</sup>の<sup>一</sup>嶋<sup>一</sup>与<sup>一</sup>なる、これ<sup>一</sup>越<sup>一</sup>碓<sup>一</sup>敷<sup>一</sup>盧<sup>一</sup>嶋<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、この名<sup>一</sup>ニつ<sup>一</sup>る<sup>一</sup>ハ秘説あり、二神此島<sup>一</sup>ニあ<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>く<sup>一</sup>たり<sup>一</sup>す<sup>一</sup>者<sup>一</sup>ち国の中の柱<sup>一</sup>越<sup>一</sup>た<sup>一</sup>る<sup>一</sup>八尋の殿<sup>一</sup>越<sup>一</sup>化<sup>一</sup>作<sup>一</sup>る<sup>一</sup>与<sup>一</sup>茂<sup>一</sup>住<sup>一</sup>給<sup>一</sup>ふ、さ<sup>一</sup>陰<sup>一</sup>陽<sup>一</sup>和<sup>一</sup>し<sup>一</sup>夫<sup>一</sup>婦<sup>一</sup>道<sup>一</sup>あり、か<sup>一</sup>く<sup>一</sup>この<sup>一</sup>二<sup>一</sup>神<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>者<sup>一</sup>かり<sup>一</sup>る<sup>一</sup>八<sup>一</sup>の<sup>一</sup>嶋<sup>一</sup>越<sup>一</sup>生<sup>一</sup>玉<sup>一</sup>ふ、先<sup>一</sup>淡<sup>一</sup>路<sup>一</sup>の<sup>一</sup>洲<sup>一</sup>う<sup>一</sup>ミ<sup>一</sup>ます、淡<sup>一</sup>路<sup>一</sup>の<sup>一</sup>穂<sup>一</sup>狭<sup>一</sup>別<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、次<sup>二</sup>伊与の二名の洲<sup>一</sup>越<sup>一</sup>ミ<sup>一</sup>ます、一身<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>四<sup>一</sup>面<sup>一</sup>あり、一<sup>一</sup>越<sup>一</sup>愛<sup>一</sup>止<sup>一</sup>比<sup>一</sup>賣<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、是<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>伊<sup>一</sup>与<sup>一</sup>なり、二<sup>一</sup>越<sup>一</sup>飯<sup>一</sup>依<sup>一</sup>比<sup>一</sup>賣<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、是<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>讚<sup>一</sup>岐<sup>一</sup>なり、三<sup>一</sup>越<sup>一</sup>大<sup>一</sup>宜<sup>一</sup>都<sup>一</sup>比<sup>一</sup>賣<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、是<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>阿<sup>一</sup>波<sup>一</sup>なり、四<sup>一</sup>越<sup>一</sup>速<sup>一</sup>依<sup>一</sup>別<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、是<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>土<sup>一</sup>佐<sup>一</sup>なり、次<sup>二</sup>筑紫の洲<sup>一</sup>越<sup>一</sup>生<sup>一</sup>ます、また一身<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>四<sup>一</sup>面<sup>一</sup>あり、一<sup>一</sup>越<sup>一</sup>白<sup>一</sup>日<sup>一</sup>別<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、是<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>筑<sup>一</sup>紫<sup>一</sup>也、後<sup>二</sup>筑前筑後<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、二<sup>一</sup>越<sup>一</sup>豊<sup>一</sup>日<sup>一</sup>別<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、是<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>豊<sup>一</sup>国<sup>一</sup>なり、後<sup>二</sup>豊前豊後<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、三<sup>一</sup>越<sup>一</sup>昼<sup>一</sup>日<sup>一</sup>別<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、是<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>肥<sup>一</sup>の<sup>一</sup>国<sup>一</sup>也、後<sup>二</sup>肥前肥後<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、四<sup>一</sup>越<sup>一</sup>豊<sup>一</sup>久<sup>一</sup>土<sup>一</sup>比<sup>一</sup>泥<sup>一</sup>別<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、是<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>日<sup>一</sup>向<sup>一</sup>なり、の<sup>一</sup>ち<sup>一</sup>日<sup>一</sup>向<sup>一</sup>大<sup>一</sup>隅<sup>一</sup>薩<sup>一</sup>摩<sup>一</sup>与<sup>一</sup>そ<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、次<sup>二</sup>一岐の洲<sup>一</sup>越<sup>一</sup>生<sup>一</sup>ます、天<sup>一</sup>比<sup>一</sup>登<sup>一</sup>都<sup>一</sup>柱<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、次<sup>二</sup>对馬の洲<sup>一</sup>越<sup>一</sup>生<sup>一</sup>ます、天<sup>一</sup>狭<sup>一</sup>手<sup>一</sup>依<sup>一</sup>比<sup>一</sup>賣<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、次<sup>二</sup>隠岐の洲<sup>一</sup>越<sup>一</sup>生<sup>一</sup>ます天<sup>一</sup>忍<sup>一</sup>許<sup>一</sup>呂<sup>一</sup>別<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、次<sup>二</sup>佐渡の洲<sup>一</sup>越<sup>一</sup>生<sup>一</sup>ます建<sup>一</sup>日<sup>一</sup>別<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、次<sup>二</sup>大日本豊秋津洲<sup>一</sup>越<sup>一</sup>う<sup>一</sup>ミ<sup>一</sup>ます天<sup>一</sup>御<sup>一</sup>虚<sup>一</sup>空<sup>一</sup>豊<sup>一</sup>秋<sup>一</sup>根<sup>一</sup>別<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ、す<sup>一</sup>へ<sup>一</sup>是<sup>一</sup>越<sup>一</sup>大<sup>一</sup>八<sup>一</sup>洲<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふな<sup>一</sup>り、此<sup>一</sup>外<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>また<sup>一</sup>の<sup>一</sup>し<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>越<sup>一</sup>生<sup>一</sup>給<sup>一</sup>ふ、後<sup>二</sup>海山の神たち<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ち<sup>一</sup>木<sup>一</sup>の<sup>一</sup>お<sup>一</sup>や<sup>一</sup>草<sup>一</sup>の<sup>一</sup>お<sup>一</sup>や<sup>一</sup>迄<sup>一</sup>こ<sup>一</sup>与<sup>一</sup>く<sup>一</sup>く<sup>一</sup>う<sup>一</sup>ミ<sup>一</sup>まし<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>け<sup>一</sup>れ<sup>一</sup>バ、い<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>れ<sup>一</sup>茂<sup>一</sup>神<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>生<sup>一</sup>給<sup>一</sup>へ<sup>一</sup>る<sup>一</sup>神<sup>一</sup>の<sup>一</sup>洲<sup>一</sup>越<sup>一</sup>茂<sup>一</sup>山<sup>一</sup>越<sup>一</sup>茂<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>くり<sup>一</sup>た<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>へ<sup>一</sup>るか、者<sup>一</sup>た<sup>一</sup>また<sup>一</sup>洲<sup>一</sup>越<sup>一</sup>生<sup>一</sup>給<sup>一</sup>ふ<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>神<sup>一</sup>の<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>れ<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>し<sup>一</sup>ける<sup>一</sup>か、神<sup>一</sup>世<sup>一</sup>の<sup>一</sup>わ<sup>一</sup>さ<sup>一</sup>な<sup>一</sup>れ<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>こ<sup>一</sup>与<sup>一</sup>二<sup>一</sup>者<sup>一</sup>か<sup>一</sup>り<sup>一</sup>か<sup>一</sup>た<sup>一</sup>し、二<sup>一</sup>神<sup>一</sup>者<sup>一</sup>か<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>宣<sup>一</sup>く<sup>一</sup>わ<sup>一</sup>れ<sup>一</sup>す<sup>一</sup>大<sup>一</sup>八<sup>一</sup>州<sup>一</sup>国<sup>一</sup>越<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>山<sup>一</sup>河<sup>一</sup>草<sup>一</sup>木<sup>一</sup>越<sup>一</sup>う<sup>一</sup>め<sup>一</sup>り、い<sup>一</sup>か<sup>一</sup>天<sup>一</sup>の<sup>一</sup>下<sup>一</sup>の<sup>一</sup>君<sup>一</sup>た<sup>一</sup>る<sup>一</sup>茂<sup>一</sup>の<sup>一</sup>越<sup>一</sup>生<sup>一</sup>さ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ん<sup>一</sup>や<sup>一</sup>与<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>、ま<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>日<sup>一</sup>神<sup>一</sup>越<sup>一</sup>う<sup>一</sup>ミ<sup>一</sup>ます、この<sup>一</sup>御<sup>一</sup>子<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>か<sup>一</sup>り<sup>一</sup>う<sup>一</sup>る<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>し<sup>一</sup>く<sup>一</sup>し<sup>一</sup>六<sup>一</sup>合<sup>一</sup>越<sup>一</sup>あり<sup>一</sup>与<sup>一</sup>ほ<sup>一</sup>る、二<sup>一</sup>神<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>る<sup>一</sup>こ<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>天<sup>一</sup>越<sup>一</sup>くり<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>け<sup>一</sup>る<sup>一</sup>天上<sup>一</sup>の<sup>一</sup>こ<sup>一</sup>与<sup>一</sup>越<sup>一</sup>さ<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>け<sup>一</sup>玉<sup>一</sup>ふ、女<sup>一</sup>神<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>し<sup>一</sup>ます<sup>一</sup>なり、是<sup>一</sup>則<sup>一</sup>伊<sup>一</sup>勢<sup>一</sup>の<sup>一</sup>内<sup>一</sup>宮<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>か<sup>一</sup>め<sup>一</sup>た<sup>一</sup>まつ<sup>一</sup>る<sup>一</sup>神<sup>一</sup>是<sup>一</sup>なり、次<sup>二</sup>月神<sup>一</sup>越<sup>一</sup>生<sup>一</sup>ます、その<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>か<sup>一</sup>り<sup>一</sup>日<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>け<sup>一</sup>り、天<sup>一</sup>の<sup>一</sup>ほ<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>夜<sup>一</sup>の<sup>一</sup>政<sup>一</sup>越<sup>一</sup>さ<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>け<sup>一</sup>玉<sup>一</sup>ふ<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>へ<sup>一</sup>り、次<sup>二</sup>蛭子の宮<sup>一</sup>越<sup>一</sup>生<sup>一</sup>ます<sup>一</sup>三<sup>一</sup>与<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>なる<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>脚<sup>一</sup>た<sup>一</sup>た<sup>一</sup>す<sup>一</sup>ん<sup>一</sup>是<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>深<sup>一</sup>き<sup>一</sup>天<sup>一</sup>磐<sup>一</sup>椽<sup>一</sup>樟<sup>一</sup>船<sup>一</sup>の<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>風<sup>一</sup>の<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>く<sup>一</sup>者<sup>一</sup>な<sup>一</sup>ち<sup>一</sup>す<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>与<sup>一</sup>い<sup>一</sup>へ<sup>一</sup>り、此<sup>一</sup>神<sup>一</sup>者<sup>一</sup>海<sup>一</sup>上<sup>一</sup>の<sup>一</sup>事<sup>一</sup>越<sup>一</sup>主<sup>一</sup>与<sup>一</sup>らし<sup>一</sup>め<sup>一</sup>給<sup>一</sup>ふ、次<sup>二</sup>素盞鳴尊<sup>一</sup>越<sup>一</sup>生<sup>一</sup>ます、勇<sup>一</sup>た<sup>一</sup>く<sup>一</sup>不<sup>一</sup>忍<sup>一</sup>し<sup>一</sup>父<sup>一</sup>母<sup>一</sup>の<sup>一</sup>御<sup>一</sup>心<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>か<sup>一</sup>な<sup>一</sup>者<sup>一</sup>す<sup>一</sup>根<sup>一</sup>国

いね<sup>与</sup>の給ふ、この三柱の御神ハいつれ<sup>茂</sup>男神<sup>ニ</sup>お者<sup>ニ</sup>しますなり、よつ<sup>一</sup>女  
三男<sup>与</sup>申侍るなり、す<sup>へ</sup>あらゆる神<sup>ニ</sup>な<sup>ニ</sup>神<sup>の</sup>所生<sup>ニ</sup>まします<sup>与</sup>い<sup>与</sup>茂<sup>国</sup>の主  
たる<sup>へ</sup>し<sup>与</sup>生<sup>給</sup>ひしか者、こ<sup>与</sup>さら<sup>ニ</sup>この四神<sup>越</sup>申つた<sup>へ</sup>ける<sup>ニ</sup>こそ、陰神伊弉  
册尊<sup>ハ</sup>神退<sup>給</sup>ひ<sup>ニ</sup>き、陽神伊弉諾尊<sup>者</sup>神功<sup>す</sup>終<sup>リ</sup>ニ<sup>け</sup>れ<sup>ハ</sup>天上<sup>ニ</sup>のほり<sup>天祖</sup>  
報命<sup>申</sup>し<sup>す</sup>な者<sup>チ</sup>天上<sup>ニ</sup>与<sup>まり</sup>給<sup>ひ</sup>ける<sup>与</sup>そ、これ<sup>越</sup>天神<sup>七</sup>代<sup>与</sup>茂<sup>神</sup>世<sup>七</sup>代  
与<sup>申</sup>なり、地神<sup>第一</sup>代<sup>大</sup>日<sup>靈</sup>尊<sup>これ</sup>越<sup>天</sup>照<sup>太</sup>神<sup>与</sup>申<sup>また</sup>日<sup>神</sup>与<sup>茂</sup>皇<sup>祖</sup>与<sup>茂</sup>申<sup>なり</sup>、  
爰<sup>ニ</sup>素<sup>盞</sup>鳴<sup>尊</sup>父母<sup>二</sup>神<sup>ニ</sup>やら<sup>ハ</sup>れ<sup>根</sup>国<sup>ニ</sup>く<sup>たり</sup>給<sup>へ</sup>かり<sup>しか</sup>、天上<sup>ニ</sup>ま<sup>ふ</sup>あ<sup>り</sup>  
姉<sup>の</sup>尊<sup>ニ</sup>見<sup>江</sup>た<sup>ま</sup>つ<sup>り</sup>あ<sup>ひ</sup>た<sup>ふ</sup>る<sup>ニ</sup>ま<sup>かり</sup>なん<sup>与</sup>申<sup>玉</sup>ひ<sup>け</sup>れ<sup>ハ</sup>、ゆる<sup>す</sup>与<sup>宣</sup>ふ  
ニ<sup>より</sup>の<sup>天</sup>上<sup>ニ</sup>の<sup>ほ</sup>り<sup>ま</sup>す、大<sup>う</sup>ミ<sup>と</sup>ろ<sup>き</sup>山<sup>岳</sup>なり<sup>响</sup>き、この神<sup>の</sup>性<sup>た</sup>け<sup>き</sup>か<sup>し</sup>  
から<sup>し</sup>むる<sup>ニ</sup>な<sup>む</sup>、天<sup>照</sup>太<sup>神</sup>驚<sup>ま</sup>し<sup>く</sup>兵<sup>の</sup>備<sup>へ</sup>越<sup>し</sup>待<sup>玉</sup>ふ、彼<sup>尊</sup>また<sup>な</sup>き  
こ<sup>ろ</sup>な<sup>き</sup>よ<sup>し</sup>越<sup>こ</sup>た<sup>へ</sup>玉<sup>ふ</sup>、さら<sup>ハ</sup>誓<sup>約</sup>越<sup>な</sup>し<sup>き</sup>よ<sup>き</sup>か<sup>き</sup>た<sup>な</sup>き<sup>か</sup>越<sup>知</sup>へ<sup>し</sup>、  
誓<sup>約</sup>の<sup>御</sup>中<sup>ニ</sup>女<sup>越</sup>化<sup>生</sup>さ<sup>者</sup>きた<sup>な</sup>き<sup>心</sup>なる<sup>へ</sup>し、男<sup>越</sup>化<sup>生</sup>せ<sup>者</sup>き<sup>よ</sup>き<sup>こ</sup>ろ<sup>な</sup>ら  
ん<sup>与</sup>素<sup>盞</sup>鳴<sup>の</sup>日<sup>神</sup>ニ<sup>た</sup>ま<sup>つ</sup>ら<sup>れ</sup>ける<sup>八</sup>坂<sup>瓊</sup>の<sup>玉</sup>越<sup>与</sup>り<sup>給</sup>ひ<sup>しか</sup>ハ、その玉<sup>ニ</sup>感<sup>し</sup>  
る<sup>男</sup>神<sup>化</sup>生<sup>し</sup>給<sup>ふ</sup>、素<sup>盞</sup>鳴<sup>尊</sup>よ<sup>る</sup>こ<sup>ひ</sup>ま<sup>さ</sup>や<sup>あ</sup>れ<sup>か</sup>ち<sup>ぬ</sup>与<sup>の</sup>たま<sup>ひ</sup>ける<sup>ニ</sup>よ<sup>り</sup>、  
御<sup>名</sup>越<sup>正</sup>哉<sup>吾</sup>勝<sup>尊</sup>与<sup>申</sup>た<sup>ま</sup>つ<sup>る</sup>なり、この吾<sup>勝</sup>尊<sup>越</sup>太<sup>神</sup>め<sup>ぐ</sup>し<sup>与</sup>お<sup>ほ</sup>し  
る<sup>常</sup>御<sup>わ</sup>き<sup>茂</sup>与<sup>ニ</sup>す<sup>へ</sup>給<sup>ひ</sup>しか者<sup>腋</sup>子<sup>与</sup>い<sup>ふ</sup>、今<sup>の</sup>世<sup>ニ</sup>お<sup>さ</sup>な<sup>き</sup>子<sup>越</sup>わ<sup>か</sup>子<sup>与</sup>い  
ふ<sup>ハ</sup>ひ<sup>が</sup>こ<sup>与</sup>なり<sup>日本</sup>お<sup>る</sup>越<sup>以</sup>あ<sup>か</sup>く<sup>素</sup>彥<sup>鳥</sup>尊<sup>な</sup>お<sup>天</sup>上<sup>ニ</sup>ま<sup>し</sup>く<sup>け</sup>る<sup>か</sup>、さ  
ま<sup>く</sup>の<sup>科</sup>越<sup>犯</sup>し<sup>給</sup>ひ<sup>き</sup>、天<sup>照</sup>太<sup>神</sup>ハ<sup>か</sup>り<sup>ま</sup>し<sup>天</sup>の<sup>石</sup>窟<sup>ニ</sup>こ<sup>茂</sup>り<sup>給</sup>ふ、国<sup>の</sup>うち  
与<sup>こ</sup>や<sup>み</sup>ニ<sup>なり</sup>あ<sup>る</sup>、昼<sup>夜</sup>の<sup>わ</sup>き<sup>ま</sup>へ<sup>な</sup>かり<sup>き</sup>、茂<sup>ろ</sup>く<sup>の</sup>神<sup>た</sup>ち<sup>う</sup>れ<sup>へ</sup>な<sup>げ</sup>き<sup>給</sup>ふ、  
その時<sup>諸</sup>神<sup>の</sup>上<sup>首</sup>ニ<sup>あ</sup>る<sup>高</sup>皇<sup>産</sup>靈<sup>尊</sup>与<sup>い</sup>ふ<sup>神</sup>ま<sup>し</sup>く<sup>き</sup>、此<sup>神</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>や</sup>す<sup>川</sup>の<sup>ほ</sup>  
与<sup>り</sup>ニ<sup>し</sup>あ<sup>る</sup>、八<sup>百</sup>万<sup>の</sup>神<sup>越</sup>つ<sup>ど</sup>あ<sup>ひ</sup>者<sup>か</sup>り<sup>玉</sup>ふ、其<sup>御</sup>子<sup>ニ</sup>思<sup>兼</sup>与<sup>い</sup>う<sup>神</sup>の<sup>た</sup>ば<sup>か</sup>  
り<sup>ニ</sup>より<sup>石</sup>凝<sup>姥</sup>与<sup>い</sup>ふ<sup>神</sup>越<sup>し</sup>日<sup>神</sup>の<sup>御</sup>形<sup>越</sup>鏡<sup>ニ</sup>鑄<sup>せ</sup>し<sup>む</sup>、その者<sup>者</sup>じ<sup>め</sup>なり<sup>たり</sup>  
し<sup>鏡</sup>諸<sup>神</sup>の<sup>心</sup>ニ<sup>あ</sup>ハ<sup>ず</sup>、是<sup>ハ</sup>紀<sup>伊</sup>国<sup>日</sup>前<sup>の</sup>神<sup>ニ</sup>ま<sup>す</sup>、次<sup>ニ</sup>鑄<sup>給</sup>へ<sup>る</sup>鏡<sup>う</sup>る<sup>ハ</sup>し<sup>う</sup>  
ま<sup>し</sup>く<sup>け</sup>れば<sup>諸</sup>神<sup>よ</sup>る<sup>こ</sup>ひ<sup>あ</sup>が<sup>め</sup>給<sup>ふ</sup>、初<sup>者</sup>皇<sup>居</sup>ニ<sup>ま</sup>し<sup>く</sup>き、今<sup>ハ</sup>伊<sup>勢</sup>五<sup>十</sup>  
鈴<sup>の</sup>宮<sup>ニ</sup>い<sup>つ</sup>か<sup>れ</sup>玉<sup>ふ</sup>是<sup>なり</sup>、また<sup>天</sup>の<sup>明</sup>玉<sup>の</sup>神<sup>越</sup>し<sup>八</sup>坂<sup>瓊</sup>の<sup>玉</sup>越<sup>つ</sup>く<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>、  
天<sup>の</sup>日<sup>鷲</sup>の<sup>神</sup>越<sup>し</sup>木<sup>綿</sup>越<sup>作</sup>ら<sup>し</sup>め、手<sup>置</sup>帆<sup>負</sup>彦<sup>狭</sup>知<sup>の</sup>二<sup>神</sup>越<sup>し</sup>大<sup>峡</sup>小<sup>峡</sup>の<sup>材</sup>  
越<sup>切</sup>あ<sup>る</sup>瑞<sup>の</sup>殿<sup>越</sup>つ<sup>く</sup>ら<sup>し</sup>む、その物<sup>す</sup>備<sup>しか</sup>ハ、天<sup>香</sup>山<sup>の</sup>五<sup>百</sup>箇<sup>の</sup>真<sup>賢</sup>木<sup>越</sup>根

ご<sup>し</sup>ニ<sup>し</sup>あ<sup>る</sup>、上<sup>枝</sup>ニ<sup>者</sup>八<sup>坂</sup>瓊<sup>の</sup>玉<sup>越</sup>与<sup>り</sup>か<sup>け</sup>、中<sup>枝</sup>ニ<sup>ハ</sup>八<sup>咫</sup>の<sup>鏡</sup>越<sup>与</sup>り<sup>か</sup>け、下<sup>枝</sup>ニ<sup>者</sup>  
青<sup>和</sup>幣<sup>白</sup>和<sup>幣</sup>越<sup>取</sup>か<sup>ける</sup>天<sup>の</sup>太<sup>玉</sup>命<sup>越</sup>し<sup>さ</sup>げ<sup>茂</sup>た<sup>し</sup>む、天<sup>児</sup>屋<sup>根</sup>命<sup>越</sup>し<sup>祈</sup>  
禱<sup>し</sup>む、天<sup>鈿</sup>目<sup>命</sup>真<sup>辞</sup>の<sup>葛</sup>越<sup>か</sup>づ<sup>ら</sup>ニ<sup>し</sup>、蘿<sup>葛</sup>越<sup>手</sup>纏<sup>ニ</sup>し、竹<sup>の</sup>葉<sup>飯</sup>憩<sup>木</sup>の<sup>葉</sup>  
手<sup>草</sup>ニ<sup>し</sup>あ<sup>る</sup>著<sup>鐸</sup>の<sup>矛</sup>越<sup>茂</sup>ち<sup>石</sup>窟<sup>の</sup>前<sup>ニ</sup>し<sup>俳</sup>優<sup>越</sup>し<sup>あ</sup>ひ<sup>与</sup>茂<sup>ニ</sup>う<sup>た</sup>ひ<sup>ま</sup>ふ、ま  
た<sup>庭</sup>燎<sup>越</sup>あ<sup>き</sup>ら<sup>か</sup>ニ<sup>し</sup>あ<sup>る</sup>常<sup>世</sup>の<sup>長</sup>鳴<sup>鳥</sup>越<sup>つ</sup>ど<sup>あ</sup>た<sup>か</sup>ひ<sup>ニ</sup>長<sup>鳴</sup>さ<sup>し</sup>む、是<sup>ハ</sup>ハ<sup>ミ</sup>な  
神<sup>楽</sup>の<sup>起</sup>なり<sup>本</sup>朝<sup>の</sup>神<sup>楽</sup>越<sup>こ</sup>こ<sup>ニ</sup>者<sup>し</sup>まる<sup>天</sup>照<sup>太</sup>神<sup>き</sup>こ<sup>し</sup>め<sup>し</sup>あ<sup>る</sup>わ<sup>れ</sup>此<sup>こ</sup>ろ<sup>石</sup>窟<sup>ニ</sup>か<sup>く</sup>れ<sup>越</sup>り、<sup>芦</sup>  
原<sup>の</sup>中<sup>津</sup>国<sup>ハ</sup>こ<sup>こ</sup>や<sup>ミ</sup>なら<sup>む</sup>、い<sup>か</sup>ニ<sup>天</sup>鈿<sup>目</sup>命<sup>か</sup>く<sup>ら</sup>く<sup>す</sup>る<sup>や</sup>与<sup>お</sup>ほ<sup>し</sup>あ<sup>る</sup>御<sup>手</sup>  
越<sup>以</sup>あ<sup>る</sup>細<sup>目</sup>ニ<sup>あ</sup>け<sup>見</sup>給<sup>ふ</sup>、この時<sup>ニ</sup>天<sup>手</sup>力<sup>雄</sup>命<sup>与</sup>い<sup>ふ</sup>神<sup>警</sup>戸<sup>の</sup>戸<sup>わ</sup>き<sup>ニ</sup>立<sup>給</sup>ひ  
し<sup>が</sup>其<sup>戸</sup>越<sup>引</sup>あ<sup>け</sup>新<sup>殿</sup>ニ<sup>う</sup>つ<sup>し</sup>た<sup>ま</sup>つ<sup>る</sup>、中<sup>臣</sup>の<sup>神</sup>忌<sup>部</sup>の<sup>神</sup>し<sup>め</sup>な<sup>わ</sup>越<sup>引</sup>め  
ぐ<sup>ら</sup>し<sup>あ</sup>る、また<sup>な</sup>か<sup>へ</sup>り<sup>入</sup>ま<sup>し</sup>そ<sup>与</sup>申<sup>た</sup>ま<sup>つ</sup>る、時<sup>ニ</sup>天<sup>者</sup>じ<sup>め</sup>あ<sup>る</sup>者<sup>れ</sup>茂<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>  
与<sup>茂</sup>ニ<sup>あ</sup>ひ<sup>み</sup>る<sup>面</sup>ミ<sup>な</sup>あ<sup>き</sup>ら<sup>か</sup>ニ<sup>し</sup>ろ<sup>し</sup>、手<sup>越</sup>の<sup>あ</sup>う<sup>た</sup>ひ<sup>ま</sup>ふ<sup>あ</sup>、あ<sup>ハ</sup>れ<sup>あ</sup>な<sup>お</sup>  
茂<sup>し</sup>ろ、あ<sup>な</sup>た<sup>の</sup>し、あ<sup>な</sup>さ<sup>や</sup>け<sup>お</sup>け<sup>与</sup>う<sup>た</sup>ふ、か<sup>く</sup>罪<sup>越</sup>素<sup>彥</sup>鳥<sup>尊</sup>ニ<sup>よ</sup>せ<sup>あ</sup>お<sup>ほ</sup>  
する<sup>ニ</sup>千<sup>座</sup>の<sup>置</sup>戸<sup>越</sup>以<sup>あ</sup>る<sup>首</sup>の<sup>髪</sup>手<sup>足</sup>の<sup>爪</sup>迄<sup>越</sup>ぬ<sup>か</sup>し<sup>め</sup>贖<sup>し</sup>め、其<sup>罪</sup>越<sup>ら</sup>ひ<sup>あ</sup>  
神<sup>逐</sup>の<sup>理</sup>越<sup>以</sup>あ<sup>る</sup>者<sup>ら</sup>ひ<sup>や</sup>ら<sup>ハ</sup>れ<sup>き</sup>、彼<sup>尊</sup>高<sup>天</sup>より<sup>下</sup>り<sup>出</sup>雲<sup>の</sup>簸<sup>の</sup>川<sup>上</sup>与<sup>い</sup>ふ<sup>所</sup>ニ  
いた<sup>り</sup>給<sup>ふ</sup>、其<sup>所</sup>ニ<sup>ひ</sup>与<sup>り</sup>の<sup>翁</sup>与<sup>姥</sup>与<sup>あり</sup>、ひ<sup>与</sup>り<sup>の</sup>少<sup>女</sup>越<sup>す</sup>あ<sup>か</sup>き<sup>な</sup>る<sup>な</sup>き  
け<sup>り</sup>素<sup>彥</sup>鳥<sup>尊</sup>た<sup>そ</sup>与<sup>問</sup>給<sup>ふ</sup>、わ<sup>れ</sup>ハ<sup>是</sup>国<sup>神</sup>なり、脚<sup>摩</sup>乳<sup>手</sup>摩<sup>乳</sup>与<sup>い</sup>ふ<sup>なり</sup>、この  
少<sup>女</sup>ハ<sup>わ</sup>が<sup>子</sup>なり、奇<sup>稻</sup>田<sup>姫</sup>与<sup>い</sup>ふ、さ<sup>き</sup>ニ<sup>八</sup>箇<sup>の</sup>少<sup>女</sup>あり、年<sup>こ</sup>ニ<sup>八</sup>岐<sup>の</sup>大<sup>蛇</sup>  
の<sup>た</sup>め<sup>ニ</sup>吞<sup>れ</sup>き、いま<sup>さら</sup>ニ<sup>又</sup>の<sup>ま</sup>れ<sup>なん</sup>与<sup>す</sup>、の<sup>が</sup>る<sup>る</sup>ニ<sup>よ</sup>し<sup>な</sup>し<sup>与</sup>申<sup>れ</sup>ハ、  
尊<sup>我</sup>ニ<sup>く</sup>れ<sup>ん</sup>や<sup>与</sup>宣<sup>ふ</sup>、見<sup>こ</sup>与<sup>り</sup>の<sup>ま</sup>ニ<sup>た</sup>あ<sup>ま</sup>つ<sup>る</sup>与<sup>申</sup>れ<sup>ハ</sup>、この越<sup>与</sup>め<sup>越</sup>  
湯<sup>津</sup>の<sup>つ</sup>ま<sup>く</sup>し<sup>ニ</sup>与<sup>り</sup>な<sup>し</sup>、ミ<sup>つ</sup>ら<sup>ニ</sup>さ<sup>し</sup>八<sup>醞</sup>の<sup>酒</sup>越<sup>八</sup>の<sup>槽</sup>ニ<sup>茂</sup>り<sup>あ</sup>る<sup>待</sup>給<sup>ふ</sup>ニ、者<sup>た</sup>  
し<sup>あ</sup>る<sup>彼</sup>大<sup>蛇</sup>来<sup>れ</sup>り、か<sup>し</sup>ら<sup>越</sup>の<sup>く</sup>ひ<sup>与</sup>つ<sup>さ</sup>か<sup>ふ</sup>ね<sup>ニ</sup>い<sup>れ</sup>あ<sup>る</sup>吞<sup>醉</sup>あ<sup>ぶ</sup>り<sup>ける</sup>越<sup>、</sup>  
尊<sup>者</sup>か<sup>せる</sup>十<sup>握</sup>の<sup>劍</sup>越<sup>ぬ</sup>き<sup>寸</sup>々<sup>ニ</sup>切<sup>つ</sup>、尾<sup>ニ</sup>いた<sup>り</sup>あ<sup>る</sup>劍<sup>の</sup>刃<sup>す</sup>こ<sup>し</sup>か<sup>け</sup>ぬ、割<sup>あ</sup>  
見<sup>給</sup>ハ<sup>ハ</sup>一<sup>の</sup>劍<sup>あり</sup>、其<sup>上</sup>ニ<sup>つ</sup>ね<sup>ニ</sup>雲<sup>氣</sup>あり<sup>け</sup>れ<sup>ハ</sup>天<sup>の</sup>む<sup>ら</sup>雲<sup>の</sup>劍<sup>名</sup>付<sup>、</sup>是<sup>あ</sup>や  
し<sup>き</sup>つ<sup>る</sup>き<sup>なり</sup>、我<sup>なん</sup>そ<sup>あ</sup>わ<sup>た</sup>く<sup>し</sup>ニ<sup>越</sup>け<sup>ら</sup>む<sup>や</sup>与<sup>宣</sup>ひ<sup>あ</sup>る、天<sup>照</sup>太<sup>神</sup>ニ<sup>た</sup>あ<sup>ま</sup>  
つ<sup>り</sup>あ<sup>け</sup>ら<sup>れ</sup>ニ<sup>き</sup>、其<sup>後</sup>出<sup>雲</sup>の<sup>清</sup>地<sup>ニ</sup>いた<sup>り</sup>宮<sup>越</sup>た<sup>る</sup>稻<sup>田</sup>姫<sup>与</sup>住<sup>給</sup>ふ、大<sup>巴</sup>貴  
神<sup>越</sup>生<sup>し</sup>め<sup>素</sup>彥<sup>鳥</sup>尊<sup>者</sup>終<sup>ニ</sup>根<sup>の</sup>国<sup>ニ</sup>就<sup>ま</sup>し<sup>ぬ</sup>、大<sup>汝</sup>神<sup>此</sup>国<sup>ニ</sup>与<sup>ま</sup>り<sup>あ</sup>る<sup>天</sup>下<sup>越</sup>經  
營<sup>し</sup>、芦<sup>原</sup>の<sup>地</sup>越<sup>領</sup>し<sup>玉</sup>ひ<sup>け</sup>り、出<sup>雲</sup>の<sup>大</sup>社<sup>の</sup>神<sup>ニ</sup>ま<sup>す</sup>、又<sup>素</sup>彥<sup>鳥</sup>尊<sup>者</sup>の<sup>御</sup>子<sup>五</sup>十

猛神越ひきひる新羅国ニあまくたりますと云云、著しめ五十猛神あまくたります時ニ多ニ樹種越茂の下ります、しかれと韓地ニうへつくさすし以茂ちかへり、遂ニ筑紫より著しめ、大八洲国のうちニまさおほし、青山ニなますといふ事なし、この故ニ五十猛命有功の神とする也、これ則当社の御神なり、秘すへしと云、さ地神第二代正哉吾勝尊高皇産靈尊の女栲幡千々姫命ニあひ、饒速日尊瓊々杵尊越生しめ、吾勝尊芦原の中洲ニくたりますへかりし、御子うまれ給ひしか者かれ越くたすへしと申給ひ、天上ニとまります、先饒速日尊越くたし給ひし時、外祖高皇産靈尊十種の瑞宝越さつけ給ふ、瀛津鏡一、辺津鏡一ツ、八握劍一ツ、生玉一ツ、死玉一ツ、足玉一ツ、道反玉一ツ、地比礼一ツ、蜂比礼一ツ、品物比礼一ツあり、これやこの尊者やく神さり給ひニけり、凡国の主とる者くたし給ハさりしニや、吾勝尊くたり給ふへかりし時ハ天照太神三種の神器越つたへ給ふ、後ニまた瓊々杵尊ニ茂さつけまし、ニ饒速日尊ハ是越得給ハす、しかれハ日嗣の神ニハましまさぬなるへし、天照太神吾勝尊天上ニとまり給へ、地神の第一第二ニかそへたまつる、その著しめ天下の主たるへし、生れ給ひしゆへニや、第三代天津瓊々杵尊天孫与茂皇孫与茂申なり、皇祖天照太神高皇産靈尊いつきめでミまし、芦原の中州の主与なし、あまくたし給者、愛ニ其国邪神あれ、たやすく下り玉ふこ与かたかりけれハ、経津主命武甕槌神たち神勅越うけゑたいらげかへりこ申給ふ、そのち天照太神高皇産靈尊あひ者、皇孫越くたし給ふ、八百萬の神たち勅越うけ給り、御供ニつかふまつる、諸神の上主三十二神あり、其中ニ五部の神といふ者、天児屋命、天太玉命、天鈿女命、石凝姥命、玉屋命なり、此中ニ茂中臣忌部の二神ハむね与の神勅越うけ、皇孫越たすけまほり給ふ、また三種の神宝越さつけまします、まつあらかしめ皇孫ニみことのりし、宜く、芦原の千五百秋の瑞穂の国ハわが子孫ノ可レ王之地也、亘爾皇孫就る治焉、行矣、宝祚之隆当与天壤無窮者矣、また天神御手ニ宝鏡越茂ち給ひ皇孫ニさづけ、祝ギ、宜く吾兒この宝ノ鏡越視まさんこ与まさニな越、吾越視ルがご与くすへし、床越同ジク殿共ニし、以斎ハイノ鏡与せよ、のたまふ、八坂瓊の曲玉天の聚雲の劍越加へ三種与す、またこの鏡のこ与くニ分明なる越、以天下ニ照臨し給

へ、八坂瓊のひろがれるこ与く曲妙越以天下越しろしめせ、神劍越ひきさげ順ハさる茂の越たるらげ給へ、神勅まし、ける与ぞ、この国の神宝ニ、皇統一種たゞしくましますこ、誠これらの勅ニみられたり、三種の神器世ニつたふ事日月星の天ニあるニおなし、鏡八月の躰なり、玉者月の精也、劍ハ星の気なり、深き習あるへきニや、そ茂く彼宝鏡ハさきニしるし侍る石凝姥命のつくり給へりし八呎の御鏡、玉ハ八坂瓊の曲玉、玉屋命のつくり給へるなり、劍ハ素戔嗚尊の得給ひ、太神ニた、まつられし聚雲の劍なり、此三種ニつきたる神勅者まさしく国越た茂ちますべき道なるへし、鏡者一物越たく者へずわたくしの心なくし、万象越らすニ是非善惡のすかたニしたかひ、感応する越徳与す、是正直の本源なり、玉ハ柔和善順越徳与す、慈愛の本源なり、劍ハ剛利決断越徳与す、智恵の本源なり、此三徳越あ者せうけすし、ハ天下のおさまらむ事まこ与かたかるへし、神勅あきらかニし、こ与ばつゞまやかニむねひろし、あまつさへ神器ニあら者し給へり、いとかたじけなきこ与ニや、中ニ茂鏡越本与し宗廟の正躰与あふがれ玉ふ鏡ハ明越かたち与せり、心性あきらかなれハ慈愛決断その中ニあり、又まさしく御影越うつし給ひしかバふかき御心越与め給ひ、んぞかし、天ニ有茂の日月よりあきらかなるハなし、よりの文字越制するニ茂日月越明与す、我神大日の宝ニまします者、明德越以照臨し給ふ事陰陽ニ越さる者、かりがたし、冥顕ニつきゑたのミあり、君茂臣茂神明の光胤越うけ、或者まさしく勅越うけし神たちの苗裔也、たれかこれ越あふぎた、まつらざるべき、かく、この瓊々杵尊あまくたりまし、ニ猿田彦与いふ神まいり、あいき、あり、か、やき、目越あ者する神なりしニ、天鈿目の神ゆきあひぬ、皇孫いづくニかいたりましますへき、与問しかハ、筑紫の日向の高千穂の穂觸の峯ニましますへし、われハ伊勢の五十鈴の河上ニいたるへし、与申、かの神の申のま、ニ穂觸の峰ニあまくたり、しつまり給ふへき所越茂与められしニ、事勝国勝与いふ神是茂伊弉諾、まいり、わか居たる吾田の長狭の御崎なんよろしかるへし、申玉ひけれハ、その所ニすませ給ひけり、此尊天下越おさめ給ふ事三十万八千五百三十三年、与い、これ日本書紀の是より上つかた天上ニとまります神たちの御事ハ年序者かりかたきニや、天地わかれしよりこのかたのこ与幾年越へた

りといふ事見江たる文なし、第四代出見尊申たまつるこの尊天下越おさめ給ふ事六十三万七千八百九十三年といへり、これらの年記<sup>ニ</sup>習ある事なるへし、震旦の世者しめ<sup>い</sup>へるニ万物混然<sup>与</sup>し<sup>あ</sup>ひ者なれず、これ越混沌<sup>与</sup>い<sup>い</sup>ふ、その後軽く清る<sup>茂</sup>の<sup>ハ</sup>天<sup>与</sup>なり、重く濁る<sup>茂</sup>の<sup>ハ</sup>地<sup>与</sup>なり、中和の気<sup>者</sup>人<sup>与</sup>なるこれ越三才<sup>与</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>これ</sup>ま<sup>ハ</sup>我國<sup>者</sup>しま<sup>り</sup>あ<sup>る</sup>その<sup>者</sup>し<sup>め</sup>の<sup>君</sup>盤古<sup>氏</sup>天下<sup>越</sup>お<sup>さ</sup>む<sup>る</sup>事<sup>一</sup>万八千年、天皇氏地皇氏人皇氏<sup>与</sup>い<sup>ふ</sup>王<sup>あ</sup>ひ<sup>つ</sup>ひ<sup>あ</sup>九十一代<sup>一</sup>百八万二千七百六十年、さき<sup>ニ</sup>あ<sup>ハ</sup>す<sup>れ</sup>ハ<sup>一</sup>百十万七千六百年、し<sup>か</sup>ら<sup>ハ</sup>盤古<sup>の</sup>者<sup>し</sup>め<sup>ハ</sup>この<sup>尊</sup>の<sup>御</sup>世<sup>の</sup>末<sup>つ</sup>か<sup>た</sup>ニ<sup>あ</sup>た<sup>る</sup>へ<sup>き</sup>ニ<sup>や</sup>、第五代<sup>越</sup>尊<sup>不</sup>合<sup>尊</sup>申<sup>た</sup>ま<sup>つ</sup>る<sup>こ</sup>の<sup>神</sup>の<sup>御</sup>代<sup>七</sup>十<sup>万</sup>余<sup>年</sup>ほ<sup>与</sup>ニ<sup>や</sup>、茂<sup>ろ</sup>こ<sup>し</sup>の<sup>三</sup>皇<sup>の</sup>者<sup>し</sup>め<sup>伏</sup>犧<sup>与</sup>い<sup>ふ</sup>王<sup>あ</sup>り、これより易道<sup>越</sup>説<sup>れ</sup>たり、次<sup>ニ</sup>神<sup>農</sup>氏<sup>軒</sup>輶<sup>氏</sup>三代<sup>あ</sup>ハ<sup>せ</sup>五<sup>万</sup>八<sup>千</sup>四<sup>百</sup>四<sup>十</sup>二<sup>年</sup>なり、この尊<sup>の</sup>八<sup>十</sup>三<sup>万</sup>五<sup>千</sup>六<sup>百</sup>六<sup>十</sup>七<sup>年</sup>ニ<sup>あ</sup>た<sup>る</sup>年、天竺<sup>国</sup>ニ<sup>釈</sup>迦<sup>佛</sup>出<sup>生</sup>せ<sup>ら</sup>る、是より仏法<sup>越</sup>説<sup>れ</sup>たりし<sup>か</sup>れ<sup>ハ</sup>仏<sup>法</sup>ハ<sup>釈</sup>迦<sup>仏</sup>ニ<sup>者</sup>しま<sup>り</sup>儒<sup>教</sup>ハ<sup>伏</sup>犧<sup>氏</sup>より<sup>者</sup>しま<sup>る</sup>与<sup>い</sup>へ<sup>者</sup>、か<sup>の</sup>二<sup>教</sup>ハ<sup>皆</sup>神<sup>代</sup>より<sup>者</sup>る<sup>か</sup>末<sup>の</sup>事<sup>な</sup>れ<sup>ハ</sup>、世界<sup>国</sup>土<sup>の</sup>うち<sup>ニ</sup>お<sup>お</sup>る<sup>ハ</sup>聊<sup>神</sup>道<sup>より</sup>先<sup>なる</sup>道<sup>ハ</sup>あ<sup>ら</sup>さ<sup>る</sup>へ<sup>し</sup>、爰<sup>越</sup>以<sup>日</sup>本<sup>神</sup>国<sup>の</sup>民<sup>ハ</sup>一<sup>身</sup>の<sup>心</sup>源<sup>越</sup>清<sup>浄</sup>ニ<sup>し</sup>る<sup>神</sup>代<sup>の</sup>古<sup>風</sup>越<sup>あ</sup>か<sup>め</sup>正<sup>直</sup>の<sup>根</sup>元<sup>ニ</sup>か<sup>へ</sup>り<sup>る</sup>邪<sup>曲</sup>の<sup>末</sup>法<sup>越</sup>捨<sup>る</sup>今<sup>宗</sup>源<sup>の</sup>妙<sup>行</sup>越<sup>願</sup>の<sup>な</sup>ら<sup>し</sup>、この<sup>神</sup>か<sup>く</sup>れ<sup>さ</sup>せ<sup>ま</sup>し<sup>く</sup>つ<sup>、</sup>す<sup>へ</sup>あ<sup>る</sup>天<sup>下</sup>越<sup>お</sup>さ<sup>め</sup>給<sup>ふ</sup>事<sup>八</sup>十<sup>三</sup>万<sup>六</sup>千<sup>四</sup>十<sup>三</sup>年<sup>与</sup>い<sup>へ</sup>り、是<sup>より</sup>上<sup>つ</sup>か<sup>た</sup>越<sup>地</sup>神<sup>五</sup>代<sup>与</sup>ハ<sup>申</sup>也、二代<sup>ハ</sup>天<sup>上</sup>ニ<sup>与</sup>ま<sup>り</sup>玉<sup>ひ</sup>下<sup>三</sup>代<sup>ハ</sup>西<sup>洲</sup>の<sup>宮</sup>ニ<sup>あ</sup>る<sup>多</sup>の<sup>年</sup>越<sup>送</sup>り<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>す、神<sup>代</sup>の<sup>事</sup>な<sup>れ</sup>ハ<sup>そ</sup>の<sup>行</sup>迹<sup>ニ</sup>た<sup>し</sup>か<sup>な</sup>ら<sup>ず</sup>与<sup>い</sup>へ<sup>者</sup>、尊<sup>不</sup>合<sup>尊</sup>の<sup>治</sup>世<sup>八</sup>十<sup>三</sup>万<sup>六</sup>千<sup>八</sup>百<sup>余</sup>歳<sup>の</sup>間<sup>事</sup>の<sup>記</sup>す<sup>へ</sup>き<sup>な</sup>し、太古<sup>の</sup>無<sup>事</sup>越<sup>し</sup>る<sup>へ</sup>し、至<sup>治</sup>の<sup>象</sup>是<sup>より</sup>あ<sup>き</sup>ら<sup>か</sup>なる<sup>ハ</sup>なし、凡<sup>神</sup>代<sup>の</sup>風<sup>無</sup>事<sup>越</sup>以<sup>宗</sup>与<sup>す</sup>、神<sup>道</sup>の<sup>た</sup>つ<sup>与</sup>ふ<sup>所</sup>い<sup>つ</sup>れ<sup>か</sup>庶<sup>幾</sup>せ<sup>さ</sup>ら<sup>む</sup>、つ<sup>た</sup>へ<sup>き</sup>く<sup>神</sup>世<sup>ニ</sup>ハ<sup>人</sup>の<sup>心</sup>聖<sup>ク</sup>し<sup>る</sup>常<sup>なり</sup>直<sup>ヤ</sup>カ<sup>ニ</sup>し<sup>る</sup>正<sup>し</sup>き<sup>与</sup>い<sup>へ</sup>者<sup>茂</sup>地<sup>神</sup>の<sup>末</sup>つ<sup>か</sup>た<sup>より</sup>天下<sup>四</sup>方<sup>の</sup>人<sup>民</sup>そ<sup>の</sup>心<sup>神</sup>シ<sup>イ</sup>く<sup>ら</sup>く<sup>なり</sup>あ<sup>る</sup>か<sup>れ</sup>これ<sup>の</sup>名<sup>越</sup>わ<sup>か</sup>ち<sup>心</sup>ほ<sup>ど</sup>バ<sup>レ</sup>り<sup>あ</sup>やす<sup>き</sup>時<sup>あ</sup>る<sup>こ</sup>と<sup>な</sup>く<sup>心</sup>ノ<sup>蔵</sup>メ<sup>や</sup>ふ<sup>れ</sup>る<sup>神</sup>う<sup>か</sup>れ<sup>さ</sup>る<sup>時</sup>ハ<sup>す</sup>な<sup>ハ</sup>ち<sup>身</sup>ほ<sup>ろ</sup>ぶ<sup>、</sup>人<sup>ハ</sup>天<sup>地</sup>の<sup>靈</sup>氣<sup>越</sup>う<sup>け</sup>る<sup>靈</sup>氣<sup>の</sup>なる<sup>所</sup>越<sup>た</sup>う<sup>与</sup>ま<sup>す</sup>、神<sup>明</sup>の<sup>光</sup>胤<sup>越</sup>う<sup>へ</sup>な<sup>ら</sup>神<sup>明</sup>の<sup>禁</sup>令<sup>越</sup>う<sup>け</sup>ご<sup>ハ</sup>ず<sup>、</sup>か<sup>れ</sup>ニ<sup>与</sup>こ<sup>や</sup>み<sup>の</sup>よ<sup>ニ</sup>し<sup>づ</sup>ミ<sup>、</sup>根<sup>国</sup>底<sup>国</sup>ニ<sup>さ</sup>ま<sup>よ</sup>ふ<sup>与</sup>ぞ<sup>聞</sup>江<sup>し</sup>、い<sup>よ</sup>く<sup>末</sup>の<sup>世</sup>与<sup>なり</sup>あ<sup>る</sup>人<sup>不</sup>正<sup>ニ</sup>な<sup>れ</sup>り<sup>ける</sup>より<sup>し</sup>る<sup>、</sup>天<sup>道</sup>ニ<sup>そ</sup>む<sup>き</sup>神<sup>道</sup>ニ<sup>た</sup>が<sup>ふ</sup>、

その罪事の咎咎あまねく天下国家の上<sup>ニ</sup>越よび、災害の並<sup>ビ</sup>いたる報たちまちかげひゞきのこ<sup>と</sup>く<sup>なり</sup>与<sup>い</sup>へ<sup>者</sup>茂<sup>、</sup>民<sup>ト</sup>不<sup>道</sup>ニ<sup>し</sup>る<sup>お</sup>ど<sup>ろ</sup>く<sup>事</sup>なし、あ<sup>く</sup>歎<sup>き</sup>かな<sup>畏</sup>かな<sup>や</sup>、この<sup>ゆ</sup>へ<sup>ニ</sup>風<sup>雨</sup>時<sup>越</sup>た<sup>が</sup>へ<sup>寒</sup>暑<sup>節</sup>ニ<sup>す</sup>ぎ<sup>あ</sup>五<sup>穀</sup>み<sup>の</sup>ら<sup>ず</sup>四<sup>菜</sup>し<sup>げ</sup>ら<sup>ず</sup>万<sup>物</sup>悉<sup>所</sup>越<sup>う</sup>し<sup>な</sup>ふ、此<sup>時</sup>ニ<sup>あ</sup>た<sup>り</sup>る<sup>人</sup>俄<sup>ニ</sup>天<sup>道</sup>越<sup>祈</sup>り<sup>神</sup>道<sup>ニ</sup>奉<sup>ず</sup>与<sup>い</sup>へ<sup>者</sup>茂<sup>、</sup>天<sup>道</sup>豈<sup>ほ</sup>ど<sup>こ</sup>さん<sup>や</sup>、神<sup>道</sup>豈<sup>か</sup>れ<sup>ん</sup>や、誠<sup>罪</sup>越<sup>天</sup>ニ<sup>獲</sup>と<sup>き</sup>ハ<sup>禱</sup>ニ<sup>所</sup>なし<sup>と</sup>ぞ<sup>申</sup>べ<sup>けれ</sup>愛<sup>越</sup>以<sup>從</sup>人<sup>天</sup>地<sup>ニ</sup>茂<sup>与</sup>づ<sup>い</sup>る<sup>命</sup>越<sup>つ</sup>ぎ<sup>皇</sup>祖<sup>越</sup>ま<sup>つ</sup>り<sup>あ</sup>る<sup>徳</sup>越<sup>顕</sup>し<sup>る</sup>源<sup>根</sup>越<sup>深</sup>ク<sup>し</sup>る<sup>祖</sup>神<sup>越</sup>う<sup>や</sup>ま<sup>ひ</sup>四<sup>方</sup>の<sup>国</sup>越<sup>ま</sup>い<sup>ら</sup>せ<sup>し</sup>め<sup>る</sup>以<sup>天</sup>位<sup>の</sup>貴<sup>越</sup>見<sup>せ</sup>大<sup>つ</sup>業<sup>越</sup>ひろ<sup>め</sup>る<sup>天</sup>下<sup>越</sup>明<sup>ニ</sup>せ<sup>よ</sup>与<sup>侍</sup>る<sup>ニ</sup>ま<sup>か</sup>せ<sup>る</sup>人<sup>々</sup>此<sup>道</sup>越<sup>ひろ</sup>む<sup>る</sup>時<sup>ハ</sup>す<sup>な</sup>者<sup>ち</sup>天<sup>地</sup>位<sup>し</sup>万<sup>物</sup>育<sup>せ</sup>ら<sup>れ</sup>人<sup>道</sup>全<sup>し</sup>、し<sup>か</sup>れ<sup>ハ</sup>神<sup>道</sup>さ<sup>か</sup>へ<sup>神</sup>明<sup>さ</sup>る<sup>ハ</sup>ひ<sup>越</sup>く<sup>だ</sup>し<sup>給</sup>ふ、その理<sup>あ</sup>き<sup>ら</sup>か<sup>なり</sup>与<sup>い</sup>へ<sup>者</sup>茂<sup>、</sup>ある<sup>ひ</sup>ハ<sup>又</sup>天<sup>の</sup>益<sup>人</sup>ら<sup>が</sup>犯<sup>シ</sup>過<sup>チ</sup>けん<sup>種</sup>々<sup>の</sup>罪<sup>事</sup>咎<sup>崇</sup>有<sup>時</sup>人<sup>々</sup>み<sup>づ</sup>か<sup>ら</sup>罪<sup>越</sup>悔<sup>イ</sup>あ<sup>や</sup>ま<sup>ち</sup>越<sup>あ</sup>ら<sup>た</sup>め<sup>る</sup>邪<sup>越</sup>す<sup>正</sup>ニ<sup>し</sup>た<sup>が</sup>ひ<sup>る</sup>杖<sup>清</sup>む<sup>る</sup>時<sup>ハ</sup>神<sup>茂</sup>又<sup>納</sup>受<sup>ま</sup>し<sup>く</sup>廣<sup>大</sup>慈<sup>悲</sup>の<sup>神</sup>遍<sup>越</sup>め<sup>ぐ</sup>ら<sup>し</sup>人<sup>の</sup>願<sup>ニ</sup>感<sup>じ</sup>る<sup>□</sup>護<sup>し</sup>給<sup>者</sup>す<sup>与</sup>い<sup>ふ</sup>事<sup>なし</sup>、神<sup>前</sup>の<sup>宝</sup>鏡<sup>ハ</sup>これ<sup>の</sup>證<sup>明</sup>なり、民<sup>あ</sup>ふ<sup>ひ</sup>る<sup>信</sup>越<sup>与</sup>る<sup>へ</sup>し、こ<sup>、</sup>ニ<sup>尊</sup>不<sup>合</sup>尊<sup>八</sup>十<sup>三</sup>万<sup>余</sup>年<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>ニ<sup>そ</sup>の<sup>御</sup>子<sup>盤</sup>余<sup>彦</sup>尊<sup>神</sup>武<sup>天皇</sup>の<sup>御</sup>世<sup>より</sup>俄<sup>ニ</sup>人<sup>皇</sup>の<sup>代</sup>与<sup>なり</sup>曆<sup>数</sup>茂<sup>み</sup>し<sup>か</sup>く<sup>なり</sup>ニ<sup>ける</sup>こ<sup>と</sup>う<sup>た</sup>か<sup>ふ</sup>人<sup>茂</sup>ある<sup>へ</sup>き<sup>ニ</sup>や、され<sup>与</sup>神<sup>道</sup>の<sup>事</sup>越<sup>し</sup>る<sup>者</sup>かり<sup>か</sup>た<sup>し</sup>、又<sup>百</sup>王<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>す<sup>へ</sup>し<sup>と</sup>申<sup>め</sup>り、十<sup>々</sup>の<sup>百</sup>ニ<sup>者</sup>あ<sup>ら</sup>さ<sup>る</sup>へ<sup>し</sup>、窮<sup>な</sup>き<sup>越</sup>百<sup>と</sup>い<sup>へ</sup>り、百<sup>官</sup>百<sup>姓</sup>な<sup>ど</sup>い<sup>ふ</sup>ニ<sup>あ</sup>し<sup>る</sup>へ<sup>き</sup>なり、む<sup>か</sup>し<sup>皇</sup>祖<sup>天</sup>照<sup>太</sup>神<sup>天</sup>孫<sup>の</sup>尊<sup>ニ</sup>み<sup>こ</sup>と<sup>の</sup>り<sup>せ</sup>し<sup>宝</sup>祚<sup>越</sup>隆<sup>こ</sup>与<sup>当</sup>ニ<sup>天</sup>壤<sup>与</sup>究<sup>り</sup>な<sup>ら</sup>ん<sup>与</sup>あり、天地<sup>茂</sup>む<sup>か</sup>し<sup>ニ</sup>か<sup>ハ</sup>ら<sup>ず</sup>、日<sup>月</sup>茂<sup>光</sup>越<sup>あ</sup>ら<sup>た</sup>め<sup>す</sup>、い<sup>者</sup>ん<sup>や</sup>三<sup>種</sup>の<sup>神</sup>器<sup>世</sup>ニ<sup>現</sup>在<sup>し</sup>給<sup>へ</sup>り、究<sup>ある</sup>へ<sup>か</sup>ら<sup>さ</sup>る<sup>ハ</sup>我<sup>が</sup>国<sup>越</sup>伝<sup>る</sup>宝<sup>祚</sup>なり、あ<sup>ふ</sup>き<sup>あ</sup>る<sup>た</sup>う<sup>と</sup>ミ<sup>た</sup>あ<sup>ま</sup>つ<sup>る</sup>へ<sup>き</sup>ハ<sup>日</sup>嗣<sup>越</sup>う<sup>け</sup>給<sup>ふ</sup>皇<sup>ギ</sup>ニ<sup>なん</sup>お<sup>者</sup>し<sup>ま</sup>す、人<sup>皇</sup>第<sup>一</sup>代<sup>越</sup>神<sup>日</sup>本<sup>盤</sup>余<sup>彦</sup>尊<sup>天皇</sup>与<sup>申</sup>、後<sup>ニ</sup>神<sup>武</sup>与<sup>名</sup>つ<sup>け</sup>た<sup>あ</sup>ま<sup>つ</sup>る<sup>地</sup>神<sup>五</sup>代<sup>尊</sup>不<sup>合</sup>尊<sup>第</sup>四<sup>の</sup>御<sup>子</sup>なり、御<sup>母</sup>ハ<sup>玉</sup>依<sup>姫</sup>与<sup>申</sup>、海<sup>神</sup>小<sup>童</sup>の<sup>第</sup>二<sup>の</sup>女<sup>なり</sup>、伊<sup>弉</sup>諾<sup>尊</sup>ニ<sup>者</sup>六<sup>世</sup>、大<sup>日</sup>靈<sup>尊</sup>ニ<sup>ハ</sup>五<sup>世</sup>の<sup>天</sup>孫<sup>ニ</sup>ま<sup>し</sup>ま<sup>す</sup>、神<sup>日</sup>本<sup>盤</sup>余<sup>彦</sup>尊<sup>与</sup>申<sup>ハ</sup>神<sup>代</sup>より<sup>の</sup>や<sup>ま</sup>と<sup>こ</sup>と<sup>者</sup>なり、神<sup>武</sup>ハ<sup>中</sup>古<sup>与</sup>なり<sup>あ</sup>る<sup>茂</sup>ろ<sup>こ</sup>し<sup>の</sup>こ<sup>と</sup>者<sup>ニ</sup>さ<sup>た</sup>め<sup>た</sup>あ<sup>ま</sup>つ<sup>る</sup>御<sup>名</sup>なり、又<sup>此</sup>御<sup>代</sup>より<sup>代</sup>こ<sup>と</sup>宮<sup>所</sup>越<sup>う</sup>つ<sup>さ</sup>れ<sup>し</sup>か<sup>者</sup>其<sup>所</sup>越<sup>名</sup>つ<sup>け</sup>る<sup>御</sup>名<sup>与</sup>茂<sup>す</sup>、この<sup>天</sup>皇<sup>越</sup>者<sup>檀</sup>原<sup>の</sup>宮<sup>与</sup>申<sup>是</sup>なり、また<sup>神</sup>代<sup>より</sup>至<sup>る</sup>貴<sup>越</sup>尊<sup>与</sup>い<sup>ひ</sup>次<sup>越</sup>命<sup>与</sup>い<sup>ふ</sup>、人<sup>の</sup>代<sup>与</sup>なり<sup>あ</sup>る<sup>ハ</sup>天<sup>皇</sup>与<sup>茂</sup>号<sup>し</sup>た<sup>あ</sup>ま<sup>つ</sup>

る、臣下ニ茂朝臣宿称臣なるといふ号出来ニけり、神武の御時より者しまれる事也、上古ニ尊与茂命与茂兼稱しける与み江たり、世くたりハ天皇越尊与申事茂見江す、臣越命与いふ事茂なし、古語の聞なれすなれる故ニや、この天皇御年十五ニ太子ニたち五十一ニ父の御神ニかハリ皇位ニつかしめ給ふ、今年辛酉の歳なり、筑紫日向の宮崎の宮ニおハしけるか兄の神たち及び皇子群臣ニみことのりし東征の事あり、この大八洲者ニな是王地也、神代幽昧なりしニより西偏の国ニしおほくの年序越送られけるニこそ、天皇舟楫越与のへ甲兵越あつめ大日本洲ニむかひ給ふ、道のつゐるの国々越たいらけ大倭ニ入れたまつる、かく天下悉くたゐらきニしかば大和国橿原ニ都越定宮つくりす、其制度天上の儀のごと、天照太神よりつたへ給へる三種の神器越大殿ニ安置し床越同しします、皇宮神宮ひつなりしかば国々の御調物越齋藏ニおさめ官物神物わきためなかりき、天兒根命の孫天ノ種子命天太玉命の孫天富命茂つ者ら神事越つかさ与る、神代の例ニこならず、又靈時越鳥見山の中ニ建天神地祇まつらしめ玉ふ、此天皇越人皇百王百代の太祖与あふきたままつる、天下越治給ふ事七十六年、御年一百二十七歳お者しましき、是すな者ち神代より人代ニうつる我朝の者しまりなり、抑筑前国三笠郡筑紫神社の由来越考るニ舊記云昔此界ノ上ニ有ニ庶猛神一往来之人半生半死其数極多、目曰人命盡神、于時筑紫君肥君等占之今筑紫君等之祖甕依姫為レ祝祭レ之、自レ以降、行路之人不レ被ニ神害、是以曰ニ筑紫神一可レ秘々或説云筑紫國魂白曰別々或説曰鶴鶴草其不合尊社例伝記曰田村麻呂なり与、庶猛神の事ハ既上ニ詳也、爰ニ田村麻呂越考ルニ從三位左京大夫兼右衛士督苜田麻呂子、考るニ正四位上犬養之孫、身長五尺八寸胸厚一尺寸目如ニ蒼鷹鬚編ニ金絲一有レ事重身則三百一斤、欲レ輕則六十四斤、隨ニ心所欲、怒目転視則禽獸懼伏、平居談笑則老少馴親云掌聞、筑紫神社ハ當時庶猛神ニ田村麻呂越合祭する茂のならし、其例間多し、田村社今近江国甲賀郡土山の駅の辺ニあり、祭所の神一座正一位田村大明神也、最神与称するニたり、並ニ又竈戸大神越勸請したまつれり、是則社家者流説なり、むかしハ日本国中大小の神社凡三千一百三十二座その他越式外の社与号す、毎歳神祇官ニ勅し以幣帛越奉年穀越祈り禍災越除く、是越名つ

ける祭といふ、是よりさき毎歳仲春四日幣使越郡国ニつか者す、これニいたる其国司詔越うける各其国の神越祭給ふ、これ越式内といふ、当国その一つなり、筑前国二十一社おハします、当社又その一ツ也き、天子ハ天下の神越祭給ひ国司八国社の神越祭給ふ、当社八国社のその一与し、百姓安堵の靈壇也、民こ越以義越つとめ君爰越以遠敬せずといふ事なし、職者ハ旦夕ニ清淨の誠越つくし領主のおほんためニハ福祥越祈り永貞越求る事神祇の徳ニ帰ずといふ事なし、爰以大明神ハ国家繁栄の恵越たれ武運長久の御矛越守護し給ふ、凡神祇ハ是人主の重する所臣下の尊ふる所なり、万民豈敬せさらんや、信せさらんや、于時延宝九年龍輶辛酉夏六月上絃日洛陽散人吉田鞠負敬識

從四位下神祇權少副卜部朝臣吉田定澄六世神孫定俊 かき者ん

筑紫神社興廢之事

- 一 至徳年中社頭有建立之由申伝欵、至延宝九年辛酉凡二百九十八年今案当社者延喜以前之鎮座也自延喜至延宝九年凡七百八十一年
- 一 大門迴廊拜殿殿其外末社不残一字筑紫一乱之時悉焼失畢
- 一 享徳二年筑紫能登守経門同左近将監俊門再興之至凡二百三十年
- 一 筑紫村与原田村之境有小丸山是称神山社壇在此神山之麓有御手洗池此辺惣名ニ大筑紫府一
- 一 筑紫本ハ云ニ津久志ト筑後筑前合テ為ニ一國一後分ニ前後ニ云フ知久世牟知久胡ト之故ニ又云ハ知久志ト欵、是定平ノ發明之説也、予拍レ節歎レ之
- 一 霜月朔日有ニ恒例神事一
- 一 昔有ニ神奉之行粧一遙宮所在レ今ニ其外古跡多存ニ干今ニ云
- 一 神領田古昔有ニ二十余町一由見ニ御函帳一今少不レ残
- 一 延宝八年庚申仲春神殿拜殿大門筑紫原田為ニ産子中一再興之奉レ寄進ニ干筑紫村
- 一 筑紫大明神宮一御縁起一卷奉納ス干

神前<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>家運長久一家親族息災延命之祈禱<sup>一</sup>也大明神愛憐納受焉

土肥次郎兵衛尉実平二十六代末孫

願主発起頭

大崎次郎左衛門尉

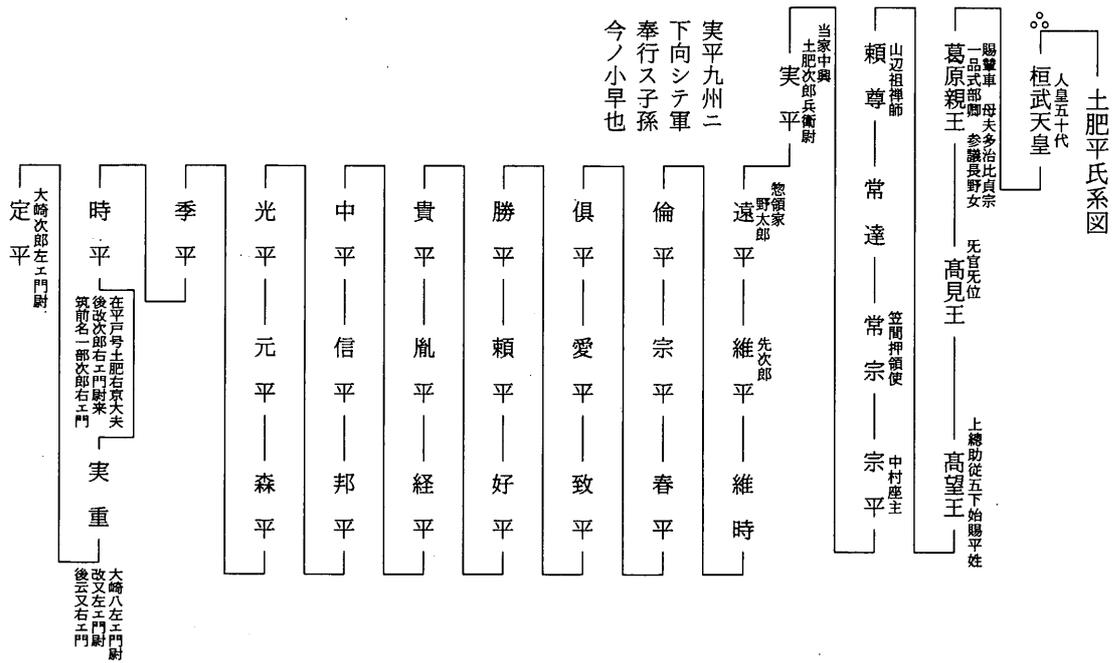
定平かき者ん

同発起

大崎七太夫

勝平かき者ん

延宝九年<sup>辛酉</sup>六月上絃日



## 御笠郡筑紫神社縁起

当社に古より有し縁起文書のたくひ、ことごとく、天正のミたれに失はてぬ、社司山内種次これをうれひ、再縁起を改め作らんと思へること、ここにとし有り、予享保己亥の秋、君命を奉り、来て此邑に幸たり、幸にして、神徳のかたしけなきを拜し奉りぬ、ここにおいて、社司種次としころのほろを、とけんことを求むといへとも、予もと草萊の鄙人固陋の習にしていともかしこき御ことなるを、いかてかたやすく、其かたはしをも、しるし奉らんや、しかれとも農民樵夫のために、日本書紀よりはしめて代々の国史に出たる事ともを考、しはらく管見をしるして、神威のかたしけなきをしらしめんとす、誠に僭妄の罪のかれかたく覺侍りぬ、ねかハハくは博雅の君子、ふたたび、予かあやまりを正し、たかえるを補ひ給ハハ幸なり

筑前国御笠郡原田邑筑紫神社は、当国十九神のそのひとつにして、祭り奉る御神ハ五十猛命にておハします、延喜式神名帳に、御笠郡筑紫神社一座名神とあり、いづれの御代に此地に鎮座し給ふといふことをしらす、此神社の御事ハ代々の国史に見てぬれハ、上古より鎮座し給ふなるへし、社司の伝説に神代より此地にしづまりましますよしへり、筑後の国風土記には筑後国ハもと筑前国と一國たり、此界のうへに庶猛神あり、往來の人無礼なれハ、なやまされて半ハ死に及ぶ、其かす極て多きゆへなづけて人のいのちつくしの神といふ、ときに筑紫君肥君肥君の君等、これをうれへ、今に筑紫君等の祖襲依姫を祝として是を祭る、然しよりこのかた、行路の人神のとかめをかうふらす、はしめつくしの神と云しを、のちにちくしといへり、筑紫氏代々当社の神司にして始ハ社のほとり筑紫村に居れり、宅の址いまに有り、城の腰といふ、その後世と成、兵革をわざとして天正の比武威を近隣にふるひハその後裔なり何の時よりか、甕門山の御神を相殿にまつり奉る、是御笠郡の惣社なるゆへ、まつり奉りしなるへし、また田村丸をも祭れり、田村丸ハ社司筑紫氏の祖神なるゆへまつれり、当社に筑紫氏代々の系今ハすへて三座にておハします、抑天神七代に当り給ふ、伊弉諾尊伊弉図一巻有

冊尊二神ともに夫婦して大八洲山川国土を生し給ふ、次に日神天照月神見尊を生す、はてに素戔嗚尊を生す、此神いさミたけく、いぶりにしてなきいざづるを以て、しわざとす、人ぐさをあからさまにして、青山をから山に、したまふ、父母二神ミことのりして汝あぢきなし、あめのしたに、君たるへからず、とおく根の国にかんざりませとのたまひて、遂にやらひ給ふ、こゝに素戔嗚尊ねの国に退りなんとす、天照大神にあひたまひて永く退りなんとて高天原にまふて給ひ、誓約のミなかに正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊をはじめ、すべて五男神を生し給ふ此五男神ハ天照大神取て御子とし養給ふ其のち素戔嗚尊、為行無状春ハしきまきし、畔をはなち、秋ハ天のぶちごまを御田の中にふさしめ、また新宮に放尿し、天のぶちごまをさかはぎにし、ミあらかをうかち、齋服殿になけい、天照大神おどろき玉ひて、天のいハやにいり給ひいハとをさしてこもり給ひぬ、故六合の内、とこやミとなりて夜昼のわかれもしらす、八十萬の神等はうれひ、もろともにはかりて、いハ戸の前にして神楽をそうし玉ひしかハ、天照大神御手をもつて警戸をほそめにあけたまへハ、手力雄神御手をたまハりて、引出し奉る、此ときにあたりて、上天初て暗れ衆ともに見る面みな白し、諸神等手をのへて舞たまふ、相ともに称していわく阿波礼阿那於茂志呂、阿那多能志阿那依夜憩飢憩、そのち諸神等罪を素戔嗚尊に帰て、おほするに、千座の置戸をもつてし、遂にせめはたる、髪をぬき、つめをぬかしむるに至りて、そのつミをあかなふ、すでにして終に、かんやらひにやらひ玉ふ、素戔嗚尊あめより出雲國簸の川上に至りて、大蛇を切、村雲の劔を得て、天の神に奉り給ひ、稲田姫を娶りて、御子大己貴神を生し給ふ、はしめ、素戔嗚尊天降り玉ふとき、御子五十猛神是当社御神也をひきひて新羅国にくだりまして曾戸茂梨の処にましてのたまハく、此地ハ吾おらまくほせじとのたまひて、終に埴土をもつてふねを作り東にわたり玉ふ、五十猛神天降り玉ふとき、多に樹種もちてくだり韓地にうへずしてことごとく持帰りて、ついに筑紫よりはじめて凡て大八洲の国の内に播植て青山と成し玉ふ、このゆへに五十猛命ハ我日の本に於て大功のおハします御神と申奉る、かかるたふとき御事にてましますは、昔ハ朝廷の御崇敬もあつく、代々の帝より神位を授奉らる、三代実録に清和天皇貞観元年正月

二十七日筑前国従五位下筑紫神に従四位下を授給ふ、また陽成天皇元慶三年六月八日筑前国従四位下筑紫神に従四位上を授給ふよししるせり、古は勅使なともたひたひ下り給ひしにや、勅使屋敷とて、いまにその址残り、されハ神田も多く油田、土器田、朱田、桑田、宮司田、猿桑田等の名いまに原田筑紫両村のあいだにあり、祭礼も嚴重にして神幸も有しと云伝へたり原田宿の南のはつれに祇園の社有、是御旅所のあとなり、そのうち応仁文明のころより世中兵革のミうちつゝき、永禄天正の間に至りてハ天下の壊乱極れり、社司筑紫氏も兵革をわざとして、筑紫村をさりて肥前国勝尾の城に移居し武威を近隣にふるへりといへとも、此時に及んで神領も没收せられ神宝文書等も凶賊かすめ去りぬ、神官社司もおのかさまくはなれちれり、神社の荒廃こゝに極りぬ山内氏一家のミやう記をつか初さの御社は享徳二癸酉年筑紫能登守経門同左近将監俊門、造營せしよし故き棟札にしるせり、しかりしよりこのかた二百有余年、寝殿破壊に及ひしを寛文二壬寅年村民力を合せ、新に今の御社を造立す昔の寝殿のあと今の寝殿の後に有、礎残り十一月初の卯の日を以て祭奉る三の卯あれハ石の鳥居ハ元禄十二年巳卯の春建立せり、額の文字ハ花山院内府定誠公まことかき給ふ、御社ハ丘陵の上まきに有て南に面ひ、原田の店駅に臨めり、農家旅館のきをならへ民のかままとにきハひて炊煙藹々たり、山下に御池有り、今ハわづかにかたはかり残りといへとも、早のとき農民此御池をきよめて雨を祈るにかならずしるしあらずといふことなし、また御食井ミけのい有り清水なり、末社に祖父堂有、伊弉諾尊を祭り奉る、鐘樓の址有、今ハ鐘もなし、北に筑紫村有、おほぢ初ハ原田村も筑紫村の内なすべて御社をめぐりて深林あり、茂樹香藹もうあとして滔天の積翠蒼々たり、緑竹蕪茸として陵雲の煙梢青々たり、実に当社の御神、筑紫よりはじめて樹種こだねをまきはじめ、我日の本を青山と成し給ふ、神代の御影を此地に宮柱ぶとしき立て、萬木を神垣の御しるしにしめし玉ふ、常磐の山のときは木ハ天地とともに長久成へし

享保五庚子年五月吉旦

梶川可久謹拝書

員原  
氏春

可久  
之印

## 筑紫神社縁起後序

原田の邑にしづまりまします筑紫神社ハこの国十九神のその一にして、いにしへ朝廷よりもことにたうとばせたまひし御事なれハ、すゑの世までもとこしなへにさかへさせ給ふへき御やしるなるに、過し世のミたれしころよりかゝる名たかき御神なる事も露わきまへ侍らて、人のいやまひつかふまつる事うとくなりゆくまゝに、御ミやゐもいとさうぐしく、夏草の事しけかりし御祭もたへくになり侍しか、いまの世四の海浪しつかにふく風枝をならさず、いにしへの事をもわすれ給ハす、ふりにし事をもこしたまふ御まつりこと、年月にをこなハれ侍りて、御やしるのさかへもやゝいにしへにたちかへるへきをひさき見えさせたまふこそたのもしきわざなりけれ、されともかのミたれし世回祿のわさハひ御ミやゐにをよひし時、むかしよりつたハリしふミとも、壁にかくすはかりことをなすミやつかさもなく、恵尺えきさかいさをしをたつるさと人もなかりしかは、ことくくほろひうせ侍りぬるそ、くちをしき事のかきなりしか、いまのミやつかさ山内種次此事をいたうれへ、御やしるの事実をかいしるして、いまでも人に見せしめのちの世にもつたへまほしく、こゝらの年このもかのものにもとめ侍しかと、あしわけをふねさハリをほく、いまだすゑとほり侍らざりに、ちかきとしよりわが従弟なる梶川可久君命をかうふり、此さとのつかさとなりて来りすミ侍るを、事のなりぬへき時いたりぬとよるこひ、つねに可久のかりまかりて此ほるとげなん事をかれずねかひ侍りけれハ、可久かれが志の甚せちなるをめつるまゝに、つゐに此事をうけひき侍りて、さとのまつりことなにくれといとこちたきいとまのひまに、六国史にもとつき、もろくのふミをかうかへ、ミやつかささとの翁のかりつぎいひつたへし事をも取捨し、ほとなう縁起一巻を作りて種次にさつけぬ、そのしるせるところたゞしう考ふる事くハしく、文のさまもまたをいらかなれば、まことに御やしるにをさめて、ななき世につたふべきこよなき神たかななるへし、ちかきころ可久よりやつかれに文して、巻の末にことはをくハふへきよしいひを

こせて侍りしか、ざえミしかき身にいとほけなきもとと思ふものから、やつかれも又此御神をうやまふ事あさからねば、此事のなりぬるをよろこぶあまりに、いな舟のいなともいはず、うけばりて此あらましをかきつゞり侍るぞ、いとかたハラいたきわざなりける、あゝ此巻を見ん人の、すなごをもて玉にましゆるのそしりあらんこそ、後の世までもななきわがをもてぶせなるへけれ

享保七年八月念八日

貝原元夫氏書

山田行恒浄写

恒行

貝原  
常春

元夫  
之印

(箱書)「神納御縁起包二ツ 文政七年甲申閏八月

下向長崎奉行

高橋越前守殿」

# 乍恐申上覚

八月十八日

筑前国十九神之儀者延喜式神名帳日本紀并舊事本紀古事記等ニ相見ヘ申たる名  
神名社ニ而御座ハ、依之長政公以来御代々追々御神領御寄附被遊ハ、就其十九  
神之内十四神ハ御社領有之ハ、相残五ヶ所ハいまた神領無御座ハ、十九神ハ何  
れ茂御國中ニ而、同キ名神之儀ニ而左程勝劣無御座ハ、然共十九神之内十四神  
ニハ御神領御寄附被成、残ル五社ニ神領いまた御寄附不被成ハ而ハ御殿典之儀  
ニ而、神慮茂如何与乍憚残念之御事ニ奉存ハ、日本之古語ニ茂神者依テ人之  
敬増威、人者依テ神之徳ニ添運ヲ与申ハハ、御国家御安全御祈禱之御  
ため相残ル五社ヘ茂神領少々御寄附被成ハ而可然与乍恐奉存寄ハ付、各様迄申  
上儀ニ御座ハ、た与ハハ一ヶ所ニ神領高廿石充御寄附被遊ハ而茂、五社ニ而わつ  
かニ都合百石之儀ニ而御座ハ、然共御国主様与リ御寄附被成ハハ、少分ニ而  
茂其神社之ためニハ一廉御規模なる御事ニ御座ハ、且又御笠郡原田村之神社ハ  
往来之道側ニ而御座ハ付、上使并隣国之御大名衆御通之刻ハ折々御参詣被成ハ  
而神号な与御尋被成ハ由承知仕ハ、加様之時茂名社之儀ニ御座ハ間、御社領御  
座ハ一段可然御事与奉存ハ、何与そ御相談於被遊者乍恐大老之野生奉遂本望  
儀ニ御座ハ

光之様御代ニ茂神領御寄附之儀ニ付拙者存寄之儀与茂申上ハハ、御□□被為成、  
十九神社数ヶ所ヘ神領御寄附被遊ハ、其御先例茂御座□、重疊乍恐奉申上ハ、  
私儀光之様御代筑前国之記録書立上申様ニ被為仰付ハ付、御國中村々無残所  
二年之間巡覽仕、其後数年之内ニ記録廿八册書立上ケハ而、神社之儀越茂委細記  
し申ハ付、只今私儀極老ニ而万事廃忘仕ハ而、如此之儀申上ハ事指出ハ而不相  
応之儀ニ御座ハハ、右之子細御座ハ故申上御事ニ御座ハ、丹下殿平馬殿鞞負  
殿式部殿茂右之旨被仰述可被下ハ、奉願ハ以上

貝原久兵衛

かき者ん

(六) 宮座關係資料

筑紫宮・本座

(表紙)

文政三歲  
筑紫宮御神座溜錢帳  
辰ノ十一月吉日

山崎代助  
山内喜助  
山崎文助  
山内五市郎  
山崎治助  
同 佐七  
山内幸右衛門  
山崎良助  
山内弥七  
同 長治郎  
同 弥吉  
山崎半次郎  
山内甚吉  
山内卯右衛門  
多田卯三郎  
山内半蔵  
久光久治

(山内文書132)

天保六年未十一月六日ニ除ル

○宗貞桂七

山崎又助  
同 多助

山崎理平

山内七右衛門

山崎利八

中村弥七

山内甚作

同七五郎

山崎兵助

人数貳拾七人

天保六年未十一月六日ニ除ル

辰十一月

一、六拾五錢百拾五匁 利考割定

右之通預置処相違無御座ハ 以上

預リ主松屋

卯右衛門㊦

文政三年辰十一月

先ニ入

御神座御連中様

一、六錢百三拾五匁

三年溜錢

一、同拾壹匁五分

同年利錢

百四拾六匁五分

右之通預リ置候処相違無御座ハ 以上

松屋 卯右衛門㊦

文政四年十一月 先ニ入  
御神社御連中様

酉年利六拾貳匁 酉十一月以上算用相極  
錢利六拾貳匁 頭本卯三郎江相渡

巳年迄溜リ錢

酉十一月八日預リ分 山内卯右衛門

一、六錢貳百六拾壹匁五分

一、元錢百三拾五匁

一、同 貳拾六匁壹分五厘 午年利分

リ拾三匁五分

午年掛錢分

合元利八百三拾目五分

一、同 百貳拾五匁

内七拾五匁五分 座元松屋江相渡

外ニ利四拾壹匁貳分六厘

成十一月十四日

預リ主

殘而元七百五拾五匁

同人預リ

四百五拾三匁九分一厘

卯右衛門印

利七拾五匁五分

卯右衛門之七右衛門江相渡

内三匁九分一厘拂

文政十二年丑十一月利受取分

午十一月九日

七拾五匁五分

与平之久次江相渡

四百五拾目預リ入申候 先ニ入

文政十三年十一月十三日利受取

七拾五匁五分

与平之甚作江相渡

未十一月十五日

天保二年十一月七日利分

一、六錢四百五拾目

七拾五匁五分

與平之太助江相渡

右之通髓ニ預リ置外処相違無御座外 以上

天保三年十一月十三日

松屋 卯右衛門

七拾五匁五分

同人之慶七江相渡

文政六年十一月

天保四年十一月十三日

御神座御連中様

七拾五匁五分

同人之理平江相渡

此利四拾五匁

天保五年ノ十二月六日

申年持寄分

七拾五匁五分

定平請取

一、百貳拾五匁

明治十八年三月廿八日巡リ尾田地相求候節余米代金受取候事

三口

一、米壹俵宛

合六百貳拾目

右天保六末年兵七座ニ而有之通相定、万一田地買求候節ハ合而卯右衛門手元之

壹勺余米丈ヶ 持出可申外、夫迄ハ年々現米ニ而壹勺宛連中ニ指出之事

預リ主 七五郎

戌十一月十四日

一、元三拾七匁

右糲器代之内

亥十一月

此利三匁七分

〆

元利四拾目七分

子十一月

此利四匁七厘

〆

元利四拾四匁七分七厘

巳十一月

此利四匁四分七厘

元利〆四拾九匁二分四厘

預リ主 壹助

亥十一月十四日

一、元錢三拾五匁

子十一月

此利三匁五分

此利三匁八分五厘

元利〆四拾貳匁三分五厘

善助

子ノ年分

一、元錢貳拾五匁

此利貳匁五分

元利〆貳拾七匁五分

三口〆百拾九匁九厘

丑十一月十三日

一、三拾貳匁

引

一、七匁九分六厘 兵助指出分

〆 百五拾九匁五厘

# 筑紫宮・筑紫座

(表紙)

享保八年 卯  
十一月十五日  
筑紫村御宮座帳

## 記録

- 一大土器 五ツ
- 一小土器 三束
- 一板折敷 五枚
- 一上莚 壹枚

## 定

- 一 御饗 (巻力) □本 惣兵衛
- 右八大明神へ棒ル 甚右衛門
- 一同 壹本 与市
- 右八太郎丸天神上ル 孫主郎
- 一同 壹本 助右衛門
- 右八惣兵衛浦天神上ル 武八
- 一 小饗 貳本 正七
- 右八座前ニ遣ス 七右衛門
- 孫市
- 部四郎

(筑紫神社文書2)

三拾壹人

又四郎

- 甚七
- 半内
- 
- 
- 半助
- 甚内
- 甚八
- 勘四□
- 半七
- 市三郎
- 久七
- 十
- 又助
- 善助
- 木主郎
- 七良兵衛
- 道斬
- 弥平
- 権平
- 利作
- 藤助
- 太忠
- 源五郎
- 藤作

〇〇〇七  
〇五三良

卯ノ年卯日

十一月十五日 甚右衛門

与市

歛遊祭祀賦慎言

辰ノ年卯ノ日 甚七

十一月 七良兵衛

巳ノ年卯ノ月 惣兵衛

十一月九日 勘七

午ノ年卯ノ日 利作

弥平

享保十二年 半〇

未ノ十一月卯ノ日 弥市

享保拾参年 六三郎

申ノ十一月 久七

享保十四年卯ノ月 新四郎

酉ノ十一月九日 勘六

享保十五年 座本

戌ノ十一月十四 正七

組合

小七

享保十六年 孫平

亥ノ十一月八日 七右衛門

享保十七年 半助

子ノ十一月八日 又五郎

享保十八年 半平

丑ノ十一月十四日 六三郎

享保十九年 助右衛門

寅ノ十一月八日 次良七

享保廿年 甚八

卯十一月八日 太忠

元文元年 武八

卯ノ月 五三郎

元文貳年 善助

巳ノ十一月七日 市三郎

元文三年 藤作

午ノ十一月七日 平兵衛

元文四年 孫平

未ノ十一月十二日 甚六

元文五歳 甚七

申ノ十一月十二日 半助

寛保元年 弥作

申ノ十一月十二日 半七

寛保貳年 善七

戌ノ十一月十二日 權忠

寛保參歳 源五郎

亥ノ十一月十二日 助右衛門

延享元年 甚次郎

子ノ十一月十八日 甚六

延享貳年 忠市

丑ノ十一月十二日 五三郎

延享三年 惣市

寅ノ十一月十二日 市三郎

延享四年 惣次郎

卯ノ十一月十七日 善次

延享四年丁卯ノ十一月十七日人数改ル

○惣次郎

○甚次郎

○忠市

○喜助

○作五郎

○武市

○甚七

○半内

○甚六

○惣市

○善七

○勘六

○久次

○市三郎

○善次

○弥作

○孫兵衛

○善四郎

○

○藤作

○五三郎

○三作

○今作

○拾平  
○吉次  
○藤十  
○惣吉  
○甚蔵  
○千助

宝曆五年  
亥ノ十一月十日  
善蔵  
作四郎

人数

寛延元年  
辰ノ十一月十七日  
権兵衛  
藤作

寛延貳年  
巳ノ十一月十日  
太蔵  
孫兵衛

寛延三年  
午ノ十一月十六日  
武内  
金作

寛延四年  
未ノ十一月十六日  
吉次  
勘六

宝曆貳年  
申ノ十一月十日  
久次  
藤十

宝曆三年  
西ノ十一月十六日  
忠市  
半内

宝曆四年  
戌ノ十一月十六日  
千助  
善四良

⊕万七  
⊕源吉  
⊕忠市  
⊕甚次良  
⊕万介  
⊕善六  
⊕甚兵衛  
⊕藤作  
□作四良  
⊕金作  
⊕弥作  
⊕弥兵衛  
⊕善四郎  
⊕善蔵  
同武市  
⊕源五良  
⊕徳次  
⊕善七  
⊕半内  
⊕善次  
⊕久次  
⊕権兵衛  
□甚蔵  
⊕□介

式拾四人  
① 惣吉

宝曆六年 德次

子ノ十一月十五日 甚蔵

宝曆七年 半七

丑ノ十一月十五日 善七

宝曆八年 忠市

寅ノ十一月八日 源五郎

宝曆九年 善次

卯ノ十一月九日 源太

宝曆十年 乙松

辰ノ十一月十五日 惣吉

宝曆十一年 忠七

巳ノ十一月九日 金作

宝曆十二年 甚次郎

午ノ十二月九日 藤作

宝曆十三年 甚兵衛

未ノ十一月十四日 万七

明和元年 惣作郎

申ノ十一月八日 善四郎

明和貳年 式市

酉ノ十一月七日 又吉

明和三年 吉次

弥作

明和四年 三右衛門

亥ノ十一月十三日 嘉作

明和五年 次右衛門

子ノ十一月七日 与七

役

惣次郎

甚□

多四郎

丑 甚兵衛

孫作

次右衛門

惣吉

次作

嘉作

万七

金作

吉作

明和七年寅ノ

明和六年  
丑ノ十一月十三日

善太  
太作

明和七年寅ノ

源治  
半七  
源作  
三右衛門  
茂吉  
惣作  
善四郎  
又吉  
武四良  
万七  
文五郎  
徳次  
善太  
忠次  
惣  
□  
□

# 原田若宮大明神祭頭人次第註文

(宮座等關係資料目錄・若宮座「本座」1)

若宮大明神祭事次第

寛文九<sup>巳</sup>酉年<sup>ヨリ</sup>文政九年<sup>甲</sup>戊迄百四拾九年<sup>ニナル</sup>

小次郎  
 久次郎  
 又四郎  
 五良右衛門  
 太右衛門  
 忠次郎  
 惣右衛門  
 新九良  
 藤藏  
 十右衛門  
 平四郎  
 九良兵衛  
 孫三郎  
 平三郎  
 八兵衛

寛文九<sup>巳</sup>酉年十一月十三日

山内兵部

右若宮御座年数、寛文九<sup>巳</sup>酉年<sup>ヨリ</sup>安永六<sup>丁</sup>酉歳迄凡百拾壹歳<sup>ニ成</sup>

山内齊記

酉十一月廿三日改

寛文九年<sup>ヨリ</sup>文久元<sup>西</sup>年迄凡百九十四年<sup>ニ相成</sup>

文政九<sup>甲</sup>戊<sup>ヨリ</sup>天保八<sup>丁</sup>酉迄百六十歳<sup>ニナル</sup>

干時元禄元年戊辰在十一月二十三日改識之

若宮大明神御祭之次第

- 一、かわらけ大小平
- 一、平析數百枚
- 一、供御貳百八拾本 内貳本八頭本<sup>ニ遣</sup>
- 一、おけさえひ
- 一、なます
- 一、ひらぎ豆

一、青いそ

一、くろ鳥式百六拾

一、かけ魚式拾かけ

一、蕙拾枚

一、俵拾表

一、紙三束

一、麻草

以上

元禄十六年末十一月廿三日迄不用

若宮大明神御祭頭人註文

小次郎末 又五郎

久次郎跡

又四郎末 与市

藤三郎

太右衛門跡

忠次郎末 又平

茂七末 甚平

新九郎末 吉兵衛

藤藏跡

加七

平四郎末 源藏

孫三郎末 惣右衛門

平三郎末 六平

八兵衛跡

社司 山内民部

享保十四年酉十一月廿三日改之

根本座人頭人覚

山内孫九郎

日下部加四郎

山内惣三郎

山崎喜太郎

山内吉三郎

山内源六

山崎與市

山崎秀山

山崎九郎次

山内源兵衛

佐藤忠兵衛

山内加七

城戸正兵衛

吉村長次郎

山内宅七

右十五人頭人

社司 山内兵部

享保十八年丑十一月廿一日<sup>二</sup>極之

若宮祭礼定目覚

一、供御<sup>赤飯</sup> 餅米<sup>(ママ)</sup>壹計

一、大土器 三ツ

小同 百

一、平折敷 三枚

但かなかけ

一、掛魚 式かけ

但シ川魚之内ニテ

一、紙 三状

但御神躰紙へいカミ

一、草 少

一、蕙 壹枚

一、俵 壹俵

一、打卷

若宮神社御献立

御繪 さえび  
大こん

青ミ

汁 さえび  
大こん

青ミ

御煮物

黒いも  
大かぶ

御

開豆

青い 有合

黒鳥 有合

御酒 三へん

但頭渡 めしわんにて  
五へん

頭人

頭人老人多三升宛持寄

金右衛門

加平次

又八郎

惣右衛門

喜太郎

又五郎

吉三郎

善八

与市

千時享保拾八歳十一月廿三日改之

山内齊記

若宮祭礼定目覚

一、供御 赤飯 糯米壹斗

一、大土器 但シ五斗 三ツ

一、小土器 百 但シ中土器七十 但シ三斗

一、平折敷 但かなかけ 三枚

一、掛魚 但川魚 三掛

一、中折 御神夜幣紙 三帖

一、麻草 三啄

一、蕙 壹枚

一、俵 壹俵

一、打卷 三舛三合

己上

若宮神社御献立

繪 さえび  
大こん

汁 さえび  
大こん

青ミ

合拾六人

民部

加七

忠平

源右衛門

半平

甚平

又平

春庵

煮物 黒いも 御供

大かぶ

黒鳥 あらめ いもがら

青ゆで

ひらき豆

御酒

山内又治

日下部傳吉

十三 山内太兵衛

伊平

十四 山内又兵衛

十五 山崎善助

治助

十六 山崎代助

十七 山内幸七

奎七

十八 山崎助市

嘉助

一 山崎徳四郎

久口

四卯ノ年

佐藤利蔵

五 城戸門作

太吉

六 多田幸次郎

正吉

七 山内弥四郎

八 良助 久光又五郎

治

九 古森治八

十 山内伊右衛門

十一 山内忠七 孫四郎

太助

十二 山崎善右衛門

天明七末ノ年ノ御供掛 佐藤忠作

若宮神社御祭礼神座人数附

一 山崎半次郎

二 山内又八

三 山崎養寿

四 佐藤利助

五 城戸木吉

木 多田卯三郎

七 山内忠八

八 山崎良助

九 山崎忠吉 文助

十 山内卯右衛門

十一 山内孫吉

十二 山崎太助

十三 山内半蔵

十四 山内五市

十五 山崎治助

十六 山崎代助

十七 山内長次良

十八 山崎喜助

十九 山崎又助

廿 久光久治

- 廿一 山内弥七
- 廿二 山崎良作
- 廿三 山内弥吉
- 廿四 山崎兵助

神職

山内縫殿

宮柱

宗貞金次

— (中欠カ) —

一、打卷 三舛三合

已上

若宮神社御献立

鱈 さえび 汁 さえび  
大こん 大こん 青ミ 青ミ

煮物 黒いも 御供  
大かぶ 黒鳥 あらめ いもがら

青ゆで

ひらき豆

御酒

- 十三 山内伊平
- 十四 山内源市
- 十五 山崎善助
- 十六 山崎與市
- 十七 山内奎七
- 十八 山崎兵吉
- 一 山崎徳四郎
- 四 佐藤利蔵

- 五 城戸太吉
- 六 多田卯三郎
- 八 久光又次
- 七 山内忠八
- 九 古森治八
- 十 山内善右衛門
- 十一 山内孫四郎
- 三 山崎養寿
- 二 山内孫六
- 十二 山崎太助

文化元年子十一月廿三日

神職 山内備後守

御神座御備物入用之品

- 一掛魚 塩鯛小三掛
- 一五斗土器 三ツ
- 一中同 三十
- 一小同 百
- 一折敷 かなかけ 三枚
- 一俵 俵 三枚
- 但米三升二合入
- 一筵 俵 一枚

文政元年寅十一月廿三日

養寿座ニテ相極ル

定

此度従

公義御改正被仰出外ニ付、当卯年ノ頭人申合之上大皿相除、小平盛ニ致外事。

一 赤飯配り相止メ候事

天保十四年卯十一月廿三日

善八座ニテ相極ル

定

一 御神座相勤ハ料理向令一順是迄之通ニ候事

一 山崎周平座ハ一順頭元<sup>え</sup>米式俵宛相渡候事

一 御宮御普請料之内式俵宛<sup>彦</sup>順、若宮御神座取用之事

右之通山崎兵七座ニテ連中申極候事

文久元年酉十一月廿三日申合

若宮神社御祭礼神座勤名順

文久二戌年相勤ル 山崎周平

嘉永二酉年ハ座預ケ (付紙)

山崎養民

佐藤利蔵嘉永四年亥ハ座預ケ (付紙)

山内文助嘉永四年亥ハ座預ケ (付紙)

山崎文助

山内卯右衛門

山内孫四郎

山崎新助

山内兵吉

山内五平当時除ル (付紙)

山崎新六安政四己年ハ座預リ (付紙)

山崎文蔵嘉永二酉年ハ座預ケ (付紙)

山崎藤平

山崎卯七

久光久七

安政五年ニ勤ル 山内定石工門

山崎良作

山内弥一郎

元文元酉年相勤 山崎兵助

以上

大宮司

山内相模正種興

嘉永元年 戊申十一月二十三日改

若宮御神座頭人相減ハニ付、当丑十一月五市座ハ仕組相立、一巡左之通申極候事

一 御神具御備一切

右は米<sup>彦</sup>俵頭本<sup>ヨリ</sup>差出、神職受負ニ相頼候事。但米三升三合入之俵<sup>ツ</sup>・<sup>彦</sup>莖

枚ハ其歳之頭本ハ差出之事

献立

御熨斗

御茶

右は冷酒 三寶

引

本膳

赤飯 青物

汁 (大根、川えび、青ミ)

□□□

平 切身 繪 (白髪大根、川えび)

暖酒自杯

重引 しゆんきく  
ひたし

引 すまし  
吸物 おいあら□□見合

鉢 ぶり ぬたあへ

押 かまほこ  
焼とふふ  
牛房  
れんこん  
玉子

吸物 ミソ  
鰯汁 さいしん

大平 かふ  
かふ  
にんじん  
かまほこ

右之外は亭主之心々也

定

□仕子三人限り、庭働男女五人限り

酒壺斗

但頭人中より□之間錢百五拾文宛持出之事、尤是迄米三升持寄ハ取止候事

若宮神社御神座

頭人 山崎半三郎

明治廿七年十一月廿三日山崎玄善ヨリ讓受依願本姓ニ腹ス

浦山逸八 改名

山崎央

山内孫九郎

山内孫吉

山崎新三郎

山内半蔵

山崎利三

山内傳之明治廿貳年座連中預ケ、同年代替ニ付改正 (付紙)

山内弥一郎

山崎勘三郎

新慶応元丑ノ十一月ヨリ加久光久次

右同慶応元丑十一月ヨリ加山内乙次郎 仁右エ門孫

同年相加 山崎理助

明治廿七年家屋御神座共一切買受

山内武三郎

此兩人明治四年末十一月廿三日ヨリ 山崎善三武義 十六

文久二年春三月任従五位下

大宮司 山内參河守藤原朝臣正興

于時文久第三□亥霜月廿三日写之

山崎養民實

若宮の神のミ靈を思ふとちい□むつましく祭りしよしに若宮の神のミ靈をかしこくもわきへにまつるけふにたぬしき

右頭人十三人一人ニ付正金貳步持出、山内仁右衛門・山崎利助兩人ハ山内孫次

平座ヨリ相加、依て山内孫四郎座ニ於テ正金三歩持出

一正金七兩貳步ハ 但シ頭元孫四郎一人ハ出銅□

一同拾三兩一朱 十四文 但シ前々ヨリ溜錢

合金二十兩二步一朱 十四文

于時慶応二年 丙寅 十一月廿三日

右件於山内孫四郎座調之

一正金二歩ハ 於山崎太助座

山内孫四郎出銅

慶応三年丁卯十一月廿三日

明治四年未十一月廿三日從山内定座原田誠・山崎善三相加、凡頭人十七人、是  
ニ依テ出銅左ノ通

一正金貳兩者 山内定座ニ於テ右兩人出銅相遂ハ者也。即尅人ニ付金一兩と議ス

明治六年二月第十二大区郷社祠掌拜命當御神座社職相務

士族 山崎時居

明治七年甲戌一月十一日

明治十一年寅十一月廿三日原田誠座ニテ申合左之如シ

一若宮神社座原田誠ニテ一順相濟料理向今一順是迄之通ニ候事

一山崎半三郎座ノ一順頭元之溜米・利米之内ノ式俵半宛相渡候事

一御宮御普請料之内ノ米式俵宛助合来候処、今一順之処米壹俵宛助合相渡候事

(七) その他の「座」関係資料

# 惠比須座

(表紙)

文政元年
惠比須座帳
寅十一月吉日

(山崎家資料目録 146)

文政十三年 寅十一月三日  
 天保二年 卯十一月三日  
 天保三年 辰十一月三日  
 天保四年巳十一月十日  
 天保六年未十一月三日  
 天保五年午十一月三日  
 天保元年入 天保元年入  
 天保元年入 天保元年入  
 天保二年入 天保二年入

天保六年弁天新助会座之節入

○勘助

武右衛門

與平

利作

良作

新助

幸次郎

亦右衛門

茂平

一、白米壹升

一、錢百五拾文

但シ文政十二年丑十一月改

右者持寄之事

天保七・文化十三年 太助

申十一月・子十一月

文化十四年 丑十一月

文政二年 卯十一月

文政三年 辰十一月

文政五年 午十一月

同六年 未十一月

同七年 申十一月

同八年 酉十一月

同九年 戌十一月

同十二年 丑十一月

同十一年 亥十一月

喜助

兵内

弥右衛門

平十郎

利平

伊助

利八

伊作

○七右衛門

喜太郎

# 金比羅座

(表紙)

明治四拾壹年  
金比羅宮御神座帳  
戌十二月十日改

(宮座等関係資料目録・金比羅座1)

一、計算八開座ノ翌日当元及当元前後三人ニテ之ヲナス事  
明治四十四年改ム

佐藤富吉 山内忠次郎

山内乙次郎

山内武三郎

久光丈七

山崎茂男

浦山逸八

藤野霍吉

山崎 美

山内作次

弥之吉

大正三年相続ニ付訂正ス

## 献立

一、ひれ 吸物

一、味噌 吸物

一、ぬた 魚見合

一、鱈 かきあえ

一、平 切身 焼豆腐

行はへ

一、汁

## 頭渡

一、千玉子 吸物

右ハ毎年十二月十日ヲ以テ金比羅神座開会定日トス 左ノ加盟人打寄協議ノ上酒肴ヲ整フ事

## 規則

一、本会左ノ人名ノ順番ヲ以テ頭元トス

一、本会ヲ退座スル者ハ積金ハ分配セサル事

一、定日ハ頭元ヨリ前日ニ案内スル事

山内忠次郎

山内乙次郎

山内武三郎

久光丈七

山崎茂男

浦山逸八

藤野霍吉

山崎 美

山内作次

弥之吉

## 積立金

一、金貳拾貳円 山内利雄

利子年割

一、米壹俵 久光丈七

利子年六升

一、米壹俵 藤野霍吉

全上

一、米貳俵 木村儀太郎

全上

一、米参斗六合 山崎茂男

全上 五升四合

大正元年十二月貸付

大正元年十二月貸付

一、米貳俵壹斗七升 天本茂三郎

利子壹俵ニ付六升

大正三年十二月

一、金貳円七拾錢 山内作次預ケ

右山内作次分大正三年十二月二十九日返却<sup>㊤</sup>(佐藤)

大正二年十二月廿九日貸付<sup>㊤</sup>

一、金六円也 久光丈七

一、金五錢九厘 大正三年一月四日 山内乙次郎へ預ケ<sup>㊤</sup>

此分ハ大正三年十二月十日返却済

# 弁財天座

(表紙)

安政六歲  
 弁財天宮御神座連名并溜錢一順年ノ指引根帳  
 未十月

(宮座等關係資料目錄・弁財天座2)

一、弁財天宮御神座初発安政六年 未十月亥ノ日御神祭仕連名子孫繁栄武運長久之祈願之多免相勤可申者也

一順通献立

一、御神酒 三升限

但シ右御神酒連名中配当之事

一、吸物 壹ツ

一、□汁

ひれ付魚

一、しひ飯

但シ米三合出シ

一、豆腐吸物

小□連

右之通連名遂申合、但シ会座之節入切丈連名中割合<sup>ニ</sup>而持寄可申外事  
 外<sup>ニ</sup>

一、米三升四合 座連中老人<sup>ニ</sup>付

右米一順酒置一順過候ハ、元利<sup>ノ</sup>上ケ評儀之上模様仕替可申外事

連名

山内又作

山内勝右衛門

一、三百文

右ハ初座之寄合之節持寄之錢。此錢<sup>ニ</sup>而帳面箱拵

安政六年 未十月初座持寄之分

一、米壹俵

□リ 八升式合二勺

借主

善次

利市

弥平

米壹俵八升式合五勺

右ハ午十月亥ノ前日<sup>ニ</sup>元利相濟

萬延元申十月切立分加ル。此外壹升□□

一、米壹俵式升式合五勺

一、同三升四合 但シ市左衛門前年分切立前加ル

未申兩年分切立前利分共<sup>ニ</sup>現米高

一、米式俵壹斗三升九合

代正金拾貫七百貳拾文

但シ米高直<sup>ニ</sup>而直段立<sup>ニ</sup>而貸付

鹿毛利市  
 山崎善次  
 山内源三郎  
 山内弥平  
 山内弥作  
 山内市左衛門  
 山内弥吉  
 山内宅平  
 大石弥助  
 山内市平

此内

四貫五百五拾文

借主 弥三郎

但シ利月老歩五厘 此年十一ヶ月掛ル  
□リ 七百五拾文

受入 久作

三貫百六拾式文

借主 弥平

□リ 五百式拾式文

受入 勘右衛門

三貫百六拾式文

借主 弥作

□リ 五百式拾式文

受入 太七

元リ

正金拾式貫六百六拾八文

但シ利老割五歩

此内

萬延元年十月

正金三歩

市左衛門渡

同 九百九拾八文

□札老貫文

同人渡

同 百式拾文

□札三貫九百八拾文

同人渡

リ七百拾六文

米老儀代リ

金三貫八百文

同人渡

同代 六百式拾四文

同三貫八百文

善次渡

同代三升分 六八拾四文

同三百三拾六文

同人渡

リ六拾文

正金三歩老朱

九貫九百八拾文  
拾五貫五百五文

リ五貫百文

式拾貫六百五文

兩二而三兩式百五文

萬延元年十月切立米

祇園座

(表紙)

明治卅壹年改  
須賀神社御神座根帳  
当元預

(宮座等関係資料目録・祇園座1)

献物

一、御酒 掛鯛

一、米壹升 塩一升

一、金七銭貳厘 御初穂

献立

御熨斗

御茶

引

冷酒 三組盃

島臺

引

本膳

かまほこ  
連こん  
三又大根

かきあへ

白髪大根  
千人参

さしみ

汁  
かふ  
焼とうふ  
千くわ

香ノ物

平  
牛房  
連根

飯

切身  
行はへ

引

御酒 三ツ組盃

一、吸もの

押江

鉢

□□□□ねぎ

焼玉こ  
かまほこ  
氷こんニやく  
ぬたあへ

一吸もの

大鉢

かめ煮  
鯛汁  
押江いろく

一、盃茶碗

中皿

□牛房  
白人参  
百合根  
はと  
青ミ

茂玉  
れんこん  
青ミ

三ツ盃

大皿  
かふ  
人参  
竹わ  
牛房  
連ん

白ことり

井  
□  
□  
□

鉢 煮付

押江いろく

頭渡シ

三ツ組盃

一、吸もの 千玉子

引 押江いろく

御茶

千秋萬歳

一、本座之義ハ依都合陽曆十一月十五日会座可致処ニ相決シ候也

右ハ明治廿六年佐藤助次郎座ヨリ相改メ

一、金八円

是ハ左之人名頭書之通相預候事、但リ金高老割年々当元之人へ助合之事

一、米貳俵

是利壹割ニシテ年々当元之人へ利米割当助合之事

一、米壹俵 久光丈七

但利壹割

一、全老俵 山内作次

全

一、全老俵 山内次六

但シ利八升五合

此分ハ廿五年度ヨリ切立米座中協議之上同人へ貸附ル

一、金七拾五銭 浦山逸八

山崎申太郎

廿四年改名 義男ト改

山内孫九郎

一、金七拾五銭 伊藤茂八

山内孫吉

一、今座中協議之上、藤野佐平座 柴田重吉  
元ヨリ加入被致候事

第廿四年十一月十五日御座濟

一、本年十一月十五日久光丈七座ヨリ左之箇條協議之上盟約取詰候事

一、明十四年ヨリ陽曆十一月十五日ニ改正候事

一、同年ヨリ式ケ年間左之組合ヲ以米壹俵宛持ヨリ之事

但シ□□組合ニテ協議之上小作致、持ヨリモ可然候也

組合人名

一、<sup>口ス</sup>是迄 山下次平 浦山逸八

山内<sup>口</sup>三郎 山下善吉

白藤茂八  
山内弥吉  
立花大造  
久光丈七

藤野佐平 山崎申太郎  
柴田重吉 山内作次

一、金七拾五銭 山下善吉

明治廿二年十一月十五日<sup>ノ</sup>柴田重吉<sup>ヘ</sup>譲ル

一、全七拾五銭 山下次平

一、全上 山内武三郎

一、全壹円五拾銭 藤野佐平

廿二年十一月十五日座済

一、全七拾五銭 久光丈七

一、金五拾銭 山内作次

一、金五拾銭 佐藤助次郎

一、金七拾五銭 立花大造

右之通明治廿一年十一月十五日山内武三郎座ヨリ改之事

一、山内孫九郎・佐藤助次郎兩人ハ現米八升五合持ヨリ之事

一、是迄社中貸付アル米金八十四年則柴田重吉座ヨリ忒ヶ年ニ払入之事

右五ヶ條ハ山内作次座ヨリ<sup>口</sup><sup>口</sup>更シ左ノ條項ヲ執行スル事

一、明治廿五年十一月十五日山内作次座ヨリ<sup>口</sup>人ニ付米忒升七合宛座元ヨリ前日

取立置者ス

一、借米ハ本年ヨリ全卅八年迄則チ山内作次再座迄トス

一、貸附方<sup>ヘ</sup>座中之協議ニヨリ座中外之人<sup>ヘ</sup>貸渡者トス

一、但シ利子ハ協議ヲ以相定ム  
金七拾五銭

是ハ山下善吉貸附分廿四年十一月十五日山内弥作座ヨリ藤野佐平相預候也

筑前原田宿

筑紫野市文化財調査報告書 第44集

---

発行日 平成6年3月31日

発行者 筑紫野市教育委員会  
筑紫野市大字二日市753-1

印刷所 秀巧社印刷株式会社  
福岡市南区向野2-13-29